退魔師鬼十郎
宝珠、紅に染まるとき
市川丈夫

イラスト 結城信輝
富士見ファンタジア文庫

鬼十郎は深編み笠を取りかけた。 なにげない所作の端々に
侮蔑と嘲笑と激怒が見え隠れしている。

退魔師鬼十郎
宝珠、紅に染まるとき

葵 鬼十郎

小早川又四郎

蛇骨丸

小幡勘兵衛

宝蔵院

「呪霊..... つる・お・ろ・ち」
若者が右目をぱちりとつぶった瞬間
足元から毒々しい色彩の蛇の群れが飛びだした!

退魔師鬼十郎
宝珠、 紅に染まるとき
市川丈夫
F
富士見ファンタジア文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。 また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。
本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。
本作品は縦書きでレイアウトされています。
また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

口絵・本文イラスト 結城信輝
マップ作製 小林裕也

目
次

第一章
第二章
第三章
第四章
あとがき
解説

然州

美萩野
鷹代山

野
鮭妻川

浦滝

滝
木津谷

州

第一章

あおい きじゅうろうどの
「葵鬼十郎殿.....ですな?」
ごうう
声をかけ、男たちはようやく現れた。昨夜から降り続く豪雨の中、いずれも軽装の武士、四人である。一様に塗り笠で顔を隠したまま、軽く頭を下げた。
いちょう　がき　かく　うすぐら　けいだい　どろ
夜も明けたと言うのに、周囲はまだ薄暗い。朽ち果てた寺の境内は、泥の海と化している。その泥の中で、名を呼ばれた人物は、 深編み笠を微かに持ち上げた。
ふかあ がさ かす
「.....待ったぞ」
侮蔑を込め、深編み笠は鼻を鳴らした。
うんしゅうたいしゆさかきばらけ
「約束の期限は、明け六つのはず。はや一時余り…いくら雲州太守榊原家の呼び出しとは言え、ちと肌寒い待たせようだな」
はだざむ　あきさめ
ょご
ひどく若い声だった。背も、さして高くはない。秋雨に濡れた深編み笠。汚れがこびりついた黒い旅装。 草鞋にも、 手甲、 脚絆にも長年の流浪が滲み出ている。
りょそう　わらじ　てつこう　きやはん　るろう にじ　こし
つば　つく　ろうにん　しろもの　かび　そうしょく
だが腰の大小は、柄と鍔の造りからしても、浪人の差せる代物ではない。 華美な装飾を
けんじつ　みば
一切廃した堅実な見栄え。 塗り笠の四人も、この事実だけは心得ているかのようであっ た。

なにぶん
「.....お待たせして申し訳も無い。 なれど、これも主人の命ゆえ、 お許し願いたい」
ごぶめい　うまえ
「葵殿の御武名、 その腕前、 この雲州にもつとに聞こえてはおりますが.....」
こたび　いらい　なみ　とうてい
「何分、此度の主人の依頼は、並の者では到底なしえぬものゆえ・・・・・・」
うちゅう　がまん
「この雨中、どれほど我らを待てるか、まずはその我慢のほどを.....」
「.....試したのだな?」
おく　そうぼう　やじゅう
笠の奥、 葵鬼十郎は、 かっと双を見開いた。野獣めいた視線が、 殺気と怒気を閃かせる。
決して怒らせてはならぬ、四人はそう伝え聞いていた。察して、全員じきる。
ろうば　どき
だが彼らの狼狽を無視し、 鬼十郎の緒を振りほどいた。 やけに気さくな声で言う。
「なれば、それがしの腕前も試されよ。 そのためにお主らは選ばれたのであろう?」
「何も我らはそこまで.....」
はな　し　ふる
「ほう・・・・・・ならば、 なぜ最前より刀から手を離さぬ? しかも震えておるではないか」
ひらめ　気をかせ
鬼十郎は、深編みを取りかけた。 何げない動作、何げない声、何げない言葉。
その々に、と笑とが見え隠れしている。 硬直する四人に、鬼十郎は正体を暴い
べつ　ちょうしょう げきど　かく　こうちよく　あば　た。
えんりよ
「遠慮はいらぬ、おいでなされ
「参るっっ!」
ぱっとう
だしぬけに、一人がした。 抜き打ちのが、鬼十郎の深編み笠を両断する。だが
Art　おく
ぎゃくしゅう はくじん きゆうはく
裂けた笠の奥からは、避ける間などない。逆襲の白刃が急迫していた。抜く手も見せぬ鬼十郎の斬撃
が、一番手の胴体を薙ぎ払う。 絶叫とともに、最初の屍が泥水に突っ伏した。
ざんげき　どうたい　はら　ぜつきょう
しかばねどろみず
「は、速いっ.....!」
呻いて、残る三人はさらに後退する。 しかし鬼十郎は、容赦なく間合いを詰めた。
あなど
「・・・・・・女と侮れば、悔やむことになる」
たち はつそう　きらめ
太刀を八双に構え、眼光を閃かせる。
うまえ　ごう う ほうこう
さい むすめ
「腕前試すのなら、死ぬ気で来ぬか・・・・・・!」
ざああっと、耳元で豪雨が咆哮する。
鬼十郎は、少女の素顔を晒していた。が、十六歳の娘・・・・・・には見えない。高く結い上げた兵
庫髷、鋭い視線、きつく結んだ唇、そして全身から立ちのぼる容赦のない闘志・・・・・・
「三郎左っ!」
ひょうごまげ するど　くちびる　とうし
さぶろうざ
さむらい　けいかい　はな
やにわに、侍の一人が叫びを放つ。しかも今、斬られたばかりの屍に向かって、だ。ぎらりと、鬼十
郎も警戒の視線を飛ばす。
その目の前で・・・・
びくりと、と死体が痙攣した。続けて、びくびくっ・・・・・・屍が泥の中を跳ね始める。
「こ奴、宿主であったか.....」

おどろ
驚きもせず、鬼十郎は口元を歪める。
かぎづめ
まず片腕が、死体の腹を突き破った。黒く骨張り、鋭い鉤爪のついた腕が、血にまみれて飛び出してくる。続けて魔界の胎児は、醜い頭蓋を覗かせた。まさに赤子。黒い肌、黒い瞳の呪神は、牙の並んだ口を広げ、カカカカカと耳障りな絶叫を発していた。
まかい　たいじ　みにく　がい　のぞ　あかご　はだ
ひとみ　じゅしん　なら　みみざわ
御=免
「御免っ！」
さむらい　いつせいやいば
叫んで、三人の侍は一斉に刃を抜いた。 同時に、鬼十郎を包囲すべく散開する。 が、
鬼十郎も動く。泥を跳ね上げ、右へ駆け進むや、ぶんと太刀を振り下ろした。
おくでら
「退けっ、奥寺っ!」
かんいつぱつ　せんぷう ともな
警告は、間一髪間に合わない。鬼十郎の刃は、旋風を伴って侍に食らいつく。
相手も咄嗟に、一撃を太刀で受け止めようとした。
りょうひじ　にぎ
侍の両肘を一刀両断する。 刀を握り締めたままの両腕は、伸び放題の草むらへ斬り飛ばされていた。
ほうだ
「お、おのれっ・・・・・・」
かた　そっとう
両腕を失った侍は、ぐらりと後方へ傾いた。卒倒するかに見える。しかし食いしばった歯の間から、
彼は醜悪な雄叫びを発するや、必死に意識を踏みとどまらせた。
しゅうあく　おたけ
「貴様もか.....!」
ちょうやく
鬼十郎は泥を蹴り、素早く背後へ跳躍する。 めがけて、雄叫びの主が短い腕をふりかざす。
びゅるっっ!
しゅんじ　しょくしゅ
侍の腕は、瞬時に再生していた。しかも、ぬめつく青緑の触手として。長さは左右共に、一丈余り。
雨脚を突っ切り、おぞましい肉の鞭が鬼十郎の太刀に襲いかかった。
じょう　あまあし　むち
じゅしん
「貴様ら、半呪神かっ!」
どな　から　と　かいりき
怒鳴る鬼十郎の刃を、左右の触手が搦め捕る。信じがたい怪力に、鬼十郎の顔が歪んだ。少女の猛進に、強引な制動がかかる。 見逃すまい... 残る二人の剣が鬼十郎に急迫しだ。
もうしん　ごういん　みの　けん　きゅうはく
いのち
「御 命.....！」
「もらい受けるっ!」
れいき　ほとばし　せつな
すでに少女の霊気は、体内から太刀へと送っている。そしてほんの刹那、切っ先に呪力が込められる。 鬼十郎は念をこらした。
じゅりよく
は
「破魔退っ!」
ばっこう　はじ　じゅれい でんげき　いつせん　ふんさい
黒い爆光が弾ける。少女の太刀から発した呪霊の電撃が、一閃で両の触手を粉砕した。続けて爆光は、触手を通じ侍の肉体にも到達する。 ばりばりっという雷鳴。 電光の衝撃。
同時に相手は痙攣、悶絶した。
らいめい
しょうげき
かんべえ

「か、勘兵衛様っ.....！」
ざま　どろみず　た
炭化した肉体が、無様に泥水に打ち倒れる。
とつき　じゅぼく　きゅうてん　せま
咄嗟に鬼十郎は、呪縛の解けた太刀を急転させた。眼前まで迫った刃を、かろうじて跳ね退ける。すぐさま、 跳躍。 苔むした石塔を飛び越え、彼女は間合いを取り直した。
ようやく一人。
ちょうやく　こけ　せきとう
ひそ
鬼十郎は静かに整息し、密かに悔やむ。のきざまにもう一人殺れたはずだ。集中力と技量が足りない。 「いまだ未熟者」師の言葉を反芻し、少女は霊気を放出し始めた。
みじゅくもの　はんすう
のど お
一方、目前の二人も、本来の力を現出させている。
一人は喉の奥から、六尺にもなる強酸蟲を吐き出した。口から伸びる、甲殻百足の神。溶解液を吐く頭が、うねうね震える。
きょう
こうかくむかで
ふ
あわだ　せんもう
もう一人も、次第に異様な正体を現していた。全身が泡立つや、細かく長い繊毛がびっしりと生え始める。 皮膚も、赤と緑の斑点に覆われた。 あたかも、毒毛虫の如き色彩。
はんてん おお　どくけし　ごと
しきさい
まかい　たいじ　しゅくしゅ　だっ　あかご
背後からは、魔界の胎児も現れた。宿主を脱した赤子は何が嬉しいのか、しきりに笑い続けている。鋭利な鉤爪で、びちゃびちゃ泥を叩き回り、邪眼で少女を見据えている。
えい　かぎづめ　たた　じゃがん
たんそく
が、鬼十郎は、つまらなそうに嘆息した。 「半呪神とは言え、榊原御家中であろう.....」
ご かちゅう
ちょうしょう
たち
やおら嘲笑を浮かべ、 だらりと太刀を下げる。
たいじ　なりわい　たいま
「それがしは、呪神退治が生業の退魔師。そこもとら如き、僅かな呪力の半呪神など敵ではない。つまらぬ殺し合いは止めにせぬか?」
言って、刀を収めてしまう。
うまえ
「腕前試すのも結構だが.....それがしと戦えば、必ず死ぬるぞ。それより、後々まで生き、御家に尽くす方がそこもとらのためではないか?
また、御家のためにもなる胎児の哄笑が途絶えていた。」
こうしょう　だ
ごうう　たいじ
いまだ、豪雨は止む気配すらない。ずぶ濡れのまま、しばし四人は静かに対峙し続けた。化け物たちは必殺の機会を窺っている。 が、動けない。鬼十郎の言は事実だ斬りあえば、
必ず死ぬことを三匹も悟っている。
「主命など忘れよ。 早々に立ち去れい」
うかが
びき　さと
しゅめい
ばか　ぬぐ
鬼十郎は、濡れた顔を拭い、にやりと笑う。
こつぜん
その笑顔を合図にしたかのように、三匹は忽然と、姿を消していた。後には何もない。ただ、降り続ける雨。 屋根の抜けた寺。 雑草に囲まれた石塔の群れ。
せきとう　やつ
「馬鹿な奴らだ・・・・・・」

しゅぼ　たんそく　きびす
泥の中、二つの屍が雨に打たれている。 呪神を産んだ屍。 焼け焦げた屍。 命に従わず逃げていれば、死ぬこともなかった。鬼十郎は遺骸に一をくれると、嘆息して踵を返した。
また しろう
「又四郎、帰るぞ!」
呼ばれて.....小さな少年が石塔の陰から飛び出した。格好だけは鬼十郎に瓜二つ、深編み笠に黒装束だが、少女の強靭さは微塵もない。丸く大きな瞳で周囲を窺うや、小早川又四郎はおどおどと鬼十郎に近づいてきた。

Translation break 1

くろしょうぞく　きょうじん　みじん　ひとみ
おししょう　もど
「お、御師匠様、戻られるのですか?」
「無論だ、こんな馬鹿にした話があるか.....」
そで　けいだい いちぐう
鬼十郎は、又四郎の袖を引くや、境内の一隅目指して駆け出した。イチョウの大木の根元だけは、この雨も避けられる。 師弟は泥を蹴散らし、大樹の軒へと飛び込んだ。
して　けち　のき
こばやかわ
こうじょう
「一時余りも待たせ、 我慢を試したんだと。 あの口上聞いた時には、キレかかったわ!」
「とっくにキレてたくせに.....」
「なにっ? 今何と言うた!」
「·····いえいえ! 全く、無礼な話でござりますなぁ.....と」
「ふんっ! わしが本気で怒ればどうなるか、とことん教えてやったわ!」
「そ、その割りには·····二人しか斬りませんでしたね?」
「当たり前ではないか! 呪神を斬るには、 霊気を使う。 腕試し程度の戦いで、体内の大
むだづか
事な霊気を無駄遣いできるか!」
ふる　てぬぐい
又四郎は、震える手で手拭を差し出した。
こたび　じきひつ
「な、なれど此度は、 雲州太守様直筆の御書状にての依頼・ ・礼金とてきっと・・・・・・」
こうちよく　えりもと
言いかけ、少年は硬直した。いつの間にか、師匠が又四郎の襟元を締め上げている。とも思えぬ膂力。 人とも思えぬ悪鬼めいた形相が、 ぎらりと又四郎を睨みつけていた。
りよりよく　にら
たいま
「何度言うたらわかるのだ、 又四郎? 退魔の仕事を金高で選んではならぬ.....!」
「で、では·····ぐふっ、い、一体何で.....?..」
「信頼よ」
又四郎から手拭を奪い、鬼十郎は断言した。
「わしの退魔の腕を見込み、こんな雲州くんだりまで呼びつけておきながら.....、その上力試すなど笑止じゃ。 わしを信ぜぬ依頼主のために、働く気になどなれぬわ.....!」
しょうし
「き、きっと、御家の一大事なのでは?」
締め上げられたまま、少年は声をふり絞る。
とうてい
「先程詫びていたではありませぬか! 此度の依頼は、到底なしえぬものだと.....」
「ふん! 大袈裟な!」
でし
不満げに、鬼十郎は弟子を解放した。
どばた
「大かた、井戸端に死んだ猫でも化けて出たのだ! このわしが出張るほどの事はない!」

「それは聞いてみないと.....」
「貴様・・・・・・ 師匠の推察を疑うのか?」
女
めつそう　　あわ
「滅相もない!ただ、御師匠様を呼び付けるからには、きっと何か.....」
「やけに食い下がるな、又四郎.....!」
「別段、それがしは何も.....」
「まさか榊原家から前金など・・・・・・」
「受け取ってなどおりませぬよ!.....ほら!」
ふところ　　ぜにぶくろ
慌てて又四郎は、懐から銭袋をつかみ出した。.....見た目も、音も、やけに軽い。
もん
「残り十八丈! これっきりです!」
「それがどうした、金が無いくらいなんだ!」
びしゅうよこやまじゅく　　た
「あのですねぇ!美州横山宿を発って、今日まで十六日!その間、御師匠様は、一度も退魔の仕事をなされておりませぬ! 路銀が無くなったら、 我らは飢え死にですよ!」
ろぎん
「むぁたしろううっっ!」
どごういつせん　　やどちん
怒号一閃、鬼十郎の腕が弟子を締め上げた。
「貴様、わしに仕事を無理強いする気かっ!」
「ぐ、ぐるじぃ.....」
ことわ　　ごんごどうだん
「気に食わぬ仕事を断って何が悪い! 退魔の法で金を儲けるなど言語道断っ!」
めし　やど
「そ、それでは我らの飯と宿が.....ぐうっ!」
「宿賃のために働く退魔師がどこにおるっ!」
「ではせめて飯代だけでも·····!」
たんそく
ああ、と鬼十郎は嘆息して力を緩めた。
「まだまだわしの教えが足らぬらしいな・・・」
「えほっ! 見栄で腹は膨れませぬよ.....」
むせつつも、必死に又四郎はすがりつく。
こよい　　はたごちん
「で、ですから、御師匠様... やはり榊原家の御依頼は受けましょう。 今宵の旅籠賃すらないのですよ? やはり、仕事はしませんと・・・」
「まぁ、次の仕事は後程考えよう。金が無ければ、野宿すればよいのだ。何なら、今宵はここに泊まってもよい」
と
ころ
「そこに死体が転がってるんですよ!」
「片付ければよい、貴様が」
絶句して、 又四郎はへたり込む。
けいだい
ひとかげ
だが鬼十郎は、絶望する弟子を無視した。彼女は、不意に境内に現れた人影に気づいていたのだ。豪雨の彼方から、 相手は静かに歩み寄る。 先程の連中と同じく、塗り笠、軽装の武士
鬼十郎は、声を正した。
ごうう
かなた
がさ　けいそう
ただ
ご　かちゅう
「榊原御家中か?」
さよう　じゅしんあ
みかしら　おばたかんべえ

「左様。呪神足軽組頭、 小幡勘兵衛と申す」
いつの間にか、鬼十郎の手が柄にかかっている。 殺気は感じられない。 ただ.....
（かなり使えるな、この男.....）
そう、見抜いていた。
さい
びどう
わかざむらい
ほそおもて
はら
まだ二十歳そこそこ、美童と言っていい若侍だ。色白で細面だが、その落ち着き払った身のこなし、
低く肝の据った声は、練達の武芸者を思わせる。何より、泥を踏み付ける一歩一歩が、
素早く、かつ鋭い。
きら すわ
れんたつ ぶげいしや
やつ
いか
どろ
すると
（剣を交えれば、いい勝負になる.....）
鬼十郎に思わせるほどの、武士であった。
「先程は、まことに御無礼致した。
こちらよりお呼びだてしておきながら、腕試しなど・・・全てこの勘兵衛の裁量・
・お許し下され」
さいりょう
し はいか
「奴ら、お主の配下か」
「いかにも引かせたのも、それがし」
「ならば、待たせたのもお主か?」
鬼十郎は、わざとらしく鼻を鳴らす。
「榊原家.....何があったかは存ぜぬが・・・・・・気に食わぬな。 なめておる」
どの
「お怒りは、ごもっとも。なれど鬼十郎殿のお怒り、重々承知のうえで.....あらためて、
退魔の仕事をお引き受け願いたい」
にやり、笑って鬼十郎は首を振る。
「断る」
「御師匠様っ!」
さけ
はな
叫んで、鬼十郎に少年がしがみつく。が、笑顔のまま、少女は又四郎を突き放した。
あて
「確かに、それがしは退魔師。 行く宛も無ければ、金も無い今、依頼を断る必要もない」
「ならば、是非にも.....!」
心と
「では、初めから是非なく雇えばよい!」
鬼十郎は、唾を吐き飛ばす。
「.....腕前など試しおって.....それがしの武名、知らぬわけではあるまい?」
小幡勘兵衛は、雨中でうなずく。
つかはらほくでん
「絶対不敗の退魔師、 塚原卜伝・・・・・・その最初で最後の門人・・・・・・葵鬼十郎殿」
ふうっと、鬼十郎は大きく息を吐いた。 少女を語るのに、最上のほめ言葉である。
しんらい
「その名を知っても、信頼しかねたのか?」
こたび
「何分、此度は・・・・・・」
おそ　　しんちょう
「分かった、聞こう。 何があった? 何を恐れて、お主らそれほどまでに慎重になる?」
たい　　ぞくせい

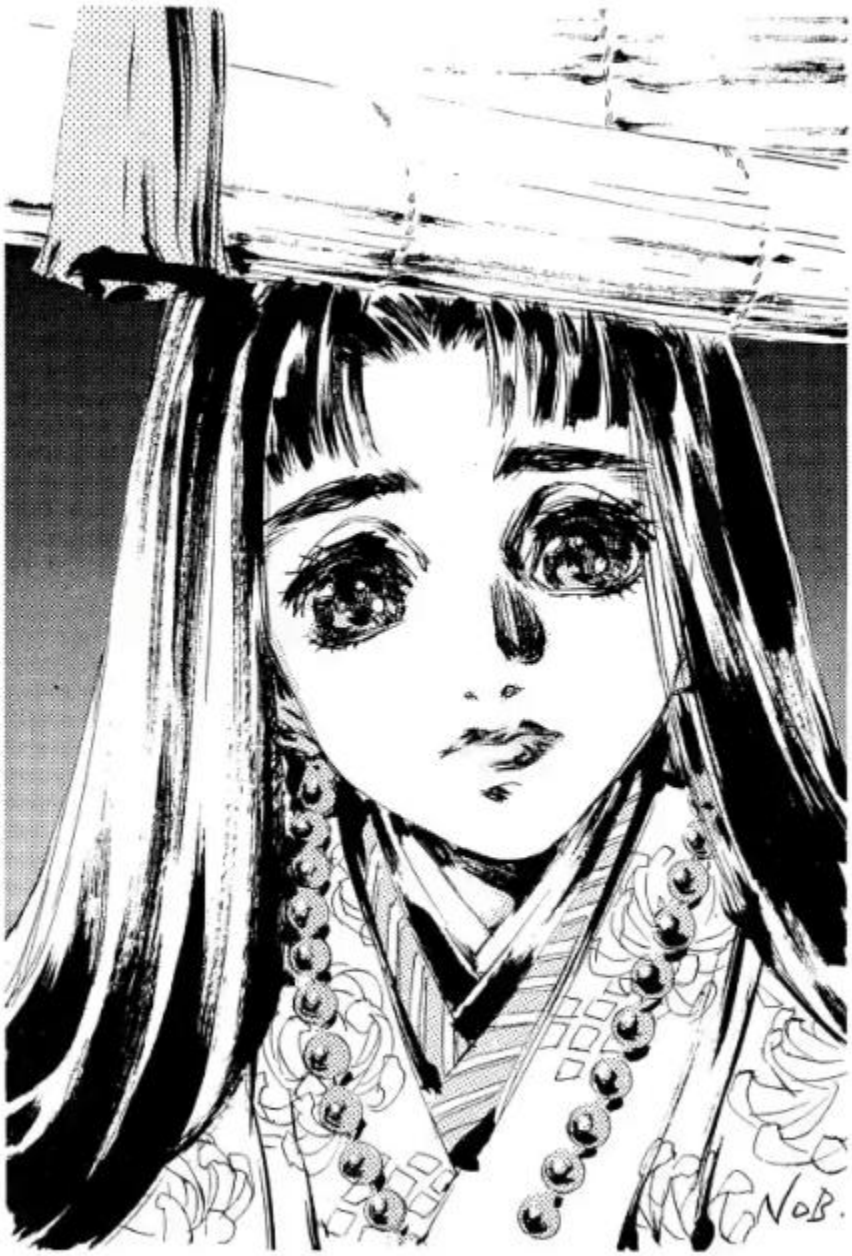
「何しろ、我らが退治していただきたい呪神は、雲州に二千年住み、五つの属性を持ち、三十の呪霊に通ずると言う.....」
じゅれい
「そ、それはまさか・・・・・・」
こうちよく
言いかけて、又四郎は口をつぐむ。が、表情を硬直させたのは、鬼十郎も同じである。
大陸中の呪神に精通した少女は、ゆっくりと敵となる者の名を口にし始めた。
「木津谷の守り神・・・・・・木津の黒鶴か.....」
きづだに
まも がみ
くろづる
「御存じでしたか.....」
なんざんしんてん けんぞく
「知らぬはずが無い。数多の伝承に名を残す 南山神天の眷属ではないか」
「では、あの話もご存じのはず.....」
勘兵衛は、挑むような視線を放った。
あいだがら
「雲州太守、 我が榊原家と木津の黒鶴の間柄についても.....」
「覚えはある」
おいのち ねろ
がてん
問われた鬼十郎は、軽く顎をつまんでみせる。
「だが合点が行かぬな。 それがしが聞き知る話では、確か榊原家には黒鶴の・・・・・・」
「しかし.....事実にござる」
せつぱく
うめ
鬼十郎を制して、勘兵衛は、切迫した呻きを絞り出した。
「何のために.....どうしてなのか.....今もって我らにも分かりませぬが.....黒鶴が姫様の御命を狙うておるは確か」
ひめさま
[.....]
「・・・・・・まだ御納得いただけませぬか?」
「いま少しくわしく・・・・・・話を聞きたい」
「ともかく、その黒鶴の手から、是非、我が姫、千鶴様をお守りいただきたいのだ.....」
「千鶴様.....?」
「はっ、あれに.....」
うちゅう
こうじょう
言われて、鬼十郎は視線を上げた。釣られて、又四郎も雨中に目をこらす。口上を述べ終えたのか、勘兵衛は黙って跪いていた。
だま
ひざまず
いつちょう
くろぬ
さんぱく
その背後に.....一丁の乗物が現れていた。周囲には、二十人ほどの手勢。
黒塗りに金箔をまぶした華美な駕籠が、 雨中を突き進んでくる。 一団の武士に守られ、乗物は静かにイ チョウの根元に据えられた。
かび かご
むぞうさ
まね
「こちらへ・・・・・・」
「よいのか.....?」
「何の、かまいませぬ」
勘兵衛は、無造作に鬼十郎たちを招き寄せる。
みずか

「今朝、姫様自ら、願い出られたのです。是非、鬼十郎殿にお会いしたいと我が身を守る願いをきいてほしいと...」

Page 24 (last line)

勘兵衛が示したのは、地に降りた駕籠、そのすぐ脇である。顔を見合わせ、困惑しつつ、鬼十郎も又四郎も膝をついた。
しゅく
みよう
(何だって、わしらなんかのために.....)
でいち
胸中でぼやき、 鬼十郎は泥地を見つめた。
やすまさ
ごくじょ
「では、お引き合わせ致す... 雲州太守榊原康政様が御息女・・千鶴様にござる」
してい
へいふく
音も無く、引き戸が開いた。 師弟は、思わず平伏する。
だが顔を伏せた二人に、勘兵衛はかぶりを振った。
ごらん
「鬼十郎殿、無用にござる。 それよりも姫様の御姿、是非、 とくと御覧あれ・・ 」
妙な言い回しに、鬼十郎は眉根を寄せた。 しかし、かまいはしない。
思い切って、鬼十郎は顔を上げた。 続けて又四郎も.....
「.....っ!」
途端に、少年が驚愕を飲み込む。と同時に、慌てて顔を伏せた。大袈裟すぎるほどの恐。
かごちゆう
だが鬼十郎も、同様であった。無敵の退魔師は、籠中に見てはならぬ物を見た気がし た。
反射的に、鬼十郎も視線を泥に戻しかける。
なのに.....
「御手をお上げください・・・・・・」
すず
の鳴るような声音が、 退魔師の動きを優しく制する。と同時に・・・・・・
声の主は周囲に春の香りを撒き散らした。 駕籠の中から、暖かく柔らかな陽光があふれだし、氷雨に濡れた鬼十郎の身体を愛しく包んでくれる。
かお
かご
ひきめ
からだ いと
(これは.....この御方は.....)
きんちょう
むさん
いらだ
あらが
かたちづく
退魔師の肉体から緊張が霧散し、苛立ちが安らぎに変わって行った。抗えない。
どうあっても抵抗できぬ平穏に満たされたまま、鬼十郎は姫君の顔を仰ぎ見た。
ていこう
へいおん
ひめぎみ
あお
むすめ
「葵鬼十郎殿ですね 雲州太守、 榊原康政が娘、千鶴と申します.....」
そのほほ笑みに、思わず鬼十郎は息を呑んだ。駕籠から顔を出したのは、一人の少女である。だが、あどけなさや幼さは微塵も無い。
おさな
みじん
つや
くろかみ

ひとみ みりょく
むしろ.....その美は完成されていた。艶めく長い黒髪が、吸い込まれそうな瞳の魅力が、微かに色づいた小さな唇が・完璧なまでに揃い立った愛らしさたちが、究極の可憐を形作っているのだ。
くちびる
かんぺき
そろ
かれん
（・・・・・・この御方は・・　・桜の花だ.....）
めぐ
けんらん
ほこ
いつかどこかで見た、春の日の思い出が退魔師の胸中を駆け巡る。
絢爛に咲き誇る薄紅色の並木道。風に吹かれ舞い散る花吹雪。　さざめく暖かな日差し.....
色の並木道。風に吹かれ舞い散る花吹雪。さざめく暖かな日差し.....
わたくし
「.....　私をお守りいただきたいのです」
くちびる ふる
千鶴は、小さく唇を震わせた。
「勘兵衛のなした無礼、非礼はお許し下さい。全て私を守らんがために・・・・・・万が一を期して、鬼十郎殿を試されたのです。どうか鬼十郎殿、なにとぞこの依頼、お引き受け下されませ.....」
いの
声は次第に小さく、それでいて力強くなっていた。　千鶴の、祈りに似たすがる気持ちが、手に握った数珠をぎゅっと握り締める。勘兵衛はただ、黙って跪いたままだった。
にぎ
じゅず
だま
ひざまず



ざんじ
暫時・・・・・鬼十郎は千鶴を見つめていた。 千鶴も退魔師を見据えている。
無言のまま、時が過ぎる。雨脚は、一向に弱まる気配も無い。風も激しさを増してきた。だが一同は、しばし雨音の中に身を晒し続けていた。
あまあし
まず
さら
そして冷えきった体をこわばらせ.....なぜか....なぜか自分でも分からぬうちに・・・・・・
まか
「すべて·····この葵鬼十郎にお任せあれ.....」
かご
退魔師の首は、しっかりと駕籠の中にうなずいていたのである.....。

『とんと昔のことじゃった。
うんしゅう

ころ
きづだに
大陸の西の果て、雲州の中ほどにある木津谷でのお話じゃ。
うすぐら
さび
その頃の木津谷は、さして住む人も無く、昼間といえど薄暗い、それはそれは淋しいと
ころであったそうな。
みようじゅ
うで
ねんじゅひ
この谷に明寿と言う、たいそう腕のよい念珠(数珠職人)がおった。明寿は、もう七
十にもなる老人であったが、 数珠の材料の鏡石を求め一人、谷の奥深くに住んでおった。
まう
かがみいし
まち がみ
おか
くろづるさま
明寿は谷に入る時には、必ず神社に詣で、谷の守り神たる黒鶴様に石拾いの安全をお願いする、それ
はそれは信心深い人であった。
まくらもと
ある夜のこと、しきりと明寿の名を呼ぶ声がする。
不思議に思い起き上がると、枕元に二一人の美しい若者が立っておるではないか。
だま
ふところ
若者は、しばし黙っておったが、やがて何やら光る物を懐から取り出した。
それは一片の傷もなく磨き上げられた鏡石であった。若者は、石を明寿に差し出し、こう言う
た。
みが
びしゅ
だれ
(この石は、媚珠と言う。この石を持つ者は、誰からも好かれ、大切にされるであろう。この媚珠で数
珠を造れば、そなたにもきっと良いことがある。持って行くがよい)
つく
ひとご
なぜそんな大切な石を私に? 明寿が問うと、若者は姿を消しつつ、こう答えた。
やしろ
ほうのう
(そなたは、毎年木津の社に数珠を奉納しておる。 この媚珠は、僅かな礼のつもりじゃ)
しん
明寿は思うた。きっと今の若者は、黒鶴様の化身に違いない。そして早速、
媚珠を交ぜた数珠を造り、都の太守様に献上したそうな。喜んだ太守様は、
牛車一台もの黄金を明寿に取らせ、数珠を代々の家宝とした。
みやこ たいしゆさま けんじょう
ぎっしゃ
かほう
その後も明寿は、黒鶴様への信心を忘れることなく、
必ず毎年、木津の神社に数珠を奉納し続けた。そして生涯死ぬまで幸せに、
安楽に暮らしたということじゃ。
しょうがい
昔々のことじゃった』

「三百余州御伽草紙より」

「ねーえさんっ! よっ、ねえさんってば!」
けいはく
せま
人込みをかき分け、軽薄な声が背後に迫る。
おとぎぞうし
ごじょうか

「御城下じゃ見かけねえ顔だな、旅の人か?」
さきもりいなり
えんにち
「咲盛稲荷の縁日は初めてだろ? どうだい、俺たちが案内してやるよ!」
のき つら
ろてん
はざま やしろ
ずらり、軒を連ねた露店は果てしもなく続いている。
その露店の狭間、社へ連なる石畳は、びっしりと人波に埋め尽くされていた。
飛び交う行商人の売り声が、賑わいに弾みをつけている。澄んだ秋晴れの空の下、祭りの人出は最高潮に達していた。
ぎょうしょうにん
にぎ
さいこうちょう
「こっち向けって、ねえさんっ!」
「何も恥ずかしがるこたねぇだろ? ええっ?」
ごういん
ひときわ
ざっとう
にやつく二人の遊び人は、強引に人波を押しのけていく。彼らの視線は、雑踏の中にあって一際目立つ後ろ姿を追いかけていた。
なるほど.....目を引く。
相手は、すらりと細く伸びた上背に、だらしなく振り袖を引っかけている。その袖たるや、純白の下地に金糸銀糸をふんだんに使った絢爛豪華な鳳凰の刺繍だ。 そして、
うなじをちらつかせる粋な着崩し方。 名のある花魁もかくやと言ういで立ちである。
きんしぎんし
けんらんごうか
ほうおう
ししゅう
きくす
おいらん
しだたみ
た
がみ
かた
風になびく根結いの垂れ髪目指し、二人はついに細い肩に手をかけた。
おもしろ
やひ
「ねーえさんっ、聞こえてんだろ?」
「面白いとこ、案内するぜっ、ひひっ!」
野卑な声に、とうとう鳳凰の袖も振り向いた。
「私のことかい?」

「ああん?」
そろ
遊び人たちは眉をひそめ、声を揃える。
がっしょう
こうちよく
ざわく
合唱した顔が、硬直する。やがて疑惑の視線が顔からつま先へ、つま先から顔へ。なめるように見回した後、 突然・・・・・・
とつぜ
「て、てめぇ、 男かっ!」
あと
びしょう
悲鳴を上げて、後じさる。
だが振り向いた顔は、気にもせず微笑した。
「そうだよ、見れば分かるだろう?」
「分かるわけねぇだろ、そんな格好で!」

そで
「派手な振り袖なんざ着て、こいつ.....!」
「派手.....? そうかなぁ?」
自分を見下ろし、彼は白い歯を輝かせた。
ちょうどよ
「でも、私の美しさには、これくらいで丁度良いと思うんだけど.....」
その通りであった。
とが
涼やかな目元も、高く通った鼻筋も、細く尖った顎も·····みな女のものである。
しかも絶品の。それでいて、笑顔が柔らかい。正面から見惚れても不思議はない、男であった。
やわ
と
けしょう
「てめぇ、化粧もしてんのか!」
きしょく
いらだ
べに
「いやぁ、紅だけはね・・・・・・」
「気色わりぃ! 頭おかしいんじゃねぇのか!」
「き、気色悪いってねぇ...!」
美形は、不満を言いかける。しかし二人は若者に背を向け、往来に唾を吐いた。
「もう用はねぇよ! とっとと行っちまえ!」
「二度とそんな格好で歩くな! おかま野郎!」
ば とう
ひとご
かなた
苛立つ声で罵倒するや、人込みの彼方に消えて行こうとする。
びしよう くも
たんそく
が、微笑を曇らせた若者は、嘆息して首を横に振った。
「ああいう無礼で無理解な連中が多すぎる。そんな奴らを反省させるには.....」
てのひら
れいき
しゅんかん じゅりよく
若者の掌に、霊気が流れる。 右目をぱちり。つぶった瞬間、魅力が込められた。
「呪霊.....つ・る・お・ろ・ち」
ぜつきょう
瞬間、絶叫が上がった。
とつじょ いしだたみ
だいじゃ
人波を抜ける遊び人たちの足元から突如、石畳を吹き飛ばし、数十の大蛇が飛び出した。大木の如き胴体。毒々しい色彩の蛇の群れが、二人を瞬時に包囲したのだ。
ごと
どうたい どくどく
しきさい
へび
「な、な、なんじゃこらぁ!」
「あ、兄貴ぃぃっっ!」
だ
きぼ
きょだい
さっとう
とつぜん
さいなん
がばっと抱き合う二人めがけ、牙を剥く巨大な頭が殺到する。突然の災難に、遊び人たちは絶望の悲鳴を上げた。
「ひえええええっっ!」
おそ

しかし.....不意に、本当に不意に大蛇たちの姿は消えていた。 突然現れ、 突然消えている。何が何だか分からない。 ぽかんと、遊び人たちは顔を見合わせた。 そして恐る恐る、辺りを見回してみる。
そ
けんそう
だいどうげいにん
こうじょう
周囲の喧噪に、何一つ変化はない。行き交う人波。 大道芸人の口上。
何事もなかったような縁日の賑わい。そのざわめきの中に、呆然と抱き合う二人だけが取り残されていた。
えんにち
にぎ
ぼうぜん
「くっ、くっ、くっ.....」
そで かく
卑屈な笑顔を、美形は袖で隠した。
「・・・・・・いい気味だ。私のことをおかまだなどと呼ぶからだよ、ざまをみっ!」
ざっとう
けいだい
必死に笑いをこらえ、 雑踏を擦り抜ける。 が、広い境内を抜けるや、また思い出し笑 い。
あわ
こし
「それにしてもあの慌てよう・ ぷぷっ! 腰でも抜けて、しばらく歩けないかもな.....
なぁんて心配なんかしたりしてほげぇっっ!」
しょうげき
だしぬけの、衝撃。
こんごうづえ ちょくげき
脳天を、金剛杖が直撃する。 頭を抱え、うずくまる美形に、涼やかな声音が語りかけ た。
じゃこつまる
「見ていましたよ、蛇骨丸」
ひど
ほうぞういんさま
「ひ、酷い、宝蔵院様.....」
むだ
「酷いのはそなたです。 また無駄に呪霊を使いましたね。それもつまらぬことに」
「頭が潰れたらどうするんですか、 もぉ.....」
ていねい とむら
「ほっほっほ、心配せずともよい。 その時は、私が丁寧に弔ってさしあげますから」
ずさん
にそう
むらさき そう
まと
右手で印を結び、まだ若い尼僧はにっこり笑った。紫の僧衣を纏った彼女は、小さな笑顔を頭巾から覗かせている。 その笑顔の裏に潜む凶悪をねめつけ、美形は背を伸ばした。
のぞ
「や、宿を探しに行かれたのでは?」
ひそ きょうあく
しゅくばまちたき
たご
「気が変わりました。私も縁日を見に.....」
「で、では私が宿を探しに.....」
「なに、焦らずともよい。何しろ雲州一の宿場町滝ノ宮、旅籠は幾らでもあるはずです。
探すのは日が暮れてからでも・・・」
「いや、やはり念には念。 私が一人で.....」
そば はな
「お待ちなさい。 やはりそなたは決して、私の側を離れぬように」
つらぬおお
じだんだ
宿場町の中央を貫く大路で、美形は子供のように地団駄を踏んだ。

「もおっ！ どうして私を一人にさせてくれないんですか、 宝蔵院様は.....！」
「一人にすれば、何をしでかすか.....」
こんごうろくしやくぼう
ため息を吐き、 宝蔵院と呼ばれた尼僧は、すいっと手にした金剛六尺棒を突き付けた。
せいいき
めぐ
ものみゆさん
「とにかく、この旅は西域の聖所を巡るが目的。 物見遊山ではありません」
「わ、分かっております.....」
「恥ずかしい真似はくれぐれもせぬよう。この雲州でこそ無名なれど、そなたは州に聞こえた呪神使い、蛇骨丸なのですよ」
じゅしんつか
「分かっております.....」
むだづか
もちろん
「まぁ、呪霊の無駄遣いは勿論、私が何よりも心配なのは、 そなたが余りにも.....」
「うおおっっ！ あっちにいい男がっ.....！」
しょうげき
今一度、衝撃。脳天直撃。
「その手にはのりません」
「ぐっ..... ぐおおっっ.....！」
びしょう
わななく呪神使い、 蛇骨丸の背中を、尼僧は悲しげな微笑で見下ろした。
「ともかく、いつもの様だけは控えるように。 そなたは、発作が起きると見境がなくなります。して良いことと、良くないことの。そうならぬよう、私がしっかと見張らねば・・・・・・」
「ご、ごもっともで・・・・・・」
きぼ
蛇骨丸は、陰でそっと牙を剥き出した。
とうとつ
その時である。
「道を開けぇーいっ！」
しおからごえ
ひび
唐突に、塩辛声が響き渡る。
かなた
きばむしゃ
わた
往来の彼方から騎馬武者が一騎、槍を振り立て迫って来た。
旗幟の家紋は、太守榊原家の物。甲冑に身を包んだ兵は、宿場中央の辻めがけ、一気に馬を駆け入れた。
かつちゆう
つじ
「あ、危ないっ.....！」
とっしん
あわ
のきざき
お
突進に慌て、蛇骨丸は宝蔵院の身を軒先に押し込んだ。 道行く人波も、左右に割れる。
が、心配はない。騎馬は、やおら二人の目前で急停止し、 兵は先触れの口上を口にした。
おんたいしゆさま ひめぎみ
づる
こうじょう
こし
「いずれの者も道開けぇーいっ！ これは御太守様が姫君、千鶴様が御輿入れの御道中！
東は然州御領内までの道行きなれば、いずれの方も道開けられぇーいっ！」
ぜんしゅう
みちゆ

「姫君の御輿入れ.....?」
おそ
ととの
そう宝蔵院は口にしてはっと蛇骨丸を見上げた。 しかし、もう遅い。った美形
は、すでににんまり緩んでいる。 騎馬武者の声に、蛇骨丸はふらふらと引き寄せられて
行った。
ゆる
「姫君.....この雲州の.....? ふふっ!」
まい
不気味な笑いに、宝蔵院は目眩を起こす。
やまい
「出た.....その病が.....」
けねん
だが蛇骨丸は、宝蔵院の懸念など無視していた。早くも通りの両側には、一行を見物し
ようと黒山の人だかりができている。 その最後列に近づき、呪神使いは右手を見つめた。
のぞ がんち
「ふっふっふ...・・・覗き眼蟲・・・・・・」
しゅんかん
しえきじゅん
てのひら
ふる
瞬間、使役呪神を呼び出す呪霊が発動した。
広げた右の掌が、ぶるぶる震え始める。と思った途端、掌の中心がゆっくりと盛り上がる。
とたん
くり
隆起は栗の実ほどに達し、やがて・・・・・・まぶたが開いた。 ぱちくり。
第三の目を造った蛇骨丸は、人垣の頭上に掌を差し伸べた。
ぶそう
ひとがき
「おお、あれが輿入れの行列か.....!」
しゅくば
覗き眼蟲の視線は、しっかり宿場に入る列の先頭を捕らえている。
総勢は、百五十名ほどであろうか。
ながもち
武装した五十名余りに守られ、長持の列が大路を進んでくる。さらに列の中央には、黒塗りの乗り物
が続いていた。大きく描かれた榊原家の家紋。 太守家にふさわしい、嫁入り 行列であった。
ごうせい
「さすがは千鶴様の御輿入れ、豪勢だねぇ」
えんむす
「そらそうさ、 太守様同士の縁結びだもの!」
かご
「あたしもあんな駕籠、乗ってみたいねぇ」
やじ馬のさえずりも気にせず、蛇骨丸は第三の目に意識を集中する。が、何げなく耳に
やまい
じゅうしょうか
よだれ
ぬぐ
けんそう
した一言が、蛇骨丸の病を一気に重症化した。
「でも、十三で嫁入りなんざ、早いねぇ‥‥‥」
ごういん
喉が・・・・・鳴った。続けて蛇骨丸の顔が上気し、血流の勢いは加速する。美形はあふれる
涎を拭い、強引に人波に突っ込んだ。
「す、すみません、ちょっと通して・・・・・・」
「何をしているのです、 蛇骨丸・・・・・・」
「ああ、宝蔵院様、いらしたのですか.....」
「私は、さっきからここにおります...!」
最悪の事態を嗅ぎ付け、 宝蔵院は軽蔑の視線を投げかけた。

「さほどに見たいのですか、その姫を・・・・・・」
たね
「いやなに、話の種に.....」
「私にも聞こえましたよ、 十三歳だと.....」
いつしゅん こうちょく
蛇骨丸は一瞬、硬直し.....
「はっはっはそうだったのですか、 宝蔵院様? ではまだ子供ではありませんか!」
「ゆえに、そなたの好みではありませぬか!」
喧燥の中、二人だけの沈黙・...
ちんもく
「ばれましたか」
むかし
「ええ、ずっと昔から」
はじ
いさぎよ
「では恥を捨て、潔くもっと前で.....!」
「なりませぬ!」
えりくび
ひとご
はな
襟首を強引につかまれ、蛇骨丸は人込みから引き離された。
「でも、みな見物してますよ!」
こしい
りょうみん
「みなは良いのです! みな、姫の輿入れを祝う領民の目付きですから!」
「では、 私は.....」
どうじょぐる
「童女狂いの目付きです.....!」
はな
決然と言い放つ。
「よいですか、蛇骨丸! そなたは、この尼僧に仕える身!
僧籍には入っておらぬゆえ、女色を断てとまでは申しませぬ! ただ・・・・・・」
にょしょく
た
「はは・ ・飽きましたねぇ、その御言葉」
いつせん。 こんこうづえ
せんたん
みぞおち
しきんさより
一閃、金剛杖の先端が、蛇骨丸の鳩尾を痛打する。しかも至近距離から。
「ぐ、ぐおおっっ...!」
せつかん
「そなたには、今すぐ折檻が必要です。 お立ちなさい、宿を探します」
「や、宿なら日暮れてからでもよいと.....」
「また、気が変わりました。 今、 探します」
「では御行列と同じ宿を・・・・・・」
こよい
まちなか
と
「ほほっ、らちもないことを。 今宵は野宿と決めました。町中に泊まれば、そなたいった
い何をしでかすか分かりませぬゆえな.....」
か
みょうだい
人だかりからため息が漏れる。黒塗りの駕籠は、乗り手を見せぬまま、名代の屋敷に
入っていったようだ。宿場を眺めても一見して分かる、 瀟洒な漆喰の土蔵造りの家。
しゅくば
なが
しょうしゃ しつくい どぞうつく

そうぼう かがや
むらさき そうい
そそ
おくば きし
ぎらりと、蛇骨丸の双眸が輝いた。悪辣な視線が紫の僧衣に注がれる。
奥歯を軋ませ、呪神使いは策を巡らせた。
さく
めぐ
「で、では宝蔵院様・・・・・・」
ずるずると自分を引っ張る尼僧に、一転、蛇骨丸は情けない笑顔を振りまいた。
ゆうげ
「野宿となれば、せめて町中で夕餉の材料だけでも・・・・・・」
「なるほど、いいでしょう」
「それに.....少々、酒も.....お飲みになられますか?」
ぴくり、 宝蔵院の表情がこわばった。
「・・・・・いえ、 私は今宵は.....」
「なれど雲州滝ノ宮と言わば、確か地酒が有名だったはず.....何でしたかな? ええと.....」
「.....」
めいがら
もく
「あの名の通った銘柄・・・ う一む.....」
たきにしき
「.....滝錦...・・・・・」
おんみ
「おお、それそれ。なにせ、野宿。宝蔵院様の御身が、夜風に冷えてはなりませぬ。寒さしのぎに是非、買い求めましょう」
黙して、尼僧はうなずく。
こし
輿入れの行列は、みな屋敷に入ったらしく、人だかりも散り始める。が、その様子を盗み見て、呪神使いは一人密かにほくそ笑んだ。
ひそ
（千鶴様.....今宵、 必ず.....）
不気味な笑みは、勝利を確信していた。
屋敷は、滝ノ宮の中心に据えられていた。
つくいべい
ていない
しんにゅうしゃ
高い漆喰塀に囲まれた邸内には、見晴らしの良い庭が広がっている。侵入者を防ぐに十
とうしゆくばみようだい
かがりび
はなよめ
分な塀と視界。加えて、当宿場名代の屋敷は、数十の篝火に守られていた。 花嫁を警護
はん
けいかい
する兵は、夜半になっても警戒を解く様子もない。
あおい きじゅうろう
まどべ
ぎょう し
葵鬼十郎も、格子の窓辺に立ったまま、広い中庭を凝視し続けていた。
「さほどに気になりまするか、外の様子?」
と
やわ
背後から、千鶴はそう問いかける。 雇い主の声は、柔らかく涼やかだ。 しかし視線をそのままに、鬼十郎はただ低く叩いた。
むじゃき
「気にするのが、それがしの役目ゆえ.....」
かんべえ
「なれど、外は勘兵衛たちが見張っておるはず・・・・・用心がすぎるのではありませぬか?」

おく
無邪気な声は、もうもうと立ち込める湯気の奥から聞こえている。
　　振り向いたところで顔はおろか、背格好すら分からないだろう。
せかつこう
びこう
お
ひのきづく
ごうせ
ろば
じょう
ざばあっと言う水音とともに、 鬼十郎の鼻孔を薬湯の香りがくすぐった。 檜造りの豪勢
　　な風呂場は、ざっと十畳もあるだろうか。宿場の名代とは言え、太守榊原家の定宿だけ
　　あって、賛の凝らされた家屋である。 その広い浴槽から上がり、少女は今一度問いかけ た。
じょうやど
よくそう
たず
おなご
「鬼十郎殿に守ってもらいながら.....そう尋ねるのもおかしな事やもしれませぬが・・・・・・」
やと
し
鬼十郎は、振り向かない。 ただ背中で、雇い主たる少女を感じ取るだけであった。
じじょ
湯から出た少女には、二人の侍女がついているはずだ。
　　鬼十郎を含め四人。いずれも肌を見せず、白い浴衣に身を包んでいた。
ゆかた
「用心には用心を。 何せ今、千鶴様をお守りできるのはそれがしだけでござるゆえ」
さむらいごころ
「女子とは思えぬ侍 心ですね」
あゆ
おのれ
「いえ、それがしは... 退魔の道を歩んで以来、己を女子と思うてはおりませぬゆえ.....]
あせ
ぬぐ
ちんもく
言って、額から流れる汗を拭う。だが鬼十郎の言葉は、しばし気配を沈黙させていた。
「.....なにゆえです? なにゆえ、女を.....」
ひめさま
はなづら
じゅしん
「姫様は、さぞ不思議に思われましょうな」
うなずく気配を察し、 退魔師は鼻面を掻いた。
「.....世の中には、女子であることを、利用する呪神もございましてな。女子ゆえの悩み、
　　恥じらい.....喜びや悲しみにも、悪しき呪神どもは付け入りまする」
「それで·····女子は捨てたと?」
「そうですな....忘れ申した。 その方が退魔師としては都合が良いので.....」
「それで湯にも入らぬのですか?」
「身を見せれば、恥じらいが生まれまする。それすなわち、付け入る隙となりましょう。
　　また、いざという時、湯を浴びた体では御役に立ちませぬゆえ.....」
からだ
うんしゅうじ
静かに、湯が流れる音がする。 浴場には、 夜風とともに虫の声が流れ込んでいた。
　　すでに、雲州路の秋も深い。
まるごし
「と言うても... 丸腰ではありませぬか.....」
気配は、当然の疑問を口にした。
まも
「素手でどうして.....私を守れるのです?」
やから
やと ぬし

退魔師などという得体の知れぬ輩を、雇い主は必死に理解しようとしている。 その素直
じゅれい
さそ
はくしき
さと
な問いは、思わず笑いを誘ったが、無知を笑えるほど鬼十郎も博識ではない。
悟られぬよう、退魔師は唾を呑んだ。
「.....いや、確かにそれがしは丸腰。
頼りなくも見えましょう。しかしだからと言うて、大事な刀を持ち込めば、湯で錆びまする」
「ではどうやって...私を守るのです?」
「呪霊の力で」
ふろば
簡単に、鬼十郎は言い切った。
「呪神とは霊体をもつ輩。 霊体を斬るには、 呪霊の力が必要にござる。
体内に霊気があり、心の内に呪力があれば、この拳にでも呪霊の力を宿らせ、
姫様をお守りできまする。それだけは、この葵鬼十郎、誓ってお約束いたしましょう」
こぶし
ちか
やくそく
せいじゃく
風呂場に、つかの間静寂が流れる。だが、ひたむきな視線を背中に感じながらも、未だ鬼十郎は振り向こうとはしない。無礼と承知でのことである。
しんし
しかし背後の声にも、なじる気配はなく、むしろ真摯な礼の気持ちが込められていた。
こたび
「みなが見込んで、此度の警護に加えた鬼十郎殿です.当代一の退魔師・・・その言葉、私は信じまする」
はな
振り向かずに、鬼十郎は礼を言う。窓際から離れることもない、白い浴衣姿。
たいしゅつ
じじょ
が、その耳は、退出していく侍女たちの足音を捕らえていた。
「もう、湯浴みはお済みで?」
のが
「いえ.....鬼十郎殿に.....お聞きしたいことがございます」
不意に改まる。 心中では身構えつつ、鬼十郎は気さくな声でうなずいた。
「.....どうぞ。 何か..... 彼の者たちには聞かせたくないことでも?」
そ
「なぜ..... なぜ鬼十郎殿は私の姿から目を背けるのです? なにゆえです?」
ついきゅう
言い逃れなど許さぬ、追求の声である。
「別にそれがしは・・・・・・」
「いいえ、背けておいでです」
でら
かご
「そのようなことはござらぬ。現に五日前、雨の荒れ寺で駕籠の中の姫様を・・・・・」
「ならば、こちらを向かれませ」
うむ
いつしゅん ちゆうちょ
こぶし にぎ
有無を言わせぬ口調でもあった。一瞬の躊躇。もどかしげに両の拳を握り直し、鬼十郎は唾を飲み込んだ。
「.....向けませぬ」
「なにゆえです?」
「言わねばなりませぬか?」

「.....無礼とは‥‥‥思いませぬか.....?」
小さな声で、初めての詰問。雇い主の精一杯のなじりように、ちくりと鬼十郎も胸が痛む。仕方がない。 そんな観念の声が、渋々退魔師の口を開かせた。
せいいっぱい
しぶしぶ
くちびる
じゅ
「あの数珠を... 今もお持ちにござるか?」
今度は背後で.....躊躇する気配。 しかしやがてうなずく。
大きく息を吐き、鬼十郎は唇を噛んだ。
「.....それゆえです」
「この数珠が・・・・・・なんだと言うのです?」
「知らないとでもお思いか?」
たくま
あず
退魔師の少女は、逞しい背を壁に預けた。
おとぎぞうし
かほう
「御伽草紙でつとに知られた...媚珠を組み込んだ家宝の数珠・・木津谷の守り神、黒鶴からの贈り物・・・・」
こたび
こしい
きづだに
がみ くろづる
まも
「.....は、はい。ですから、父が.....此度の輿入れに際し、私に持たせてやると.....」
はだみはな
「そして肌身離さず持てと言われた.....」
「その何が気にいらないのですか.....!」
「その逆にござる」
静かに.....
鬼十郎は、興奮する気配を制した。あきらめたような笑みを浮かべ、退魔師は腕を組む。
「.....逆なのでござります、千鶴様。
それがしは姫様の数珠に、そして数珠をつけた姫様に.....魅かれておりまする。どうしようもなく仕様のないほどに」
しょう
気の重い告白に、背後の気配が狼狽した。
「そ、それはいったい.....」
とたん
ろうば
でら
「御自分でもお分かりのはず。 初めてそれがしが御意を得た時・ ・あの荒れ寺で・駕籠の中の千鶴様を覗いた、それがしの顔を覚えておられますか?」
のぞ
ちんちく
息を殺し、雇い主は沈黙した。
とつき
「それがしは咄嗟に ・魅入られ申した。 そして後から分かったのです。
それがしは姫様の数珠に数珠が永遠に放ち続ける呪霊の力に魅入られたのだと・・・・・・」
はな
[.....]

「あの時、あれほど勘兵衛殿に腹を立て、すぐに雲州を去ろうとした気持ちが
　　・姫様を見た途端.....立ち消え申した」
[.....]
たの
「御顔を拝した途端、思うたのでござる。この姫様の頼みを聞こう、この姫様を守ろう」
　　「そう.....思うのがお嫌なので.....?」
「いえ、違いまする。 姫様をお守りするのが嫌なのではなく、ただ・・・・・・」
鬼十郎は、言葉を選んだ。
がた
「呪霊の力にてそう思うのが・・・嫌なのです。 どうしようもなく」
こずえ さわ
窓の外で、夜風に梢が騒いだ。
かく
おど
月が、ゆっくり雲に隠れて行く。葉の茂った大木が、ざわざわと踊るのを見ながら、鬼十郎は言葉を
　　続けた。
おのれ
ようま
「それがしが敵は、呪霊を使う妖魔.....すなわち呪神。
　　その呪神どもの呪霊に取り込まれぬよう、それがしは女を忘れ、剣の腕を磨き、呪霊を習い覚
　　えてまいりました。 自然、敵方の呪霊をはねのける力も、身につけたつもりにござる」
けん
うで
みが
「そして呪霊にかけられぬことが、強い退魔師に必要なのですね....」
「かけられれば、負けにござる」
凜として言う。もう鬼十郎は、遠回りな言い訳に嫌気がさしていた。
「それがしはただ、 呪霊に取り込まれるのが嫌なのでござりまする。
　　仕事を引き受けるのなら、己の気持ちで納得し、 決めたいのです。
　　たとえそれが姫様の宝でも・・・・」
なつとく
たから
「なんとのう...分かります」
「どうせなら、好ましく思える方をお守りしたいのです.....なれど、呪霊の力で好ましく思うのは..
　　..納得ができませぬ」
「つまり呪霊の・・・・・・この数珠の言いなりになるのが嫌なのですね?」
じゃらり、珠が擦れる音がする。 確かに一言で言えば・・・・・・そうなのであった。
てき
みずか
たず
「勘兵衛殿にもお尋ねしたのですが.....」
「かまいませぬ」
ねら
「まこと黒鶴に狙われる覚えは.....」
くちびる か
もん
言いかけて、鬼十郎は唇を噛んだ。 我ながら、 ぶしつけな愚問である。
「.....あるわけござりませぬな」
「ずっと御城で育ちましたゆえ・・・・・・」
「木津谷に行かれた事も?」
いな

気配は、否と首を振る。
ののし
自らを罵るため息をつき、鬼十郎は視線を伏せた。
「どうもそれがしは.....守るべき姫様にいらぬ心配や、 無礼な事ばかり.....」
たよ
「よいのです。 私は頼りに思うております」
きら
「決して、姫様が嫌いなわけでは.....」
「あ、私もそれだけは、気にしていたゆえ... つい問いただすようなことを.....」
「取り越し苦労をおかけして...」
「いえ.....そういう事でしたら・・・もう問い詰めたりなど・・・・・・決してしませぬ」
あんど
何か安堵した、晴れやかな声とともに、からりと引き戸が開く音がする。
「上がられるのですな?」
「はい、 長湯をしました」
「では、それがしも.....」
「鬼十郎殿はよいのです」
じじょ
だいじょ
たいしゅつ
笑って気配は、侍女の待つ脱衣所に退出した。
「さっきから外ばかり見て‥‥‥まだ一度も、湯船につかっておらぬではありませぬか」
にん
「それがしが任は、湯浴みではなく.....」
「いいえ、私にかまわず、ゆっくりつかってから、あがればよいのです。 ゆっくりと」
「それでは警護の任が・・・・・・」
まぶ
とも
だが雇い主は、笑い声に眩しい明るさを灯してみせた。
「私なら、もう風呂から上がりました。ここから先は、男の方でも警護できますゆ え.....」
言って、静かに戸を閉めて行く。 侍女たちに指示する声とともに、やがて雇い主の足音も遠のいていった。
ろうか
静かに廊下を渡る気配。 何か、支えの取れた軽やか足取りである。 気配の安堵に気づき、鬼十郎も胸を撫で下ろした。
きんちょう ゆる
そして広い浴場も、もう鬼十郎一人の物となった。ようやく緊張を緩め、退魔師も背後を振り返る。途端に、薬湯の香り。広い浴槽は、溢れんばかりの湯で満たされている。
よくそう
とたん
くすり ゆ かお
「ゆっくりつかって、あがればよいか.....」
鬼十郎の胸中からも、なぜか支えが取れた気がする。 久しぶりに「ゆっくり」と、女の髪を洗ってやりたい。そんな気分で、 退魔師は浴衣の帯をほどき始めていた.....。

おお
かく
西の空から、長大な雲が月を覆い隠した。
いそがい

ゆかた
もん
やしき
闇夜に浮かぶ篝火の列。それだけが、磯貝八右衛門の屋敷を照らしている。
　　平服で長屋門を警護する武士たちの間を、小幡勘兵衛は声を掛けつつ巡回していた。
おばたかんべえ
じゅんかい
「変わりないか?」
「はっ、別段」
「油断すな。敵は、いつ来るやもしれぬ」
しょうそう　さむらい
なれど、と少壮の侍が口を寄せてくる。
じゅしん
てぜい
「いくら呪神とて、この手勢相手では・・・・・・」
ゆる
まんしん
「気を緩めるな。 呪神は、 その慢心や油断に付け込むと言うぞ」
そう言って、勘兵衛も軽くほほ笑んだ。
くちぐせ
「ま、これは鬼十郎殿の口癖だがな」
たよ
「まこと頼りになるのですか、 あの娘?」
むすめ
「なる。呪神相手の戦いなら、一千の兵より確かだ。 それはわしが保証する」
りくしゅう
てんぐ
「陸州では、天狗二十の首をあげたとか.....」
ばちばちとはぜる篝火に目を細め、勘兵衛は重々しく首を横に振った。
だいじ
たく
つら
「武勇を連ねれば、数十巻の絵巻物になる。一流の退魔師だ、大事を託すにふさわしい」
「どうもにわかには・・・・・・」
「信じられぬか?」
「目の前で、 退魔の腕見れば、別ですが.....」
びしょう
馬鹿な、と勘兵衛は微笑を続けた。
「そうそう簡単に出てきてもらっては困る。 何事もなければ、それでよいのだ」
言って、足元の小枝を拾い上げる。
だがその手が・・・・・・
やみ　かなた
ぴた、と止まった。 気配を察した視線が、 ゆっくり闇の彼方に向けられる。談笑の相手
　　も、慌てて目をこらす。
　　しかし平静の表情のまま、すっと勘兵衛は背を伸ばした。緊張を悟り、周囲の武士たちも、得
　　物に手をかける。
もの
きんちょう
お
その闇の奥から.....
「すもとろっ!」

だしぬけに声がした。
「すもとろっ！ お侍様、相撲とろうよ!」
まるはだか
そろ
だつりょく
現れた相手は、丸裸であった。無論、 子供である。
　　まだ五つか六つ、きれいに前髪を刈り揃えた男の子が、ひょこひょこと近づいてくるではないか。
「なんじゃ、 子供か.....」
くぼう
こもの
めんどうくさ
脱力した声が、八尺棒を手にした小者に合図する。
　　うなずいた二人は、面倒臭そうに棒を振り回した。
「ええい、こんな夜中になんじゃ.....!」
「行け！ あっちに行けぃ!」
しぐさ
犬でも追い払うかのような仕草である。だが子供は、 かまわずまとわりついた。
「ねぇ、おじさんとろうよ！ 相撲とろうよ!」
あき
はがん
呆れた我がままに、侍たちは破顔する。
「こんな夜更けに.....どこの.....」
いつしゅん
勘兵衛は、一瞬疑念を浮かべる。だが...一笑に付して立ち去りかけた、その時である。
「こ、こ奴っ!」
ながやもん
小者の悲鳴が、勘兵衛を振り向かせた。
　　勘兵衛だけではない。長屋門を警備する全員が、驚愕に口をあんぐりと開けていたのだ。
きょうがく
「やめろっ！ やめんかっ!」
「ねぇ、おじさんったらぁ!」
無邪気な声が、そうねだっている。だが子供の右手は、
　　突き出された八尺棒を握り締めると、そのまま垂直に向きを変えていた。
　　何の造作もなく、小者と一緒にである。
ぞうさ
いつしょ
はな
「な、何をする、離せっ!」
せんたん
真っすぐ闇夜に向けられた棒の先端には、しっかと小者がしがみついている。それを片手で振り回し、子供は浮かれた声をあげた。
こいのぼり
「うわぁ、鯉幟みたぁい!」
「ば、馬鹿、揺らすな!」
「おい、降りてこい!何してんだ!」
はな
「へ、変だ！ 手が離れねぇんだよ!」
きょう
買ってもらった風車でも回すように、子供は八尺棒を左右に振る。 棒を抱く小者は、恐怖のあまり目をつぶってしまった。

かいりき
あぜん
その怪力に、武士たちも唖然とした。当然の疑念が、全員の胸に湧き起こる。そしてみなの視線が、
一斉に勘兵衛に向き直っていた。
「斬れっ!」
どごう
いつせい
無言で問われた勘兵衛は、怒号を発した。
「姿は子供なれど、あの力はまさしく呪神! 千鶴様の御命狙う者に相違ないっ!」
いのちねら
そうい
「お...おおっ!」
る。
ふふ
さけ
ていない
「笛吹けいっ! 邸内に異変を知らせるのだ!」
叫んで、真っ先に飛び出して行く。
いぐち
わらわ
しゅんそく
すでに鯉口は切ってある。童めがけ突っ込む勘兵衛は、俊足、一気に距離を詰めてい た。
「ひええっっ!」
なにもの
子供から棒を取り返そうとする小者が、突き飛ばされる。 かまわず、抜き打ちの一。
はくじん やみよ ひらめ
勘兵衛は、素早く白刃を闇夜に閃かせた。
「死ねええいいっっ!」「いてぇっ!」
どせい
怒声と、力無い悲鳴が交差する。 はっと、勘兵衛は身を引いた。その目の前に、どさり
はつしゃくほう
と小者が落下してきた。続いて、真っ二つになった八尺棒が、からり。
勘兵衛は静かに、剣を収めた。
「勘兵衛殿っ!」 「小幡様!」
駆け寄る声を、彼はおもむろに制した。
「わっぱめ、 消えたわ・・・・・・」
子供など、どこにもいなかった。斬ったはずの屍を求め、勘兵衛は視線を周囲に巡らせ
「何者でしょう、今の子供.....」
めぐ
しょうふく
あき
そな
「呪神である事は明白.....ともかく、それぞれの備えに知らせよ。敵は近くにいるとな」
がっしょう
承服の合唱とともに、兵は邸内に散って行く。
じゃき
ぎん
だが勘兵衛は、まだ周囲に残る邪気を感じ、暫時その場を動こうとはしなかった。 何か
忌まわしい視線。勘兵衛の背中を、ぞくりとおぞけが走っていた。

「なんてまぁ、気の短い侍だ」

さむらい
邪気は、屋敷の屋根からそう呟いた。
せんだゆう
「けどこれで.....潜入成功。 ふっふっふ.....」
しょうちゅう すいしようだま にぎ
こうしまど
まきわ
こうしょく
掌中の水晶玉を握り締め、邪気は好色な笑いを噛み殺した.....。

おし しょうさま
「湯加減はいかがでしょう、御師匠様?」
また しろう
かお
格子窓の外から、又四郎の声がした。窓から漏れる湯気には、薬草の香りが染み込んでいる。その立
ちのぼる湯気を眺めながら、 鬼十郎は「ああ」と生返事を返した。
なが
なまへんじ
きさま ふろばん
「おぬしがいたのか、又四郎? なんでまた、貴様が風呂番なんぞ・・・・・・」
「御師匠様のお言い付けではありませんか!」
ふんが心
呆れた声が憤慨した。
けん
しゅぎょう
まず
「薪割りは剣の修行になる、しっかり励めと言われたではありませぬか!」
「そんな事をわしが言うたのか.....?」
みょうだいどの
「何でもするゆえ、 こき使ってくれと名代殿に私を預け.....」
「ああ、そういえば、そんなことも.....」
「またそれですか、御師匠様・・・」
おのれ きげん
弟子の言葉に、思わず退魔師は笑みを漏らした。 又四郎をからかう時は、己の機嫌が良い時だ。
薬湯に肩までつかった鬼十郎は、緩みきった自分をいささか反省した。
ずいぶん
ここち
しゅんかん
くすりゆ か
ゆる
「ぬるければ、もっと薪をくべますが?」
「ぬるくもないし、熱くもないわ.....」
「それじゃ分かりませぬよ」
「ちょうど良いということよ」
ゆぶね
退魔師は、湯船の中で、ゆっくりと四肢を伸ばした。
疲弊した肉体を揉みほぐせば、自然、心地よいため息が出る。
安楽を貪る鬼十郎の上機嫌に、どうやら弟子も気づいてい た。
むさぼ
「随分、 長湯をしておられますね?」
ぜいたく

「.....いい風呂じゃ。 やはり、 たまに贅沢するのもいいものじゃな」
「お背中などお流しいたしましょうか?」
瞬間・・・鬼十郎は、ざばっと、湯船の中で身をひるがえす。殺気を感じ、又四郎も焚き口から数歩退いた。
「お、御師匠様、 何か.....?」
はだか
「き、貴様は師匠の裸を見るつもりか!」
「いえ、決してやましい気持ちからでは.....」
「ぬかせ! こいつ、いつまでも子供と思うておれば·····いつの間に.....」
かんちが
「な、何を勘違いなされておいでです!」
こぶし
かべ たた
しゃだん
だが鬼十郎は、どかっと拳を壁に叩きつけ、弟子の弁明を遮断する。
いろか
「よいか、又四郎! 金に迷うのも許せぬが、 色香に迷うはもっと許せぬ! 大罪じゃ!」
「は、はぁ.....」
おなご
きら めい
「女子なぞ、さして良いものではない! その事、肝に銘じておけ!」
「はぁ、しっかりと.....」
「ましてわしの裸なぞ.....女子が欲しければ、わしがそのうち世話してやる!」
「ええっ! ま、まことでござりますか?」
きしょく
さと
しゅんかん
こうしまど
ておけ
その声に.....喜色が混じっている。悟った瞬間、鬼十郎は、格子窓の外へ手桶の湯をぶちまけた。
「な、何をなされます! 御師匠様!」
「嬉しそうな声だったな、又四郎.....」
げきど
静かな激怒を秘めた声。 びしょ濡れのまま、又四郎が凍りつく気配。
もど
ようしゃ
「.....部屋へ戻っておれ。 わしも上がる」
「と言われますと御師匠様・・・・・・」
ほんのう
じん
「久しぶりに絞ってやる。貴様の煩悩、微塵も残らぬほど打ち砕いてくれるわ。今宵の打稽古に容赦は無い。覚悟せい」
かくご
「は、はは.....」
返事に、歯の鳴る音が交じっている。 うなだれた足音は、やがて焚き口を去っていっ た。
(しかし又四郎の言う通り.....)
長湯をしたな、と鬼十郎も思う。 かほどに自分が疲れ、安息を欲していたとは気づかなかった。いつまでもこの湯につかり、できることなら、このままぐっすりと眠ってしまいたい。それでも退魔師は、湯船から上がり、何とかいつもの自分を取り戻そうとした。
こよい うち
ゆぶね

もど
だが.....
(せっかくの風呂ではないか.....)
(今しばらく....もう少しだけ・・・・・)
と

己の裸形を見下ろし、鬼十郎は大きく息を吐いた。旅装を脱ぎ、刀を置き、緊張を解いた姿は、ただの娘でしかない。常日頃から油断を戒め、隙を見せない退魔師はどこかへ消えていた。
鬼十郎自身忘れていた、十六歳の自分がそこにいたのだ。

むすめ
つねひごろ
いまし
「風呂場か.....」
かげ
ひそ
中庭に忍び寄った影は、少年が立ち去るまで息を殺して潜み続けた。
やしき
いまさら
自分
しかし広い屋敷だ。今更、感心し、頭を掻く。
これでは目当ての姫がどこにいるか、捜し当てるのに苦労するはずである。警護の兵を撹乱したのは良いが、当然、警戒も厳しくなっている。諦めて、影は静かに嘆息した。
かくらん
あきら
たんそく
ぜんさい
「ま、先に前菜でもいただきましょう.....」
いつてん じゃこつまる
こうしまど
一転、蛇骨丸は、にやりと笑う。そして音もなく、風呂場の格子窓まで忍び寄った。
昼間の派手な衣装ではない。 闇夜に溶け込む、黒装束であった。焚き口まで達するや、周囲に視線を走らせる。
いしょう
やみよ
IT
くろしょうぞく
「ふっふっふ.....」
うずくまり、蛇骨丸は口元の笑みを押さえた。中から聞こえてきたのは、確かに女の声であった。それもひどく若い。浮かれ気分を噛み殺し、蛇骨丸は念をこらした。
のぞ がんちゅう
「頼むぞ、覗き眼蟲・・・・・・」
ひそ
じゅしんつか
てのひら
密やかな命令とともに、呪神使いはそっと右手を広げた。すでに掌に浮き上がった眼球は、第三の目を機能させている。 蛇骨丸は、慎重に掌を格子の間に差し出してみた。
きゆう
しんちょう

とたん
途端に.....
(まさかっっ.....!)
かんき
ぜつきょう ほとばし
ぜつけい
胸の内から、歓喜の絶叫が送りかける。だが、あまりの絶景に、蛇骨丸はさっと手を引っ込めた。胸が打ち震え、我知らず、 両の拳も握られている。
ふる
こぶし にぎ
(まさか姫様が御入浴なのかっ!)
とつき
かんしょう
咄嗟にそう思った。しかし念には念。
呪神使いは今一度、今度はゆっくり鑑賞すべく、右手を窓格子に滑りこませてみた。
すべ
たたず
そこに、美が佇んでいた。
らしん
ゆぶね
こうちょう
しずく
なみだ
裸身は、今湯船から上がったばかりなのだろう。 まだ全身が紅潮し、洗い場に滴が落ち続けている。若くしなやかな少女の後ろ姿には、一点の歪みや曇りもない。湯気の中で伸び上がる姿に、蛇骨丸は涙した。
ゆが
くも
(来て良かった.....!)
かみ
だが、一人だけの鑑賞会は終わらない。少女は、頭頂でまとめていた髪をばらりと解く。
瞬間、黒髪は腰の辺りまで落ちた。 艶やかな洗い髪は、蛇骨丸の涙腺を緩ませ、くびれた腰から腿に続く曲線を確かめた時、 呪神使いは感極まった。
しゅんかん
こし あた
つや
るいせん
ゆる
もも
かんきわ
(前から見たいっ!)
ていねい
素直な欲求である。 が、視点を移動するわけにはいかない。窓はひとつ。外でも向かぬ限り、相手は振り向いてくれないだろう。
みわくてき
かな
だが後ろ姿だけでも、十分魅惑的な少女であった。
何か軽快な鼻歌を奏でつつ、黒髪を丁寧に洗い流している。やがて糠袋を手拭に絡め、均整の取れた身体を隅々まで洗い清めていった。少女にとって神聖にして不可侵の時間。蛇骨丸は、その幸せそうな背にうっと りと見惚れ続けた。
ぬかぶくろ てぬぐい から

きんせい
からだ すみずみ
ふかしん
(楽しそうだな.....)
とつぜん
(よっぽど風呂が好きなんんっ?)
まばた
突然、第三の視線が、ぱちっと瞬きする。もう一度、確認。 そして.....夢から醒めた蛇
まゆね くも
骨丸は、険しげに眉根を曇らせた。
しらぬの
たた
かたば
湯気の中、少女はやおら白布を手にすると、
細長く折り畳み始めた。肩幅ほどの長さ。その両端を握り、いきなり・・・・・・
りょうたん
....
[むすめ
(なんなのだっ、この娘は...!)
こす
やわはだ
おのれ みが
たくま
ごしっ、ごしっ。背中の柔肌を擦る音は、外にまで達していた。力強く己を磨く少女の腕には、逞しい力こぶが盛り上がっている。 それだけではない。
よく見れば、洗い場に踏ん張る足は、引き締まった筋肉の東に見える。規律正しい摩擦の律動に、蛇骨丸は少女の 真実を見た気がした。
まさつ
りつどう
くせもの
(どうも目当ての姫様ではないらしいな.....)
おなご
(それに.....女子とは思えぬ肉付き.....)
感心し、そして蛇骨丸はにやついた。
(しかし、これはこれで美しいな。何というか... 男らしい健康美だが.....)
思わず、ぷっと吹き出してしまう。 しかし、それがいけなかった。
「又四郎かっ!」
すると
はな
かく
素早く、少女が鋭い声を放った。 胸元を両手で隠し、さっと上体を窓に向ける。
蛇骨丸は、慌てて掌を引っ込めたが、もう遅い。
「何者だっ!」
きょうじん
こうしょく
おそ
女とも思えぬ強靭な声は、好色な気配を察していた。風呂場はおろか、庭先まで聞こえるように、少女は怒号を響かせる。
どこう ひび
だれ
と

「庭に誰かおるぞっ! 捕らえよっ!」
じょうだん
「.....冗談でしょ!」
ちようやく
ぽんと地を蹴り、蛇骨丸は茂みへ跳躍した。
　　が、その姿を、駆けつけた一団の兵たちが発見する。即座に呼び子笛が鳴った。
そくさ
こぶえ
「曲者っ! 曲者じゃ!」
やしき
のが
「追え! 屋敷の外へ逃すな! 回り込め!」
「明かり持て! 明かりを·····!」
そうらん
しゅんじ ていない
げき
りょう
騒乱が、瞬時に邸内に広がっていく。しかし蛇骨丸の動きは、追撃の速度をはるかに凌駕していた。
　　茂みから塀の上へ、塀から大屋根へと、猿のごとく跳び退る。警護の視界か
　　ら、呪神使いは一気に逃れていた。
さる
AI
しさ
のが
いまごろ
「今頃気づくなんて、たいした事ないなぁ」
かく
ぜんら
身を低めて屋根に隠れつつ、蛇骨丸は微かにほほ笑んだ。
　　まだ脳裏には、全裸の後ろ姿が焼き付いている。 あの紅潮した柔肌。
　　満足な収穫に、自然と頬も緩んでいた。
こうちょう
やわ
しゅうかく
ゆる
ほうぞういんさま
たいさん
「さて、そろそろ帰らないと、宝蔵院様が目を覚ますからな 「さて、そろそろ帰らないと、
　　宝蔵院様が目を覚ますからな・・・・・退散しますか.....」
言った直後・・・・
「いずこの手の者だ?」
不意に呼びかけられた。ぎくりとして振り返る。屋根の上には、蛇骨丸の他にもう一 ひとかげ
　　ていりつ人、人影が停立していたのだ。
「いつの間に、私の背後に」
「聞いているのは、こちらだ。 答えよ」
ながやもん
「ああ。先程、長屋門におられた方ですな?」
わらべ
「と言う事は、あの童.....貴様の差し金か・・・」
言いながら、小幡勘兵衛は刀を引き抜いた。
じゅしん

「あの童、人間ではないな。 呪神であろう?」
しえき
そうしゅう
「いかにも、それがしが使役呪神。
　　けんもん、と申してな、宗州では、らしゃんぽ。軍州では川童と呼ばれるが.....」
かわわらべ
ぐんしゅう
よやみ
はくじん
ちみつ
しょげき
ちょうやく なんな
夜闇を、白刃が嫌いだ。 緻密なまでに正確な初撃。 それを、
　　蛇骨丸の跳躍が難無くかわす。が、続けてもう一閃。勘兵衛の剣は、容赦なく呪神使いの胸元を狙った。
いつせん
ようしゃ
ま
さき ほんろう
かいひ
おがわら
しかし、ふわりと宙を舞い、蛇骨丸は切っ先を翻弄するように回避する。
　　鬼瓦を足場にし、美形の侵入者は肩をすくめた。
しんにゅうしゃ
「やっぱり気が短いな。 出世できませんよ」
まわ
「貴様の首を取れば、恩賞でも賜れる.....」
「そんな高い首じゃありませんよ、私は」
「抜かせ、黒鶴の手先め!」
.....? 蛇骨丸は首をかしげた。
「何です、その黒鶴って?」
「ほざくなっ! しらばっくれおって!」
たち
はつそう
今一度、勘兵衛は太刀を八双に構えた。
「貴様が、姫様狙う黒鶴の一味であることは明白! おとなしく観念せぬか!」
ほお、と蛇骨丸は軽くうなずく。
たくら
「そんな企みがあるのですか? へええ.....」
てのひら
言って、軽く掌を打ち振った。
もんぜつ
むかで
同時に、勘兵衛が悶絶する。 その身体には、いつの間にか長大な百足が巻き付いてい
　　た。抱えもある胴体は紫に輝き、万力めいた力のである。両腕を脇腹に押さえ付けられ、勘兵衛は太刀を取り落とした。
たち
やつ
「おのれ、こ奴っ.....!」
こうそく
むかでにゆうどう

「それも私の拘束呪神です。 名前は、百足入道。結構、かわいいでしょう?」
しゅうあく
きょだい
兵衛の顔に、呪神が醜悪な顔を近づけてきた。
　　くわっと横に開いた口は、左右に巨大な牙が並んでいる。並の百足ではない証しだ。
きば
あか
ちょうしょう
なら
なみ
のが
「しばらくすれば消えてしまいます。私が逃れるまで、しばしお待ちを」
「く、くそっ! こいつは...」
「それから私は、姫様を狙う一味などではありません。 それだけはくれぐれもよろしく」
嘲笑を残し、立ち去ろうとする。
とつき
こうちょく
とうそう
びどう
だが振り向いた蛇骨丸は、咄嗟に硬直し、逃走の歩みを止めた。しばし、微動だにしない。
　　いや、できはしなかったのだ。
けんおかん たたず
そこに、嫌悪感が佇んでいた。
つね
りょそう
ぽつとう
常の黒い旅装に身を包み、相手はすでに抜刀している。
　　ひたと蛇骨丸を見据える視線には、一分の隙もない。動けば、斬られる。悟った呪神使いは、
　　笑みをも引っ込めていた。

しかし何よりも.....
(なんなんだ、この殺気は・・・・・・)
しつよう
けんま
すると
ごと
とう
執拗なまでに研磨された、鋭い針先の如き闘志が蛇骨丸の顔をつついている。
　　自然と、呪神使いは歯を軋ませた。 嫌な相手に出くわした時の、いつもの癖である。
きし
(それにしても嫌な感じだ.....)
心中のおぞけを、彼は思わず口にした。
ふふん
「随分、憎たらしい人ですね.....」
「貴様、 男か....?」

さと
相手は、初めて気が付いた。だが蛇骨丸も、その声でようやく悟っている。
「そういうあなたも女で.....?」
「分からぬか! 馬鹿にしたやつだな.....!」
やみ
蛇骨丸は、闇に目をこらした。察したのか、相手もじりっと前に出る。 雲の晴れ間から
射し込む光が、 相手の顔を僅かに照らす。 呪神使いは、信じられぬ思いで後じさった。
あら
がみ
わず
つや
あと
風に、洗い髪が舞っている。
青い月の光を浴びた黒髪は、一段と艶めきを増していた。そしてその全身から立ちのぼる薬湯の香り。 呪神使いは、唖然とした。
くすりゆ
かお
あぜん
「どうした、この顔に見覚えでもあるのか?」
さき せいがん
やいば
女は、切っ先を正眼に構える。慌てる蛇骨丸に、じりっと刃が近づいた。
「だが.....待っていたぞ。 黒鶴の手先め!」
牙を剥き出し、少女はゆっくりにじり寄る。

しんにゅうしゃ
あいたい
ぞう ふ
大屋根の上、 侵入者に相対した鬼十郎も、臓腑がぎりぎりと苦しむのを感じていた。
けんお
見して分かる、嫌悪すべき相手。 臓腑は、 それを知らせていたのだ。
「やけに嫌らしい顔だな、吐き気がする」
めずら
「へぇ、珍しい美的感覚ですねぇ.....」
ののし
「さっき貴様も罵ったぞ。 憎たらしいと.....」
「ええ、先程の方とは思わなかったので...」
そうぼう
鬼十郎は双眸をぎらつかせた。
「どういう意味だ?」
「い、いえ、別に・・・・・・」
「ここに何しに来た?」
「言うのは、恥ずかしいですねぇ.....」
しょう
「女の化粧をしておいて何を.....」
「そういうあなたも男みたいだ」
にら
しばし・・・・・・睨み合う。
「木津谷の黒鶴、その手先だな?」
「違います、私はただの.....」
「呪神使いと言うわけか.....」

せつな
ばっこう
はじ
その刹那 爆光が弾けた。
しきんきょ
いじ
ちさき
至近距離で対峙する蛇骨丸めがけ、 鬼十郎は一刀を突き込んだ。
　　ただの太刀先ではない。呪霊の電撃を纏った、雷の切っ先である。
じゅれい
でんげき まと
いかずち
「うわああっ!」
かんいつぱつ
いつわ
しんそこきょうふ
かた
間一髪、蛇骨丸が後方へ飛びのく。 悲鳴に偽りはない。心底恐怖し、逃げ延びた肩は大
　　きく上下していた。
のが
と
しかし鬼十郎は、蛇骨丸を逃したものの、捕らわれた勘兵衛の元に駆け寄っていた。
　　太刀で一薙ぎ、素早く百足に斬りつける。 退魔師の気合が、 大屋根に送った。
ひとな
むかで
Ge
たいま
はまたい
「破魔退っ!」
むかでにゅうどう
どう
うんさんしょう
鬼十郎の剣が百足入道の胴を断ち割った。 雲散霧消。 呪神の肉体は、
　　すうっと周囲に断ち消えていく。勘兵衛は、屋根に膝をついた。
ひざ
「すまぬ、鬼十郎殿!」
「気になさるな。それより問題は奴.....」
かた
なら
そろ
やつ
二人は肩を並べ、切っ先を揃えた。
　　視線の先に、蛇骨丸を捕らえる。ところが侵入者はうなずきつつ、呑気な体で得心していた。
とくしん
きら
「そなた.....鬼十郎殿か.....」
「それがしの名がどうした?」
「いや、聞いたことがあるので。 確か、 葵鬼十郎殿 退魔師ですね?」
よゆう
蛇骨丸は、深く息を吐いた。余裕の表情に、勘兵衛が間合いを詰める。
「それがどうした、怖じ気づいたか?」

おどろ
やから
「いいえ、驚いたのです。まだこの大陸に、退魔師などという輩がいたなんて・・・・・・」
「嫌いらしいな、 退魔師が.....?」
鬼十郎の問いに、蛇骨丸がうなずいた。
「ええ、 一番.....この世で一番嫌いです」
「ふざけおって.....!」
「でも、それは鬼十郎殿も同じはず.....」
蛇骨丸は、嫌みったらしく笑みをつくった。
「お嫌いでしょう、呪神使いなど?」
「当たり前だ。我らは、互いに相容れぬ生・・・・・呪神を使う者と、呪神を殺す者」
せいがん
鬼十郎の剣が、 再び正眼に据えられる。
きゅうてき
「古来よりの仇敵ではないか.....」
あ
ほろ
「けれど、もう滅んだかと思いましたよ」
とだ
「悪しき呪神がいる限り、 退魔の系譜は途絶えることはない・・・・・・」
「呪神は、悪い奴ばかりじゃない。 人間と暮らしていける者も数多くおりますよ」
「そんなことはどうでもいい.....」
退魔師の太刀が、 がちゃりと鳴った。
たいじ
「それがしは、請け負った敵を退治するだけだ。貴様のような輩を.....な」
「ですが.....私は、あなたがたの敵ではありませんよ。さっき黒鶴とか申した.....」
しの
「なら何しに忍び込んだ!」
「他人には言えない・・・・・・深い事情ゆえです」
「どうだか.....!」
さわ
いまごろ
たいじ
ふと、屋根の下が騒ぎ始めた。
今頃、屋上の対峙に気づき、兵たちが駆けつけようと必死になっている。そんな下界の騒乱を見下ろし、 呪神使いは肩をすくめた。
そうらん
「どうもうるさくなって来ましたね、また出直して来ますよ」
「逃げるのか!」
もちろん
ほか
「勿論。けど、目当ては他にありますので.....それに、
退魔師がいるとなれば、出直すよ他ないでしょう」
ねら
「言え、姫様が狙いであろう!」
「どうかな」
きつもん
兵衛の詰問に、美形はほほ笑みを返してみせた。
「私の名は蛇骨丸。 また御会いしましょう」
「おい待てっ!」
きや

おくば
「私は敵ではない。それだけはくれぐれも・・・」
言って、呪神使いはかき消える。何も、誰もそこにいなかったかのように・・・・・・
「鬼十郎殿、奴は.....」
階下から上がって来る喧噪をよそに、勘兵衛は問いかける。しかし退魔師は、静かに太刀を鞘に収めていた。
いちげき
「奴.....わしの一撃をかわしおった.....」
きし
奥歯を軋ませ、少女は断言を口にした。
「だが次はない。 次は必ず・・・・・・斬ってみせる」
「鬼十郎殿.....」
さむらい
ちか
鬼十郎は侍の横顔で、そう誓うのだった。

第二章

「何じゃとぉ?」
かえるづら
じん
ねむ
面が、ぎょろりと目を剥く。 増田右衛門 尉 長盛は、眠そうな眼をこすり続けた。
「おぬし.....今何と申したのだ?」
しゅくば
「ですから夜が明けぬうちに、この宿場を発ちたいと申したのです」
はん
ざしき
ひざ
なら
小幡勘兵衛は、 語気を強めた。
この夜半、座敷には十数名の武士が膝を並べている。増田長盛を筆頭に、いずれも輿入れ行列の奉行たちである。その一同に向けて、勘兵衛は白
ひつとう
こし
ぶ ぎょう
そうぼう
めいた双眸をぎらつかせていた。

「発つ.....とは、御行列の事か?」
「いかにも。今すぐにでも.....!」
ふだい ろうしん
ぜつきょう
しらがまげ
長盛の間に、勘兵衛がうなずく。だが譜代の老臣は、絶叫して白髪髷を振り乱した。
「一体、何があったと言うのじゃ! わしには何も分からぬわ! 事細かに説明せ いっ!」
「敵にござる」
みわた
静かに... 鬼十郎は言い切った。 勘兵衛の背に従う退魔師は、一座を見渡し、おもむろに口を開き始めた。
まちが

あや
じゅしん あやつ
おもや
しんにゅう
「間違いなく、黒鶴の手先。 怪しき呪神を操る者、先程母屋の方に侵入いたしました」
「何っ! で、では千鶴様は...」
に
「御家老殿、御心配なく。 敵はすぐさま逃げ、千鶴様の奥座敷にも、別状はござらぬ」
あんど
かんはつ
こわね
ほおっと、安堵の息。 が、間髪入れず、勘兵衛は声音を響かせた。
「なれど、ついに敵も動き始めた今、ちまちま御行列を進め続けるわけには参りませぬ!」
「そ、それで今発てと?」
ぜんしゅう
しゃにむに
「いかにも! 然州州都まで、あと五十里! 昼夜を分かたず、 遮二無二御行列を突き進
めれば、おそらく四日後には必ず・・・・・・」
れいげん
「待て! 待て!待て!」
たくわ
「木津の黒鶴は雲州にあってこそ.....雲州の霊源から霊気を蓄えてこそ、その呪霊の力を奮えます
る!とすれば勝負は国境まで!」
ひざ
座したまま、ぐいと勘兵衛は膝を詰めた。 退魔師の視線もひたと、長盛を見据えている。
「御家老殿.....御決断を.....」
「いい加減にせい、おぬしら!」
ごういん
嘆願を、増田長盛は強引に制した。
こたび
たいしゅ
きょうき
「太守家の御行列は、一日六里と定められておる! 五十里を四日でなど狂気の沙汰じゃ!」
どごう
ごじょうほう
ひめさま
おんみだいじ
いつきかせい
じょう
「此度の御行列は例外にござる!」
負けじと、勘兵衛も怒号を飛ばす。
「御定法はこの際足かせ! 何より姫様の御身大事を願うなら、一気呵成に逃げるが上 策!」
「逃げるとは何事じゃ! 逃げるとは! 貴様は、千鶴様に夜逃げせよと申されるか!」
「それで勝てるならよいではありませぬか!」
どうかつ おそ
よめ
「呪神の恫喝を恐れ、雲州の嫁は然州に逃げ込んだ.....世間はそう見る! そう笑う!」
だま
ろうしんたち
おくば
けっこう

老臣達の声に・・・・・・ 勘兵衛の奥歯がぎりっと鳴った。激高した長盛も、しばし黙る。
　　それでも勘兵衛は、今一度深々と頭を垂れた。
「御家老、なにとぞ、なにとぞ.....!」
「.....立は定め通り、明朝明け六つ」
めんぼう
にべもない。長盛の視線は、 ひたと鬼十郎の面貌を捕らえていた。
むか
じきじき
「堂々と迎え撃ち、堂々と然州に入る。 これが御太守様直々の御命令である」
やと
ぬし
「そのために傭われたお主だ。見事、千鶴様をお守りできるのであろうな?」
せん
ちんもく
し
奉行の一人が、扇子の先で沈黙する退魔師を指し示す。だが鬼十郎は、不快を表すこともなく、ただ
　　静かに、あえて瞑目を続けていた。
「無論の事.....そのために、それがしはここにいる。たとえ不利と分かっていても、主の御
　　要望とあらば是非も無し。万事、安んじてお任せあれ」
ぜひ
ばん
まか
あんどん
ふすま じしん
ざしき
・じゅう
行灯が消え、襖が侍臣の手で閉められる。座敷には、勘兵衛一人の苦渋がただぽつりと残されていた
　　。

やみ
たんそく
闇の中、置き去りにされた二人は嘆息した。
「申し訳も・・・・・・鬼十郎殿」
あやま
「何も、勘兵衛殿が謝られる事はない」
言いながら、鬼十郎は憤慨を嘆息で表した。
めずら
「どこの国、どこの家にも分からず屋はおるものだ。さして珍しい物でもない。
　　それに・・・・・・馬鹿ほど数は多いと言う。気にされるな」
ばか
けむ
「御家老は正直、鬼十郎殿が煙たいのです」
捨て鉢な声で、勘兵衛は冷静に告げた。
みずか
せつしや
「鬼十郎殿を雇う話は、御太守様自らが御発案なされ、拙者も大いに同意したのですが.....
　　」
ひた
かちゅう
「まぁ.....何となく分かっていたつもりだ」
制して、鬼十郎も胸中を晒す。

たよ
さら
ふだい
「家中の外の者を頼る.....　譜代の家臣になかなかできる事ではなかろうな.....と」
「しかし、それがしは信じておりまする!」
勘兵衛は、真っすぐに鬼十郎を見つめた。
ずいいち
あんど
「大陸随一の退魔師、　鬼十郎殿あってこそ、みな安堵しておるのです。どうかこの輿入
れ、最後までお見捨て下さるな.....」
だま
わかざむらい
こうふん
鬼十郎は黙ったまま、勘兵衛に視線を合わせた。　若侍は、未だ興奮を押さえきれず、
いらだ
けつきさか
び　どう
しゅら　ぎょうそう
を大きく上下させている。　苛立ちは、この血気盛んな美童を、　修羅の形相に変えていた。
「御心配なのですな...　千鶴様が.....」
だいじ
「それは無論!　何より大事な御方にござる!」
直向きな言葉を、勘兵衛は何のてらいもなくぶつけてくる。
鬼十郎は初めて、この小幡勘兵衛という若者を知った気がした。
「その気概を、御家老殿もお持ちなら良かったのに.....しかしそれは無理と言うもの」
「何ゆえです、御家老とて榊原家の.....」
いやいやと、言って鬼十郎はほほ笑んだ。
じん
「それがしが見る限り、勘兵衛殿ほどの気概をお持ちの仁はおりますまい。
あの御重役方に正面切って御意見できるほど・・・
千鶴様を愛しく思うておられる方は.....」
こし
肩だ
「べ、別段、それがしはっ!」
ぬぐ
言いさして、絶句する。　慌ててうなじの汗を拭う勘兵衛に、鬼十郎は微笑を漏らした。
まこと
(正直な.....誠、正直な方だ)
ねえん
うらや
恋など、鬼十郎には一生無縁のはずだろう。　分かっていながら　・微かに、羨む気持ち
が退魔師の胸中に湧いている。
(勘兵衛殿は.....)
(千鶴様をひたむきに思うておられる.....)
(雨の中、わしを試したのも‥‥‥その思いゆえであったか.....)
鬼十郎は、おもむろに頭を下げた。
「その御気持ち、それがしも無下には致しませぬよ。
そして勘兵衛殿おられる限り.....決してこの御輿入れ、見捨てる事はいたしませぬ.....」
おこし
勘兵衛の思いは、鬼十郎の双肩にかかっている。応えぬわけにはいかぬ、誠実な思いで　あった。
しゅつたつ

「出立ーっ!」
きじょう
こし
朝もやをついて、合図の声が響き渡る。
　　騎乗の小幡勘兵衛を先頭に、輿入れの一行は街道へ滑り出して行った。
「昨夜はよく眠れたか、又四郎?」
「い、いいえ、全然.....」
してい
かご
くつわ なら
師弟もまた、馬上にある。 総体の中央、
　　千鶴の駕籠のすぐ後ろを、二騎は轡を並べていた。又四郎の慣れぬ手綱さばきに、師匠はにんまりと笑みを見せる。
たづな
ししょう
ほんのう
じゃま
こよい
「忘れてはおるまいな?
　　貴様の煩悩の一件...昨夜は邪魔が入ったが、今宵はそうはいかぬ。打ち稽古、楽しみにするがよい」
げいこ
がっくりうなだれる又四郎に、続けて鬼十郎は囁いた。
さいこうび
「.....行列の最後尾に行け」
だしぬけに、冷静な命令。
「なにゆえです、御師匠様?」
ささや
「つけてくる者あらば知らせよ。まさか堂々と.....とは思うが.....昨夜の妮、やけに自信ありげであった。妙に気になる」
みよう
「わ、分かり申した.....!」
ひとかげ
馬首を返し、又四郎は周囲に視線を配る。だが早朝の街道に、まだ人影は少ない。
　　ともかくも、少年は馬を列の後方へと走らせた。
(そうなのだ·····気になる)
(妙に.....奴が気になる)
鬼十郎は、一人思っていた。
昨夜の呪神使い。鬼十郎の一刀をかわしただけでも、その腕は相当なはずだ。

Translation Break 2

やいば
(まだ、わしの刃をかわせる者がいた.....)
おどろ
うまえ
驚きは隠せない。しかし、鬼十郎が本当に気にしていたのは、腕前だけではなかったのだ。
ふんいき
(あの嫌らしい目付き·····雰囲気)
(一目見ただけで.....吐き気がした)

けん じゅれい
そんな敵には、出会ったことがなかった。敵とは、常に剣と呪霊を交えて戦い、常に鬼
十郎が倒すもの。一撃をかわし、逃げたうえに捨てぜりふなど、許しがたい汚辱である。
（じゃこつまる、とか言うたな.....奴.....）
次はいずこで出会うのか。
その風景を想像しつつ、鬼十郎は馬を進めていった。上り始めた朝日が、ようやく朝靄を払って行く。街道は、輿入れ日和であった。
あさもや はら
びより
おこ
ほうぞういんさま
ひど あおあざ
じゃこつまる
ふちど

「まだ怒ってらっしゃいます、 宝蔵院様?」
酷い青痣が、蛇骨丸の右目を縁取っていた。街道を見下ろす山並みに、二人の巡礼は息を潜めている。それでも宝蔵院は、がんがん鳴り響く頭を押さえて歯軋りした。
やまな
じゅんれい
ひそ
ひび
はざし
ふつかは
いっしよう
「あ、当たり前です.....ううっ! また、 そなたの手に引っ掛かりました...!」
「いつもながら単純な御方で...」
なぐ
「二日酔いさえなければ、左の目も殴っているところですよ、蛇骨丸! ううっ!」
ごと
ひか
「一升、水の如し.....ですからねぇ、宝蔵院様は。もう少し、お控えなされては・・・・・・」
こんごうぼう
返事ではなく、金剛棒が飛んできた。
そうけん
なんな
だが今朝の蛇骨丸は、心身ともに壮健である。
難無く一撃をかわすと、街道を去る行列に目をこらした。
もちろん
「宝蔵院様、そろそろ私共も参りましょう」
「まことつけるのですね、蛇骨丸?」
「勿論です」
胸を張り、呪神使いは鼻息を荒げた。
あら
ひめさま
「昨夜は、せっかく忍び込んだのに、目当ての姫様を、ちらりとも見れなかったのですよ。ここであきらめては、私の男がすたります!」
「もう、すたってます。 とっくに」
「ああ、お逢いしたい.....いったいあの駕籠には、どんな美姫が乗られていることか.....]
しょうゆい
ちが

「正真正銘の美姫ならば、きっと、そなたのなりを見て気絶するに違いない.....」
「秋風にそよぐ黒髪.. 宝玉めいた瞳、艶やかな唇.....そして稲穂の如く細いお御足.....]
ゆめ
「また夢見てる.....」
おとな
ういうい
かがや
かんむりょう
「大人になりかけた少女の初々しい輝き、若々しい美しさ・・・・・・う一ん、感無量だ」
ついせき
ろくしゃく
かか
せんたん
だが宝蔵院は、六尺金剛棒を空に掲げ、その先端で行列の中央を示してみせた。
「私が追跡を許したのは、 あれに退魔師がいるからです! それを忘れぬように!」
「現実的ですねぇ、 宝蔵院様は.....」
「当たり前です! 葵鬼十郎がいると聞いては、黙って見過ごすわけにはまいりませぬ!」
つえ
がちゃり。宝蔵院は大地に枕を突き立てた。
じゅしん
「退魔師のおかげで、どれほど無益な呪神たちが殺されたことか! それもみな、あの無
理解で野な・・・・・・呪神と見ればすぐ殺そうとする退魔師たちのせいなのです!」
さけくさ
せま
本題に入った宝蔵院は、酒臭い口で蛇骨丸に迫ってくる。
「その退魔師が目の前にいながら、呪神使いたるそなたが憤激せずにどうします!
我らにとって呪神とは友、 呪霊の力を人間に貸してくれる神聖な存在なのですよ!
それを、そなた·····恥を知りなさい! 恥を!」
じゅれい
はじ
[ははは.....]
にく
なみ
「ですから.....あの行列をつけるのです! 姫が目当てではありません!
当代随一陸きっての退魔師と呼ばれる葵鬼十郎の事です.....きっと何か呪神がらみの企み
に加担し
陸きっての退魔師と呼ばれる葵鬼十郎の事です.....きっと何ているはず。無益な呪神を殺さ
ぬとも限りませぬ。 何があるのか・・・・・・それを確かめるた
め、私は行列をつけると言うたのです!」
確かに.....
蛇骨丸も、気になっていた。
昨夜の退魔師。百足道を難無く斬り伏せた太刀筋。蛇骨丸に切りつけた切っ先の速さ。
(並の腕ではない.....)
いか
恐怖すら覚えた。
しかし、蛇骨丸が本当に気にしていたのは、腕前だけではない。あの憎たらしい目付き・・・
・・・ 雰囲気。
脱げば絶品だったのに、どういうわけか·····一目見ただけで.....怒りが込み上げた。
ふんいき

そんな退魔師には、出会ったことがなかった。
退魔師と言えば、常に呪霊の力を鼻にかけ、無益な呪神を苛めて金を稼ぐ卑屈な奴らと決まっている。 が、あれほど腕が立つうえに、心底根性の曲がった奴は見たことがない。
いじ
ひくつ
こんじょう
やつ
(葵鬼十郎.....か)
おどろ
ゆが
どこで、再び見えようか。
あのひねくれた顔が、驚きに歪むような再会を果たしてやろう。想像する蛇骨丸の顔は、自然とにやついている。二人の巡礼を待つ街道筋は、秋晴れ の穏やかな陽気に包まれていた。
いち

じゅんれい
とて
いただき
鬼十郎の馬が、土手の頂に乗り上げた。
とたん
よくや
あし
かっしょく
途端に視界が広がる。広大な沃野は、一面、葦に覆われていた。 風に揺れる褐色の葦原は、波間のようにざわめいている。
かいかつち
おおうら
おく
その開豁地を二本の大河が横切っていた。 手前には大浦川、 視野の奥には鮭妻川。 雲
へいそう
なが
「いい天気だ・・・・・・」
こしい
輿入れの行列は、ゆっくり土手を横切っている。
鬼十郎の前を進む駕籠も、増田長盛の州きっての大河が併走する様子を、鬼十郎はしばし眺め続けていた。
かわら
はんてん
先導で河原へ降りて行った。 その駕籠目指し、 先行していた勘兵衛が反転する。 動きを認め、鬼十郎も、ようやく馬を進め始めた。
ものみ
ید ه
わた
「勘兵衛、渡し場の様子は?」
たぐ
「待ち伏せ、仕掛けの類い、一切見当たりませぬ! 大浦川の対岸からも、物見が戻りま した!
ひとまず、 ここは安心かと.....」
報告に、長盛は大きくうなずいた。
かわば

「これだけのじゃ。
　　一時に全ての手券を渡らせれば、動きの取れぬ船上で、余剰兵力の無いまま襲われる.....
　　...」
おそ
し
きじょう
長盛は大きく、指揮杖を振りかざした。
やりたい
わた
ほうじん
「竹内彦四郎が槍隊、まず渡れっ！ 対岸で防陣を組み、御駕籠を待てえいっ!」
ざざざっと、命令に合わせて兵が動く。
じゅんが
ひおきげん
「小幡勘兵衛が呪神足軽は、御駕籠に付け！ 日置元之進、騎馬を率い渡し場にて待て!」
ぶそう
長盛は、武装した五十名を三隊に分けた。 まず対岸を確保し、船で駕籠を渡す。
　　何かあれば、手前の岸に控えた騎馬隊が急行する。
じょうせき
てがた
「定石だな･････手堅い」
しょうきん らくたん
鬼十郎は、称賛も落胆もしなかった。長盛も無能では無い。 しかし・・・・・・
(･････いかにも少ない)
なが
たんそく
たこく
分散する兵を眺め、鬼十郎は嘆息した。嫁入りとは言え、他国に入る行列、軍勢である。然州は、随
　　行する警護兵の数を厳しく制限した。それゆえの五十人である。とは言っても、もし木津の黒
　　鶴が攻めかかれば、万の軍勢があったとしても、守りきれはしないだろう。
ずいこう
まん
(そのための・・・・・・わしか)
そしゃく
今更、鬼十郎は自分の役目を咀嚼する。 御駕籠に添うべく、 退魔師は馬を進めた。
「おお、鬼十郎殿、何か感づかれましたか?」
「いや..... 別に・・・・・・」
鬼十郎は、勘兵衛と馬を並べた。
ひより
なら
「この日和では、退魔師の力も鈍りそうだ。 隙だらけになりそうな秋晴れですな」
「なれど気を抜いてはおらぬのでしょう?」
「無論、抜けば必ず付け込まれるゆえ」
びしょう
しばし、二人は馬上で微笑をかわした。
その視線が駕籠に合致した時・・・・・・
「どう思われましたか、 鬼十郎殿?」
「何をで?」
「千鶴様の事にござる・・・・・・」
分かっていながら、 退魔師は惚けていた。
ひめぎみ

「美しい姫君でござるな・・・・・・」
「それだけで?」
「いけませんか.....?」
だが、惚けを繰り返すのは気が引ける。仕方なく、鬼十郎は諦めのため息を吐いた。
「いや、正直申さば・・・・・・美しすぎる」
さら
け ねん
やりたい
じゅしん
さよう
つね やみ
[.....]
「ただそれが姫様御自身の美しさなのか、それとも媚珠の力によるものなのか.....」
「それは確かに・・・・・・」
とつぜんり
懸念に同意し、勘兵衛もうなずく。 その横顔に、鬼十郎は突然凜々しさを感じていた。
わかむしゃ
やくぶそく
この若武者なら、あの姫君の横に並んでも役不足ではないはずだ。
おさなころ
つか
「勘兵衛殿は、幼き頃より姫様にお仕えしていると聞きましたが?」
なが
槍隊が川を渡って行く。それを眺めつつ、 小幡勘兵衛はかすかに目を伏せた。
ぞく
ひゃくしょう
あしがる
「それがしは、武族ではござらぬ。戦にて親を亡くした百姓の子.....拾われて足軽となり申した。誠申さば、今ここでこうして姫様の警護をするなど恐れ多い身分の者にて....」
まこと
おそ
ふみがしら
「勘兵衛殿は呪神足軽の組頭・・・・」
わかざらい はいか
鬼十郎は、若侍の配下を見渡した。
「呪神足軽とはすなわち、 半呪神・・・・・・呪神と人間の間に生まれし者たち。人の世では忌み嫌われ、呪神の世にもなじめぬ者ばかり」
「左様..... 雲州二百四十万石、六万の兵を養うとは言え、 呪神足軽はたったの五十数名.....それがしは身分低きゆえに、人の子なれど組頭に選ばれ申した」
そこまで言って、勘兵衛は肩で息を吐いた。
おきて
「常は闇に生き、闇に死すことを掟となす我らにござるが・・・・・・敵が呪神となれば話は別。呪力なき人間に、呪神の身体は斬れぬゆえ.....」
からだ
ばつてき
やと
「呪霊操る勘兵衛殿の隊が姫様護衛に抜擢され、さらにこの退魔師が備われた訳ですな」
ひとみ
せきりょう
けっこう

うなずき、勘兵衛は鬼十郎を見つめた。 その瞳に、寂蓼が満ちている。
昨夜激高した男とも思えぬ、穏やかで、どこか悲しげな視線だった。
おだ
たこく
とつ
(惚れた相手が他国に嫁ぐと言うのは.....)
男にとってどんな気持ちなのか・・・・・・)
とど
ましてその相手が、決して手の届かぬ存在であったら。 適当な言葉すら見つからぬま
ま、鬼十郎は勘兵衛の肩に軽く触れようとした。
その時.....
おししょうさま
「御師匠様っ!」
とつぜん
突然の声に、鬼十郎の表情は一変した。
「又四郎、どうした? 何かあったか?」
「来ております!」
さいこうび
行列の最後尾から駆けつけ、少年は馬上で息をきらした。
ふうてい
まちが
「御師匠様が言われた風体の男、まず間違いありませぬ! 御行列の後ろをずっと.....」
「まさか昨夜の.....!」
けしょう
「確かか、又四郎? 化粧した、気色の悪い、馬鹿そうな男だぞ!」
まゆ
にじ
ふぬ
「さっきの言い方と違いますよ!
いい年して派手に厚化粧した、売れない三流女形みたいな腑抜けっておっしゃったじゃないで
すか!」
ひそ
「どっちでもよい! 密かにつけているのか?」
「いいえ、ちっとも」
きば
眉を寄せ、鬼十郎は牙を剥き出しにする。
「なら、なんで知らせに来た? 見つけはしたが、つけてはおらぬのか?」
「つけてますよ、思いっきり!」
「何、どういう事だ?」
いつかつ
「分からないかなぁ····· 御行列の後を、堂々とつけて来てるんですよ! 堂々と!」
弟子の報告を聞き、鬼十郎はわなわなと手綱を震わせた。怒りが全身の毛穴から吹き出
し始める。叩きに似た声も、喉の奥から絞り出されていた。
「..... 堂々..... 堂々と、だと?」
「は、はい、御師匠様・・・・・・」
滲み出る怒りを察知し、又四郎は馬ごとたじろいだ。しかしもう遅い。 馬上の退魔師
やじゅう おたけ
は、一喝、野獣の雄叫びを上げていた。
「.....なめるなあっっ!」
「わ、私じゃありませんよ、御師匠様!」
おやま

あなど
どせい
ちょうはつこうい
「やかましい! まさかと思うたが、堂々とは許せぬ! 明らかな挑発行為だ! わしの力を侮っておる!
ふざけた呪神使いだ!」
「ま、全くその通りで.....」
こうたい
すると
ほぼく
怒声を受け、又四郎はさらに後退する。だが鬼十郎は、鋭い視線で少年を捕縛した。
「奴は、もう追いつくのか?」
わた
しはんとき
「いえ、足取りは遅いゆえ、この渡し場までは、四半時もかかりましょう」
「一人だな?」
「それも.....二人連れでござりました」
いか
いっしゅん
とぎ
鬼十郎の怒りが一瞬.....途切れた。
「二人連れ?」
にそう
ころ みそじ
じんびんいや
「はっ、尼僧です。 年の頃、 三十路も半ば男とは違い、何やら人品卑しからぬ女性に
見受けられました」
又四郎は、つとめて冷静に評している。だがその観察眼に、思わず鬼十郎は眉をひそめ た。
「なにっ... 三十路半ばだと? 貴様、いつから女の年が読めるようになった?」
「それは.....男の勘と言うもの.....」
「ませた口を...・・・」
によしょう
だつりょく
じょうきょう
りん
おそ
言って、鬼十郎は脱力した。怒りは治まらぬが、状況も変わらない。 背後の渡し場を
さく
めぐ
おかご
「忌ま忌ましい奴らだが、今は道中を急ぐが先だ。わしは姫様の御駕籠につく。又四郎は振り返り、
退魔師は策そのまま行列の最後尾にて、監視を続けるのだ。 何かあれば・・・・・・
花火にて急を知らせよ」を巡らせた。
かん
きゅう
さいぜん
さく
「それが最善の策。敵は二人だけとは限りますまい。是非、鬼十郎殿は御駕籠の.....」
また
勘兵衛は、そう言葉を続けようとして・・・・・・視線を急に背後へ移した。馬に跨がった増田長盛
が、奉行らを引き連れ急迫して来たのだ。
ぶ ぎょう

きゅうはく
「勘兵衛、何をしておる? さっさと御駕籠につかぬか! 鬼十郎殿も早く!」
ふてい やから
「ただ今参ります、御家老様。
何やら不逞の輩が御行列を届けているとの事で、鬼十郎殿凜として、冷静を保つ勘兵衛だが、長盛たちは一転表情を引きつらせた。
ではず
いつてん
「不逞の輩? そは何者じゃ?」
みようだいどの
やしき
しの
「恐らく... ・昨夜、名代殿の屋敷に忍び込みし賊。得体の知れぬ呪神使いにござろう」
へいせい
はな
ろうばい あらわ
鬼十郎も平生のまま言い放つ。だが奉行たちは、一斉に狼狽を露にした。
「呪神使い.....とすれば黒鶴の一味.....!」
「いや、それはまだ分からぬ!」
「確かめるべき····· いや追い払うべきじゃ!」
(何を馬鹿な.....)
ちょうしょう
ついせき
あからさまに、鬼十郎は嘲笑を浮かべて見せた。たかが二人の追跡を知らされただけで、榊原家の老臣達は一様に動揺し始めた。 大国の、責任ある武族の振る舞いではなかっ た。
ろうしんたち いちょう どうよう
ぶぞく
ま
およ
めった
「御心配には及びますまい。御駕籠にはそれがしと勘兵衛殿がついておりまする。 たとえどれほどの呪神が攻めかかろうと、滅多な事では御駕籠には近づけぬはず。いらぬ気は使われぬ方が良いかと思いまするが.....?」
おうよう
動揺を鎮めるため、鬼十郎はわざと鷹揚な口ぶりを示してみる。だが馬上の長盛は、丸い顔へ一気に血潮を上らせた。
ちしお
「そうは言われるが鬼十郎殿! らが与し易しと看るは、早計ではござらぬか!どのような呪霊を使うか、そなたとてすべて知った訳ではなかろう!」
「それはそうだが・・・・・・」
「ならば御駕籠の警護は勘兵衛に任せ、そなたは不埒な輩とやらを、早々に始末したらどうなのだ! また、敵の力を知る良い機会でもある! ここで一戦交えられよ!」
「そ、そんな.....」
だが又四郎が不平を叫ぶより早く、 勘兵衛が反射的に逆上していた。
「鬼十郎殿に御駕籠から離れてもらうのですか? それこそ敵の思う壺ではありませぬか! 黒鶴の一味に付け入る隙を与える事になりまするぞ!」
あた
さよう
「居所の知れぬ敵を警戒するより、姿現した敵を斬るのだ!」
「鬼十郎殿ならば、敵の先兵ぐらい難無く倒せよう! 敵に我らの力を見せつけるの だ!」
きさま おのれ

「左様! それとも勘兵衛、貴様、己の一隊だけでは姫様守る自信が無いと申すかっ!」
「何を申されますっ!」
こぶし
たづな
兵衛の白いうなじに、くっきりと青筋が浮き立った。拳は、
手綱を引きちぎらんばかりに震えている。
ふる
だが鬼十郎は.....
(.....疲れる連中だ)
きょう ふ
ぶぎよう
恐怖に取り憑かれた奉行たちに、鬼十郎の正論は通じまい。まして無能な老人達と、押し問答する気力も無い。 勘兵衛の悔しさは分かるが、今は言い争っている時でもなかった。
くや
「分かり申した。 それがしが行こう」
おししようさま
「御師匠様っ!」
あぜん
「しかし鬼十っ.....!」
わかむしゃ
ばしゅ
唖然として、 若武者は馬首を返す。だが振り向いた勘兵衛の手を、 退魔師は穏やかに撫
さいはい
とく
にぎ
こしい
「行列の采配は、長盛殿が握っておられる。輿入れもまだ始まったばかり.....ここで統率を乱すのは得策ではあるまい」
とくざく
「よう言うてくれた、 鬼十郎殿! ではわしの命に従ってくれるのだな?」
もちろん
きら
めい
「それは勿論。ただこれだけは肝に銘じていただきたい・・・・・・」
ただ
なら
鬼十郎は背を正し、居並ぶ雲州の老臣達をねめつくした。
はな
「それがしが御駕籠を離れる間・・・・・・くれぐれも御油断無きよう。
万が一、敵が襲い来るような事あらば、すぐにお知らせ願いたい。
そして敵に会うたならば・・・・・・勘兵衛殿に全権を委ね.....采配をお任せ願いたい。いかがで?」
まか
すんぶん じょうほ
すると
みわた
寸分の譲歩も許さぬ、鋭い眼光が一同を見渡した。 敵以上に恐ろしい味方の存在に、 長盛達は今初めて気が付いていた。
ふてい やから
「こ、心得た。 とにかく、 鬼十郎殿、 不逞の輩の事・・・・・・頼み申すぞっ!」

震える声でそれだけ言うや、長盛達は逃げるように去って行く。
　　しかし勘兵衛だけは納得できぬ視線で、鬼十郎を睨みつけた。
にら
「どうして言いなりになど...!」
こた
りんせつ
しばし、退魔師は応えない。ふと、渡し場に隣接した簡素な休み小屋を眺め、鳥のさえずりに耳を傾けてみる。
　　簾で覆われた東屋には、船を待つ人々が談笑していた。輿入れ行列が渡り終え、自分たちの船が出るのを待っているのだ。
そくぼく
「.....それがしは退魔師にござる。 確かに、それがしにはそれがしのやり方もある。
　　しかし.....
　　我が師ト伝は常に言うていた。たとえ他人のやり方を押し付けられても、たとえどんな束縛や制限があろうとも、見事、退魔の仕事を果たすのだと。それを成し得てこ そ·····
　　一流の退魔師だと」
しほくでん
ととの
[.....]
「それがしは、退魔師として一流でありたい。たとえ最良の条件が整わずとも.....立派に
　　千鶴様はお守りしてみせまする」
だま
してい
言って、鬼十郎は又四郎にも視線をくれた。師の言を受け、少年は黙ってうなずく。 も
　　はやいらえの必要もない、師弟であった。
まざ
くらつぼ
なぐ
勘兵衛は、行列を振り返り、悔し紛れに鞍壷を殴りつけた。
ごぶぎょうしゅう
じん
「.....御奉行 衆が今少し、話の分かる仁であればっ.....!」
ご いつとう
「気にされるな。あの御一党には、いかなる講釈も通じまい。それより勘兵衛殿・・・・・・」
わかな しゃ
むぐら
かた
やおら、鬼十郎は若武者の胸倉を引き寄せた。
　　はっと勘兵衛の表情が硬くなる。だが鬼十郎は、臆さず真っすぐに、彼の瞳をひたと見つめた。
ひとみ
ご いちにん
「それがしが見込んだ侍は、勘兵衛殿ただ御一人。 千鶴様の事、くれぐれも・・・・・・な」
まか
「.....心得た。お任せ下され」
駆け去る勘兵衛を見送ると、 鬼十郎は大きく肩で息を吐いた。
「ならば、我らも先に渡ろう」
わた
「例の者、始末しないのですか?」
問うた弟子に、 鬼十郎は四方を指し示した。
なか

か
「ここでは見晴らしが良すぎる。 先に渡り、 大妻川と鮭妻川の・・・・・・・
・中洲にて迎え撃とう」
「渡って来るまで、 かなりかかりますが?」
かせ
たかまがはら
「それで良い、時が稼げる。 その間、行列は鮭妻川を渡り終え、わしは高天原を張れる」
「では、本当に待ち伏せるんですね?」
ちゅうちょ
はら
にら
言って、少年は退魔師を見上げた。 念を押す又四郎の声は、明らかに躊躇を孕んでいる。鬼十郎は、怪訝な目付きで弟子を睨みつけた。
「何だ、何が不満なのだ?」
ねら
にそう
「だって.....尼僧ですよ?」
「尼さんがどうした?」
じゅうにしんてん
「十二神天に仕える女性を、高天原なんかに引きずりこんでいいんでしょうか?」
「構わぬ。男だろうが女だろうが.....それがさんだろうと、坊さんだろうと.....御行列を狙う者に容赦は要らぬ。 斬って捨てよ」
ようしゃ
「ばちが当たりませんかねぇ.....」
ふん、とわざとらしく鬼十郎は鼻を鳴らす。
「その尼僧・・・・・・美人であったな?」
ずきん
「いやぁ.....頭巾で顔しか見えませんでしたから.....」
みそじなか
「十分ではないか。 三十路半ばとは言え・・・・・・斬るのをためらう女だな?」
又四郎は、返事ができない。引きつった笑いを続けたまま、 さらに馬を一歩後退。
しか退魔師は、うなずいて馬首を巡らせた。
「分かった。 嫌なら、わしが二人とも斬る。貴様は、高天原の外で待て」
「いいんですか?」
はな
「ほっとした顔をするな。 そんな女に限って、 思い掛けぬ呪霊を使うものだ。 肝に銘ぜよ」
言い放ち、鬼十郎は渡し場へ馬を走らせた。 慌てて又四郎も後を追う。
どこかの山上からは、薦の声が聞こえていた。それは血なまぐさい謀略には似合わぬ、
やまざと
ひび
穏やかな山里の響きであった。

うら
わた
ちゅうてん
ころ
船が大浦川を渡ったのは、もう日が中天を過ぎた頃である。日差しには、未だ夏の陽光が感じられたが、葦原を渡る風は涼しく心地よい。粗末な桟橋に降り立った宝蔵院は、その風に顔を緩ませた。
あしはら わた
ここち

そまつ
ほうぞういん
じゃこつまる
「良い風ではありませぬか、蛇骨丸?」
「いいから、早く手を貸してくださいよ・・・・・・」
あいかん
じゃしんつか
次々下船する旅人に従い、情けない声が哀願した。呪神使いは震えながら、ようやく岸辺に一歩を踏み出していた。
たよ
「頼りない姿だこと・・・・・・」
さわ
「ええ、ええ、何とでも。 全くどうしてみな、んなに揺れるのに騒がないんだろう.....」
ささや
もど
小声で囁き、蛇骨丸は対岸を振り返った。渡し船は、大浦川の水面をゆっくり戻って行く。視線を戻せば、妻川との間に横たわる長大な中洲に到着した旅人たちが先を急いでいた。誰もが次に控える鮭妻川を渡り、 日暮れまでに、その先の鷺野城下に入りたいの だ。
さけま
なかす とうちやく
ひか
ひぐ
さぎのじょうか
だれ
こしい
「宝蔵院様、お輿入れの行列は見えなくなりましたね。 急いでいるんだなぁ.....」
こよい
「なれど道は一本。 鮭妻川を渡り、今宵は鷺野の御城下に入るはず。宿が分かっているのです。追うのは容易いことですよ」
たやす
大浦川の渡し場から、鮭妻川の渡し場へ。
人の列は、葦原を横切る細い道に沿って続く。小径の両側には、人の背丈をも越えた葦が密生し、視界は遮られていた。道は一町と無い距離ではあるが、蛇骨丸は背筋にちくちと突き刺さる気配を感じていた。
「どうしたのです、 そんなにそわそわして・・・」
「宝蔵院様は感じませぬか? どうも誰かに見られているような気が.....」
かじょう
「そなたは、いつでも自意識過剰なのです。最もそんな成りをしていては、みな怪しい目付きで見るでしょうが.....」
あや
にそう
こんごうづえ
尼僧は金剛杖を手に、先へ先へと歩を進める。しかし呪神使いは、明らかに殺意のこもった視線を感じていたのだ。
いっぴき ほう
(念のためだ.....)
(一匹、放っておくか.....)
ふところ
がら そで
すいしょうだま

蛇骨丸は、懐に手を入れた。派手な柄の袖の下。
　　細い二の腕には、幾つもの水晶玉が巻き付いていた。穴を穿ち、珠数状に繋がれた玉には、使役呪神たちが封じられている。
うが
じゅず じょう つな
しえきじゅしん
ふう
その刹那.....
ていきつ
歩きながら玉を探り、蛇骨丸は偵察用の一匹を選びかねた。
せつな
とうとつ
「あ.....?」
思わず声が出た。
　　唐突に、足が止まってしまう。だがそれは宝蔵院も同じであった。同時に異変を察知し、視線を合わせる。 二人とも、耳の奥に湿った空気が流れ込むのを感咄嗟に身を堅くしていた。
おく しめ
とつさ
かた
そしてその周囲で・・・・・・
んざい か
とつぜん
へんよう
あた
いつてん
異変が顕在化した。 突然の様である。
　　秋晴れの空はかき消え、辺りは一転、暗黒に包まれた。いや、真の暗黒ではない。
　　中洲を包囲した闇には、星が幾つも明滅している。葦 原は、いきなり星空に包まれたのだ。
かす
やみ
めいめつ
ひかげ
さらに、二人の前後を歩いていた人影が、一人残らずかき消えている。周囲はただ、星
　　空と風になびく葦。 佇むのは、蛇骨丸と宝蔵院。 二人きりの静寂である。
あし たたず
せいじゃく
あし
「こりゃあ、一体.....」
とつじょ
かんたん
くちびる
突如現出した満天の夜空を見上げ、蛇骨丸は感嘆の声を漏らす。
　　しかし宝蔵院は、唇を真一文字に結ぶや、しばし硬直し続けた。
まいちもんじ
こうちょく
「まずい事になりました.....」
つぶや
こし
呟き、いきなり宝蔵院は、金剛杖を腰に構え、周囲に視線を走らせた。
「な、何がまずいんです、 宝蔵院様?」
れいき

じゅりよく
「分からぬのですか? この閉ざされた空間に満ちた霊気の量... 呪力の力.....」
「これ・・・・・・呪霊なんですか?」
てんかい
おそ
おうぎ
「呪霊も呪霊.....展開された霊気の量から察して・・・・・・恐らく第一種の奥義呪霊.....」
「となると.....!」
うろたえる蛇骨丸が、 水晶玉の列をまさぐる。だがかぶりを振って、 宝蔵院は言い切った。
むだ
やつ
どひょう
「無駄ですよ、蛇骨丸。これがもし、例の退魔師の呪霊ならば、私たちは其奴の土俵に引きずり込まれたのです.....」
たかまがはら
「まさか高天原.....!」
「そのまさかでしょうね.....」
うなずいて、 宝蔵院は宙へ飛んだ。
とたん
いつせん
身を丸め、一閃、金剛杖を振り回す。途端にかん高い金属音がきんと言う激突の衝撃とともに、星空に火花が散った。
きんぞくおん
げきとつ
ようげき

「宝蔵院様っ!」
さけ
にそう
叫んだ蛇骨丸の眼前に、尼僧は着地した。
きのう
つえ
しかし同時に、星空から舞い降りた影がもう一つ。
　　杖の一撃を凌いだ太刀が、すいっと闇に浮かび上がる。 葦を背に、黒装束は姿勢を整えた。
やみ
くろしょうぞく
ととの
「待ったぞ、蛇骨丸とやら.....」
[.....-]
あおい きじゅうろう
冷め
とげとげ

するど
と
現れて、葵鬼十郎は切っ先を二人に据えた。刺々しい視線が、鋭く呪神使いを捕らえる。昨夜のままの、怒りを込めた双眸であった。
そうぼう
「昨日の続きだ。そのために待った。 待ち過ぎて...・・・いささかくたびれたわ」
はくじん
もはや避けることのできぬ、そしてかわすことのできぬ白刃であった。

わた
ばたかんべえ
けいかい
かわら
水面は、波一つ無い穏やかな流れであった。 鮭妻川の渡し場に立ち、小幡勘兵衛がぐるりと周囲を警戒する。 秋晴れの河原には、水鳥のさえずりだけがこだましていた。安全を確かめた勘兵衛は、黙して増田長盛に合図を送る。応えて、老臣は号令をかけた。
もく
ましたがもり
こた
ろうしん
おか
「御駕籠を乗せえーいっ!」
こちの
しんちょう
声を聞き、駕籠かきの小者が、慎重に乗物を船に上げ始める。同時に、勘兵衛麾下の一隊も、四五名ずつ小船に分乗する。 対岸で待つ長槍隊を目印に、鮭妻川の渡河が始まっ た。
ちょうそうたい
とか
ばか
勘兵衛も、駕籠を乗せた船にひらりと飛び乗る。 その勘兵衛に視線を合わせ、舳先に立つ長盛は、静かに若武者を差し招いた。
わかむしゃ
「何か、御家老・・・・・・」
まね
「いや、万事つつがないと思うてな。黒鶴からの書状では、一族挙げて攻め掛かるなどと記してあったゆえ...正直、気が抜けたわ」
ぜんしゅう
「良いではありませぬか。 それに御行列が然州に入るのは、八日も先のこと。まだまだ油断はできますまい·····ですが、それが何か?」
うむ、と答えて、長盛は言葉を絞り出した。
「これならば・・あえて雇い続ける必要も無いのではないかと.....な?」
「馬鹿な! 鬼十郎殿をですか!」
げつこう
あわ
勘兵衛の激高に、思わず船が大きくかしぐ。 慌てて長盛は、 わななく若武者を諌めた。
りょう
たいしゆきまじきじき めい
「そうは言うが·····雇い料は一千両じゃぞ! いくら御太守様直々の命とは言え.....」
およ
「雇い料については、御太守様も御承知のはず! 我らが心配するには及びますまい!」
「なれどのぉ.....」

つら
さんざんぶぎょう かんじょうぎん みやく
口をすぼめ、長盛は不満を連ねかける。金山奉行、勘定吟味役を兼任する長盛に一千両の出費は辛いのだろう。だが勘兵衛は、老臣のうなだれる背に声を改めた。
つら
ひめさま
うば
「もしここで鬼十郎殿を御行列から外し、その上で黒鶴に姫様を奪われでもしたら・・・・・・家老様は責めを負い切れまするか?」
「そ、それは.....」
「いかにも。一切、申し開きのできぬ事になりましょう。 それでも良いのですな?」
きさま
「勘兵衛、貴様.....脅すつもりかっ!」
どな
せんび
ふなべり
こし
きより
小さく怒鳴り、長盛はそそくさと船尾に逃げ出した。ほほ笑んで、勘兵衛も船縁に腰を 下ろす。二人は距離を置いて、 しばし風景に目を移していた。
ゆうよく
なめ
とせん
呆ク
青空には、遊弋する水鳥の群れ。滑らかな水面には、渡船の波だけがうねっている。れるほどのどかな、 初秋の昼下がりであった。
つぶや
とつぜん
「まぁ、案ずる事もないか.....」

呟いた長盛が取り越し苦労を止めようとした、 その時·····
突然、舳先から勘兵衛の姿が消失していた。
「勘.....っ!」
ぎょうこ
言いかけた長盛の声が凝固する。だしぬけに大きな水音。そして水しぶき。悲鳴はなかった。だが疑う余地は無い。勘兵衛は、水中へと引きずり込まれ.....
「船を寄せえーいっっ!」
たち
反射的に、叫んだ長盛は太刀に手をかけた。気づいた周囲の船頭が、続けて兵たちが、駕籠船に刮目する。
かぶね
かつもく
おそ
しかし、遅い。
しわぶ
いつせい
あわだ
たった今まで、咳き一つ立てなかった水面が、一斉に泡立った。それも幾つも。続けて、駕籠を乗せた渡船の周囲に、水柱の群れが逆る。長盛は、頭上遥かの水柱を見上げ、果敢に太刀を抜き払った。

ほとばし
はる
はら
「じ、呪神かっ.....!」
ろうしよう
きょうふ
ひび
いぎょう
老将は、腹の底から恐怖を響かせる。だが異形の者たちは、長盛をあざ笑うかのように、堂々と船上へと舞い降りた。 醜悪な刺客たちが、今始めてその姿を露にしたのだ.....。
しゅうあく
しかく
あらわ
はりさき
すると
にら
まがまが

鬼十郎は、切っ先をぴたりと蛇骨丸に据えた。同時に針先めいた視線で、鋭く呪神使いを睨みつける。全身からは、禍々しい怒りが噴き上がっていた。
ばか
ほど
「よくまぁのうのうと、御行列をつけて来られたものだな!馬鹿にするにも程がある!」
「いや、私は別に馬鹿になど・・・...」
たた
「やかましいっっ! 叩き斬ってやるっ!」
あし
りんこう
周囲の葦の中からは、数十の燐光が浮かび上がっている。ゆらゆらと頼りなげに浮遊するそれは、次第に蛇骨丸と宝蔵院を囲む陣形を組み上げていった。 退魔師の結界が完成し たのだ。
蛇骨丸は、うんざりした声で顔をしかめた。
たいまし けつかい
みずか
ま
「わざわざこんな結界を張って待ち伏せですか? たかだか私たちのために.....」
ねら
だま
「御行列を.....姫様をつけ狙う者を、黙って見過ごすわけにはいかぬのでな・・・・・・」
「だから言ったじゃありませんか、私たちはあなたがたの敵じゃない。 呪神使いを憎く思う、退魔師殿のお気持ちも分かりますがね」
うそ
ととの
鬼十郎は、口の端を吊り上げる。 すり足で態勢を整え、 退魔師は間合いを詰めた。
「自ら敵だと名乗り出る馬鹿もおるまい!」
「では嘘をついていると?」
「ああ、そう見えるっ!」
どろぼう
「人を見れば泥棒と思え、ですか?」
「忍び込んだのは貴様! 悪いのも貴様だ!」
「確かにねぇ.....」
とつぜん

にそう
突然、尼僧が声を上げた。 そして何げなく、 鬼十郎の前に歩み出る。
その落ち着き振りに、退魔師は眉を寄せた。
「そなたは?」
じゅんれいしゃ
「宝蔵院。 この蛇骨丸の育ての親にして後見人。 共に大陸諸州を旅する巡礼者です」
いんぎん
冷静に、かつ慇懃に宝蔵院は頭を下げる。
「これは大陸に名高き退魔師、 葵鬼十郎殿とお見受け致しますが.....」
「貴様も一味かっ...?」
「なるほど、一味と言わば一味。 なれど葵殿が待つ、企ての一味ではござりませぬ」
きんちょう と
低姿勢ではあるが、鬼十郎に緊張を解くつもりはない。
宝蔵院ににじり寄るや、牙を剥いた退魔師は、怒声と共に唾を吐き飛ばした。
どせい
つば は、
さくやみようだいとの やしき
しの
「では何ゆえ、その男は昨夜名代殿の屋敷に忍び込んだのだ? 目的を言え!」
まこと
「それは・・・・・・誠に申し上げ憎いのですが.....」
「言わぬかっ!」
せいらない こうしょく
「はい.....実はこの蛇骨丸、生来無類の好色でございまして.....」
「ちょっ、ちょっと、宝蔵院様・・・・」
「しっ! 誠の事ではありませぬか!」
どうよう
蛇骨丸の動揺を制し、 宝蔵院は先を続けた。
としごろ むすめ
きょうみ
おさな
「それも.....年頃の娘にはさっぱり興味がないのですが・・・・・・逆に幼い娘にはまるで目がないのでござります.....」
「な、なんだと・・・・・・」
きば
おぶつ
やき
あと
やおら鬼十郎は、汚物でも見るような目で蛇骨丸を蔑んだ。 思わず、切っ先も後じさる。
たき
みや しゅくば
ひめさま
うわさ
「はい、それで・・・・・・たまたま滝ノ宮の宿場で、姫様のお噂を聞き付け、何とかお姿だけでもと... つい、忍びこんだとの事・・・・・・」
「ばっ 馬鹿にするなあっっ!」
ど
24
しゅんじ
あわだ

怒鳴る鬼十郎の背に・・・ 寒気が走っていた。剣を握る両腕も、瞬時に泡立つ。怒りと侮
蔑に満ちた視線で、 鬼十郎は蛇骨丸を睨みつけた。
「そんな言い訳で納得できるか! からかうにもほどがあるっ!」
「でも... 宝蔵院様の言う通りなのですよ‥‥‥ いやぁ、全くもってお恥ずかしい・・・・・・」
「恥ずかしいで済む話かっ!貴様、そんな汚らわしい奴だったのか.....!」
しらじら
しこう
そうとしか言えなかった。敵ではないかもしれない。 だが、 味方であっても許せる男
ではないのだ。 好色こそ、 鬼十郎が最も忌み嫌う、人間の悪しき嗜好であった。まして童
女狂い.....。
「まぁ...ちょっと人と好みが違うだけですよ ちょっとだけね・・・・・・」
せきばら
白々しい笑いを、尼僧は咳払いでくい止めた。
いたずら
ねら
「とにかく.....蛇骨丸のした事は悪い悪戯とは思いますが・・・・・・姫様狙う企てなど、私共は
一切知らぬこと。どうかその刀を、お納めいただけませぬか?」
もう一度、宝蔵院が頭を下げる。釣られて蛇骨丸も平伏した。だが.....
「や、やかましいっ!」
けん
今一度、鬼十郎は剣を構え直した。
「そ、それで疑念が晴れたと思うなっ!」
「まだお疑いなのですかっ?」
「当たり前だ! そんな話をいちいち信じていては、退魔師なんぞ勤まらぬわっ!」
「蛇骨丸ではなく、私がお話ししてもだめなのですか?」
「当たり前だっ!」
宝蔵院の言を、 退魔師はにべもなく一蹴する。
いつしゅう
どうじょぐる
「尼僧とは言え.....そんな女のなりをした童女狂いの育ての親では、信用がならんっ!」
「何ですとっ!」
みそじなか
じんびんいや
あや
「三十路半ば、 人品卑しからぬ風に見えて‥‥‥そんな奴こそ、最も怪しいのだ!」
ふる
思わず蛇骨丸は、吹き出した。 こんな場面だと言うのに、肩が震えてしまう。
「み、三十路半ばだなんて.....鬼十郎殿、 いくらなんでもそりゃあ見積もり過ぎ・・・・・・」
だが、蛇骨丸が我に帰った時には、すでに宝蔵院の全身がぶるぶると震えていた。
今までの低姿勢の鬱屈が、 一気に噴出しようとしている。
気づいて蛇骨丸が笑いを止めた時・・・・・・
りつくつ
ふんしゅつ
「黙らっしゃいっっ!」
したて
怒鳴った宝蔵院は、金剛杖の先端をぐいと鬼十郎に突き付けた。
「下手に出ればつけあがりおって.....この疑り深い木っ端退魔師っ!」
「何、木っ端.....だとぉっ!」
うやま
「ええ、木っ端退魔師です! 若いのを良い事に、目上を敬う事を知らぬ小娘です!」
「ぬうっ、言わせておけば!」

こころね
「人や呪神を信ぜぬその心根が、そなたたち退魔師を滅ぼすのです! なぜ未だ、その事
が分かりませぬか!」
「き、貴様らこそっ.....」
りくつ
けお
思い掛けぬ尼僧の怒りに気圧されつつ、鬼十郎も前に踏み出した。
おびや
「なぜ人の暮らしを脅かす呪神を野放しにする! なぜ奴らと共に生きるのだ!」
「共に生きられぬ方に責めがあるのです!」
「屁理屈を申すなっ!」
「屁理屈ではありませぬっ!」
ののし
いつの間にか、罵り合いから遠く離れた蛇骨丸は、うなじをぼりぼりと掻き始めた。し67かし、その緊張感の無い姿を見つけるや、 鬼十郎はさらに怒気を強めていた。
「立ち会えっ、蛇骨丸! その汚らわしい体を、我が刃で断ち割ってくれるわ!」
ごめん
「そりゃ、御免ですよ。 ここは、一切呪霊の使えぬ高天原でしょう? 私が頼りの呪神
しらじら
だって使えやしない。負けるに決まってます」
「剣で来れば良い! 男らしく抜けいっっ!」
こうしょう
しかし両手を打ち振る呪神使いは、 からからと哄笑を響かせていた。
「はっはっは、もっと無理ですね。避けるのは得意ですが... 私は剣が使えんのですよ」
「腰抜け! 軟弱者! 男女!」
「はは.....最後のは鬼十郎殿も同類ですよ」
白々しく、蛇骨丸は笑ってごまかす。だが宝蔵院は、常の冷静さをまるで忘れていた。
「どこを見る、葵鬼十郎! 相手は私です!」
「よかろう、望むところだ!」
「ほ、宝蔵院様、お止めになった方が.....」
「そなたは黙っていなさい!」
「そうだ、軟弱者は引っ込んでいろ!」
せい
ちゅうさい
むげ しりぞ
両者の罵声が、仲裁を無下に退ける。
宝蔵院は杖の先端を素早く振りほどいた。石突であった先端が地に落ち、隠れていた鋭利な穂先が現れる。
「呪霊抜きで戦うも面白い我が宝蔵院流槍術、とくと見よっ!」
とどろ
すでに尼僧の声ではない。 びりびりと殺気を放つ、槍師の声音が周囲に轟いた。
「秘剣、一の太刀.....」
鬼十郎も、一刀の念を研ぎ澄ます。
「冥土の土産にとくと見よ.....!」
(あー、もう好きにしてください.....)
ひとかげ
蛇骨丸は地べたに腰を下ろし、全てを諦めた。
やいば
星空を背景に、二つの刃がにじり寄る。
それを呪神使いは、寝転がったまま、黙って観戦することにしていた.....。

Translation Break 3

ひと
ごと
また しろう
ぎょうしょうにん
「あーあ、遅いなぁ、もぉ.....」
独り言を言いかけ、又四郎は口をつぐんだ。その目の前を、行商人たちが怪訝そうに見つめて、歩き去って行く。 路傍の石仏に寄りかかる少年は、思わず姿勢を正した。
ろぼう せきぶつ
「全く.....いつまで待たせるんだろ.....」
あしはら
はざま
わた
ただ
広がる葦原は、大浦川と鮭妻川の狭間に伸びている。
二つの川の渡し場を結ぶ小道には、人影も少ない。
その閑散とした野に、又四郎は一人、待たされ続けていた。
かんさん
「この分じゃ、結構てこずってるかなぁ.....」
しかし、
不可視の空間で戦う師を、又四郎は少しも心配などしていない。ただ、自分が飽きてきただけなのだ。誰もいないのを確かめ、もう一度又四郎は独り言を口にした。
だれ
「これじゃ、みなに置いていかれちゃうよ.....」
つぶや
かなた
独り呟き、少年は細い背を伸び上がらせた。 小道の彼方には、鮭妻川の渡し場がある。
さいこうび
いつしゅんあんど
渡し場に残る一隊は、行列の最後尾である。 認めた少年は、一瞬安堵しかけた。 しかし.....
「あれ.....?」
きばたい あわ
とせん
騎馬隊が慌ただしくざわめき始めている。それだけではない。渡船の用意も無いのに、
兵は次々に川に入って行くではないか。
「ま、まさか....!」
たちおうじよう
焦る視線が、水面へ走る。 その大河の中央では、渡船の群れが立往生していた。 一際大
きな船には確かに駕籠が・・・・・・そして船上に・・・・・・
「大変だ、こりゃあ.....!」
けつかい
又四郎は、 不可視の結界へ大声を張り上げた。

「ちえええええいいっっ!」
大気を切り裂くび。
鬼十郎の太刀が、葉のみを嫌いだ。だが一瞬速く、宝蔵院は僧衣をひるがえして後方へ飛び退いていた。
すかさず、地を蹴った鬼十郎も追いすがる。先に着地した尼僧めがけ、頭上から白刃が
落下した。しかし穂先を露にした金剛杖が、 がっきと、一撃をくい止める。
至近距離で、両者はまともに組み合った。

「全く.....脱げば美人なのになぁ.....」
もてあそ
ちからみなさ
なが
蛇骨丸は千切った葦を弄び、 力漲る鬼十郎の身体の線を眺めていた。
かんか
その閑暇を破って.....
「御師匠様っ!」
突然の声に、蛇骨丸はびくりと震える。
「お、驚いたなぁ! もぉ!」
「御師匠様、聞こえますか!」
まだ若い子供の声に、反応したのは蛇骨丸だけである。
競り合い続ける二人は、睨み合ったまま離れようともしない。
困った呪神使いは、見えない声の主を捜し回った。
「だ、誰だい、君は?」
「そ、その声はどなたです? 御師匠様は、おられませんか!」
互いに覚えの無い声が、顔も見えぬまま問いあった。 仕方もなく蛇骨丸は、嫌々退魔師に振り返る。
にら
いやいや。
「あ、あの..... 今の声は、鬼十郎殿のお知り合いですか?」
「ああ! 弟子の又四郎だ!」
「何やら呼んでいるような.....」
「やかましい! 今それどころではない!」
視線すら合わさずに言い放つ。むっとして、蛇骨丸は勝手に返事を返すことにした。
「ええと.....君の御師匠様は、今立ち会い中だ。用なら私が伝えるけども.....」
「ですから、あなたはどなたです!」
「君の師匠に待ち伏せされた者だよ」
げしょう
おやま
ふぬ
「ああ、いい年して派手に厚化粧した、売れない三流女形みたいな腑抜けの方ですね?」
「な、なんです、 そりゃ?」
ふんがい
だいこんやくしゃ
「あれ? 三流女形じゃなくて大根役者だっけな? とにかく昨夜忍び込んだ方ですよね?」
さらに憤慨し、蛇骨丸は鼻息を荒げた。
「君の師匠は、私のことをそんな風に説明したんですか! 無礼にも程がある!」
「ああ.....すみません! そんな事言ってる場合じゃないんだった.....」
「何事だっ、又四郎!」
ようやく、 宝蔵院の杖を跳ね退け、鬼十郎は間合いを外した。尼僧も、長時間の対峙に
息を切らせている。だが宝蔵院を気遣う前に、蛇骨丸はのしのしと退魔師に詰め寄っていた。
ひど
「あなた、弟子に私の事を何と説明したのです! 酷い侮辱だ!」
じょく
たいじ
「何の話だ?」
「何だと!」
「しらばっくれるつもりですか! 派手な厚化粧だの、三流女形だの.....」
きしょく
「そう言ったかな? それがしはただ、気色の悪い馬鹿そうな男だと.....」
「どっちにしても最低じゃないか!」

ちゅうくう
だが、切迫した又四郎の声は、宙空から一同を制していた。
「やめてください、御師匠様！ それより御行列が大変です！」
おか
「鮭妻川の上で御駕籠の乗った船が.....」
弟子がそこまで言った時、鬼十郎は両手で素早く印を結んだ。
はまたい
「破魔退っ！」
とうとつ
たかまがはら
唐突に、夜空が消失する。 一転現れたのは、先程までの秋晴れだ。
呪霊空間高天原を解いた鬼十郎は、小径に立つ又四郎を振り返った。
「ついて来い！ 又四郎！」
それだけ言って走りだす。後を追う少年の背に、蛇骨丸は我に帰った。
「ち、ちょっと待って！ 何があったんです！」
「やかましい！ 勝負はまた今度だ！」
罵声とともに、師弟は見る間に消えて行く。呆気に取られて、蛇骨丸はため息を吐いた。
「全く·····勝手に待ち伏せたと思ったら、今度は勝手にどっかに消えるんだから.....」
やり切れない思いの背後では、宝蔵院が息を切らせてへたばっていた。 杖にしがみつ
き、今は声すら出ない。呪神使いは、呆れきった。
「みんな私を無視して、勝手ばかり・・・・・・ 宝蔵院様、今度は私が勝手にさせてもらいます
よ！」
やくさい
言うなり、蛇骨丸は渡し場へと駆け出した。結界を脱した呪神使いに、怖いものはない。
危険と災厄の匂いを嗅ぎ付け、蛇骨丸は水晶玉に指を伸ばしていた。
「こ、こ奴ら...・・・・・」
しゅうげきしや
たち
かぶね
さむらい
現れた襲撃者たちに、長盛の太刀が震えていた。だが無理も無い。駕籠船を守る侍たちは、みな呪霊
を使う呪神足軽である。 その誰もが、 長盛同様恐怖を隠せないでいるのだ。
じゅんあがる
きょう ふ
だれ
たいじ
船上には、張り詰めた対峙の時が流れていた。
ふなべり
船縁の襲撃者は、四人。
いや、彼らを人と数えてよいのか。
ひとがた
どろにんぎょう
くさ
おでい
確かに人型ではあるものの、とても人間には見えない。 どす黒い泥人形。 腐った汚泥で
出来た肉体は、びっしり水草で覆われていた。
ごと
長い両腕の先端には、身の如き鉤爪が幾つも伸びていた。そして頭と思しき部分に
は、ぎょろりと、瞼の無い眼球が剥き出されている。悪臭を放つ口腔には、黄色い牙が並
まぶた
がんきゅう

あくしゅう はな
こうこう
きぼ なら
ほうこう
めすねこ
び、威嚇の咆哮は性交時の雌猫を思わせた。
「御家老様っ!」
「斬れっ!」
そくぎ
即座に長盛は命を下す。
「この船守れずば、我らの命も無い! 命惜しむな、みな死ねいっっ!」
こた
かか ちようやく
もの
おお、と応えて、雲州の呪神足軽たちは船底を蹴った。果敢に跳躍、一気に化け物たちの前へ出る。
その隙に、長盛は駕籠の戸を引き開け、ぐいと花嫁の手を引き寄せた。
すき
はなよめ
「早う、姫様、 これへ!」
「長盛、これは. . . これは・・・」
いちめがさ かぶ
ろうぼ
狼狽する声が、 市女笠を被って飛び出して来る。
れに顔を隠した姫を、急ぎ老臣は背中にかくまった。
せんび
かくり
「船尾へ! 船頭たちの所へ早く!」
長盛は、必死に櫓を漕ぎ続ける二人の男を指さした。
船尾こそ、この船上で襲撃者から最も隔離された場所である。だが、おののく姫は、老臣の背中にしがみついたままだっ た。
「な、なれど・・・なれど長盛. . . 」
こわね
こきざ
ふる
か細い声音が小刻みに震えている。 仕方なく、
長盛は姫を背にしたまま、一歩一歩ゆっくりと後退して行った。
せま
こうたい
きむらい
狭い舳先では、襲撃者と侍の列が、じりじりと間合いを詰めている。 まだまだ遠い対岸
いらだ
あらわ
み
を見据え、長盛は苛立ちを露にした。

「船頭、早くせいっ！ 早く漕げいっ！」
「へ、へい！ で、ですが.....」
とせん
かんまん
船頭の返事も、なぜか背後で震えている。 気づけば、渡船の動きも緩慢になっていた。
いまごろ
今頃察して、長盛も周囲へ視線を移動する。 その目が.....
「な.....なんじゃ、あれは.....！」
さと
老人はようやく、船団全体の危機を悟っていた。
駕籠船を取り巻く水面が、異様なうねりを見せている。何か巨大な、家屋ほどもある生き物が、駕籠船の回りを旋回しているの
だ。その動きに阻まれ、警護の兵が乗る小船は一隻として近づけない。だけでなく、駕籠
船そのものも前進を阻止されていたのだ。
きょだい

せんか
「化け物めがっ.....!」
はが
そう長盛が歯噛みした時・・・・
「死ねええっっ!」
れつばく とどろ
たいじ
最初の裂帛が轟いた。 襲撃者に対峙していた一人が、ついに一刀を振り下ろしたのだ。
たちさき
くさ
ひじ
しゅんびん
じゅれい でんこう まと
俊敏な太刀先には、呪霊の電光が纏わりついている。 前進する化け物の、腐れた左腕が肘
から斬り飛ばされた。
「やったかっ!」
ぜつきょう
こぶし
にぎ
耳をつんざく絶叫に、思わず長盛は拳を握った。だが絶叫を発したのは、逆に一撃をくらわせた呪神足軽の方だったのだ。
「ご、御家老様ぁぁっっ!」
さけ
もんぜつ
ぎせいしゃ
叫んで太刀を取り落とし、悶絶する。
のたうちつつ、犠牲者は両手で顔面を押さえ込んだ。化け物は腕の切断面から、ぬめつく黒い体液を撒き散らしたのだ。 その飛沫をまともに浴び、足軽の皮膚は紫に変色していた。
ひふ
むらさき
「ぬうっ.....!」
きずぐち
いつせん
長盛は、慄然とした。 腕を斬られた襲撃者は、ぶんと傷口を一閃してみせる。と、瞬時
に肘から下が再生しているではないか。そして倒れた男に乗り掛かる。鋭利な心が、最初の喉頭をかっ切った。ごぼっと言う断末魔。 船底に鮮血を撒き、化け物は笑みを浮かべ た。
のどくび
だんまつま
せんけつ
かぎづめ
しゅんじ
かき
がっしょう
おく
だえき
続けて、襲撃者たちは金切り声を合唱した。同時に喉の奥から、びゅっと黒い唾液を撃ち放つ。粘着質の涎が足軽らの身体にへばりつくや、肉の焦げる匂いが長盛の鼻孔をつい た。
はな
ねんちゃくしつ よだれ
にお
びこう

「ひいいいいっっ!」 「があっ.....!」
きょうさん
ようかい
とう
衣服の上から、唾液の強酸が足軽たちを溶解する。
もんどり打つ兵に、化け物たちが殺到した。喉笛に食らいつき、首を振り千切る。腹に鉤爪を打ち込み、臓腑を引きずり出す。間近で顔面に唾液を浴びた者は、白い頭蓋骨を晒して倒れた。容赦の無い殺戮であった。
「こ、殺されるっ!」
ふる
震える声で、船頭たちがわななく。 二人は顔を見合わせ.....やおら櫓を捨て去った。
きさま
「ま、待たぬかっ! 貴様らっ!」
しつせき
とど
だが長盛の叱責も届かない。船頭たちは振り返りもせず、大河の流れへ飛び込んで行っ た。
「船を寄せい! 船を.....!」
叫んで、再度長盛は周囲へ視線を走らせる。だが助勢に来れる小船など、 一隻もない。
かいぶつ
ちょうそう
みな水中の怪物に遮られ、駕籠船には接近すらできないでいた。
兵は、ひたすら長槍を波間に突き入れ、怪物を牽制するだけである。
けんせい
きしべ
しかし、怪物は小船には見向きもせず、必死に岸辺を目指す船頭たちに接近した。
せんすい
きょたい だつそうしゃ にくはく
たる泳法は変わらない。 ぐうっと潜水し、巨体が脱走者に肉迫した。
「く、食われるっっ!」
ぜつきょう
どんよく
あご
か くだ
最後の悲鳴は、そう聞こえた。だが絶叫は、間もなく貪欲な顎に噛み砕かれていた。
いつしゅん
怪物は一瞬、水面にその頭部をさらけ出していた。平べったい頭蓋は、確かに百足のものだ。しかし二段に重なる鋭い鍬形の牙は、いかなる蟲の類いにも見られない。
ばりばりっと言う骨格を粉砕する音を響かせて、 怪物は二人の船頭を続けざまに食らっていた。
すると くわがた
むし たぐ
むかで
ふんさい
ひび
「お、おのれいっ.....!」
近）
長盛は、絶望的な切っ先を持ち上げた。
さむらい
込）
すでに屠殺は完了している。 もはや駕籠船の侍は、老臣一人。
長盛の無力さを悟り、襲撃者たちも歩みを遅めていた。こうなれば、いつでも船尾の姫に手を下せる。 醜悪な泥人形たちは、そうあざ笑っているかに見えた。

おそ
せんび
しゅうあく どろにん
ぎょう
さいご
「姫様・・・・・・無念にございますっ!」
さらに一歩後退し、 長盛はほぞを噛む。
こうたい
ほおかくご
.....
かいけん いまし
りん
こわね
「かくなっては・・・・・早御覚悟 ・」
「.....出来ております... 長盛・・・・・・」
背中でうなずく少女は、すでに懐剣の戒めを振りほどいていた。
凜とした声音も、すでに最期を心得ている。
「千鶴様、姫様!」 「長盛様っ!」
周囲の小船から、兵たちの絶叫が重なった。 しかし呼び声も無力である。
船底に、だらだらと汚泥をしたたらせ、化け物たちは必殺の間合いを詰め始めていた・・・・・・

し しょうさま
「御師匠様、あれは.....!」
ぎょうし
お
ひとかげ
言われるまでもなく、鬼十郎も駕籠船を凝視していた。倒れて行く人詰め寄る異形の者。そして追い詰められていく・・・・・・
「船じゃ!」
わた
叫んで、渡し場を見渡す。
はな
こうかい
「船じゃ、 又四郎!船で追いつけ!」
せき
「ございませぬ、 一隻も!」
きばたい
ゆうよく
かいぶつ
ほうがい
後続の騎馬隊は、果敢に大河に飛び込んでいる。だが水中を遊弋する怪物に、妨害される事は必至だろう。 決意を固め、 退魔師は川べり目指して駆け出した。
ひつし
「何をなされます、御師匠様!」
けん
あなど
「やってみなければ分からぬ! 侮るなっ!」
しょうそうかん
うで
しゃにむに
「離さぬか、わしは泳いでいく!」

「無茶です! あの怪物相手に、水の中、どうやって剣を奮うのですか!」
弟子を突きだし、鬼十郎はざぶっと川に飛び込んだ。焦燥感に駆られた腕が、遮二無二
水をかきわける。 水面から駕籠船を見据え、鬼十郎は必死に祈った。
(こんな事なら...やはり待ち伏せなどするのではなかった!)
(わしのしくじりだ!すべてわしの.....!)
(間に合え!間に合ってくれ!)
あせ
はくしゃ
いつこう
いの
後悔の念が、焦りに拍車をかける。だが一向に駕籠船は、鬼十郎に近づく気配すらない。
余りに広い川幅を、 退魔師は思わず毒づいた。
かわはば
どく
とつぜん
「くそっ.....何でこんなに遠いのだ.....!」
「そりゃ、しょうがないでしょう?」
どくはく
こた
突然、独白に声が応える。
「水練もなかなかの腕ですが·····泳いで行くのは、ちょっと無理じゃないですかね?」
「き、貴様は.....!」
あぜん
ぬし
ちゅうくう
唖然として、鬼十郎は空を見上げた。 声の主はそこにいる。 そう、宙空にだ。
ゆうぜん かわ
蛇骨丸は、悠然と川面を渡る風に髪をなびかせていた。
退魔師の努力を見下ろし、微笑すら浮かべている。
その両足は、畳ほどもある列島通銭に乗っていた。
宙に浮いた銅貨を踏み締め、呪神使いは呆れ顔をちらつかせた。
たたみ
れっとうつうせん
あき
きんれい
「何も泳がなくても・・・・・・言ってくれれば、 この金霊に乗せてあげたのに.....」
「やかましい! 退魔師が呪神の手を借りてたまるかっ!」
「そんな事、言ってる場合じゃないと思いますがねぇ.....」
しんそこあき
泳ぎつつ、鬼十郎は黙した。
それ以上もう、何も言おうとはしない。心底呆れたのか、蛇骨丸はため息を吐いた。
ごうじょう
すけだち
「本当に強情な人ですね。 ですが、助太刀はしますよ。 あんなに人が殺されてるのを・・・
見過ごすわけにはいきませんからね.....」
どうか
しょう
[.....]
「分かりました。 じゃ····· お先にっ!」
せつな
ちんにゆうしゃ

とつぶう
その刹那 水面に突風が起こった。
移動呪神金霊は神速、船団に突っ込んだ。が、乗り手は平然と際立している。その異様な闖入者に気づき、船の兵たちは思わず太刀を身構えた。
なにやっ
「何奴っ!」
「新手かっ!」
どうよう
おそ
動揺に、駕籠船の襲撃者たちも視線を上げる。 しかし、遅い。 すでに蛇骨丸は、彼らの
目前にまで達している。 呪神使いは、口を結んだ。
すいさん
「推参っ!」
どな
おど
そで
怒鳴って、蛇骨丸は金霊から身を躍らせる。眼下の駕籠船目がけ、白い振り袖がひるがえった。襲撃者たちが後方へ飛び退くや、呆然とする長盛の前に、呪神使いは華麗に着地 する。
ほうせん
かれい
「な、何者っ.....!」
しゅんかん
長盛が言いかけた、瞬間.....
こぶし
にぎ
すいしょう
はな
蛇骨丸は、拳に握った水晶を空へ放った。
えんらえんら
「出でよ、 炎羅炎羅っ!」
しゃくねつ ごうおん
命令一下、水晶玉は渦を巻く火柱へと転じている。
ごおっと言う灼熱の轟音が耳をつんざき、うねる炎の竜巻は襲撃者たちの頭上から唐突に襲いかかった。
ほのお たつまき
とうとう おそ
「じえええええっっ!」
だんまつま
おい
ささくれだった断末魔。 先頭の二体が、真っ先に炎に巻かれた。
汚泥の人型は全身火だるまと化し、炎熱に身悶える。
異臭が鼻をついた。だが絶叫する仲間を川へ突き飛ばし、後方の二匹は無謀な突入を開始していた。
みもだ
ぜつきょう
えんねつ
「姫様っ!」
とつき
いちめがさ
長盛は、咄嗟に市女笠の少女を抱き抱える。だが飛び出す敵めがけ、蛇骨丸は冷静に、次なる水晶玉を解き放っていた。
はな

しちけんざん
「七剣山っ!」
どろにんぎょう
声と同時に、
人形は急停止する。長盛は息を呑んだ。突如中に出現した幾つもの抜き
身が、襲撃者たちを四方から串刺しにしていたのだ。もはや悲鳴すらない。泥人形たちは、一瞬びく
ついたかと思うと、次の刹那 びちゃっと船底に崩壊した。 人型は崩れ、
ただ汚泥の山だけが残っている。
くしぎ
ほうかい
くず
またた
全ては、瞬く間の戦いであった。
「そ、そなたは一体.....」
長盛に問われ、ようやく蛇骨丸は背後を振り返る。 にこやかな笑顔が、うなずいた。
うんしゅうご たいしゅ
「私は旅の呪神使い、 蛇骨丸。 雲州御太守の姫様を救うべく・参上つかまつりました」
（この方か.....）
蛇骨丸は、老人の背中に目をこらした。
むすめ
こがら
きゃしゃ
うすももいろ
ごろも
市女笠の娘は、まだ長盛にしがみついている。小柄で華奢な少女。 しかし薄桃色の垂
れ衣は、呪神使いが一番求める顔かたちを憎らしく覆っていた。それでも.....
（美しい.....）
おお
えびん
蛇骨丸の女性嗅覚が鋭敏に素性を察知していた。匂い立つような.....そう形容すればいいのだろうか
。 正に開花の時を迎えた蕾が、芳醇な花の香りを撒くように.....少女の何
かが蛇骨丸を捕らえていた。
むか
つぼみ
ほうじゅんいた。
だが.....
よゆう
わず
美を愛でる余裕は、僅かで終わる。
とつぜん
ゆうやく
かくわがた
突然の水音とともに、駕籠船のすぐ脇から巨体が宙へ勇躍した。
川面を蹴った百足鍬形の咆哮。水しぶきと共に、高い横波が駕籠船を翻弄し、
長盛と市女笠の身体は、まともに船底へ叩きつけられた。
ほうこう
ほんろう
からだ
たた
「そのまま伏せて.....」
さけ

ふゆ
のが
叫んだ蛇骨丸は、近づく金霊に飛び乗った。船揺れは得意ではない。空に逃れた呪神使いは、指先で川面の巨体を指し示した。
きざ
「焼き払えっ!斬り刻めっ!」
かつくう
かいぶつ
きんぞくおん
金霊で宙を滑空し、蛇骨丸は怪物の眼前ぎりぎりへ身をさらけ出す。
耳に痛い金属音めいた叫び。その強欲な顎をかいくぐり、 呪神使いは素早く川下へ逃れた。
ごうよく
あご
ろうしん
すき
じゃばら
あきら
どうか つい
怪物は、蛇腹を水中から引きずり出し、諦めず空飛ぶ銅貨を追尾する。だがその背に、 ほのおやいば使役呪神炎羅炎羅と七剣山が躍りかかった。 鋼めいた漆黒の甲羅に、 呪霊の炎と刃が立ち向かう。
苛烈な灼熱と斬撃に、 百足鍬形は大きくひるんでいた。
ざんげき
はがね
さつとう
しつこく こうら
その隙に、駕籠船には小船が殺到していた。船頭を失った船に、護衛船が次々接舷する。姫君の小さな体は、その中の一隻へ大急ぎで託されていた。
せき
「さ、早う、姫様っ!」
「なれど長盛、あの方が.....あの方が.....」
いちめがさ
小船に乗船した市女笠が、 必死に遠くを振り返る。
川下へ川下へ、戦場を遠のかせる蛇骨丸の姿は、徐々に小さくなっていた。その飛び回る勇姿を、少女は何とか捕らえようと する。だが長盛は、小船の船頭に合図を送った。
じょじょ
「ともかく向こう岸へ! あの者がくい止めておるこの隙にっ!」
だつ
老臣も駕籠船を脱し、 市女笠と共に小船に移る。戦いを遠目に、船団は対岸へ再出発した。
だが鮭妻川の中程には、ようやく鬼十郎がたどり着いていた。しかしもはや船団は、岸を目指して進み始めている。 騎馬隊すら、散り散りになりつつも、船影を追っていた。
ばた
「く、くそっ! 待たぬか! おいっ!」
りょそう
水に濡れた旅装が、次第に重みを増している。悪態をつきつつ、退魔師は流れを捨て身で横切っていた。
と、その流れの中を.....
「か、勘兵衛殿っ!」
お
そうはく

仰向けに水面に浮く男が、 鬼十郎の視界に入っていた。
蒼白な面持ちの小幡勘兵衛は、瞑目したまま、下流へと流されつつある。
退魔師は、水を掻く手を急がせた。
めいもく
どな
「勘兵衛殿、しっかりせい! 勘兵衛殿!」
わかざむらい
まばた
怒鳴って、鬼十郎は若侍にたどり着く。 瞬きすらせぬ勘兵衛の顎に手をかけ、
退魔師は一層泳ぎに力を込めた。
かわも
きょうらん
赤いぶつ
しかし川面は、下流で狂乱する百足鍬形の作り出す波で大きくうねっていた。
怪物は、素早い金霊の動きに惑わされ、蛇骨丸に一矢すら報いることができない。
その間に使役呪神たちは、細かな傷を重ねて与え、怪物の命数を確実に削っていった。
いつし
まど
あた
けず
ちめいしょう
こうげき
「とは言え、致命傷にはなりませんね・・・・・・」
今一度、攻撃をかいくぐり、蛇骨丸は新たな水晶玉を握り締めた。
すいしょうだま にぎ
「結構霊気を使うけど‥‥‥仕方ないっ!」
なずま
伸びた細い指先が、水晶を空中へ放り出す。緩やかな放物線。怪物の頭上へ落下した玉は、蛇骨丸の霊気を受けて瞬時に具現化した。
しゅんじ
ぐげんか
むち
じょう
ごと
直径約十丈、小山の如き黒い球体が宙に現れた。
その周囲には、ばりばりと音を立てる稲妻の鞭が纏わり付いている。
狂奔する怪物めがけ、黒い球体は一直線に落下して行っ た。
まと
きょうほん
がんりきさま
「頼むよっ、眼力様っ!」
叫んだ蛇骨丸は、怪物の上空から急速離脱する。ぶつかり合った巨体は、うねる高波を
巻き起こし、水中で正面から組み合った。百足鍬形の叫喚が、 波打つ川面を震わせる。
まぶた
と、黒い球体が・・・・・・瞼を開いた。
どくどく
いろど
きょうかん
ひとみ
ふる

黒い眼球に黒い。 その中心に、毒々しい赤に彩られた瞳が現出する。
視線は、しっかと怪物を捕らえ、くぐもった響きを発して攻撃を開始した。
ひび
こうげき
「あ、あれは一体.....!」
げきとう
ぼうぜん
ようやく岸にたどり着いた長盛は、下流の激闘に呆然とした。集まった兵たち、行列の
一行全てが、この世のものならぬ戦いに息を呑む。千鶴すら、垂れ衣を僅かに押しのけ、
視線を固定していた。
ごろも
かれつ でんげき むち ほとばし
その衆目の中、使役呪神眼力は、苛烈な電撃の鞭を送らせた。のたうつ稲妻が、百足鍬形の全身を搦め捕る。 苦悶の叫びは両岸に届き、怪物の巨体は水面で転回した。
から
と
とど
くもん さけ
てんかい
とど
「今だっ! 止めを刺せっ!」
いかずち こうそく
ほのお うず
蛇骨丸の命は、炎羅炎羅と七剣山にも下される。雷に拘束された怪物めがけ、炎の渦と刃の群れが突入した。 電光に炎熱が加わり、目も眩む閃光が辺りを照らす。 思わず長盛たちは、視線を伏せた。
とつにゅう
えんねつ
くら
せんこう あた
やいば
きしべ
ばつこう いっしゅん
とぎ
しかし、爆光は一瞬で途切れる。
おそ
おそ
かわる
せいじゃく
岸辺の人々は、恐る恐る瞼を開いた。が、すでに川面は、静寂を取り戻している。怪物も、黒い眼球もない。 そして炎の渦も、刃の群れも。 何事も無かったかのように、鮭妻川
は常の流れを取り戻していた。
おくぼ
ただ上空には、ほほ笑む呪神使いの姿だけがある。 水面からその勇姿を見上げ、
退魔師は奥歯をきつく軋ませていた。
きし
「全く、何と御礼を申し上げればよいか.....」
ますだ ながもり
まこと
わた
増田長盛は、渡し場で深く頭を下げた。
じゃこつまるどの

ひめさま
「もし蛇骨丸殿の助勢無くば、危うく姫様の御命を奪われるところでござった。この通り、誠にかたじけない.....」
いなら さかきばらけ
いっせい
へいふく
あつか
背後に居並ぶ榊原家の者たちも、一斉に呪神使いに平伏する。慣れぬ慇懃な扱いに、蛇骨丸はひたすら恐縮した。
きょうしゅく
あんど
「いやいや... 当然の事をしたまで。何より姫様がご無事で何より。安堵致しました」
「私からも.....」
いちめがさ
言って、市女笠が進み出る。
「礼を申します、 蛇骨丸殿。 長盛の申す通り、 そなたの助けなくば、私の命はありません
でした。 誠.....命の恩人です」
いぜん
めんぼう おお
とうてい
垂れ衣は、依然千鶴の面貌を覆っていた。 蛇骨丸は内心ほぞを噛んだが、到底口には出
せないでいる。 一同のにこやかな顔に包まれては、本音も吐きづらかったのだ。
ほんね
と、川べりから・・・・・・
ぶえんりょ
ひとかげ
無遠慮な水音が耳に刺さった。振り返った蛇骨丸は、川から上がる黒い人影に気づく。
かんべえ
ぶぜん
とうちゃく
あき
勘兵衛を抱えた退魔師が、憮然として対岸に到着したのだ。
「ええっ! 本当に泳ぎ切ったんですか?」
だれ
「当たり前だ! 誰の力も借りてたまるかっ!」
どな
呆れ顔の蛇骨丸に、鬼十郎はすぐさま怒鳴った。 さすがに息が切れている。
ずぶ濡れの退魔師は、駆け寄る兵に勘兵衛を預けると、思わず地べたに腰を落とした。
こし
さむらい
「この侍は...昨夜私がからかった人ですね?」
「わしもからかわれた一人だ!」
「まぁまぁ、こんなに濡れてしまって風邪引いちゃいますよ?」
「寄るな! 貴様の情けは受けぬ!」
「水もしたたるいい女だなぁ・・・・・・」
きじゅうろう
いっしゅんたち
呪神使いの笑顔に、鬼十郎は一瞬太刀に手をかける。が、駆け寄る長盛の声を聞き、殺意は一時かき消えた。
おそ
「鬼十郎殿、遅いではないか!」

ふてい やから
老臣は、介抱される勘兵衛に一をくれ、激しい口調で詰め寄った。
おかご
「不逞の輩などさっさと片付け、御駕籠に駆けつけるはずではなかったのか!」
「その不逞の輩こそ・・・・・・」
めんどうくさ
面倒臭そうに、鬼十郎は蛇骨丸を指さした。
ばかばか
「.....この馬鹿馬鹿しい男にござる。見事、仕留めそこないましたがね.....」
「な、何と申した、 今.....?」
ろうばい
J
だま
長盛の狼狽した顔が、蛇骨丸を見つめる。 呪神使いもほほ笑み、黙ってうなずく。
瞬間、老臣の怒りは、いきなり頂点に達していた。
いか
「馬鹿な! この方は、我らの命の恩人! 姫様救うてくだされた天の助けじゃぞ!」
しんしょ しの
ぞく
「そして昨夜、姫様の寝所に忍び込もうとした賊でもござる.....!」
つうこん いちげき
はな
くちぶえ
痛恨の一撃を、鬼十郎は放ったつもりである。
あらぬ空に口笛を吹く蛇骨丸を指さし、退魔師は牙を剥き、罵りの言葉を吐き連ねた。

Page 140

もくろ
どせい
ごかろう
「御家老は、こ奴を信ずるおつもりかっ!この者は、男のくせに女子のふりする痴れ者ですぞ!
化粧すら施す、 恥知らずですぞっ!」
しょう
ほどこ
「鬼十郎殿だって、女のくせに男の.....」
おそ
しば
ちが
「やかましいわっ ...恐らく、 今の戦い振りも芝居に違いない!
全て、姫様に近づく目論みに相違ござらぬ! 一瞬たりとも、油断はなりませぬぞ!」
そう
こんしん
ばとう
渾身の罵倒である。
蛇骨丸と延々勝負を繰り広げ、さらに勘兵衛を助けながら大河を渡りきり、これだけの怒声を発している。並の人間には、及びもつかぬ力であった。
なみ
「しかし今の戦いぶり、芝居とは思えぬが.....」
「そこが付け目! 隙でござる!」
いらだ

つの
長盛の安心に苛立ちを募らせ、 鬼十郎はたまらず立ち上がった。
やつ
「この笑顔! このほほ笑み! 無意味に笑う奴に、ろくな奴はおりません!」
「でも、笑顔には結構自信があるんだけど.....」
あざむ
「貴様は死ねっ!とにかく全てが、 我らを欺く手立て! 呪神のあやかし!
まさか御家老.....この者、御行列警護にお加えなされるおつもりではありますまいなっ!」
「おお、確かにそんな手も...」
ほのお
そそ
はたと気づいて、 長盛は手を打つ。その仕草が、 鬼十郎の怒りの炎に油となって注がれた。
わな
「馬鹿げた事を!」
がみ
退魔師は、濡れ髪を振り乱した。
もの いつしょ
「なんでこんな痴れ者と一緒に御行列を.....」
「しかし戦いの腕は確か.....」
「罠ですぞ! 見え透いたやり口だ!」
「全然、私を信用して無いんですねぇ.....」
「当たり前じゃ! 誰が信ずるものか!」
あぜん
すると
鋭い罵声は止まらない。行列の一行が唖然として見守る中、
鬼十郎はいよいよ呪神使いにつかみ掛かった。
「ええい、断れ! お断りしろ!」
おもしろ
「いやぁ、でも...くっついて行けば、何だか面白い事になりそうだな.....と思って.....」
「ふざけるな! 遊びではないぞ!」
「ぐ、苦しいっ!息できないっ.....!」
えりもと
退魔師は、蛇骨丸の襟元をぐいぐい揺すぶる。 しかしついに、至高の声が両者を引き離した。
「鬼十郎殿、もうよいではありませぬか.....」
ひび
ゆる
がさ
ほうこう とぜつ
その響きに、はっと鬼十郎の力が緩む。進み出た市女笠を目にするや、咆哮は途絶する。姫は、濡れた鬼十郎の肩に手を置くと、静かな声音を震わせた。
こわね ふる
ひめ
しんらい
かた
「良いのです、鬼十郎殿。私はこの方を信じます。 助けてくれたこの方を·····ですから、
ついて来ていただきます。 そなたも私と共に、蛇骨丸殿を信じてはもらえませぬか?」
ちづる えたい
にぎ
こぶし
信頼の点から言えば、 鬼十郎に分があるのは明白だ。 それなのに、千鶴は得体の知れぬ
蛇骨丸を信じていた。 呪神使いは、握った拳を打ち震わせ、 感動に天を仰いだ。

お
そして鬼十郎も.....
じゅれい じゅず
千鶴の声には逆らえなかった。 やはり呪霊の数珠の力なのか。どうしても、この姫には
逆らえない。頼みは何でも聞いてしまう。 最初の出会いの時のように、 退魔師は黙ってう
なずくしかできなかった。
「運の良い奴だ.....!」
小さく吠え、鬼十郎は呪神使いを解放する。と、その背中に.....
「き、鬼十郎殿・・・・・・」
さむらい
急に、名を呼ばれた。 かすれた小さな声は、勘兵衛のものだ。
急ぎ、鬼十郎は地に寝かされた侍の元へ駆け寄って行った。
「しっかりなされ、勘兵衛殿っ!」
だま
めんぼく
「め、面目次第もござらぬ.....」
うめ
ごてんい
びしょう
くぐもった呻きが、口から漏れる。だが脈を取る御殿医は、かすかに微笑してみせた。
だいじ
あんど
大事ない事を知り、鬼十郎はほっと安堵する。
「何、心配ない。姫も長盛殿も御無事じゃ」
まこと
あきら
ずいぶん
「では鬼十郎殿が姫を.....」
「いやぁ、違うんですよ」
突然、顔を寄せ、 蛇骨丸は笑顔をふりまいた。
「助けたのは私です。 以後、よろしく」
「きっ、貴様.....!」
顔を見合わせ、勘兵衛は反射的に起き上がろうとする。だが仕方なく、
鬼十郎はその体を押さえ付けてやった。
「いいのだ、勘兵衛殿。確かに、姫様をお助けしたのはこ奴。礼を言うのは我々らしい」
「誠か、 それは.....?」
「姫様が許された。 それで良いではないか」
くちょう
諦めた口調が、不満げに説明する。だが蛇骨丸には、まだまだ物足りなかった。
「随分、素直になりましたね? でも、実際礼の言葉は聞いてませんが?」
「心の中で頭を下げた。 それで十分だろう?」
いやいや
鬼十郎は、嫌々ながらに蛇骨丸を見上げ、さも辛そうに大きく息を吐いた。
「しかし..... 確かに良い腕であった。 見かけに寄らず、貴様相当に使えるな」
ねぎら
鬼十郎の労いに、呪神使いは呪神を封じた数珠をちらつかせる。
「私は、何にもしちゃいませんよ。ただ、この子たちが戦っただけです。 ですが.....」
さんぱし
わた

そこまで言って、蛇骨丸は桟橋へ歩を進めた。
すでに渡し場には、乗り捨てられた駕籠船が曳航され、係留されている。
搬出される侍の遺骸に黙礼し、呪神使いは鬼十郎を手招いた。
ぶね
えいこう
けいりゅう
はんしゅつ
いがい もくれい
じゅしんつか
てまね
「こいつらの事ですがねぇ.....」
おでい
あゆ
あくしゅう
そむ
蛇骨丸は、崩壊した汚泥の山を指さす。 歩み寄った鬼十郎は、悪臭に顔を背けた。
「いやそれが... 呪神じゃないんですよ」
「これが呪神の残骸か・・・・・・早く打ち捨てよ!」
さらりと、言ってのける。 退魔師は口元を手拭で塞ぎ、目線を曇らせた。
「呪神ではない? ではこいつらは一体.....」
「ちょっと失礼.....」
呪神使いは、水際から小枝を拾い上げ、 汚泥の山をつつき回した。
鬼十郎も嫌々、顔を近づける。やがて小枝は、残骸の中から汚れきった物証を捜し当てていた。
よご
ふき
くも
ぶつしょう さが
「これを見てください」
かご
「ただの草ではないか?」
どくうるし
「はい。ですがこれが本体です。 こ奴らの正体はただの草。 呪神なんかじゃありません」
鬼十郎も、小枝に引っかけられたそれを、じっくり眺め回す。そして、呻きを絞った。
「毒漆の花か.....?」
くぐつだま
あやつ
じゅれい
「ええ。傀儡玉もそこにあります。 植物や岩石、動物に人型を取らせ操る低級の呪霊・
間違いなく、傀儡使いのなせる技です」
「では一味に.....人間がいると?」
おそ
恐らくは、と蛇骨丸はうなずいた。確かに傀儡玉を使うのは人間のみである。 呪神は、
呪霊を行うに道具など用いはしない。
なっとく
わた
だが、鬼十郎は納得できない。敵は黒鶴のはずだ。 二千年の永きに渡って生き続ける呪
神が、人間の傀儡使いなど配下にするだろうか。 傀儡などと言う小細工など弄せずとも、
はいか
ざいく
しゅうげき
もっと強力な呪霊で襲撃をかけることも可能なはずだ。 それとも.....

「何をだ?」
「やはり鬼十郎殿も、そうお考えですか?」
「今の襲撃は黒鶴の為したものではないと」
「はっきりそうと決まった訳ではない」
「しかしその可能性もあるのでは?」
ねら
鬼十郎には、肯定も否定もできない。
黒鶴の他に千鶴を狙う者がいるのか。それとも、黒鶴の一味に傀儡使いがいるのか。
新たな可能性に、まだ断定は下せなかった。
くわ
「事の次第‥‥‥どうも詳しく聞かせてもらう必要がありますねぇ.....」
「やかましい、 そのうちにな」
「つれない事を.....」
おししようさま
と、その二人に・・・・・・
「御師匠様っ!」
「ぶ、無事ですか、蛇骨丸?」
まんさい
わた
ぶね
ころ
さんぱし
対岸から、旅人を満載した渡し舟が着岸する。 小船から転げるように、
又四郎は桟橋に降り立った。その後ろからは、頭痛を抱えた宝蔵院が追いすがる。
おおあわ
こし だけづつ
又四郎は、ずぶ濡れの師匠を発見し、大慌てで腰の竹筒をまさぐっていた。
「御師匠様、よくぞこの大河を...!」
ばかもの
「見直したか、馬鹿者っ!」
「うわっ! 冷たい! 冷えきってますね!」
よこぶえづき
ぎょうずい
「当たり前だ!もう横笛月だぞ! 行水したのとは訳が違うのだ!」
「寒さしのぎです、どうぞ」
にごりざけ
差し出した竹筒を、 鬼十郎は素早く引ったくる。
筒を満たした濁酒が、音を鳴らして干されていく。やがて臓腑に熱が広がると、
退魔師は大袈裟な感嘆の息をついた。
ぞう ふ
ごういん
「ふううっ! 生き返ったぞ!」
「相変わらず、うまそうにお呑みになる.....」
笑って、鬼十郎は視線を移した。
あわ
「くそっ、哀れな尼さんだ.....!」
舌打ちして、 退魔師は宝蔵院に歩み寄った。
「一杯召され。むかえ酒じゃ」
黙って、宝蔵院は退魔師を見上げる。 その鼻先に、ぐいと鬼十郎は竹筒を突き出した。
みき
「よろしい.....のか? その酒、 霊気を含んだお神酒であろう?」

「一杯だけだ。さっき斬りおうた時・・・・・・だいぶ酒臭かったぞ」
「なぜ急にそのような.....」
尼僧に問われ、鬼十郎はため息を吐いた。
「蛇骨丸には·····姫様を助けてもらった。 礼はせねばならぬ。こいつが礼だ」
「礼ならば蛇骨丸に.....」
「せねばならぬが.....したくはない。理屈で分かっていても、拒む気持ちが強い。だから、そなたにこれをやる」
強引に、退魔師は竹筒を手渡した。
「奴にはまだ・・・・・礼を言う気持ちがおきぬ。わしにとって奴は、礼を言いたくなるような奴ではない」
「ごもっとも」
「よくやってくれた・・・・・・とは思うているのだが.....」
さら
正直に、鬼十郎は胸中を晒した。
弁明など必要ないと分かっていながら、どうしても口が動く。その弁明にも、生難さがぬけない。
また
とまど
だが宝蔵院は、疲れた笑みで応えてみせる。 まるで退魔師の戸惑いを見透かしているよ うだ。
不快を感じて、鬼十郎は顔を引き締めるや、わざとらしい咳払いで姿勢を正した。
「行列はすぐに出立する。 ついて来るなら、一杯呑んで、 まことしゃきっとせぬか!」
退魔師は、ふんと乱暴に鼻を鳴らす。 力量を認めた者への、ぎごちない礼であった。
おちょこ
そんな不器用な師匠へ、 又四郎は小さな御猪口を差し出した。
「御師匠様、これで呑んでいただいては.....」
「おお、そうだな・・・・・・宝蔵院殿、酒は.....」
あぜん
言いかけて···· 師弟は唖然とした。
のど
ぐびぐびっ、とうまそうに喉が鳴る。 二人の目の前で、 宝蔵院は腰に手を当て、
竹筒の酒を一気に臓腑へ流し込んでいた。 最後の一滴は、ずず一っと音を立てて吸い込み、尼僧は満足げな声を吐いた。
「ぷは一っっ!」
よど
上気した顔が、澱んだ息を撒き散らす。
「の、呑まれました...御師匠様.....」
「一本全部か・・・・・・」
鬼十郎の悲嘆が一転、激怒に変わった。
くさ
「この腐れっっ!」
「ああ~~~っっ!」
おたけ
ほとばし
絶叫した鬼十郎の背後から、さらなる雄叫びが送る。そこには、全てに絶望した呪神使いの姿があった。
「私はもう.....知りませんよ.....」
「何だ、うちしおれた顔なんぞしおって!」
「はい、この世の終わりが始まったので...」
「何を訳の分からぬ事を.....!」
「ああ..... やっぱり止めればよかった・・・・・・でも止めたら、
私が殺されるんだ・・・・・・」
「泣いてどうする! 泣きたいのはわしだ! 貴様の後見人は、わしの大事なお神酒 *.....]

「分かります...・・・でも本当に泣くのは･････これからですよ.....」
「それはどういう意味.....」
「お、御師匠様っっ!」
退魔師の怒りを、弟子の悲鳴が遮った。 鬼十郎と蛇骨丸の視線が、
下卑た笑い声に反応する。とても尼僧の・・・・・女とも思えぬ笑い声に･････
本当に.....終わりが始まっていた.....。
第三章

城は、小高い丘陵から町を見下ろしていた。鷺野の城下は、城を北限として南西に広 がっている。
すでに日暮れだ。輿入れの行列は街道を定速で進み、鷺野の街へ入りつつ あった。
「なかなか広い城下町だな」
なら
ゆうこく
とも
にぎ
道の左右に並ぶ商店に、鬼十郎は視線を奪われた。夕刻の街に早くも火が灯る。
賑やかな街の喧噪に、退魔師の足は自然速まった。
んそう
たいまし
うんしゅう
かなめ
「鷺野は雲州第二の都雲州街道防衛の要。 賑わいも当然、人も物も豊かにござる」
おばたかんべえ
馬上で、小幡勘兵衛が口を開く。
しゅうもく
りょうみん
衆目を引き付けつつ、行列は城下中央を進み、一路城門を目指していた。領民たちの視線は、まず花嫁の乗る駕籠に集中する。どこの宿場でも同様だが、
この街では人数がやたらに多い。何やら気分良く、蛇骨丸は足取りを軽くしていた。
はなよめ
かご
しゅくば
「どうです、 鬼十郎殿? 何だか行列の主役は私たちのような気がしませんか?」
「いい気なもんだな、貴様は.....」
なりわい
「少しは、状況を楽しみましょうよ。どうも退魔師という生業は、心にゆとりと言うものがなくていけません」
だが又四郎は首を横に振り、一心に呪神使いの背を押し続けていた。
「とにかく早く歩いて下さい! みなにあの人と同類に見られたら、 どうすんですか!」
「それは.....私の連れの事ですか?」
おそ おそ
たず
恐る恐る、蛇骨丸が尋ねる。
さいこう び
おくば
きし
とうていずいこう
鬼十郎は、行列の最後尾に視線を送り、奥歯をぎりぎり軋ませた。列尾には、到底随行
者とも思えぬ乱心者がいる。歌は、道いっぱいにこだましている。
蛇骨丸と又四郎は、絶して天を仰いでいた。
あお

「でんでんでんでん虫の××××は~~♪」
鬼十郎は目線を伏せた。
「なんて頭の悪い歌なんだ・・・・・・」
ちどりあし
赤ら顔の乱心者は、千鳥足で行列を追っていた。すでに酒を飲み干した宝蔵院は、周囲も気にせず酔いしれている。
こしい
「小幡様、本当に申し訳ございません」
きし あやま
蛇骨丸は、騎士に謝り続けていた。
どうちゆう
「お輿入れの道中だと言うのに、全く.....」
「まあ、年に数度あるかないかの事であれば・・・今日は格別にお目こぼし致そう」
しゅうでんつうじ
ののし
「本当に年に数度なんだろうな!」
問うた鬼十郎に、蛇骨丸は小さくうなずく。
「ええ、ごくたまにああやって酔って」
「さすがに貴様の育ての親だ・・・・・・この子にしてこの親あり、 だな」
「そう言われては弁解できませんね」
「弁解などさせるか! 大体、何だ!
わしのお神酒を全部呑み干しおって!あれは役州伝通寺の山門で買い求めた、わしの大事な...」
とつさ
そう罵りかけ... 鬼十郎は咄嗟に身を伏せた。 蛇骨丸が振り返る。が、遅い。
「蛇骨丸くううんっっ!」
ふんさ
きしゅう
脳天を金剛杖の一閃が粉砕する。 宝蔵院の奇襲に、呪神使いは頭蓋骨を押さえ付けた。
「あ.....ああっ.....」
ひざまず
声が震えている。だが構わずに、尼僧は跪く蛇骨丸を引きずり立てた。
「なぁに、休んでるの! ささ、今宵のお宿目指して参りましょーっ!」
「くそっ、二日酔いが治って良かったな.....」
「だ、誰が二日酔いですってぇっ!」
その声に杖を振り回し、宝蔵院は鬼十郎に肉迫した。
「鬼十郎殿! そなた、私が昨夜から呑んでるとでも・・・・・・」
れ!」
「いやいや、そうではないがな.....」
「そうです! 私は二日酔いではない! 断じて、酔ってなぞおりませぬぞ! ほほほほ.....」
きょうたい
蛇骨丸は、去り行く狂態を見つめ直した。
「いっそ鬼十郎殿も、酒に呑まれてみてはいかがです? 素直な自分になれますよ」
「わしは素直だ。常に自分に正直に生きておる。 酒なんぞに呑まれる必要は無い」
だが蛇骨丸は、くねくねと長身を鬼十郎にすりよせた。
「いえいえ、素直な目で見れば、この私の素晴らしさにも気づきますって。なんていうの
かな.....男らしさ、とかにも」
「馬鹿を言えっ! やめんか! 人が見とるんだぞ! 離れろっ! 貴様っ、恥を知
「ああ.....鬼十郎殿の髪、良い香りがする香木を焚き込めてるんですね.....」

「そうなんですか、御師匠様?」
「意外に女っぽいんですね、 鬼十郎殿も」
だが鬼十郎は、 ぶんぶんと頭を打ち振った。
「騙されるな、又四郎! 酔っ払いの戯言だ!」
ざれごと
「私は呑んでませんよ。鬼十郎殿も別に隠すほどのことじゃないのに、もおっ!」
ほほえ
そんな二人を、又四郎は微笑ましく見守っている。
きび
「普段、隙を見せるな、油断するなと私に言い聞かせ‥‥‥御自分でも厳しく戒めを守られてるのになぁ・・・まぁ、こんな人と会うたのは初めての事だからなぁ.....」
の娘だったのだ。
もてあそ
あんど
又四郎は、あれほど厳格な師匠が弄ばれる姿に安堵していた。やはり師匠も人間、
十六だが当の本人だけは.....

（一体何なのだ、こいつは...）
（さんざんわしを馬鹿にしたかと思えば、 呪霊の腕を見せつけ・・・・・・）
（見事姫様を救ったかと思えば、このような.....）
（全く汚らわしい奴だ、汚らわしい呪神使いなのだ.....）
（だがなぜ.....なぜ.....）
蛇骨丸は、甘える猫のように頬を擦り寄せてくる。 その顎に手をかけ、 退魔師は男の身体を己から引きはがそうとした。
（なぜわしは、そんな奴に平静を乱される・・・）
（なぜ、そんな奴に見抜かれるわしのわしの秘めた.....）
えんか
思いを、何とか嚥下する。 冷静を保てと、常の自分が呼びかけた。 それでも鬼十郎は、大陸一の退魔師を取り戻せないでいる。
鬼十郎の惑乱も知らず、行列は鷺野の城へ、ひたすら道中を進めて行った。

〃
まどう
「一月前 御本城の護摩堂にこれが・・・・・・」
おりほん
たた
まばゆ
しきさい いろど
ばらりと、長盛は折本をくつろげた。
書状は、細長く畳まれている。目映い色彩に彩られた文字が、緻密に書き込まれていた。
蛇骨丸は文面を手元に引き寄せ、軽くうなずいた。
ひぶん
「秘文ですね.....」
といき
あまざけ
呪神使いは吐息をつき、内容に目を通す。
まだ、甘酒の酔いが抜けず、気分が悪い。それでも、左右に控える長盛と勘兵衛は、ただ黙って、蛇骨丸を見つめていた。
ひか
だま
ぜんしゅう
こたび
「.....此度、 雲州太守榊原家姫君千鶴様、
おこしい
そくぶん
然州へ御輿入れと側開するに及び、
きづだに じゅしん
そろ
およ
木津谷の呪神一同うち揃いて談合し、
ごと
かご
かくの如き覚悟、先触れにてお知らせ致す。
たば
くろづる
木津を束ねる黒鶴、
しもじも
じゅう

こたび
こんき
いさ
長年下々の事由には一切口出し致せぬが、此度の婚儀、不快の意をもってお諫め申す。
かんげん
そろ
おいのちちょうだい
もしこの諫言入れられぬとあらば、
一族一同うち揃い、討ちかかりて、
必ずや千鶴様御命頂戴する覚悟のほど、
先んじて、ここにお知らせ致す次第。
かな
木津谷の一族が力、挙げても叶える曲、
かくご
重々御承知の上、とく再考されたし.....」
読み終えて、蛇骨丸は視線を上げた。
「木津の黒鶴・・・...か.....」
むぞうさ
てんしゅ
かんさん
書状を無造作に、広い座敷に置き捨てる。 鶯野城の天主に近い、大広間は閑散としていた。
二本の燭台だけを明かりとし、 長盛と勘兵衛は共に腕を組んでいる。 蛇骨丸は、こめ
かみを指先で掻き、しばし思考を巡らせた。
しょくだい。
うで
まちが
めぐ
「まず間違いはないですね、この書状。これだけの色を秘文に使えるのは、複数の属性を持つ者に限られます」
「色で分かると申されるか?」
ぞくせい
ほか
「はい。属性ごとに一色。 二つ属性を持てば、
二色と.....その二色を掛け合わせた色、さらに元の色を掛け合わす事ができるのです」
蛇骨丸は、虹色の文面に再度目を落とした。
じゅれい
「これだけの色を使えるのは、呪霊の属性を五つ以上持った者だけです。
雲州で、黒鶴の他に、そんな呪霊使いや呪神がいますか?」
じゅしん
まぶた
いないと知っていて、確かめる。長盛は、重々しく瞼を閉じた。
ひめさま ねら
「何より不可解なのは・・・・・・なぜ黒鶴が姫様を狙うておるのか.....その一点じゃ」
いさか
「我が榊原家は、 雲州太守を務めて以来、 一度として黒鶴と諍い起こした事はござらぬ」
かか
「しかし、関わりはあるのでしょう?」
たず
わかむしゃ
呪神使いの視線が、勘兵衛に尋ねる。いらえはなく、 若武者は深くうなずいた。
おとぎぞうし

いつわ
あた
かがみい
「確かに。御伽草紙にある逸話・・・・・・黒鶴が信心深い職人に与えた鏡石・・
いや、媚珠の媚珠で造られた数珠なら、今でもここに」
つく
じゅず
「ここにと言うより、姫様の御手元ですね?」
ふすま
しんじょ
蛇骨丸は、閉ざされた襖の奥を指す。
広間の先には、千鶴の寝所が用意されているはずだ。まだ見ぬ素顔を思い浮かべ、呪神使いは軽くほほ笑んでしまった。
「なら.....やはり原因は数珠でしょう」
「そうお考えになられますか?」
みな
「他に関わりが無いのなら。 今までに数珠が雲州から持ち出された事はありますか?」
長盛も勘兵衛も、はっきり首を横に振った。
「いいえ、一度も」
かほう
さよう
くちびる
おのれ
たこく
「何しろ、家宝。 当家にあってこの方、一度として他国に出たことなどは.....」
「その家宝が持ち出されようとしている・・・・・・」
きみよう ゆが
蛇骨丸は、ふと顔を奇妙に歪めた。
「皆さん、 そこまではお気づきでしたね?」
「だが、 それを理由に御命奪うと言うのが.....」
長盛の声に、勘兵衛も同調する。
「左様。ならば返せと言うはず。 それがなぜ御命まで狙うのか.....それが分かりませぬ」
「そう.....ですねぇ」
んもく
唇を尖らせ
呪神使いは沈黙した。狙いは数珠、それは分かっている。だがその数珠に何か別の意味があるのだ。
それとも.....
(何か別の関わりがあるのか.....?)
おそ
何れにしろ聞かねばならない。襲ってきた時.....当の黒鶴に。そうはっきり、呪神使いは己の使命を自ら決定づけていた.....
たいしゅつ
じこく
蛇骨丸が天主を退出したのは、すでに夜も更けきった時刻である。
鷺野城は山頂に天主を構え、山裾へ向かって曲輪を連ねていた。蛇骨丸たちが与えられた宿舎は、最も大手門に近い大崎曲輪である。斜面を下る道筋はなだらかで、かつ長い。 その斜路を、呪神使いは小石を蹴りつつ降りていた。
やますそ
くるわ つら
あた
おおさき

おおてもん
しゃめん
（黒鶴の狙い.....）
（数珠か・・・・・・それとも別の何かか.....）
（まさか、まこと姫様の御命が狙いなのか.....）
はな
黒鶴が何を考え、何を狙っているのか。 疑念は頭から離れない。
せっしょく
こば
ひとざと
きら
元々、呪神とは人間の気配を嫌い、極力人との接触を拒む存在である。
人里に暮らす呪神とてそうだ。 まず人前には姿を見せない。
（いるようでいないもの。
（そんな呪神が·····黒鶴がなぜ.....）
いないようで必ずいるもの）
（あんな書状を堂々と送り付けてきたのか.....）
せつばつ
きゅう
切羽詰まっている。
そうとしか考えられなかった。ならなぜ窮しているのか分からない。腑に落ちぬ事ばかりであった。
それに、傀儡を用いての襲撃も合点が行かない。
くぐつ
しゅうげき
つや
艶めく髪をぐ
むし
しゃと掻き毟り、呪神使いはため息を吐いた。悩んでいても答えは出ない。
黒鶴本人に会えば分かる。 出会う時を楽しみに.....するしかない蛇骨丸であった。
はがん
「どうなるんだかなぁ.....」
ひと
ごと
と、独り言を漏らした時・・・・・・
「何がでござるか?」
わかむしゃ
急に、呼びかけられる。 はっと振り向く蛇骨丸の前に、若武者の姿があった。
「.....ああ、 独り言ですよ、 小幡様」
「天主を出てより、ずっと思案の御様子。 さては黒鶴の事にござるか?」
呪神使いは、すっかり勘兵衛の存在を忘れていた。
別の曲輪に用があると、彼は蛇骨丸と共に天主を降りて来たのである。
提灯を下げた勘兵衛に、呪神使いは軽くほほ笑んだ。
ちょうちん
から
めぐ
「いや、色々と.....呪神絡みの一件ゆえ、私なりに考えを巡らせたのですが.....」
「何かお気づきになりましたか?」
「それがなかなか・・・・・・
護衛にお加え下されたのは有り難いが、私で役に立つかどうか.....」
ごけんそん
「それは御謙遜.....」

こた
破顔して、勘兵衛も応える。
だれ
じきじき
とも
「昼間の御働き、行列の誰もが認めておりまする。
姫様からも直々、供に加えよとの御言葉・・・・・・この勘兵衛も心強い限り」
「昨夜の働きについてはどうです?」
「これははっは、 失念致そう」
二人は笑って、道を下り続けた。
「ところで蛇骨丸殿.....」
「何か?」
「何ゆえ、警護をお引き受けなされた?」
ちゆうちょ
不意に提灯が停止する。 振り返った蛇骨丸は、躊躇無くこたえを述べた。
「無論、あの姫様に心打たれたゆえ」
「それだけでござるか?」
びしょう
いけませんか、と蛇骨丸は微笑を続ける。
うさんくさ
「私はこの通り、胡散臭い男です。 まして呪霊使いだ。
あなた方から警戒されても仕方のない人間だと言えましょう」
[.....]
きら
「昨夜の一件もある。 姫様に嫌われても仕方ない。が、千鶴様は、私を信ずると言ってくれました。
私が傀儡どもを退治した、 その一度の事だけを見て、信じてくれたのです。
そんな姫様を、愛しく思ってはいけませんか?」
くぐつ
たいじ
いと
とつき
てのひら
勘兵衛は、咄嗟に答えない。 しかし蛇骨丸は、笑顔のまま掌を軽く持ち上げた。
かね
こし
びりよく
「金は、一切いりません。 まだ御顔を拝めぬ姫様ですが、無事お輿入れ成るまで、微力な
がらお力になります」
まこと
「それで誠に良いので.....?」
「構いませんよ。 気ままに生きる人間ですが、好きな事には命をかけます。 あ、ちょっと.....」
よやみ
ふちど
ふと、気づいた呪神使いは夜闇に目をこらした。その視線が、曲輪を縁取る松林に注が
れる。何かが動いた。
「蛇骨丸殿、何か.....?」
「いえ.....御見送りはここで結構。 私はやほ用ができました」
言って、呪神使いは身をひるがえす。
「どうやらもう一人.....心打たれそうな人がいるのでね」
息を殺し、蛇骨丸は木陰に忍び寄って行った。その林の中から・・・

「てえいっっ!」
はくじん かがや
ひらめ
やいば
ひび
裂帛と共に白刃の輝きが閃く。 風を切る刃の響きは短く、それでいて重厚だ。
八方を敵と定め、鬼十郎は周囲に斬撃を突き入れる。
息を呑むほど凄絶な太刀運びは、見惚れるほどに優美だ。鞘に太刀を収めると、どこからか称賛の拍手が打ち鳴らされた。
さや
しょうさん はくしゃ
たいま
「御見事、さすがは大陸一の退魔師」
ささま
「何だ、貴様か.....」
おもしろ
きび
まなざし
じゅしんつか
面白くもなさそうに、鬼十郎はそっぽを向く。その厳しい眼差しに気づき、呪神使いはゆっくり近づいていっ鬼十郎は、憮然として、 手桶を引き寄せた。 両手を冷水に突っ込み、顔を洗い出す。た。

ぶ ぜん
ておけ
ととの
ひごろ
その汗を拭った顔に
蛇骨丸はしばし見惚れた。化粧気はまるで無い。それでいて整った少女の面立ちは凜々しく、ある種近づきがたい美しさを放っている。 一息つき、退魔師は松の根元に腰を下ろした。
おもだ
はな
ごめいわく
けいこ
「こんな夜更けに稽古ですか?」
「日頃の常だ。どうも昨夜から‥‥‥その 《常》が乱されてならん」
「それは私のせいですね?」
「認めたくないが、そうらしい」
「御迷惑ばかりおかけします...」
言われて、 鬼十郎は蛇骨丸を見上げた。
「そういう貴様は、長盛殿と談合らしいな」
「誰に聞いたんです?」
「わしには忠実な弟子がおる」
「ああ、そうでしたね」
とうか
得心して、呪神使いも腰を下ろした。 夜風は涼しい。 灯火は月光だけ。周囲から聞こえる虫の音に、二人はしばし聞き惚れていた。
つと、どちらから合わせるでもなく.....
おかん
びしょう こた
しゅんかん

視線がぶつかった。 退魔師は嫌悪感を表にし、呪神使いは微笑で応える。
出会いの瞬間を思い出し、鬼十郎は吐息をついた。
といき
やくどう
よい・
せいそく
からだ
「.....ったく、何で貴様なんかと・・・・・・」
きら
「私のこと、本当に嫌いなのですね...?」
「それは貴様も同じはずだ」
退魔師は、躍動の余韻を整息して鎮めた。
「初めて貴様を見た時に思うた。こいつは嫌な奴だと。 何か癪に障る、刺々しい奴だと。
貴様もそう思うたのではないか?」
「はい、確かに」
たた
じゅれいつか
「わしらは共に、戦いの中に身を置く呪霊使いだ。 敵と味方、
その区別を常に定めるよう身体に叩きこまれている・・・・・・」
たが
「その身体が、互いを敵と認めた。 いや.....」
しゃく さわ
とげとげ
にくにく
そう言って蛇骨丸は、微笑を捨て鉢な笑みに切り替えた。
「ただの敵なら.....すぐに斬り倒せばいいのです。
ですが何か、そう簡単に斬らせてはくれぬような雰囲気が・・・・・・」
ふんいき
つぶや
分かる、と呟いて鬼十郎もうなずいた。
にぎ
「強敵.....とも違うな。 初めて会うたはずなのに、なぜか.....弱みを握られているような
憎々しい気持ちが湧いた。 一度手を出せば、 必ず手ひどく二度打ち返されるような.....」
「そうです、 そうです」
たた
なっとく
呪神使いは、手を叩いて納得した。
にく
にがて
じゃま
「なぜでしょうねぇ、私も鬼十郎殿を憎いと思うと同時に・・苦手と思いましたよ。邪魔なのに、な
ぜか邪魔にしにくい・・・・・・」
はな
ちんもく
てぬぐい もてあそ
いつしゅん
とつぜん
いつち
「お互い、それだけは一致したようだな」
ておけ

言い放ち、鬼十郎はしばし沈黙した。 手拭を弄ぶ手も、一瞬止まる。だが突然、
退魔師は手桶めがけ手拭を叩きつけた。
「そのわしらがなぜ、 共に戦わねばならぬ!」
「いいじゃありませんか、姫様のお言い付けです! それに私はもう納得しましたよ」
「なぜだ!」
やみ そうぼう
鬼十郎は、闇に双眸を光らせた。
「なぜ納得できる! なぜ最も嫌う退魔師と共に戦えるのだ!わしは呪神を倒す者、貴
様は呪神を使う者! 我らは正反対の呪霊使いだ!」
「ええ、まぁ、確かに.....」
「わしは今まで、何百何千と呪神どもを斬ってきた! そんなわしが憎いとは思わぬのか!」
きゅう
言われて、蛇骨丸も己の心中を見つめ直した。 答えに窮し、美形は顔を曇らせる。
てつかい
「前言を撤回するわけじゃないんですが.....」
呪神使いは、ぽりぽりと額を掻いた。
「初めてお会いした時に言いましたよね、呪神は悪い奴ばかりじゃないって。
逆に・・・・良い奴ばかりでない事も、私は知っています」
[.....]
なまびょうほう
ほとん
たい
「鬼十郎殿とて、無差別に呪神を退治されてきた訳でもないでしょう?
依頼を受け、何人間に害を成した呪神を成敗する.....」
せいばい
「だが大方の退魔師はそうではない」
かわ
鬼十郎は、傍らの草をむしった。
「生兵法の呪霊のみで、小さき呪神を勝手に退治しては、金を要求する...
押しかけ退魔師が殆どだ。あの尼僧が憎む気持ちも分かる」
にそう
「でも、鬼十郎殿は違うでしょう?」
「なぜそんなことが分かる?」
あいたい
退魔師の問いは、蛇骨丸に正面から相対した。
「わしらは出会ってから.....まだ一日しか経っておらんのだぞ?」
びしょう
たが
しかし蛇骨丸は平然と微笑を返した。
「いや、確かに私たちは出会って一日しかし先程も言ったではありませんか。
一目見て、お互いを苦手な敵だと理解し合ったと」
にがて
「それは・・・・・・確かに.....」
「同じ事ですよ。私には分かりました、 鬼十郎殿が愚劣な退魔師でない事は。だから姫様
を救うお手助けもしたのです」
「だがわしはなぁ.....!」
言いさして、鬼十郎は言葉を詰まらせた。
「何です? 何か言いたいことでも?」
せんな
「.....いや、なんでもない。 貴様に言うたとて、詮無いことだ」
「なんだか気になるなぁ・・・・・・どうせ私の事なんでしょう?」

すると
きら
(そう見抜く貴様の鋭さが嫌いなのだ!)
したう
鬼十郎は、小さく舌打ちした。
人が隠そうとする思いへ、この男はするりと入り込んでくる。そのうえ、素知らぬ顔でとぼけて見せる。 さも偶然入り込んでしまったかのように。
ぐうぜん
さげす
(こいつはわしの...女に気づいておる.....)
(わしが封じ、しまいこんだ女の心に.....)
かみ
(それでいて、わしの髪にも気づき・・・・・・)
しばらく忘れていた恥ずかしさなどという気持ちが、 退魔師の身体を火照らせる。
ととの
にら
ふうっと息を整え、 鬼十郎は蛇骨丸を睨みつけた。
もど
(こいつの前では、わしは 《常》を取り戻せぬ.....)
(それでも..... 《常》 であるのだ・・・・・・)
じょうきょう
(いかな状況でも平静を保て・・・・・・それが師の教え.....そしてわしの教えなのだ)
(それとも.....)
はんすう
ふと.....鬼十郎は師の教えを反芻した。
(いかな状況でも・・・・・・それは・・・...)
(こんな奴とでも、組まねばならぬ時の事も言うておられたのか.....?)
けん
蔑む視線で、蛇骨丸を値踏みする。 呪神使いは怪訝そうに身を引いた。
きみわる
だま
「だ、黙ってないで、何か言ってくださいよ、薄気味悪いなぁ.....」
「やかましい、思案の最中じゃ。 黙って、 わしにつきあえ」
きみょう やつ
(我が師とて、こんな奇妙な奴を見たら.....)
(だが、確かに今は共に戦うしかない.....)
(共に戦うが... わしの 《常》 は守る)
しゅぎょう
つら
(それも修行か
辛いものだ)
「貴様も、姫様に見込まれた男だ。 ついて来るからには‥‥‥死ぬ気で戦え.....」
はな
乱暴に言い放てば、 また呪神使いは笑う。
「はっはっは.....できれば、 楽して勝ちたいものですねぇ」
しばらくは、辛い道程になる。鬼十郎は、そう覚悟を決めていた。

「まだ起きていたのか?」
きじゅうろう
たたみじ
どま しょうじ

くるわ
いちぐう つら
あしがるながや
こよい
鬼十郎は、土間の障子をからりと開けた。 曲輪の一隅に連なる足軽長屋が、
今宵の宿である。城内には、五百にのぼる兵が常勤している。今夜だけは千鶴の側近くで眠らずともよいと、長盛が用意してくれたものだ。
ちづる そば
ねむ
ながもり
しんらい
しつつい
正直、追い払われた感がある。 鬼十郎の信頼は、昼間の件で失墜していた。
千鶴の側かあからさまに遠ざけられた形だが、今夜だけは鬼十郎も我慢することにしたのだ。
がまん
たいま
畳敷きに上がり、 退魔師は奥の台所へ声をかける。
また しろう
「何を作っておる、又四郎?」
くさがゆ
くさ
「草粥を・・・宝蔵院様が御要りようではと.....」
あま
さけす
「あの腐れにか?あの酒盗っ人にか? あの変態野郎の育ての母にか?」
おししょうさま
「.....そりゃ言い過ぎですよ。まぁ、御師匠様の分もございますので.....」
たいまし いそが
はし
「蛇骨丸さんと御一緒でしたね?」
どなべ
そう言って、少年は土鍋を運び込んでくる。すでに煮立った鍋の中には、得体の知れぬ青物が混在していた。だが、匂いは鬼十郎の空腹感を増長させる。
丼に取り分けた粥を、退魔師は忙しげに箸でかき回した。
おもの
にお
どんぶり
じゃこつまる
ご いつしょ
さ
じゃま
「いらぬ気を回すな、 子供らしくもない」
えんりょ
「何だ、貴様、見ていたのか?」
「夕餉にお呼びしようとしましたが、お邪魔と思い.....」
はな
鬼十郎は不快げに言い放ったが、粥を口にするや表情は簡単に緩む。遠慮もなく、ぞぞっと音をたててすすり、熱さに口を押し開く。
「旨い... 相変わらずだな」
「料理ばかり褒めてくださいますね」
「仕方あるまい。貴様、剣はさっぱりだ」

そぼう
かるくち
そう言ってから、鬼十郎は常の粗暴な言いようを反省した。 軽口とは言え、こんな夜更
けまで、自分を待っていた弟子に言う言葉ではない。
傍らには、さっきまで自分が横臥していた布団が、几帳面に畳まれている。 やおら箸を置き、
退魔師は姿勢を正した。
ふとん
きちょうめん
たた
ただ
ちづるさま
ひめさま
また しろう あやま
「.....いや、 すまぬ。 わしは今日、又四郎に謝らねばならぬのだ。 昼間はすまなかった」
「ど、どうなされました、御師匠様?」
「千鶴様の警護につきながら、わしは.....その役目を果たせなかった。
蛇骨丸がいなければ、姫様の御命はどうなっていたかしれぬ」
おいのち
「御師匠様.....」
くもん
「何が大陸一の退魔師だ。己が嫌い、斬ろうとした昵神使いなんぞに危地を救われ.....わし
は姫様に会わせる顔がない」
苦悶の表情に、 又四郎は小さな声で問うた。
「蛇骨丸さんの事、まだ嫌いなのですか?」
「貴様はどう思う?」
じゅれい うで
「悪い人じゃないと思います。それに呪神を使う呪霊の腕も、相当なはずです」
鬼十郎も、同感であった。
決して、忌むべき人間ではない。敵ではないと分かり、協力してくれるなら、心強い味方となろう。
宝蔵院も同じだ。 そこまでは、信頼できる二人である。
ほうぞういん
しんら
しかし.....
「わしが嫌いなのは、わし自身なのだ」
「そんな.....」
こわだか
ぜんしゅう
りょう
「考えてもみよ、わしらが受け取る金は一千両だぞ。 わしが、
それに見合う仕事をしているとは到底思えぬだ」
とうてい
ろてい
素直に胸中を露呈する。 失態を悔いる気持ちを、鬼十郎はどうしても口にしたかったの だ。
とな
が、又四郎は異議を唱える。 少年の手は、ぐいと鬼十郎の裾を握り締めた。
「何を申されます! 御師匠様の働き場所は、 これからではございませぬか!」
さけ
どんぶり かゆ
声高に叫び、又四郎は井に粥を盛り足した。
た
おそ

「然州に着くのは、まだまだ先！ それまでに必ずまた、敵は襲って来るはずです！
奴らを御師匠様が斬ればよいではありませんか！」
「そうだな・・・・・・確かにそうだ」
「弱気な御師匠様なぞ、私は見たくございませんよ！ 強気！ 強気で勝負です！」
弟子の励ましにうなずき、鬼十郎は丼をあおった。我ながら情けないと思いつつも、今
は又四郎の言葉がやけに嬉しい。空腹を満たしながら、 退魔師は必殺の信念を再燃させ た。
（木津の黒鶴 ・相手にとって不足はない.....）
（次こそは次こそは必ずこの手で.....）
そ
鬼十郎は、念じつつも草粥をむさぼり続ける。
どま
しょうじ
その勢いは、土間の障子が開いた事にも気づかぬほどの一心さであった。来客は仕方なく、貪欲な背中におもむろに声をかけた。
ぶん
かんべ
「夜分、御無礼.....」
してい
振り向く師弟に、勘兵衛は静かに目礼した。

城下は、軍勢で満ち満ちていた。
さかきばらけ
ごう
はたさしもの
な
とりで
まだ朝もやの消えぬ街道へ、榊原家の旗差物が列を成して流れて行く。
周辺の砦から糾合された部隊は、乱れる事なく整然と合流し、一つの巨大な隊列へと変じていた。
きょだい
さぎのじょう しゅつたつ
こしい
その隊列の中に、鷺野城を出立した輿入れの行列もあった。
が、前日までとは、総勢が違い過ぎる。騎馬、鉄砲、長槍・
・雑多な兵種で急造された護衛部隊のおかげで、行列は十倍以上に膨らんでいたのだ。
きば
てつぼう ちょうそう
ふく
「御師匠様、これはどういうわけです！」
二千にのぼる大行列の中で‥‥‥又四郎の不平が響き渡った。太守家の紋をあしらった籠から、小さな顔が覗いている。少年は、駕籠に併走する師匠に声を涸らした。
のぞ
へいそう
「私の役目は、一体なんなのですか！」
やつ
ささま
ちょう
「分からぬ奴だな、貴様も。 今言うた通り、今日から駕籠を二丁用意したという訳だ」
きゆう
むぞうさ
しゅぎかい
ゆうぜん

はる かなた
鼻を鳴らし、鬼十郎は悠然と後方を指し示した。確かに行列の遥か彼方にも、もう一丁全く同型の駕籠が揺れている。 退魔師の指は、的確に弟子を導いた。
てつかく
ほんめい
「後ろの駕籠には、千鶴様がお乗りになっている。いわば本命よ。
それに対して、先発し貴様の駕籠は...ま、 囮だな」
おとり
だれ
「なんで私が影武者なんですか! 誰がこんな策を考え出したのです!」
「勘兵衛殿と・・・・・・わしだ」
無造作に、鬼十郎は言い放つ。
はな
なかや
きのう しゅうげき かえり
「昨夜貴様が寝てから、長屋にて勘兵衛殿と話し合うた策だ。
昨日の襲撃を顧みるに、やはり護衛の人数は手薄と考え・・・・・・勘兵衛殿は、夜のうちに兵をかき集められた」
てうす
おこしい
「なれど御輿入れの人数は、定められて.....」
言いかける弟子を、 退魔師は笑って制した。
ぜんしゅう
もど
「州境までだ。然州に入れば、元の人数に戻る。 影武者を用意したのも、敵を欺く手筈
だ。又四郎、よろしく頼むぞ」
「そりゃないですよ! 何の相談も無しに!」
ことわ
「相談すれば、 断ったであろう?」
「ええ、そりゃあまぁ.....」
鬼十郎は、不満げな弟子を無視し、駕籠の戸をぴしゃりと閉めていた。
あざむ てはず
「とにかく絶対、顔は出すな! もしばれたら身代わりとして貴様に死んでもらうから な!」
「お、御師匠様ぁ!」
たんがん
もくさつ
みじん
嘆願の声も黙殺される。 鬼十郎には昨夜の弱気も、弟子への感謝の念も、微塵も無い。
退魔師は何食わぬ顔で、晴れて行く朝の空を見上げつつあった。と、唐突に.....
とうとつ
ひど
「まったく、酷い事を.....」
にがにが
したう
呑気な声が背中にかかる。ちらりとだけ振り向き、鬼十郎は苦々しく舌打ちをした。
「何だ、貴様らか.....」
「お早うございます、 鬼十郎殿!」
はつらつ
あいさつ
かた なら

刺とした挨拶で、蛇骨丸は退魔師に肩を並べる。
その後ろには、三日酔いを抱えた宝蔵院がぴったりと付き従っていた。
はい
ぞういん
さと
「う~~鬼十郎殿、今朝はまた、一段と気合の入り様が違いまするな?」
あまご
「それを悟られるようでは、まだ若いと言いたいのだな? 尼御のいらぬお世話だ」
「分かっておられるなら構いません。あ~~頭がガンガン・・・・・・」
笑顔で、蛇骨丸は街道の前後を見渡した。
すご
みわた
「それにしても凄い人数ですね? よくまぁ、一夜にして集まったものだ.....」
うんしゅう
「なに、雲州の総兵力からすれば、微々たるものだ。それより貴様は本命に付け!」
あしな
はな
足並みを速め、鬼十郎は引き離しにかかる。
「囮は、わし一人で十分だ。 貴様は勘兵衛殿と、本物の千鶴様の駕籠を守らぬか!」
のぞ
だが後方を覗いた蛇骨丸は、かぶりを振る。
いっしょ
おもしろ
「本命に付いたのは、長盛殿と勘兵衛殿ですね。あまり一緒にいても面白くないなぁ.....]
「わしと一緒なら面白いのか!」
「ええ、色々と。それに本命ばかりに護衛が付いては、本命と知れてしまいます。 私は鬼十郎殿と、しばらく歩きたいのです」
きより
するど
すんぷん
退魔師は、ぎらりと警戒の眼光を鋭くした。歩きながらも、隙は十分も見当たらない。
せきばら
適度に距離を取り、鬼十郎は咳払いをした。
「貴様、何が聞きたいのだ?」
「まず、この大人数ですよ」
ひど
蛇骨丸は、嬉しそうに退魔師に接近する。
たか
「人数の多寡で勝てるおつもりですか?」
くろげる
ひとぶすま
「別に勝つつもりはない。黒鶴が現れれば、 みな姫様の人襖となり時を稼げばよいのだ」
「ひ、酷いっ!」
さむらい
よじょう
「それが侍の仕事だ。時を稼げば、 勝機が見える時もある。余剰兵力はあった方が良い」
かげむしゃ
「なら、 影武者は?」
じゅしんづか
しょせん
呪神使いは、 又四郎の駕籠を軽くこづいた。

「まさかこんな子供だましで、 黒鶴を引っかけられるとお思いではないでしょうね?」
「しかし、他に手の打ちようはないのだ・・・・・・」
といき
言いながら、鬼十郎は疲れた吐息をついてみせる。
退魔師は、初めて蛇骨丸の顔を見据え、心中を露呈し始めた。
ろてい
ほどこ
「御駕籠には、仕掛けも施した。だがそれも気休めだ。 何せ相手は呪神黒鶴。
どんな手を使うか図り知れぬ。 正直、 手立てはない」
つら
「我らは受け身ですか、辛いですね.....」
じょうきょう
「所詮、護衛が増えようが、 影武者を用意しようが状況は変わらぬ。だが気休めでも、
千鶴様が安心なればよいのだ、僅かでも」
わず
つか
鬼十郎は、後ろの駕籠を振り返った。 蛇骨丸も視線を並べ、軽くほほ笑んで見せる。
「気を遣われているのですね、 鬼十郎殿は」
きのう ごと
さ
「ああ、千鶴様にはな。 昨日の如く、目前まで敵に迫られるような事は必ず避けたい」
そうぼう
いつく
たた
退魔師の双眸は、慈しみの光を湛えていた。
世間も知らぬ姫君が、目の前で家臣が殺されるのを目撃したのだ。
それも醜悪な傀儡に。心に受けた傷は、決して浅くないはずである。
(またそんな思いはさせたくない)
いの
退魔師の祈るような願いを、蛇骨丸も確かに感じ取っていた。 思わず呪神使いも、まだ
じゃこつまる
見ぬ千鶴に思いを馳せてしまった。
「そこまでして、嫁がねばならぬのですか?」
きずな
「仕方あるまい、国の絆を結ぶためだ」
「どこの姫様も同じですね.....」
「だが千鶴様は、まだお幸せな方だ・・・・・・」
鬼十郎は、ほんの少し声を細めた。
おきな ころ
「然州の若君とは、幼い頃から知り合うた仲だそうだ。 決して、嫌々嫁ぐわけではない」
「会ってみたいな、 千鶴様に・・・・・・素顔の姫様に鬼十郎殿はお会いになられました か?」
「ああ、だが貴様はどう思うかな?」
あゆ
問うて、 退魔師は歩みを速めた。
「あの姫様に会うて平然としていられるなら.....貴様もたいした呪霊使いだよ」
「それは.....どういう意味です?」
と
蛇骨丸の視線が、 鬼十郎を捕らえた。だが無言のまま立ち止まり、
退魔師は背後の駕籠を見守った。 渦中の姫君の素顔を、 呪神使いはまだ知らないのだ。
つぶや
どうちゅう

「分からぬ道中でいいのだ、まだな.....」
あゆ
呟き、鬼十郎は歩みを再開する。輿入れの道中も、街道へと歩を進めていった.....。

なんぎ
「こりゃあ、難儀な所だ・・・・・・」
どな
いわはだ
すきま
思わず、蛇骨丸は声を上げる。 左右から迫り出した岩肌の僅かな隙間。
街道の行く手は、その隙間に消えている。辺りの岩陰からは、濛々と白煙が上がっていた。周囲に立ち込める刺激臭に、呪神使いは鼻をつまんで言った。
あた
いわかげ
もうもう はくえん
げきしゅう
わき
にお

Translation Break 4

「なんでこんな所を通るんですか? 腋の下の匂いがしてますよ?」
くさ
ぼかもの
「違う、卵の腐った匂いだ、馬鹿者めっ!」
おうしゅう
だいこくだに
怒鳴って、鬼十郎も顔をしかめる。行列は、硫黄臭に包まれた大黒谷の入り口にさしかかっていた。
雲州と然州を隔てる能城山地を越えるには、唯一の道。たとえ休火山
大越山の麓であっても、避けて通れぬ道程であった。
へだ
のしろ
ゆいいつ
やま
ふもと
ささま
「おい、貴様の後見人はどうした?」
ほうぞういんさま
にば
「宝蔵院様ですか? 後続の荷馬です」
にそう
ようやく気づいて、 退魔師は列の後方に目をやった。
見れば尼僧は、ぐったりと馬の背にしなだれかかっている。 呆れて、鬼十郎はふんと鼻を鳴らした。
あき
「情けない! 硫黄の匂いくらいでなんだ!」
おおごえ
きた
さむらいしゅう
つら
しかばね
「警護の侍衆も大分辛そうですよ。 さすが屍の谷と言われるだけの事はあるな・・・・・・」

「鍛え方が足りぬのだろうっ!」
いら
おお
が、呪神使いは苛つきもしない。口と鼻を手拭で覆い、蛇骨丸はくぐもった声を響かせ た。
あまでら
「あれで私の母親代わりです。 尼寺に捨てられていた私を、拾い育ててくれた恩がある。
酒には弱いが、優しい人ですよ」
ようしょう
もの
「なるほど、幼少を尼寺で過ごすと貴様のような痴れ者になるのか。 来世では、わしも尼
寺には近寄るまい。 気をつけよう」
「そういう鬼十郎殿は、どこのお育ちで?」
たず
蛇骨丸は、何げなく尋ねた。
さいぎしん
「いつから陰険な猜疑心をお持ちです? まさか物心ついた頃からではないでしょうねぇ?」
「いや、きっとそうであろう」
たいまし
おどろ
あっさり、退魔師は認めてうなずく。 驚く蛇骨丸に、鬼十郎は皮肉っぽい笑みを浮かべ た。
ししょうぼくでん
あず
「わしも、 親を知らぬ子であった。 物心ついた時には、師匠卜伝の元に預けられていた」
おやご
「では親御は.....」
まも がみ
にえ
「わしが生まれ、すぐ死んだそうだ。村の守り神たる、 呪神の生け贄としてな」
うき
きょうがく
びしょう
蛇骨丸は、咄嗟に言葉が出ない。だが呪神使いの驚愕に、 鬼十郎は軽く微笑して見せ た。
「どこにでもある話だ。 悪しき呪神の強要を拒めぬ村など·····それにわしとて、顔も知ら
ぬ親だ。さして悔しい気持ちも湧かぬわ」
「なれど.....」
きょうぐう
ひょうひょう
「だからと言って、許すつもりもない。 そのために・・・・・・わしは、
退魔師となった。己と同じ境遇のみなし児だけは・・ ・・まぁいい、そんな程度の話だ」
飄々と、鬼十郎は岩場を踏み締めて言った。
大陸には、呪神が満ちている。 生まれついて、 呪霊を行使する人間以外の存在。良い者
もいれば、悪い者もいる。 それを知った上で、二人は正反対の生業にあった。
(呪神を斬る者と呪神を使う者)
なりわい
古来から、合い入れぬ立場である。だが今はとにかく、力を合わせねばならない。その
思いを察したのか、蛇骨丸が不意に呼びかけた。
「私たちは正反対ですね.....」
「それがどうした?」
「二人で·····上手くやっていくことは、できませんかね?」
おのれ
ご

のうど
山間の空は、白煙に濁っていた。 硫黄の濃度は、さらに強まっている。
岩山を抜ける街道で立ち止まる事なく、鬼十郎は低く呻いた。
「それは.....二人で何をするかだな.....」
「何を?」
「ああ.....わしらが共に力を合わせるような何かが起きれば・・・・・・有り得ぬ話でもない」
「起きるんじゃないですか、 それは?」
蛇骨丸が、鬼十郎を見つめる。 退魔師も、 呪神使いを見つめた。
「力を合わせられるか、わしに?」
「それは.....何かが起きれば」
だが蛇骨丸の答えに、 鬼十郎は顔を背けた。
そ
ふきつ
「ふん!何も起きない方が良いに決まっとるだろう! 不吉な事を言うな!」
あきら
ざくざくと、 退魔師は荒れた道を踏み抜いて行く。 諦めず、 呪神使いもその背にすがろ
うとした。 その瞬間・・・
しゅんかん
....
「何だああっっ!」
どうよう
反射的に、蛇骨丸が悲鳴を上げていた。だが動揺したのは彼だけではない。長大な行列全てが凄まじい衝撃に翻弄され、叫喚は谷全体に響き渡った。強大な地震。竿立ちになる馬を押さえ、長盛と勘兵衛は緊張を漲らせた。
しょうげき ほんろう
きょうかん
じしん さおだ
すさ
ひび
「あ、あれはっ.....!」
けいこく
地響きは、未だ渓谷を揺るがせていた。
左右の崖から、ばらばらと小石がなだれて来る。その断崖に行列の視線が集中した。 鬼十郎が、
蛇骨丸が・・・・・・長盛が、 勘兵衛が..... 宝
蔵院すら、重い頭を持ち上げていた。侍たちも呆然と絶壁を見つめている。 その視線の先.....
みぎうで
右腕が現れていた。
きょだい
ぼうぜん ぜつべき
断崖の中から、岩石で出来た、巨大な腕が飛び出している。
その大きさたるや、家屋すら片手で握り潰せそうなほどだ。
つぶ
おどろ
ひま
が、行列に驚いている暇はない。続けて左腕が飛び出し、左右の足も現れる。 最後に飛
び出した奇怪な頭部は、重々しい咆哮を轟かせた。塗り込められていた岩石の巨人は、岩肌を崩落させ、行列の側面に躍り出たのだ。
ほうらく
おど
うきあしだ
とんば

ほうこう とどろ
まど
げきとつ
行列は、一気に浮足立った。
人馬のいななきが交差し、逃げ惑う人波が激突する。迎え・・・・気概のある者は皆無だ。
狭い峡谷に、怒号と悲鳴がひしめき合った。
かいむ
せま きょうこく
どごう
「引けえーっ！ 引けえーいっ！」
軍配を打ち振り、長盛は声を減らす。
もど
「御駕籠を戻せーっ！ 後ろへ退けえーいっ！」
けんそう
まど
きむらい
命令は、喧噪にかき消された。しかし行列は、散り散りとなって逃げ惑っていた。 侍た
むかちには、抵抗する気配すら無い。
ていこう
さけ
じゅれい やいば
鬼十郎は、呪霊の刃を抜き払った。
はら
「引くなーっ！ 引いてはならぬっ！」
からだ まり
叫んだ身体を毬の様に弾ませ、 退魔師は周囲の頭上を飛び越える。
行列を見下ろす大岩に着地し、鬼十郎は鋭い声音を叩きつけた。
すると こわね たた
「先へ進め！ 退いてはならぬ！ ここで止まれば袋の鼠ぞ！ 御駕籠を通す道筋を守れいっ！」
「鬼十郎殿っ！」
どな
きょじん
怒鳴って、蛇骨丸は背後を指さした。 一歩二歩、 岩石の巨人が悠然と歩きだしている。
つぶ
長大な足は、逃げ遅れた騎馬を押し潰し、重なる悲鳴は無残に踏み殺された。 続けてその
腕が、不意に鬼十郎めがけて急降下したのだ。
「こなくそっ！」
こぶし
鬼十郎は、身体を垂直に飛び上がらせる。その足元へ、小山のような拳が突っ込んだ。 いちげき
ふんさい
最前までの足場は、一撃で粉砕されている。 空でとんぼを切り、退魔師は大きく飛び退いた。
おししようさま
「御師匠様っ！」
駕籠から顔を出し、 又四郎が悲鳴を上げた。 少年は急ぎ、
飛び出しかける。だが蛇骨丸は、はやる又四郎を乗物へと押し返した。
もうそく
まか
「君は駕籠へ！ ここは私らに任せなさいっ！」
「でも御師匠様が.....！」

交差する二人の声に、ばらばらと石塊が降り注いだ。街道を塞いだ巨人は、石灰色の身体を揺らし、巨体のあちこちを赤く点滅させている。 溶岩の熱を帯びた身体の一部から
は、同時に白い蒸気も吹き上げられていた。
てんめつ
つばめ ごと
おど
鬼十郎は、小さな身体を燕の如く躍らせ、果敢に斬り込んで行く。だが巨体に似合わぬ猛速で、化け物は左右の拳を振り回した。 退魔師は、続けざまの跳躍で、攻撃をかわす。
こぶし
ちようやく
こうげき
しりめ
にあ
間合いに詰め寄る事すらできない。 退魔師を尻目に、巨体は行列へと踏み込んで行った。
「殺されるっ!」
「退けっ!退かぬかっ!」
「早く逃げろおっ!」
行列の先頭は、恐慌に陥った。巨人はその手で、馬の別なく殺戮を開始した。乾いた岩石の指の間からは、生け贄の血しぶきがこぼれ落ちる。そして絞り殺された遺体をあるや、すぐに次の犠牲が捕捉された。圧殺の拳から逃れようと、行列は瞬時に散開してい た。
ぎせい
ほそく
あつきつ こぶし
のが
「だめだっ! 逃げろっ!」
「ああっ! 待ってよ!」
ついに又四郎の駕籠かきも、わななきながら逃げ出した。
乗物ごと、どすんと置き去りにされ、少年の脳天が駕籠の天井に激突する。
てんじょう げきとつ
「いてええっ!」
た
いとま
もんぜつ
だが悲鳴を上げた又四郎に、痛みを堪える暇は無い。 蛇骨丸は、悶絶する少年を素早く
駕籠から引きずり出した。
とつばこう
「仕方ない! 又四郎君は姫様の駕籠へ!」
「蛇骨丸さんはどうするんです!」
「鬼十郎殿と突破口を開く!」
まど
すいしょうだま
にぎ
逃げ惑う人波を避け、二人は駕籠の陰に寄り添った。
蛇骨丸はすでに水晶玉を握っている。呪神使いの視線は、巨人の顔を仰いでいた。
「勝てる見込みはあるんですか?」
じゅしんつか
せま
あお
「なくても戦うのさ! まだ行列の後ろは統制が保たれているはずだ、 宝蔵院様と一緒に
姫様をお守りしてくれ!」
「本当に突破できるんですね?」

少年の問いに、蛇骨丸は大きくうなずいた。
こうたい
「この狭い道に、この大人数後退するのは不可能だ。
危険でも、巨人がひるんだ隙に突破するよう、勘兵衛殿にお伝えしてくれ!」
いつしょ
「分かりました!」
くちびる
もど
とうき
唇を結び、又四郎が後方へ戻ろうとする。対して蛇骨丸は、水晶を投擲しようとした。
二人が背を合わせ、互いの前方へ意識を集中した‥‥‥ その時であった。
「うおわあああっっ!」
「しまった!」
かいこん
ぜつきよう
両者の声が同時に上がる。 悲鳴と、悔恨の絶叫。だが叫んだのは、蛇骨丸たちだけではない。逃げ惑う侍たちの群れにも、新手は予期せぬ方向から襲いかかっていたのだ。
とつき
むち
咄嗟にそれは、肉の鞭に見えた。
うすももいろ ひとはだ
しょくしゅ
おそ
薄桃色。 人肌を思わせる色づきの、しなる触手が地面から飛び出している。 一本二本ではない。街道に敷き詰められた小石を吹き飛ばし、ざっと一町の間、数百本が行列に食らいついたのだ。
さいこう び
むち
かご きょう
しかも先頭だけではない。 行列の最後尾にも、鞭は波打って現出した。 千鶴の駕籠を挟撃するように攻め掛かる。
りよりよく
はじ
どうたい
触手の膂力は、馬をも弾き飛ばした。
打ちすえられた騎馬は、胴体を真っ二つに裂かれ、臓腑を撒いて転倒する。
敏速な一撃をくらった人間は、四肢を吹き飛ばされ、鮮血にまみれて昏倒した。
びんそく
いちげき
せんけつ
ぞう ふ
てんとう
「勘兵衛、 これは!」
「おのれ、図られたかっっ!」
つら
勘兵衛は、思わず馬上でたじろいだ。前方に連なる行列の、もはや先頭三割が敵中にある。加えて後方二割も、同様の憂き目に遭っていた。腕をもがれ、腹を裂かれた兵たちの悲鳴は、若武者の耳にも届いている。 千鶴の駕籠とて、無事ではすまぬ距離だった。
わかむしゃ
とど
かご

はら
きより
「ともかく御駕籠を！ 姫様を.....！」
はじ
こうげき
はかま
蛇骨丸にも又四郎にも、この襲撃は予測不能であった。いきなり目の前に現れた一撃
で、又四郎は街道から弾き飛ばされている。 足をかすった攻撃だが、裂けた袴から血潮が
飛び散った。岩場によろめき、少年はそのまま意識を失っていく。
おそ
いつせん
ふところ
せんたん
おど
しかし蛇骨丸を襲った一閃は、呪神使いの懐に飛び込んでいた。 気づいた時には、もう
鞭の先端が眼前に踊り出している。 避ける間など無い。
右肩から胸板へ、胸板から左の腰へと、敵手は蛇骨丸を袈裟斬りに倒す。
ばっと宙に散る自分の鮮血に、呪神使いはのけ 反ってまろんだ。
みぎかた
むないた
お
せんけつ
きりも
さけ
「鬼十郎殿っ！」
叫んだ身体が、錐揉みして地に伏せる。
どごう
飛び交う怒号の中、退魔師はその呼び声にはっと視線を振り返らせた。
「蛇骨丸！」
じゅりよく
ちようやく
こぶし
声を返し、退魔師は跳躍する。 蒸気と共に、巨人の拳が鬼十郎へ落下していた。寸前で
攻撃を見切り、少女は大岩を飛び移る。その瞬間にも、 鬼十郎は敵の正体を見極めてい
（呪力を感じぬ.....！）
しゅんかん
みきわ
すんぜん
そそ
ほうこう つぶて
拳が地面にめり込み、飛び散った石が周囲へ降り注ぐ。耳をつんざく咆哮。 飛礫を避
け、鬼十郎は巨人に念をこらした。
やつ
くぐつ
（こ奴も呪神ではない、 傀儡・・・...）
（どこだ、傀儡使いは.....）
（傀儡使いはどこにいる・・・・・・必ず近くに.....）
「き、鬼十郎殿おっっ！」
しょくしゅ
ようこん
ていこう

蛇骨丸が、今一度絶叫した。 倒れた両足首には、各個に触手が巻き付いている。 妖根
は、呪神使いをずるずると引きずり始めた。しかし、蛇骨丸に抵抗する余力は無い。 血に
染まった胸を押さえ、呪神使いはただ呻くだけだ。
じゅうにしんてん
「御力貸されよっ! 十二神天!」
おのれ
すべ
叫ぶ鬼十郎は、己の呪力に望みをかけた。
こりつむえん
うめ
せま こぶし にら
りよううで
時が無い。孤立無援の退魔師は、 再び迫る拳を睨み据えた。
すでに両腕からは、体内に残った全ての霊気がっている。 呪力も集中された。 最初で最後の一撃。
機会を狙う退魔師は、気合の言霊を口にした。
ことだま
「破魔.....退っっ!」
せんぷう
ごおっと、岩場に旋風が舞った。
こぶし
もうそく
じゃり
ごうう
ご
迫り来る巨人の拳は、猛速で大地をかすめていく。
吹き飛ぶ砂利は豪雨の如く降り注ぎ、土煙も竜巻を思わせる高さに舞い上がった。
つちけむり たつまき
あくらつ けんげき
だが鬼十郎の身体は、 その一撃に正面から飛び込んでいた。悪辣な拳撃も、 退魔師の間
合いに一気に踏み込む。 両者の突進が、まともに激突する。 そう見えた刹那である。
退魔師は、地表を蹴った。
しんそく
とっしん
ゆうやく
げきとつ
せつな
細く引き締まった肉体が神速、宙に勇躍する。 拳は鬼十郎を見失った。 またも失中した
腕が、地面に手首まで潜り込んだ。 その一瞬を、 退魔師は見逃さなかった。
もぐ
みのが
(今だっっ!)
ひじ
鬼十郎は、大地に突き刺さった右腕に着地した。と思った時には、もう肘まで駆け上 がっている。
たったっと、目にも止まらぬ足運びで、 退魔師は巨人の肩めがけて突入し た。
かた
とつにゆう
「む、無茶だああっっ!」
あわ
とうたつ
くま

がれ場を引きずられつつ、蛇骨丸は我が目を疑った。慌てて身を起こす巨人の、早くも
右肩へ鬼十郎は到達している。 熊に立ち向かう鼠ほどの無謀さ。 呪神使いは、自分と退魔
ねずみ師の最期を覚悟した。
さいご
かくご
きょうふ
たお
にぎ
だが鬼十郎に恐怖はない。 ただ敵を倒すと言う一念のみ、両手に握った太 心中にある。
だいじょうだん
しつそう
刀を大上段に構え、退魔師は、巨人の肩から頚部へと疾走した。

「行くぞおおっっ!」
せま
れつぱく

裂帛に、巨人の軋みが重なる。へ伸びた巨人の左手が、鬼十郎を捕らえ損ねた。続いて右手も、己の肩へ叩きつけられる。 が、
退魔師は、迎撃を難無く回避する。しかし顔面まで迫った鬼十郎めがけ、ついに怪物はしくじりの絶叫を浴びせかけた。
いげき
おのれ
たた
かいぶつ
ぜつきょう
[.....!]
もの
巨人と向き合った退魔師は、直前で空へ飛んだ。 化け物の口が吐き出したのは、絶叫でいつせん。
しゃくねつ おうと
だ
だんが
はない。溶岩の一閃だ。 灼熱の嘔吐は岩肌へぶつかり、高熱が断崖を溶解する。
だげき
づな ほうてき
こうせん
鬼十郎は、必殺の打撃をかいくぐった。 そして空中で、 手首から投げ綱を放擲する。 列
島渡りの鋼線は、巨人の首にぐるぐるっと巻き付き、足場の無い退魔師を宙づりにした。
そのまま一気に・・・・・・
少女は振り子の要領で、胸元を横切り、巨人の左肩へと身を躍らせていた。 怪物の後頭
部、それが眼前にある。 綱を切った退魔師は左肩を蹴り、うなじ目がけて跳躍した。
ちようやく
ほくでんりゅうてんまひじゅつ
「卜伝流 天魔秘術.....!」
こんしん いつとう
さき
けんご
鬼十郎は、渾身の一刀を突き入れた。 切っ先だけが、堅固な岩肌に突き刺さる。
が、光をまとった刃は、ぐうっと岩盤に食い込んでいった。ばちいっと、退魔師を包む周囲の大気が爆ぜている。 黒髪を逆立て、鬼十郎は巨人の首を貫き崩した。
がんばん
くろかみ
つらぬ
くず
「.....秘剣、 一の太刀っ!」
赤いぶつ
じゅれい
だんまつま
もだ
いとま
怪物に、断末魔は許されなかった。悶える戦すら無い。鬼十郎の太刀から流れ込む莫大な呪霊の破壊力が、瞬時に巨体へ浸透した。 硬直する巨人。 白刃を抜を払い、退魔師は左腕に飛び移った。
はかいりよく
しゅんじ
しんとう
こうちよく
はくじん
B

はら
ひだりうで
「鬼十郎殿っっ!」
きなか
さけ
混乱の最中、勘兵衛はそれだけ叫んだ。
ずがい
ごうおん
ばくさい
はじ
が、次の瞬間.....巨人の頭蓋は、轟音と共に爆砕していた。内部から弾けた電撃が、から上を微塵に吹き飛ばしている。 退魔師の一撃で、岩石の巨体は街道上に停止したの だ。
みじん
いちげき
「はは・・・・凄いな・・・・は・・・・は」
つぶや
そそ
薄れ行く意識の中で、蛇骨丸はうわ言のように呟いた。
ばらばらと降り注ぐ頭蓋の破片に、呪神使いは称賛の呻きを送った。
しょうさん うめ
しょくしゅぐん こうそく
そく
だがもはや、蛇骨丸は、触手群に拘束されていた。両足だけでなく、 腕や首も捕捉されている。
最期の恐怖を何となく感じ、呪神使いは仕方なく瞑目した。
さいご きょうふ
その耳に·····
ばかもの
とつ
ばせい
「いつまで寝てる気だ! 馬鹿者っ!」
突然、罵声が飛んだ。 はっとして目を開く。 蛇骨丸は眼前に、四方を薙ぐ白刃の閃きを見ていた。
やおら緩む拘束に、蛇骨丸は僅かに身を動かした。
ゆる
わず
ひらめ
「き、来てくれたんですね、 鬼十郎殿.....」
「呼んだのは貴様だぞ、か細い声で泣くな!」
きかん
じゅぼく
はら
いつの間にか、巨人の左腕から地へ帰還した退魔師が・・・・・・蛇骨丸の呪縛を斬り払っていた。
鞭の根元めがけ、容赦なく太刀を振り下ろす。のたうつ触手を次々裁断し、鬼十郎は
あえぐ呪神使いをぐいと引き立てた。
けがにん
とう
かわ
さけ
「痛い!け、怪我人ですよ、私は.....」
とっぱこう
「やかましい! 痛がるのは後だ! 突破口を開くのは、貴様しかおらん!」
たお

いちべつ
はが
傍らに倒れる又四郎にも一瞥をくれ、鬼十郎は行列の混乱に歯噛みした。
お
じゅしん。
「この触手の群れをぶっ倒せるのは貴様の呪神だけなのだ!わしは、今の一撃で霊気を 使い果たした!頼んだぞ!」
「何でそんな真似を! それじゃこれからどうするんですか! この先、霊気の補充 +o.....]
「あんなでかい敵は、あの呪霊でなければ倒せぬ! 仕方がないのだ!」
わざ
「じゃ、鬼十郎殿はあんな技はもう.....」
しえき
「いいから、さっさと使役呪神を飛ばせ!」
しょくしゅ
じゅうおう
と叫ぶ退魔師へ、新手の触手が飛びかかった。 大地を割って、
敵は縦横から鬼十郎へ殺到する。だが打撃を浴びる寸前で、鬼十郎の太刀は肉の鞭を斬り飛ばしていった。
だげき
すんぜん
たち
むら
ほ じゅう
「半分でいいのだ、蛇骨丸!」
ふる
わめ
鬼十郎は、太刀を奮って喚き続けた。
やつ
ひめさま
「御行列の前方を遮る奴らだけでも蹴散らせい! さすれば姫様をここから落とせる!」
「わ、わかっちゃいますが.....」
たお
倒れたまま、呪神使いは右手を引きつらせた。
僅かでも腕を動かすだけで、激痛が全身に走る。だが蛇骨丸は涙をこらえ、何とか水晶玉を握り締めた。
なみだ
すいしょ だま
にぎ
かみまい
「頼みますよ ・呪神紙舞.....」
呪力を振り絞り、念を込める。
とたん
さむらい
ほぼく
途端に、侍たちを捕縛する触手めがけ、
水晶玉が空を横切った。同時にその中心から、数百枚の紙片が吹雪のように舞い散っている。
いずれも半紙大の白い紙切れ。 使役呪神が、水晶玉から解き放たれたのだ。
of 25 a
はん しだい
はな
「助けてくれっっ!」

「.....苦しいっっ!」
こもの
侍も小者も、行列の先頭では数百人が敵手に落ちていた。打たれ、裂かれ、締め上げられる悲鳴が交差する。 犠牲者は次々と、地の奥底へと引きずりこまれていた。
ぎせいしや
おくそこ
しんそく
その上空へ、紙吹雪が舞っていた。風を切る音と共に、 神速の素早さで。
とつにゅう
やいば
敵に突入する紙片は、触手の幹を切り裂いた。紙の刃である。
しかも群れをなした数十の刃は、触手を烈断するや、
一撃離脱の後、さらに再突撃を開始していた。餌を求める魚群の様に、呪神紙舞は一糸乱れず、触手たちに襲いかかっていた。
よう
れつだん
いちげきりだつ
えき
「やるではないか、蛇骨丸!」
おど
一言褒めたたえ、鬼十郎も混乱の中へ躍り込んだ。
切り裂かれた触手は、肉色の体液を噴き、大地へ昏倒していく。
退魔師は檬々たる土埃を突き抜け、浮足立った兵たちに駆け寄って行った。
こんとう
もうもう
つちけむり
うきあし
「道は開けたぞ!」
おからごえ
倒れた者へ手を貸し、 退魔師は塩辛声を響かせた。
ひび
「みな先へ進め! 千鶴様が通る道筋を守るのだ! 動ける者は前へ出ろ!」
こた
ぎゃくしゅう
もど
だが応える者は無かった。紙舞の逆襲に、触手たちはずるずると地下へ舞い戻っている。しかし脅威が失せたとは言え、まともに動ける兵など辺りには皆無であった。
いずれつき倒れ、恐怖に脅えたままなのだ。
きょうい
あた
かいむ
ぜつきょう
わななく鬼十郎は、刀を振り上げ絶叫した。
うんしゅうさかきばらけ
ざま
「貴様らそれでも雲州 榊原家の侍かっ! 姫様守って死ぬ奴はおらぬのか!
雲州侍の死に様、この退魔師に見せてみい!」
「鬼十郎殿っ!」
がっしょう
きょうほん

男女の合唱が、 退魔師を呼んだ。 土煙を上げる騎馬が二騎
狂奔を擦り抜け、後方から飛び出している。腕しい表情のまま、鬼十郎は、勘兵衛と宝蔵院に振り返った。
おかご
「おお、みな御無事か!」
しと
「それは鬼十郎殿に言う言葉! よくぞ、あの巨人を仕留めなされた!」
「御駕籠も無事です.....ううっ! 蛇骨丸は?」
馬上で吐き気をこらえる店に、退魔師は口調を速めた。
「そこで寝ておる! 又四郎も同じだ! 道は開かれたぞ、早、千鶴様の駕籠を!」
「鬼十郎殿はどうなされる!」
「行列の後ろの敵は、まだ無傷のはず! これから行って斬りまくってくれるわ!」
いつしゅん
勘兵衛は、一瞬背後へ視線をやった。
「我らだけで先発してよろしいか!」
「構われるな! 傷負うた者も捨て置かれ!
わしと蛇骨丸が後から連れて行く!とにかくここから姫様をお連れ下され!早く!」
「き、鬼十郎殿、蛇骨丸を頼みましたよ...!」
だいおんじょう とどろ
うなずいた退魔師は、再度大音声を轟かせた。
じゃま
「戦えぬ者は道開けい! 御行列の邪魔だっ!」
わかむしゃ
かぜん
とうせい
続いて、勘兵衛が背後へ大きく手を振る。 若武者の合図を受け、俄然行列は統制を取り
戻し始めた。おののく兵たちは左右へ退き、後方から無傷な一隊が突進を開始する。 千鶴
むきず
とっしん
の駕籠を守護する兵たちであった。
たいぎ
「鬼十郎殿、大儀っ!」
きば
くろね
一言叫び、長盛の騎馬が駆け抜けて行く。
鬼十郎は素早く目礼し、追いすがる黒塗りの駕籠へ目を移した。
駕籠を担う小者たちは、常の速度を越えて疾走している。 その駕籠の
小窓が一瞬、鬼十郎のために開かれた。
こもの
しつそう
にな
つね
「.....鬼十郎っ!」
視線が合った。
こわね
か細い声音が退魔師を呼ぶ。
とうとつ
ふる
かんび
きんちょう

その響きが、唐突に鬼十郎を震わせた。
しばし聞き忘れていた甘美な、それでいて緊張感のある清音。
退魔師には、咄嗟に返事をする事もできない。
騎馬隊に守られた駕籠は、そのまま巨人の屍の脇を走り抜けて行った。
せいおん
とつき
「続けえーっっ!」
だら
勘兵衛の下知で我に帰り、鬼十郎は背後を振り返った。行列は、早くも全隊離脱に向
かっている。後方から攻める触手に構わず、兵たちは一斉に勘兵衛の声に集まった。
一気に混乱は終息し、行列は活路を見いだしていた。
しょくしゅ
いつせい
かつろ
「鬼十郎殿、お先に参るっ!」
こうび
めぐ
勘兵衛も、後尾が見えるや馬首を巡らせた。
「何と御礼を申し上げれば良いか!」
「礼など後でも良いではないかっ!」
戦いに高ぶった退魔師は、思わず語調を荒げる。だが構わずに、鬼十郎は馬上の勘兵衛
を見上げて叫んだ。
「それより姫様をお頼み致す!」
「無論の事!」
じゅれいつか
あしがるぐ
「わしや蛇骨丸ほどの呪霊使いは、呪神足軽組にはおらぬ! 今ここで我らと別れた後、
敵が襲う事も考えられる!」
その警告に瞬間、勘兵衛の顔色が変わった。
「どうかなされたか!」
「い、いや、確かにその通り!」
たの
むだじ
危険を察したのか、若武者は狼狽を露にする。しかし鬼十郎は、鼓舞するように塩辛声を張り上げた
。
「案じられるな! ここは決して通さぬ!」
まこと
「頼み入る! 誠、かたじけないっ!」
むち ふる
勘兵衛は口元を引き締め、鞭を奮った。駆け出す馬上から、 若武者も声を絞る。
「無駄死になされるな! 生き延びられい!」
どな
あほう
おう
しゅくば
「次の宿場までに追いつく! 殿は任されよ!」
しんがり まか
怒鳴り合う視線がかち合い、やがて遠のいた。
せま
頼れる侍を見送ると、鬼十郎は迫る新手に視線を据える。苦々しい声が低く呻いた。
「蛇骨丸、 まだやれるかっ?」

「ひ、一晩寝てから、考えさせて.....」
おそ
「阿呆! それでは遅いわっ!」
「だってもう...・・・呪力を集中できない.....」
「力を合わせると言うたではないか!」
「ええ.....ま、また今度ね.....」
横臥したまま、 呪神使いは低く呻く。
すでに呪神紙舞も、蛇骨丸から送られる霊気を失い、水晶へ還元されていた。さらなる呪霊を行使するにしては、傷は余りに深い。岩場へ
ちしお
えんご あきら
流れる血潮を認め、鬼十郎は援護を諦めた。
「ふんっ! わし一人で十分だ!」
しつく
つちけむり
行列が疾駆した街道は、前も見えぬほどの土煙にかすんでいる。
その煙塵の奥から、触手の列が地を割って突進して来た。
屍と負傷者の群れの中、唯一、鬼十郎が立ちはだかる。
えんじん おく
しょく
とっしん
かばね ふしょうしゃ
「む、無茶はしないで・・・・・・」
きさま だま
「無茶をせねば勝てぬ! 貴様は黙ってろ!」
せいえん
とど
蛇骨丸のつたない声援が耳に届いた。鬼十郎は、太刀を正眼に据える。 触手も、疾走を速めた。
霊気を失った退魔師は、苛烈な攻撃の真正面に己の身を固定する。
「力になれなくて本当に.....」
つぶや
呟き、蛇骨丸も静かに意識を閉ざしていった。

ようき
しゅんどう
まもの
暗黒の中、妖気の群れが蠢動した。
(・・・・・・着いたのか?)
のわけ しゅく
だいこくだに
さく
すべ
はず
(はっ。無事、野分の宿に。行列は、大黒谷にて策にかかりました。全て手筈どおり魔者どもは、千鶴と切り離されました)
行列の護衛は?)
たま
(すでに千五百余り。しかし、何の手向かいもできますまい。 これで珠は我らの手に.....)
こよい
(あの退魔師さえいなければな。 まさか今宵の内に追いついて来るような事は.....)
もくれんどうじ

けつかい
(それも御懸念無く。すでに野分の宿は、目連童子の結界にござる。
たとえ来たところで、我らの夜襲を妨げる事はできますまい)
やしゅう さまた
気圧するような思念が・・・・・・笑みを浮かべた。

Page 205

(その結界の内で...珠を奪う)
わた
(長きに渡る我らの悲願、どうやらこれで・・・)
そろ
(しくじりは許されぬ。ゆえに我が一族の力、 ここに揃えたのだからな)
気配は、周囲の名を呼んだ。
ぎょうらいしょうにん
(暁雷上人、 おるな.....?)
しゃくじょう
こ
かしゃん、と錫杖の音が応える。
かさびくに たの
(傘比丘尼、頼むぞ.....)
うき
衣擦れとともに、ほほ笑む気配がある。
(婆羅鬼、しかと働け.....)
ごと
やみ
熱風の如き鼻息が、闇にこだました。
(そして目連童子・・・・・・みな配下の下級呪神どもをよく使い、
千五百の命、残さず奪い取れ。容赦はいらぬ。 みな昔日の報いだ)
ようしゃ
せきじつ
むく
さわ
ざわざわと、妖気の群れが騒ぎだした。 その中心で、主たる気配は今一度視線を戻した。
ぐつ
しば
(そして貴様の傀儡の腕だ.....此度は負ける必要も無い。殺し尽くせ。芝居も終わりだ)
(はっ、存分に・・・・・)
たま
きさま
うば
(珠を奪うは、どうしても貴様にしかできぬ。そのための六百年じゃ、心してかかれ)
うそ
(肝に銘じて.....)
びどう
妖気が散る。ただ、主たる念は微動だにしない。 暗闇は鳴動を続けていた。
星無き暗黒は、人界を遥か離れた、禁断の異界の空であった。

じんかい はる はな
ひぐ
みじ

つら
てお
「あまりくっつくな! みな見とるのだぞ!」
がん
「私は怪我人なんですよ~~少し優しく.....」
おししようさま
「いえ、今の御師匠様は十分お優しいです」
日暮れの街道には、惨めな一団が連なっていた。いずれも手負い。
大黒谷にて捨て置かれた兵は、二百人ほどである。みな、己の衣服を切り裂いて手当を施し、何とか本隊を はいざん いつこう追っている。 敗残の一行であった。
おのれ
ほどこ
たいまし じゅしんつか
退魔師と呪神使いは、その列の中心にいた。
きずぐち しけつ
じゃこつまる
ってい
かた
傷口を止血した蛇骨丸は、師弟の肩を借りて前へ進んでいる。だが、よろめけば必ず、呪神使いは鬼十郎へと寄りかかっていった。
きじゅうろう
「貴様、わざとだな.....!」
めつそう
「そ、そんな、滅相もない!」
のぞ
「嘘ついてもだめですよ、蛇骨丸さん。さっきから、御師匠様の胸元ばかり覗いて・・・・・・」
しゅんかん
たた
何げなく、又四郎が言う。その瞬間、 鬼十郎の腕が呪神使いを地表へ叩きつけた。
「い、いだいいいいっっ!」
ぜつきょう
だが耳をつんざく絶叫にも、周囲の負傷兵たちは振り返りもしない。
もう二時余りも、同じことの繰り返しだ。だが飽きる事なく、鬼十郎は怒りの雄叫びを上げていた。
おたけ
「貴様はこんな時でも色気ばかりか!」
せ
「いや、素敵な谷間が見えてたから、つい.....」
がばと、鬼十郎は自分の胸元を締め上げる。
どうじょ
「おのれ.....童女だけではなかったのか.....!」
「確かに好みはそうですが.....やっぱり、 美しい人なら年に関係なく.....」
「世辞はいい! 直れ!首を刎ねてやる!」
こし
だが退魔師の腰には少年が飛びついていた。
「もうやめてください、御師匠様! これじゃ蛇骨丸さんの傷も悪くなっちゃいますよ!」
「なればよい! 悪くなって死ねばよいのだ!」
「力を合わせようって言ったのにぃ・・・・・・」
「やかましい! わし一人で十分だ!」
へろへろと立ち上がり、蛇骨丸は大きく息を吐いた。 そして、にっこりと笑う。
「でも、見事な発育ぶりですね、 鬼十郎殿?」
「何だと?」

か
いつしゅん
やわ
「堅い筋肉ばかりと思えば柔らかそうな所もあるじゃないですか。 惚れ直しました」
「貴様ーっっ!」
「あれ? また赤くなってるんですか?」
また しろう
ふる
りよりよく
こいぐち
一瞬、怒りに震えた鬼十郎の膂力が、少年の制止を振り切って鯉口を切りかける。もはや又四郎も絶望しかけた。
その時.....
くぼ
「宿場が見えたぞーっ!」
「野分の宿に着いたーっ!」
かた たた
列の先頭で叫ぶ声がする。 呪神使いは、 さらに表情を明るくし、鬼十郎の肩を叩いた。
「おお、おお! やっと着いたようですよ!」
「貴様、本当に傷が痛むのか...?」
「ええと.....宿に着いた喜びと、鬼十郎殿の胸元の喜びで、すっかり.....」
「そいつは良かった.....な!」
激怒を込めた前蹴りが、蛇骨丸を茂みへ突き落とす。何事も無かったように、鬼十郎は負傷者の列を追い越して行った。
「どこだ、明かりが見えるか?」
「はっ、あれに.....!」
ぬの
こもの
腕を布で吊った小者が、前方を指さす。街道は急な下り坂となり、そのまま山間の窪地へ連なっていた。狭隘な山里には、確かに人家の灯火が見えている。
一番星を見上げ、鬼十郎は安堵の息をついた。
きょうあい
やまざと
じんか とうか
あんど
ひぐ
「どうにか日暮れまでに着いたな」
だつらく
「大黒谷からここまで、脱落した方もおりません。 無事、殿を務めたようで.....」
又四郎の言に、 退魔師も息を整えた。
ととの
ぜい
「よし、 貴様は先に宿場へ行け。勘兵衛殿に、手勢をいくらかお借り申すのだ」
「方々をお運びするのですね? 承知!」
「あの~~私は.....」
ごめんこうむ
「何だ、貴様まだいたのか?」
不快な視線にめげず、蛇骨丸は退魔師の背後へ追いすがっていた。
「ねぇ、まだ歩けないんですよ、お願いだから肩を貸してください」
「御免蒙る! 一人で歩け!」
「鬼十郎殿のぬくもり、忘れられないなぁ・・・・・」

しゃべ
「それ以上喋れば、×××にしてやるぞ.....!」
「本気で言ってますね、鬼十郎殿.....?」
きゅうげき
はやあし
はな
だが答えずに、 退魔師は急激に歩速を速めた。 わき見もしない速足。
離されてなるかと、蛇骨丸も必死にその背に取りすがろうとした。
あしな
その二人の足並みが...
「おやぁ?」
「何事だ、あれは...」
あた
唐突に停止した。声に気づき、辺りの兵たちも立ち止まる。 一団の視線は、真っすぐ眼
下の宿場へと集中していた。
みきわ
ほんの数秒、退魔師と呪神使いは目線の先を重ねる。
事態を見極めるに、さして時間はかからない。蛇骨丸の顔が瞬時に青ざめ、悟った鬼十郎は反射的に拳を握っていた。
しゅんじ
こぶしにぎ
さと
もど
「又四郎、戻れっっ!」
どらごえ
ひび
せつぱく
こわね とどろ
街道の先へ、銅鑼声が響く。 振り向いた弟子に、鬼十郎は切迫した声音を轟かせた。
「敵だ! 呪神だ! 戻って来い!」
「はあ一っ? 何ですってぇ?」
「よく見ろ! 宿場の空だっっ!」
ふところ
言われて、又四郎は懐の遠眼鏡を取り出した。だが確めるまでもない。
鬼十郎たちが認めた何かは、もはや誰の肉眼にも明らかなほど、肥大化している。宿場の中心、
その真上の宙空に何かはあった。
ほたる び
蛍火・・・・・・に見える。
とうか
じょじょ
きょだい
てん
だいだいいろ かいこう
じゅれい
おそ
きさま
しかし灯火は、徐々に巨大な球体へと転じていた。丸い橙色の怪光は、やがて宿場を呑み込み始め、山間の窪地にめり込んでいく。見る間に、半球形の光が、宿場全てを覆い尽くす。周囲に集まった侍たちからは、驚嘆の声が上がり始めた。
さむらい
きょうたん

「あれは何じゃ一体.....!」
「野分の宿が消えた・・・・・・」
「姫様たちはどうなったのじゃ!」
つぶや
蛇骨丸は不満そうに呟いた。
けつかい
「やられましたね.....明らかに結界です.....」
「呪霊の規模は分かるか?」
「恐らく、 消費霊気量四五百、高位呪霊」
ぶんせき
したう
呪神使いの分析に、鬼十郎は舌打ちした。見積もりが正しければ、手ごわい敵である。
「貴様・・・・・・やれるか?」
「霊気はまだ十分に。 しかし呪力を集中できるかが問題です。 それよりも.....」
きず さす
細い指で傷を摩り、蛇骨丸が不安げな顔をちらつかせる。何を言いたいかは、鬼十郎にも分かっていた。
こんじょう
「わしの事なら心配するな。 呪霊無しでも、何とかなるはずだ」
なまやさ
「そんな生易しい敵でしょうか.....?」
「霊気は尽きても、 呪力がある。
生まれついてこの方、必死に高め磨いた力だ。いざとなれば、気合だけで霊体を斬ってみせる」
つら
「根性だけが頼りですか、辛いな.....」
「貴様こそ呪霊を発動せねば、どうなるか.....」
「ええ、分かっています」
退魔師と呪神使いの視線がぶつかった。
「やらねば、姫様が危ない.....」
「そういう事だ、行くぞっ!」
鬼十郎は、周囲をぐるりと見渡した。不安げな視線が、 二人をじっと見守っている。だ
退魔師は、不敵な笑みで期待に応えた。
こた
ちづるさま
「方々、ここで待たれよ! 必ずや、千鶴様を無事お救い申す! 御免っ!」
しゅんびん くろしょうぞく だつと
ごと
ごめん
それだけ言って、駆け出した。俊敏な黒装束は脱兎の如く、暗い街道を駆け抜ける。
「御師匠様、私も...!」
れつぱく
だが叫んだ又四郎は、無様に合流し損ねる。
鬼十郎は、弟子を突き飛ばすように先を急ぎ、裂帛だけを暗闇に吐き捨てていた。
くらやみ
「残れ! 貴様、剣はさっぱりだからな!」
ごむたい
「そんな、御無体な!」
こんがん
じゅくば
情けない懇願に構わず、 退魔師は宿場へと直行する。
又四郎は、思わず街道に立ち尽くした。しかし愕然とするその肩に、不意に.....

かくせん
「うわあっ、何ですかあっっ!」
「た、頼むよ、又四郎君・・・・・・肩貸してくれ.....」
すでに蛇骨丸は、少年にのしかかっていた。
「本当にもぉ、しょうがないなぁ.....」
とうてい
「頼むよ、宿場まで。 鬼十郎殿一人じゃ、到底無理な戦いになるはずなんだ。 急いで!」
かいこう
うずま
確信を込め、蛇骨丸は宿場を見下ろす。 早くも呪神使いは、怪光の中に渦巻く、数千の
げきせん
かく
妖気に気づき、激戦の覚悟を決めていた。

「これは.....」
思わず
声が漏れる。
まちか
せま
じょうへき
はんきゅう
きょだい
宿場まで間近に迫り、鬼十郎は目を伏せた。
光り続ける半球は、予想以上に巨大である。城壁の如くそびえた球面は、確かな鼓動を脈打たせていた。太刀を抜き、 退魔師は警 戒の気を周囲へ放つ。その眼前で・・・・・・
こどう みやくう
はな
半球は、正体を現した。
とうか
およ
ひまく
次第に光が失われ、 球面は透過される。
その透き通った皮膜の上に、無数の眼球が張り付いていた。いずれも拳大の目玉が、びっしり外界へ向けられているのだ。数千、数万に及ぶ眼球の群れが、
球面上をわさわさと移動し、おぞましい蠢動を続けていた。
こぶしだい
しゅんどう
「鬼十郎殿、これは.....!」
「近寄るなっ!」
追いついた声に振り向かず、 鬼十郎はさらに念を集中する。 と、
その視線が、透明な結界の中にたどりつく。無意識に、 退魔師は刀を握る手に力を込めていた。
にぎ
(何という事だ、 これは.....!)
のどもと
うめ
絶望的な呻きが、喉元まで出かかった。駆け寄る蛇骨丸も、又四郎も、かいま見えた中の様子に絶句する。 宿場に広がっていたのは、地獄絵図そのものだったのだ。
ヒごくえず
あざやく ほのお
宿場は、悪虐な炎に呑まれていた。

こくえん
けつかい
街道を中心とした数十軒の家屋が、みな焼け落ちかけている。熱も黒煙も、結界に閉じ込められていた。そのため、どす黒い煙は通りに充満し、視界は次第に消えつつあった。
けむり
ろぼう
じゅうまん
さむらい
だが、何が起きているかは明白である。 路傍に積み重なった侍たちの遺骸。地面に流れ落ちた無残な血溜まり。 そしてはしゃぐように飛び回る無数の黒い異形。
ちだ
ふる
いぎょう
げきじょう
退魔師の歯が、がちがちと鳴った。胸の震えも止まらない。
込み上げた激情を押さえるように、鬼十郎は奥歯を食いしばった。
くそ
「糞っ垂れがぁ.....!」
たち
とつげき
退魔師は太刀を構え、一気に結界へ突撃した。 激怒の一撃。
上段から振り下ろした一刀が、眼球の壁を斬り裂くかに見えた。 が.....
かべ
め
「御師匠様っ!」
素早く又四郎が駆け寄る。弾力性のある結界は、突進を鬼十郎ごと撥ね除けた。
よろめく退魔師の背を、少年はひしと抱きとめる。
だいじ
「心配すな! 大事無いっ!」
「まずいな! どうします?」
まゆ
ちょうしょう
傷をまさぐりつつ、蛇骨丸は眉をひそめた。
無規則に動き回る目玉たちは、嘲笑を浴びせるように瞬きを繰り返す。
退魔師は、歯軋りして視線を鋭くした。
はぎし
すると
だいじょうぶ
ま
しえきじゅしん
「貴様の使役呪神で何とかなるか?」
やっ
「大丈夫です!かなり霊気を食う奴ですが。さあっ、どいていてっ!」
「いやっ、やはり止めろっ!」
そで
のぼ
鬼十郎は、呪神使いの袖を引き留めた。その声に、きっと蛇骨丸は牙を剥き出した。
「なぜですっ! この結界の中にみんないるんですよ! 宝蔵院様も、勘兵衛殿も.....それに何より姫様も!
中に入れば、助ける段取りは幾らでもできます!今は結界を破る事だけ考えましょう!」
ちが

「.....違う、 それは早計だ」
冷静に、鬼十郎は声を低めた。
「霊気を失った後に、この結界を張った者が再度、 同じ呪霊を使ったらどうする! その
時こそ、中に入る手立てはなくなるのだぞ!」
こうちょく
言われて、蛇骨丸の手は、白くなるほど硬直した。
返す言葉が無い。己の焦りを恥じ、呪神使いは整息して、動揺を鎮めようと試みた。
せいそく
どうよう しず
「では、手をこまねいているだけですか!」
きわ
しようそうかん
どせい
今度は、 又四郎が結界を指し示す。 極まった焦燥感が、 涙の交じった怒声をぶつけた。
「見てください! みな死んでいる! 早くせねば一人残らず、殺されてしまいます よ!」
「君も落ち着くんだ、又四郎君! 何か手はあるはずだから.....!」
「ああ、手はあるぞ。 確実な手がな」
あた
ひそ
りんせん
退魔師は、すでに辺りに潜む強い呪力を察知し、臨戦態勢にある。 蛇骨丸の視線が、
きっと鬼十郎に突き刺さる。
「その手とは何です! 早く教えて下さい!」
「簡単な事だ。 呪力無くして、 呪霊は保てない。結界を保持している者を...」

瞬間、 鬼十郎が跳んだ。
「.....倒せばいいのだっ!」
「こっちです、 蛇骨丸さんっ!」
よこ
と
わずかに遅れ、又四郎も横っ跳びに呪神使いを突き飛ばした。三人を狙った一撃は寸前でかわされ、
無人の地表が爆砕する。激痛をこらえ、蛇骨丸は収穫を終えた畑に転がっ た。
ぼくさい
げきつう
しゅうかく
くろづる
けんぞく
「出て来い! 木津の黒鶴の眷属だな!」
こうしょう
鬼十郎の問いに、哄笑の渦が返事を返す。
男の笑い声、女の笑い声。老人の笑い声、子の笑い声。何百という箍の外れた笑い声が、さざ波の如
く辺りに打ち寄せた。
たが
ごと
ころ
そして不意に・・・・・・
ちゅうくう
まめつぶ
やみ
空に目玉が現出した。無論、こちらも一つ二つではない。豆粒ほどの目玉から、西瓜
ほどもある目玉まで、無数の眼球が闇に浮かび上がり、猛速で鬼十郎の頭上を飛び交い始 めていた。

もうそく
「鬼十郎殿っ、こいつは...」
だま
「分かっている。黙っておれ.....」
たくわ
すでに二人の呪霊使いは、敵の呪力の強さを感じつつあった。 そして相当量の霊気を蓄
えている事にも。
ひとかたまり
たつまき
やがて眼球の群れは一塊となり、路上に小さな竜巻を巻き起こした。
沸き起こる疾風に蛇骨丸は顔を背けたが、 鬼十郎だけはしっかと敵の姿を捕らえていた。
そむ
ごたいそう
けつかい あるじ
「御大層な現れようだな。 この結界の主か?」
もくれんどう
(そうだよ。僕は目連童子)
きんばくかん
緊迫感の無い、子供の声がそう答える。 鬼十郎と蛇骨丸は、街道の左右で身を起こし た。
しっぷう
たつまき
ぬし
あゆ
かみ
すいかん
街道の真ん中、竜巻の中心から、声の主が歩み出した。
髪をみずらに結い、白い水干に身を包んだ少年だ。 まだ大陸統一前の、古の頃の身なりである。
いにしえ ころ
けつかい
きさま
「この結界を張ったのは貴様か.....」
(そうだよ、葵鬼十郎さん)
じゃま
「悪いがね、君の呪力が邪魔なんだ。 ここで消えてもらうよ」
びしょう
言った蛇骨丸に、目連童子は微笑する。
(できるものならね。 無理と思うけどなぁ)
「どうして分かるんだい?」
(退魔師さんには霊気が無い)
ずばり、少年の呪神は看破した。
たお
(呪霊無しで倒せるほど、僕は弱く無い。 そして蛇骨丸さん、
あなた一人で倒せるほど、弱くもないんだ)
すがすが
清々しい笑顔が二人にうなずいた。
あきら
(もう中の人達は助からない。 諦めなさい)
しょうぶん
「あいにくそれができない性分でな.....」
はむ
(黒鶴様に刃向かって勝てるとでも?)

「ああ、そう信じたいな」
話しつつ、鬼十郎と目連童子の間合いが詰まる。 蛇骨丸も、気配を察した。
何か不可視の間が、一気に詰め寄った瞬間・・・・
しゅんかん
はな
「御師匠様、離れて!」
又四郎が叫んだ。
ふる
おきな
もうぼう
むらさき かがや
じんそく
だが退魔師は、すでに頭上に跳んでいた。 目連童子が奮った両刃の剣は空を切る。 幼い
双眸が瞬間、紫に輝いた。迅速な一撃をかわされ、呪神は酷薄な笑みを浮かべる。
こくはく
もけいか
おど
せんこう
続けて蛇骨丸が、無警戒な背へ躍りかかった。両腕から尾を引く閃光が、目連童子を奇襲する。
呪神使いは、必死に呪力を集中した。
しゅう
ほぼくべん
「捕縛鞭っ!」
なわめ
から
てごた
きんぼく
呪霊の縄目が、目連童子へ絡み付く。 手応えを感じ、蛇骨丸は緊縛の態勢に入りかけた。
しかし遅い。目連童子は片手で印を結び、かっと短い熱気を放つ。同時に呪霊の縄が弾け飛ぶ。一息に疾走、 妖童は蛇骨丸の眼前に迫った。
た。
たちすじ
おそ
はな
しつそう
「そ、そんなっっ!」
けいげき
せま
慌てる呪神使いに、迎撃の時は無い。
眼光を緑へ転じ、剣を振る目連童子が虚を突いが、そこに鬼十郎が割り込んだ。空中から落下した退魔師は、二人の間合いに飛び込み、太刀を真一文字に組み据える。瞬間、鋭い金属音。
目連童子の一刀をがっきと受け止め、退魔師は白い牙を剥き出しにした。
まいちもんじ
すると きんぞくおん
きば
む
くそがき
「てこずらせるな‥‥‥糞餓鬼が.....!」
(さすが呪霊抜きでも名うての退魔師だ.....)
ひとみ
うるわ

ようしゃ
ほほ笑む瞳が金色に瞬く。白い柔肌の少年の姿は、一見麗しく見えた。しかし容赦の無太刀筋は、無感情な惨殺者のそれである。
ざんさつしや
つかはらぼくでん
すき
(塚原卜伝.....その弟子の名に恥じない・・・・・・ 凄まじい呪力をお持ちだ・・・・・・)
「だが勝てぬと言いたいのか?」
(察しが良いな、 その通りです)
あと
蛇骨丸が、無言で二人から後じさった。察して、 鬼十郎は声をかけた。
「.....そうだ、貴様はもっと下がっていた方が良い・・・・・・蛇骨丸」
「で、でもこいつは.....呪霊抜きで勝てる相手じゃない! 私が代わりますっ!」
すべ
呪霊以外に、呪神を斬る術はない。
となれば、体内の霊気が尽きた鬼十郎に、勝てる見込みはない。それどころか、相手に一太刀浴びせることも叶わぬはずである。
かな
はら
いちぶ
みなさ
だが.....鬼十郎は、かぶりを振った。引くつもりは一分も無い。肉体に呪力を張らせ、少女は腹の底から怒声を発した。
どせい
まか
「呪神退治はわしの仕事だ、ここは任せろ!」
(ふふふ.....そんな簡単に.....)
言いかけて、目連童子が跳んだ。感づいて、蛇骨丸も後ろへ下がる。
目連童子は、鬼十郎の太刀を撥ね除け、水干をひるがえした。 と突然、垂直に飛び上がる。
鬼十郎を飛び越 え、蛇骨丸へ·····が、 退魔師も地を蹴った。
太刀と剣が宙で激突し、激しい火花が舞い 散った。
すいかん
とつぜん
げきとつ
「こっちです、 蛇骨丸さん!」
ころ
ごぼう
又四郎の怒声が、蛇骨丸を引き寄せた。 転げる二人は、路傍の岩陰へと駆け込む。退魔師が着地すると同時に、蛇骨丸は顔を上げた。
街道に、殺気が張り詰めている。
び どう
めめ
向かい合う二つの切っ先は、微動だにしない。 鬼十郎と目連童子は、共に口元を歪めた。
かげ
みぎかた
と同時に.....二人の影が揺らいだ。 鬼十郎の右肩から血しぶきが上がる。 目連童子の水干が、袈裟切りに裂かれた。 ぐらりと体をよろめかせ、両者に苦悶の表情がかいま見え た。
けさぎ
「じ、蛇骨丸さんっ.....!」
「き、鬼十郎殿っっ!」 「御師匠様っ!」
重なる悲鳴に、 退魔師はうなずいた。

「案ずるな、かすり傷だ.....!」
傷を押さえる鬼十郎は、したたかに微笑した。
「それに傷なら奴の方が深い.....見ろ.....」
言われて、蛇骨丸と又四郎の視線が動く。
又四郎のがたつく手が、 呪神使いの袖を握った。だが蛇骨丸とて、戦慄を禁じ得ない。
(やりおったな、 退魔師めが.....!)
そで にぎ
せんりつ
こそで
目連竜子が、少年の声を捨てている。
と、いきなり裂かれた水干と小袖をむしり取った。裸の上体を露にし、呪神は剣を構え直した。
はだか
あらわ
(呪力の力だけで·····斬りたいと願うその力だけで霊体を斬るとは・・・・・・貴様・・・・・・さすが大陸一の退魔師よ.....)
ほうぜん
For
唸る少年の肉体には.....無数の眼球が瞬いていた。首筋から腕へ、胸から腹へ、びっしりと張り付く目玉の群れ。
きざ
その胸元には、鬼十郎の一撃がはっきり刻まれていた。幾つもの眼球を断ち割り、傷は深く胸板を裂いている。
「君の師匠は.....」
呆然として、蛇骨丸は絶句する。 又四郎は拳を握り、しっかとうなずいた。
「.....ええ、本当に大陸一の退魔師です!」
その退魔師は・・・・・・
たい
おのれ
じっと目連童子と対峙を続けていた。
霊気に頼るな、己の呪力のみで敵を斬れ。師の言葉があったればこそ、鬼十郎は躊躇なく霊気を使い切れたのだ。
ちゅうちょ
「どうした、 呪力が萎えておるぞ.....」
(小賢しい口を利く人間め.....)
けつかい
と
「潔く結界を解け。 なれば命までは奪わぬ」
(人間の言う事など当てになるかっ!)
むらさき ひとみ
めいめつ
鬼十郎の言に、目連童子は紫の瞳をぎらぎらと明滅させた。
うそ
びしゅ たこく
たくら
(太守榊原家が黒鶴様についた嘘、
そして今また媚珠を他国へ持ち出す企み·····どうして黒鶴様が許されようか.....!)
ど
わかげ
そこで、蛇骨丸が岩陰から身を乗り出した。
「ちょっと待って! その嘘って何です!」
(それが罪だ! 嘘を忘れ、かき消した罪!)

「黒鶴の狙いは媚珠ではないのか!」
(無論、その通り! が、その媚珠を奪ったのは貴様ら人間、 榊原の家の者ではない か!)
怒気と殺気を強めた目連童子は、 退魔師の間合いへぐっとにじり寄る。
(企みに加担した貴様らも、許しはせぬ.....!)
「知った事ではないな.....」
ともかく鬼十郎も、太刀を据え直した。
だれ
「事情は後で誰かに聞く。今は貴様を斬り、結界を抜ける事が、 我らにとって先決だ」
どくどく
目連童子は、眼光を毒々しい赤に変え、つうっと口の端を吊り上げて見せた。
(来い.....この目連、斬れるものならばな!)
「いぇあああああっっ!」
「鬼十郎殿、待って.....!」
とど
蛇骨丸の声は、一瞬届かなかった。 いや届いていても、叶えられはしなかっただろう。
蛇骨丸の声は、一瞬届かなかった。いや届いていても、叶えられはしなかっただろう。
ふところ
退魔師は、太刀を引っ提げ、一気に目連童子の懐へ飛び込む。印を結んだ呪神は、一歩

こうたい
こんしん
ほとばし
ざんこうりん
(斬光輪っっ!)
おおざら
こくう
ゆうやく
ざわ
おたけ
叫んだ瞬間、大皿ほどもある輝く車輪が三つ、 突然虚空に勇躍した。
大気を切り裂く耳障りな雄叫び。目連童子の攻撃呪霊は、鬼十郎目がけ一斉に突進した。しかし退魔師の剣が下段から跳ね上がる。 一撃は先頭の光輪を粉砕し、急転、次の攻撃を両断した。
いつせい
ふんさい
きゆうてん
せま
ちょうやく
が、最後の攻撃は鬼十郎の目前にまで迫っていた。同時に目連童子が跳躍する。剣を
真っすぐに突き入れ、 呪神は野獣の咆哮を上げた。
ほうこう
「鬼十郎殿!」「御師匠様!」
おうえん
きしん
ことだま とどろ
助勢の声が飛ぶ。 しかし応援をかき消すように、鬼十郎も鬼神の言霊を轟かせた。
はまたい
「破魔退いつつ!」
わきざし
退魔師の左手が、太刀から離れた。と見た時には、すでに腰の脇差を払っている。短い
が厚い刀身のそれを振りかざし、鬼十郎は目連童子の一刀をくい止めた。
(おおのれいっっ!)

せつな
呪神が叫んだ刹那、 退魔師は片手で太刀を奮い、三つ目の光輪を斬り割った。 怒気を極めた目連童子も、脇差に構わず剣を押し込む。 呪霊の光を灯した剣は、抵抗を押しのけ、鬼十郎の脇腹に食い込んだ。
とも
ていこう
あじ
（人間風情が、味な真似をっっ!）
せんけつ
ぎょうし
ぶしゅつと噴き出る鬼十郎の鮮血を浴び、目連童子は退魔師を凝視した。
鬼十郎は、ぎりっと奥歯を噛み締める。 呪神は勝利を確信した。
はくじん
が、その顔面を... 鬼十郎が横に薙いだ。
目連童子の両眼を削ぎ、白刃は素早く流れる。顔を手で覆い、呪神は真後ろへのけ反った。
おお
せんこう はじ
こくえん
「すまぬが、貴様の負けだ.....!」
続けて、脇差を少年の喉元に突き刺し、退魔師は唸るように声を絞った。
「結界は通してもらう。 悪く思うな...!」
ちしお
閃光が弾けた。 血潮の代わりに霊体を四散させ、目連童子の肉体は虚空へ消える。 呪神が消失した後にはぽつりと、一個の干からびた眼球が転がっているだけだった。
ごうおん
ひび
わた
しゅくば
すると同時に、鬼十郎の背後で轟音が響き渡った。
宿場を包む半球の頂点が、無残に破吹き飛んでいる。
蠢く目玉の群れは、みな悶絶するように瞼を閉じ震えていた。
うごめ
もんぜつ
まぶた
まく
うんさん
結界の破れはすぐさま広がり、透き通った幕も雲散する。
その破れの中から、一時に火炎と黒煙、阿鼻叫喚の声が飛び出したのだ。
あびきょうかん
「鬼十郎殿、御見事!」
「斬るなと合図をしたくせに、貴様.....」
とつさ
言われて、咄嗟に蛇骨丸は口ごもる。
「.....奴が事情を知ってたようなのでね。 しかし鬼十郎殿の言うた通り、
それを知るのは後でも良いはずです。誠、御見事でした」

まこと
せじ
どな
「世辞はいい! 中へ入るぞ!」
ひざ

怒鳴って突然鬼十郎は膝を落とした。
肩と脇腹の傷が、同時に疼く。うずくまるようにして、退魔師は街道に突っ伏した。
「無理ですよ、御師匠様! この傷では.....」
「そうだ! 手当もせずに、まだ戦うなど.....」
でろ
蛇骨丸は少年と声を揃える。 しかし鬼十郎は蛇骨丸の腕を握り、果敢に微笑を見せていた。
しる
「痛みはある、傷が浅い証しだ。 大事な.....」
「呪霊も無し、身体は傷だらけじゃ、いくら何だって無茶過ぎる! ここにいた方がい い!」
B
しかし退魔師の血塗られた腕は、蛇骨丸を離そうとはしない。握る手に力を込めたま
ま、鬼十郎はよろめく身体を立て直した。
「わしより、姫様を心配せい... 今度は貴様の番だ・・・・・・早く肩を貸せい.....」
仕方なく、蛇骨丸は退魔師の腕を担いだ。 もはや自分の傷など忘れている。
呪神使いは、少女をしっかと抱き抱えた。
だ
かか
ゆくば
その前を又四郎が先発する。 三人は熱風に満ちた宿場へと、 ゆっくり歩を進めて行った。
ちだ
てぬぐい
ひど
「ひ、酷すぎますよ、こんな.....」
少年は声を詰まらせた。道端には、中間、小者を問わず、行列の者が重なって息絶えている。女中、そして宿場の者らしい遺体もあった。
何か鋭利な刃で斬殺された者、黒焦げと化した者。みな無残な死に様を晒していた。
いたい
やいば ざんさつ
さら
ご ほんじん
「げほっ御本陣を探さねば..... ううっ!」
し
「一番、屍が多い所だろう。 護衛がそれだけ厚いはずだからな...くそっっ!」
ししゅう
血溜まりを踏み越え、一同は宿場の中心へ突き進む。
死臭と黒煙にむせ、蛇骨丸は口元を手拭で覆った。頭上に幾つも飛び交う妖気も、今はさして気にならない。
ようき
くろこ
しょうか
くろぬ
かご
やがて視線は、一際大きな商家を発見していた。その入り口では、黒塗りの駕籠が燃え盛っている。
蛇骨丸と鬼十郎の視線がかち合った。家も、もはや業火の中にある。四散した遺骸で、辺りには足の踏み場も無かった。
さか
ごうか
いい
あた
「御師匠様、まさか・・・・・・」
「貴様はここで待て、又四郎」

「何かあったら知らせるんだよ、いいね?」
意中も一致した。 蛇骨丸は鬼十郎を引きずり、 炎の中で念をこらした。
ほのお
せいれんけつかいじん
「.....聖廉結界陣」
あわだま
瞬間、二人を不可視の球体が包む。そのままふわりと、巨大な泡玉は浮かび上がった。炎熱を遮断し、大気を清める結界の中で、しばし鬼十郎は息をついた。
えんねつ
「便利な奴だな、全く助かる...・・・」
「ようやく私の有能さに気づきましたね?」
「やかましい、油断するな.....」
鬼十郎は太刀一本握り、周囲の炎に目を配る。
「強い呪力は感じぬが.....」
「ええ、雑魚がまだうろついてますね.....」
やしき
はな
結界は、屋敷の奥から離れへと進んで行った。
屍の山は、座敷や土間、そして庭にもあふれている。地表から一尺ほどの高さを浮遊する結界は、並ぶ遺骸の上を突き進んだ。 が、不意に蛇骨丸が、結界の前進を停止させた。
ふゆう
なら
「何だ、 一体....?」
「長盛殿です.....」
えんがわ
たお
ひだい
ろうしん
示した指先が、縁側に倒れる死体に向く。肥大した老臣の身体は、胸元で上下に両断されていた。
千切れた臓物が、離れた身体を繋ぎ止めている。
血にまみれ、太刀を奮う上体は縁側に、腰から下はまだ座敷の内にあった。周囲には、
+行衆の遺骸も転がっている。
「千鶴様! 宝蔵院様!」
ちぎ
ぞうもつ
ふる
ぶぎょうしゅう
もくとう
叫ぶ蛇骨丸の横で、 退魔師は片手で黙した。
こぶし にぎ
さいおうぶ
だが座敷の中へ視線を移し、鬼十郎は拳を握り締めた。 すでに屋敷の最奥部である。
燃え盛る床の間には、美麗な燭台や食膳がまだ残されていた。誰の物かは、一目瞭然である。
とこ
ま
しょくだい しょくせん
だれ
りょうぜん
そして、不意に・・・・
「こ、これは.....」
しゅんじ

けつかい
と
何かに気づき、蛇骨丸が口を震わせた。瞬時に結界を解き、不思議そうに拾い上げる。
えんねつ
あぜん
じゅず
ばか
ねら
炎熱の中、鬼十郎は唖然とした。 確かに見覚えのある・・・・・・数珠であった。
やつ
「馬鹿な、奴らの狙いは.....」
「狙いはこれでしょう? 置き去りですよ.....」
言われて、呪神使いも数珠に目をこらす。 一際目立つ鏡石こそ、狙う味ではないのか。
「それじゃ、敵はいったい何を.....」
こくえん しゃくねつ
しょうちゅう じゅず
黒煙と灼熱が、二人の顔を撫でつけた。 鬼十郎は、じっと掌中の数珠を見つめる。
そして視線をふと上げた時・・
[.....-]
とつさ
鬼十郎の唇から.....何かが漏れかけた。 蛇骨丸も、咄嗟に振り向く。
「鬼十郎殿、何がっ.....!」
だが答えぬまま、鬼十郎は炎の中へ歩み出す。
ゆっくりとした足取りで、退魔師は、一人の若武者の亡骸に歩み寄った。
ながら
「鬼十郎殿、そっちには火が.....!」
言いかけて・・・・・・ 蛇骨丸も声を失った。
ごうか
かま
ざしき
いちぐう
業火に構わず、鬼十郎は小幡勘兵衛を見つめている。座敷の一隅を守るように倒れた、小幡勘兵衛の遺骸を.....。
いくすじ
めいもく
たんせい
幾筋もの刀傷に絶命した若武者は、 天井を向き瞑目していた。 その血にまみれた端正な
顔を、退魔師は黙って見下ろしている。
黙って見下ろし.....
拳の中に痛みが走った。
つぶ
自分でも知らぬ間に、握り締めた数珠が、手の中で潰されかけている。 鬼十郎は、
数珠に連なる水晶玉に視線を移した。透き通った珠は、 苛烈な炎を映し出している。
そして、鮮血に染まった勘兵衛の死に顔も・・・・・・
せんけつ
かれつ
鬼十郎は、背後を振り返った。
たたず
蛇骨丸は炎を背に、ただ佇んでいる。 疑いを知らぬ、澄んだ瞳が退魔師を見つめていた。
「泣いてもいいんですよ、 鬼十郎殿」
呪神使いは、勘兵衛の遺骸をも見下ろしてそう言った。

きよせい
「今は.....泣いていいんです。虚勢を張ったり、
退魔師であることを意識することもない。ここにいるのは、私だけです。思いっきり泣いて.....それから先に進みましょう」
(なぜ貴様がいるのだ.....)
私が..... 《常》の私を失いかける時・・・・・・なぜ?)
(なぜ貴様の前で私は・・・・・・)
そこまで思いが巡った時.....

おえつ
じゃま
蛇骨丸の言葉が全身に染み渡ってきた。なぜか、いつもの自分が邪魔に思える。
そして鬼十郎が忘れ、封印してきたものが.....
こぶし
もう一度、拳の中に痛みが走った。

退魔師の掌中で、 媚珠が悲鳴を上げていた。
それは蛇骨丸だけには分かる、一人の少女嗚咽であった.....。

第四章

目を閉じても、地獄絵図は消えなかった。
ほのお
かいこう
せんけつ
燃え盛る炎の色。 飛び交う青白い怪光。床や壁を染めた鮮血。全てをかき消す黒煙。
くえん
きょうかん
耳を塞いでも、叫喚が聞こえて来る。
まど
けもの
だんまつま
リ
いぶき
逃げ惑う足音。獣のような悲鳴。長盛の断末魔。勘兵衛の最期の息吹。 禍々しい高笑い。
ちづる
やみ
千鶴は、闇の中にうずくまっていた。
ひざ
かか
かた
さんげき
膝を抱え、堅く目を閉じていれば、この惨劇が終わると信じていた。だが五感を閉ざそうとも、声は少女を呼び続けていたのだ。
(雲州太守が娘、千鶴よな.....)
たいじ
子供でも若者でも老人でもなく、そのうえ男か女なのかも判別できぬ声である。
千鶴は必死に胎児の姿勢を維持し続けた。
あいな
(何ゆえ、このような仕儀に相成ったか.....)
(そなたには分からぬであろう.....)
(しかし全ては、 そなたの父祖の代の罪・・・・・・)
つみ
(恨むなら過去を恨むがよい.....)
こぶし
おさな ころ
はだみはな
じゅず
千鶴の拳が空をつかんだ。 幼い頃から肌身離さず・・・・・・その数珠が今はない。
数珠さえあれば、媚珠さえあれば、誰も千鶴に手をかける事はできない。そう教えられ続けてきた。
びしゅ
（さぞ不安であろう.....）
見透かすような声である。
(だがそなたは未だ媚珠の加護を受けておる。わしとて傷つける事はできぬ。傷つける事を考えるだけでおぞけが走る。強い呪力じゃ)
「で、では私に何を.....」

ようやくそれだけ声にして、千鶴は口をつぐむ。どこかで、ほほ笑む気配がした。闇の中
少女の身体は転回し、 たよりなく浮遊する。
てんかい
(わしは是が非でも媚珠が欲しい・・・・・・)
(雲州にあるうちに取り戻したい.....)
ふゆう
(しかし心ある者に····· 人間や呪神に・・・・・・ 媚珠を奪うことはかなわぬのだ.....)
「どういう事です.....?」
(.....)
「ここに数珠はない! 媚珠もない!」
(.....)
「何を.....私の何を狙っているのです!」
やみ みす
とくちょう
千鶴は、闇を見据えた。 どこまでも続く無限の暗黒には、何の特徴もない。
ただ深い暗闇が続いているだけだ。 その闇の奥底から・・・・・
おくそこ
答えの代わりに.....やるせないため息が漏れた。それも確かに、二人分の.....。
たの
(.....後を頼むぞ)
まか
(お任せください・・・・・・)
新たな気配に、千鶴は身を固くする。 それを察して、二つの声は闇の中でにじり寄った。
(目連童子の呪力が消えた.....)
(するとまさか.....)
(貴様の知らせた二人の者、かなりの腕だ.....)
(呪霊無しで勝つとは.....油断致しました)
ゆうぜん
ちんちゃく
うごめ
しかし悠然と沈着な気配は蠢いた。
(まぁ、さしたる障害にはなるまい。 ここが知れるわけもなし·····存分にやれ)
(この囲み、抜ける見込みはありますまい)
(貴様の願いもようやくかなうな.....)
(はっ、これで恨みも晴れるかと・・・・・・)
みょうじゅ うら
(晴らしてやれ。明寿の恨みを.....)
がくせん
まぶた
愕然として、千鶴は瞼を開いた。
「その声は·····そなた.....!」
くちびる
のど
言いかけた唇が、 突然引きつる。 舌も歯も動かない。 喉を押さえる圧力に、
千鶴の細い身体が醜くよじれた。
みにく
さいご
(声を出してはなりませぬ.....)
新たな気配がそう告げた。
(その御声聞かば、私とて.....)
おいのちうば

（姫様の御命奪う覚悟が萎えまする.....）
ざんじがまん
（最期までの一時、暫時我慢なされませ・・・・・・）
いく
千鶴の周囲に、幾つもの青白い炎が群れ集う。 炎の輪の中心で、少女はまた耳を塞ぐ。
（千鶴の体内より媚珠を取り出せ.....）
（わしにはできぬが、 貴様なら.....）
くぐつ
（貴様の傀儡ならできるはずだ・・・・・・）
（心を持たぬ傀儡ならばな.....）
おのれ
声が次第に遠のいていく。 炎の舞いを見つめる千鶴もやがて、己の意識を見失った。
どこまでも続く暗黒の、それは深淵での事だった。
しんえん
ちど
「血止め、終わりました」
「すまぬな、又四郎.....」
つぶや
もろはだ そで
ぞうきばやし
ふしょう
小さく呟き、鬼十郎は諸肌を袖にしまいこんだ。 静かな夜の雑木林に、虫の音と負傷者たちのざわめきが鳴響する。 退魔師は咳払いをして、背後を振り返った。
「もう良いぞ、こっちを向け」
もてあそ
手当の済んだ蛇骨丸は、数珠を弄んでいる。
「そうまでして肌を見せたくないんですか?」
「無論、貴様は男だからな」
「では又四郎君は?」
「こいつはまだ子供だ」
ととの
っ気なく、着物を整える。 蛇骨丸は、鬼十郎の横顔をじっと見つめていた。
しゅくば そば
ねむ もの だれ
燃え落ちた宿場の側、小さな林の中に兵たちは集まっている。
眠る者は誰もいない。みな傷が疼き、宿場の惨状に絶望しているのだ。幾つもの焚き火に、人の輪ができていた。
さんじょう
いく
た
ごうか
ほのお
ひいろ のわけじゅく
そして鬼十郎もまた、焚き火の炎を見つめている。
小さな暖だが、その緋色が野分宿を化した業火に重なった。鼻孔の奥には、勘兵衛の死の匂いがこびりついている。
びこう お
にお
ざんし
その残滓を払おうと、鬼十郎は太刀をすらりと抜いた。厚い刀身の重みで、
退魔師は力を取り戻そうとする。 が、刃に映った己の顔を見た途端・・・

やいば
おのれ
しゅぎょう
（まだ修行が足りぬのか.....）
まま
（未だ己一人、自儘にできぬとは.....）
とたん
悪が込み上げた。悲しく、悔しい。だが感情に気圧されている場合ではない。も早く、千鶴を奪い返さねばならない。
よみがえ
それでも四肢に力が蘇らない。久しぶりに泣いたせいか疲れてもいた。気持ちを整理できぬまま、鬼十郎は刀を鞘に収めた。
「御師匠様、これからいかがなさいます?」
ふくろ
ほしいい
まなざ
又四郎は、袋に入った猫を差し出した。 やけに無口な師匠を、弟子は気遣いの眼差しで
見つめている。
「少しは食べぬと、力が出ませんよ」
「何を食うても、 力など出そうにないな.....」
「そんな台詞、《常》の鬼十郎殿らしくないですね。 それなら代わりに、私が....」
言った蛇骨丸が、 又四郎から袋を横取りする。
だが鬼十郎は我に帰り、呪神使いから非常食を奪い返した。
「これはわしの物だ、わしが食う」
「でも食欲が無さそうだから.....」
「そんな時もある。 欲しければ、先ず頼め」
「けち臭い人だなぁ・・・・・・」
「貴様は.....」
しゃべ
力無く言いかけ・・・・・・退魔師はふと気づいた。
蛇骨丸は、もしや・・
「.....わしを、 気遣っておるのか?」
とつき
あわ
言われて、蛇骨丸は咄嗟に口をつぐむ。その慌てように、 又四郎も驚いた。
「そうだったんですか? 気が.....」
おどろ
「わたしにちょっかいを出せば.....言い返すうちに気力が蘇ると思うたのだな?」
詰め寄る鬼十郎に、蛇骨丸は頭を掻き毟った。
むし
「そう、単刀直入にきかれるとなんですが‥‥‥ええ、 そうですね。 元気になってほしくて・・・・・・まぁ逆効果になる時もありますが」
ぼそっと、呪神使いは白状する。
「心の内にあるもやもやは外へ出してすっきりするのが一番です。
とりあえず、どんどん喋ってください。でないと、鬼十郎殿は潰れてしまいますよ?」
つぶ
（確かに.....な）
たんそく
嘆息して、鬼十郎はその言を認めた。
めし

塞いでいても仕方ない。まして飯も食わず、口もきかずでは、体がおかしくなる。
蛇骨丸の言う通り、今は心身共に回復すべきなのだ。
「医者のような奴だな、貴様は」
むぞうさ
鬼十郎は、無造作に猫を口に運んだ。 まるで味気無い。 それでも少しは.....
よみがえ
(覇気が蘇ったか.....?)
みなもと
退魔師は、気力の源をほおばり続けた。
又四郎も、ようやく話を進め始めた。
「敵は.....姫様を連れ去りました。遺体が無いという事は、すぐには殺さなかった。
その代わり、数珠は置き去り奴ら、 姫様に何かするつもりです。 何かは分かりませんが」
じゅず
やつ
きょてん
もう
「待ち伏せしていたという事は・・・・・あらかじめどこかに拠点を設けているはずだ。今は一
旦、その拠点に戻ったと見ていいだろう。 呪神が自由に行動するには、必ず霊気を補充す
る霊源が必要になるからな」
ひざ
と、蛇骨丸が膝を詰めてきた。
むだ
「止めても無駄でしょうが・・・・・・勝ち目はありませんよ。
呪霊抜きで戦うなんて・・・・・・」
そ
呪神使いの視線と、鬼十郎のそれがぶつかる。だがすぐに逸らすと、
退魔師は地面に絵地図を広げた。
「呪霊抜きで、あの目連童子とか言う呪神を斬ったのは御立派です。
しかし奴は、手先に過ぎません。奴と同等の呪神があとどれくらいいることか。そいつらを全部倒し
て初め て、黒鶴と戦うことになりましょう」
たお
おく
「なら全て斬るまでだ。臆することはない」
びき
「目連童子一匹倒すのに、あれだけ手間をとられ、傷を負ったではないですか。
黒鶴の前にたどり着くまで、鬼十郎殿がもつとは.....」
「わしを見くびっておるのか?」
「ですから.....心配しているのですよ」
鬼十郎は、顔をしかめた。何と返事をしてよいか、言葉が見つからない。
さむらい
「.....ならば、おめおめ逃げ延びよと申すか? 姫様を奪われ、雲州の侍どもをむざと死
なせた上で.....全てあきらめよと言うのか?」
ふつふつ
そう口にすることで、鬼十郎の体内から沸々と戦意が込み上げて来た。 問いは、己自身
にも投げかけられている。逃げるのか? あきらめるのか?
(まだ、あきらめぬ。 逃げてなるものか.....)
(必ずや·····奪い返す.....!)
とう
己に言い聞かせるや、むせるほどの闘志が沸き上がる。
今何をすべきか確かめた鬼十郎は·····退魔師の精神を取り戻していた。
「萎えている場合ではないのだな.....」

おのれ
鬼十郎は、蛇骨丸に向き直った。
やと
「わしは退魔師だ･････ 千鶴様に雇われし、 退魔師なのだ.....何をすべきかは明白だ。敵を斬り、姫様を救う。 それだけのことだ」
もく
さと
蛇骨丸は黙して答えない。 もはや退魔師に、気遣いの言葉は無用である。 そう悟った笑顔が、じっと鬼十郎を見つめていた。
(不思議な男だ・・・・・・)
むずか
いら
(あれほど苛ついた男なのに...････今は違う)
ぬく
焚き火に照らされた蛇骨丸の顔が、鬼十郎に温もりを伝えている。
鬼十郎も、蛇骨丸に・・・・・・笑顔を返した。 それでいい、と言わんばかりに蛇骨丸も笑う。
ひとみ とも
きょうじん
びしょう
二人の瞳に灯った強靭な光に、 又四郎も気が付いた。微笑して視線を交わす二人を無視し、少年は地図に顔を寄せた。
「.....ともかく...････問題は、姫様がどこに連れて行かれたかです。時が経てば御救いするのが難しくなるでしょう。 蛇骨丸さんの呪神で何とか探せませんか?」
「そうですねぇ･････ いや.....」
やみ
つぶや
そして周囲の闇を見渡し、 蛇骨丸は急に口をつぐんだ。やがて...おもむろに呟く。
「ちょっと待ってください・・・・・・」
ととの
続けて、闇の中、整った顔が微笑する。 呪神使いは、 すいと指先を宙に差し向けた。
「あれを.....」
示した先に.....
りんこう
たよ
光が浮かんでいた。宙を泳ぐ青白い燐光が、ふらふらと頼りなく接近する。明らかに、意志を伴った迷走だ。
「何だ、ありゃあ!」
「呪神だ! 敵の呪神が来た!」
かいこう
気づいた侍たちから声が上がり、三人もゆっくり立ち上がる。
現れた怪光は林の中に降り立ち、長い触手をぶらつかせてみせた。
しょくしゅ
「これは.....呪神ですか?」
そうさくじゅしん ちょう
「そう。 宝蔵院様の捜索呪神、 提灯水母さ」
にそう
「あの尼僧、生きておるのか.....」
「だって死体が無かったじゃないですか」
「それで心配してなかったんですねぇ.....」
「簡単に死ぬような方じゃないからね」
ちゅうくう

笑って、蛇骨丸は宙空の水母に歩み寄った。呪神使い自身も、内心ほっとしている。
宝蔵院の無事な証しに、 自然と顔も和んでいた。
あか
なご
「で、この呪神は何を.....?」
「提灯ですよ、まさしく。 この夜道、私たちを導いてくれるはずです。 宝蔵院様の元へ」
「その宝蔵院殿はどこにいる?」
くちょう
たち そそ
鬼十郎は、口調を強めた。 呪神使いの視線は、鬼十郎の太刀に注がれる。
すでに長刀を腰にたばさむ退魔師は、荒々しく棚を払った。
こし
あらあら
はら
「.....姫様の元だな?」
おそ
「ならば行くぞ」
つば
は
そうぼう
いろど
「恐らく、宝蔵院様が何かつかんだはず.....」
べっと鬼十郎は唾を吐く。 いつの間にか、双眸はぎらつく闘志で彩られていた。
かたき う
しゅつたつ
「みなの仇を討ち、 姫様を救わねば、わしの武名も地に堕ちる。 すぐに出立するぞ!」
おとも
「わ、我らも御供を.....!」
果敢な名乗りが兵たちから上がる。だが退魔師は、ぐるりと負傷者の群れを見渡した。
「その方たちは来るな。
ここから先は、わしとて勝つ当てのない死地だ。たとえわしらが戻らなくとも、明朝、
次の宿場へ向かえ」
しゅくば
「しかしそれでは.....!」
むだぐち
だが鬼十郎に、それ以上無駄口を利くつもりはなかった。ばきばきっと指が鳴る。
退魔師は背後に立つ、二人の僚友に視線を戻した。
りょうゆう
じごく
「貴様らは来い。 地獄の果てまでもな」
ごいっしょ
「無論、御一緒に・・・・・・」
笑って、蛇骨丸は少年と声を合わせていた。
すべ
おえつ
「私のせいなのですね.....」
うば
全てを知らされた思念が、
嗚咽を続けていた。たとえ声を奪われようとも、怒りと悲しみは暗闇に拡散する。
千鶴の震える思念は、気配の胸中へも達していた。
くらやみ かさん

ふる
その思念が、気配の決心を鈍らせた。千鶴を守るは、珠の力だけではない。長年仕えた時間が、思い出が、気配を躊躇させかけた。
ちゆうちょ
(責めは一切姫様にはござりませぬが・・・・・・)
ふそ
なにとぞ
ご ようしゃ
2
かくご
どうこく
さつりく
(晴らさずして、父祖も浮かばれませぬ・・・・・・)
(何卒、御容赦下され・・・・・・)
しかし、 思念は途切れない。 全てを覚悟しながらも、千鶴の思いは強く慟哭したのだ。
ねら
「では初めから..... 私一人を狙えばよい!」
「なぜあれほど殺めた! なぜみなを斬った!」
むえん
「家臣たち、長盛、無縁の宿場の者まで・・・・・・」
さんげき よみがえ
千鶴は、激しい嗚咽をこらえた。目の前に再び、あの惨劇が蘇る。 誰のせいでもない。
　　あの殺戮は、自分のせいだったのだ。
「鬼十郎殿や蛇骨丸殿まで巻き込んで・・・・・・」
「私はみなに申し訳ができぬ・・・・・・」
ざしきくぐつ
しゅんどう
ふっしょく
儀式傀儡たちが蠢動を始める。 躊躇を払拭し、気配もおもむろに儀式の意を決し直した。
ぞう お
「殺しなさい・・・私も早く.....」
思念は、そう繰り返した。
「殺せばよいのです...殺したいのなら.....」
「そなたが望むなら.....殺せばよい・・・・・・」
「私とて.....一人生き残るつもりもない.....」
たいじ
そして、 思念が気配に対峙した。
にく
「なれどかほどに.....私が憎かったのか.....?」
「憎悪の目で十数年、私を見ていたのか?」
「かほどに.....そなたの心は...」
いつしゅん こうちょく
むかし じんしん
思念を見つめる気配が一瞬、硬直する。
気配は、遠い昔に人心を捨て去っていた。心を無くしたゆえに、今ここにいるはずだった。
(それが・・・・・・このざまか.....!)
おのれ
みじゅく
いか こぶし
まかい

気配は、己の未熟を呪った。だが怒る拳が、 傀儡たちに命を下す。
魔界の儀式の始まりに、千鶴はようやく思考を閉塞させていた。

へいそく
めん
きた
「ま、待ってくださいよ、御師匠様・・・・・・」
「ぐずぐずするな、置いて行くぞ!」
「又四郎君は、足に怪我してるんですよ!」
お
あま
「みな手負いなのだ! 甘やかしてはならん!」
にんじょうかみふうせん。
「本当に人情紙風船だなぁ.....」
暗い山道を、三人はどこまでも登っていた。
提灯水母の明かりだけを頼りに、草深い斜をひたすらに突き進む。仕方なく、鬼十郎は足を止め、弟子の腕を強引に引っ張り上げた。
「鍛え方が足りぬようだな、どうも・・・・・・」
やまがき
「ま、誠に申し訳もなく.....はあっ!」
「少し休みましょう、その方がいい」
言って、蛇骨丸も提灯水母を呼び止めた。
「怪我した子供にこの山道はきついですよ ほらっ、山柿の種っ!」
ほう
受け取った黒い種粒を、又四郎は口に放った。強い苦みには、鎮痛作用がある。しばし
大木にもたれかかり、鬼十郎も一息ついた。
「どこへ連れて行く気だ、こいつは?」
たかしろやま
おね
「このまま進めば鷹代山の尾根に出るはず.....」
「城跡があるな.....確か.....」
提灯水母に歩み寄り、鬼十郎は地図を広げた。指先で確かめた目的地には、まだ程遠 い。
「やはり急ごう。 又四郎、行くぞ!」
「もう少し待ってあげればいいのに!」
「貴様、姫様が心配ではないのか!」
「心配ですよ!でも又四郎君や、鬼十郎殿だって同じくらい心配なんです!
勝てるか蛇骨丸が声を荒げる。鬼十郎は、じっとその顔を見つめ、おもむろに声を絞った。
どうかが心配なんです!」
「勝てるさ、わしと貴様がいれば」
「は.....はい?」
「言うたではないか、力を合わせるとな?」
「そ、そんな事、 急に.....」
狼狽する蛇骨丸の視線が、
又四郎に向けられる。だが少年も、そんな師匠を見るのは初めてであった。恐る恐る、
呪神使いは質問を繰り返した。
「本当に私と力を合わせてくれるんですか?」
「退魔師に二言は無い」
けしょう
「言っときますけど、私は男のくせに化粧もするし、軟弱だし.....そのうえ年端もいかぬ娘が大好きなんですけどそれでもよろしいんですか?」
「構わん」

平然と言い放つ。
やおら、蛇骨丸は全身で喜びを表した。
「やっと私のことを好きになってくれたんですねっ!」
叫んで、抱き着こうとする。 その鼻先へ・・
はやわざ
鬼十郎の切っ先が突き付けられていた。 抜く手も見せぬ早業に続いて、鬼十郎は淡々と
言葉を連ねていく。
「・・・・・・わしと貴様は正反対だ」
[.....]
「わしは男のなり、貴様は.....」
「.....女のなり。 それに性格だって.....」
「貴様は軽薄、わしは厳格」
げんかく
ごうじょう
「いいえ、私は素直。 鬼十郎殿は強情です」
たんたん
だま
蛇骨丸の断言に、又四郎も笑った。
「好みも違う。私は女性が好きですが.....」
「わしは男なぞあまり好かぬ」
「周りにもあまり気を使わないし・・・・・・」
「黙れ、八方美人め!」
きんちょう
すき
「いつも緊張して、隙を見せない.....」
「貴様が気を抜き過ぎているのだ」
かたひじは
「その肩肘張った生き方も私にはできない」
のんき
「わしも貴様ほど呑気には暮らせぬ」
「戦い方も違いますよ。私は呪神を頼り.....」
おのれ うで
「わしは己の腕一本だ」
「でも.....今度は違うのですね?」
J
かす
ああ、とうなずき、 退魔師は微かに笑った。
うま
「正反対でも.....上手くやらねばな.....」
こた
刀を収め、鬼十郎は、蛇骨丸を見上げた。 蛇骨丸の視線も、それに応える。
ほほ笑む又四郎にも気づかず、二人はしばし見つめ合った。
おとしごろ
「笑うと、やっぱり御年頃に見えますよ」
何が嬉しいのか、蛇骨丸も笑顔を返した。
あかつき
ほう
「姫様助けた暁には、褒美に着物でも・・・・・・」
「やかましい、くだらぬ話を.....!」
しょう
「いいえ、化粧もすればきっと...」

「できるか、貴様じゃあるまいし!」
「まさか似合わぬと思っているのでは?」
「ああ、似合わぬ! 女の着物など!」
「鬼十郎殿だって女じゃないですか!」
「うるさい! 女は忘れた!」
ながぶろ
「その割に長風呂ですよねぇ?」
こうちよく
言われて.....鬼十郎は硬直した。 退魔師の顔から笑みが失せている。
又四郎は、すでに大樹の陰に避難した。
わなわなと震える鬼十郎から、蛇骨丸もゆっくり後じさった。
ひなん
ふる
あと
「そうか.....そうか.....そうかああっっ!」
「何です、何です、 何なんですっ!」
えりもと
おそ
蛇骨丸の動きは一瞬遅い。
踏み出した鬼十郎は、呪神使いの足を踏み付け、両腕で襟元を締め上げる。牙を剥き出し、
退魔師は蛇骨丸の顔に肉薄した。
きば
にくぱく
「今...・・・・・たった今気づいたぞ.....!」
まんしん
まこと
「な、何をですっ?」
「どうも貴様、わしの肉付きを良く知っていると思うていたが・・・・・・」
「いやぁ、お褒めに預かって・・・」
のぞ
「ふざけるなああっっ! 貴様、滝ノ宮の宿でわしの風呂を覗いておったなあっっ!」
ちっそく
満身の力が、 蛇骨丸を窒息に追い込む。慌てて又四郎が飛びついた。
「お止め下さい、こんな時に!」
「やかましい! 離せ、又四郎!」
「ぐ、ぐるじ...し、 しむぅぅ.....」
はだか
「言えぃ! どこまで見た! わしの裸をどこまで見たのだ!」
「そ、そんな事、御師匠様!」
「後ろだけ·····後ろだけ、 本当・・・・・・」
「誠だな! 嘘を言えばためにならぬぞっ!」
ゆる
一瞬、鬼十郎は首締めを緩める。 ほおっと深呼吸し、蛇骨丸が照れ笑いを浮かべた。
「あっ! あと、背中ゴシゴシを.....」
「斬るっ!」
蛇骨丸が必死に、鬼十郎の刀を押さえ付けた。
おおげさ
「そんな大袈裟な! 背中ゴシゴシぐらいで.....」
あやま
「やかましい! もう貴様の助けはいらん! ここで斬って捨てる!」
「御師匠様、背中ゴシゴシって何です?」

「いいから貴様も手伝え！ こいつを斬れ!」
「謝ります！ 謝りますから、どうか.....」
と、いきなり.....
「ぐえっ!」「ぬおっ!」 「痛いっっ!」
三人の脳天に衝撃が走った。茂みから飛び出した金剛が、容赦ない一撃を浴びせる。
むらさき そうい
思わず倒れた三人に、紫の僧衣が飛びかかった。
「そなたら、声がでかすぎるっ!」
「ほ、宝蔵院様！ 無事で何よ.....」
かか
にそう
じんじん疼く頭蓋を抱え、蛇骨丸は再会の喜びを口にしかけた。
が、尼僧の手は、ぴたその声を封じる。 まだ呻く退魔師を足でつつき、宝蔵院は顔を歪めた。
「敵地ですぞ！ 我らの動き教えるつもりか!」
もの
「くっ.....この痴れ者がわしの風呂を.....」
「そんな事は後です！ それより姫様じゃ!」
みずか
すいしょう
小さく叫び、 宝蔵院は提灯水母を自らの水晶へ回収した。
尼僧は藪を割り、三人を尾根へと先導する。蛇骨丸は、後見人の健在振りに眉をひそめた。
まゆ
「それにしても・・・・・・宿場はなぜあんな事に?」
「お分かりでしょう、待ち伏せです」
「敵は黒鶴だったのか?」
「それは確かめていませんが.....」
宝蔵院は、さらに声を落とした。
しえきじゅん
おそ
「ともかく、あっと言う間に宿を使役呪神の群れが襲い、私も戦いの中に投げ出されました。姫様をお救いする暇などまるで無く.....」
いとま
「長盛殿も勘兵衛殿もだめでした」
思い出して、蛇骨丸は周囲を見渡した。
「で、どうして宝蔵院様はここへ?」
おそ
のが
「強力な.....恐らく呪力五百程度の気が、宿から逃れるのを察しました。
提灯水母に先に追わせ、さらに私も後を追ったのです」
「呪力、 五百か.....」
退魔師は、呪神使いと視線を合わせた。
いくら訓練を積んでも、人の限界呪力は二百である。それを遥かに凌駕する相手となると・・・・・・
はる
りょうが
じきじき
「やはり黒鶴は来てますね、直々ここに・・・・・・」
「奴がどこに行ったか、分かるのか?」
はいじょう
とうとう
鬼十郎の問いに、宝蔵院は短くうなずいた。 と、 唐突に停止し、尾根の頂上を指し示す。

ぼくだい
しろあと
「廃城です。もう百年も放置された・・・・・・莫大な呪力が、 あの城跡に集まっています」
あいいろ
りょうせん
蛇骨丸も念を集中する。
藍色の夜空を背に、稜線には確かに朽ちた建物が浮かんでいる。そしてわさわさと嫌らしく蠢く呪力の群れ。
うごめ
蛇骨丸は、 退魔師を振り向いた。 鬼十郎も、呪神使いを見ている。
「来たようだな、 その時が」
「そうですね。 正反対の私たちが、力を合わせる時が.....」
夜風が、尾根を駆け抜ける。 二人の言葉に、尼僧と少年も堅くうなずいていた。

(確かか、それは.....)
うで
から
暗黒に、幾つもの白い腕が伸びた。
血の気の無い、死人色の腕はお互い絡み付きながら、気配向かって殺到する。
さっとう
(間違イゴザイマセン!)
くさ
(退魔師! 退魔師!)
にお
(嫌ナ臭イ! 臭イヨー 臭イヨー)
てのひら
ばや
かえり
ぱっと開いた掌には、真っ赤な口が生えている。矢継ぎ早の報告に、気配は後方を顧みた。
ぎしき
(儀式の方はいかがした?)
(まぁだ、なぁんとぉもぉ.....)
やみただよ なまじろ
きょたい
間延びした声がそう答える。闇に漂う生白いなめくじは、牛ほどの巨体をくねらせ、しきりに粘液を分泌した。
ねんえき
ぶんび
(とおきがぁ、かぁかあるのでぇわぁ·····)
(婆羅鬼、 おるな.....)
沈着な、思念が虚空に飛ぶ。暗闇をする気配は、鼻息を荒くし、気配の前に現れ た。
はな
じゃまもの
(城外に配下の下級呪神を放て。見つけ次第、邪魔者を殺し尽くすのだ.....)
でぼん
(では、我らの出番はござりませぬな?)
たず
新たな気配が、そう尋ねる。だが巨大な気は、二人の腹心にいらえを送った。
(目連童子を倒した奴らだ。油断はならぬ)
しょせん
(とは言え、所詮は人間.....)

こうしょう
かん高い、女の哄笑が鳴り響く。
（我ら呪神に勝てる道理など・・・・ほほほっ!）
きんちょう ゆる
いまし
それでも、気は緊張を緩めない。 集結する呪力の群れに、 思念は戒めを厳しくした。
およ
めぐ
（忘るるな、人間は我らより弱い。だが人間は、
我らに思いも及ばぬ策を巡らす事がある。奴らは狡く、賢い。 ゆえに六百年前、
我らの媚珠は人間に奪われたのだ・・・・・・）
する
かしこ
びし
じょうへき
いぎょう
つど そろ
きょうじん
闇に、異形の集団が集い揃う。気配は今一度、強靭な霊体をわななかせた。
（隙に付け込め ・・・人間は隙だらけの生き物だ。さすれば勝利も我らのものだ）
せいじゃく
しず
異形が散る。そして気配は再び、暗黒の静寂に身を沈めていったのである。

しろもの
城門、という代物ではない。
しろあと
きどもん
たかしろやま はいじょう
へいたんきょてん
城跡への入り口は、木戸門だけだ。鷹代山の廃城は、戦時に急造された兵站拠点らしい。城壁も無く、周囲はただ瑞垣に覆われていた。
みずがき おお
おく
ほうきぼし ごと
朽ちた木戸門のその奥から... 白い光がたなびいた。 しかも無数に。帚星の如く尾を引
しんちょう
すいせい
白光は、城外へ抜けるや、慎重に着地する。
数十の彗星が次々に飛来し、そして.....正体を現した。暗闇に、透けるような肢体が浮かび上がる。
肌はもちろん、腰まで伸びる長い髪も純白に輝いている。豊かに丸みを帯びた乳房や、大きくくびれた腰を全て晒し、白い女達は木戸門の周囲へ悠然と散開した。
ちぶさ
すべ さら
かみ
かがや
ゆた
ゆうぜん
ほたる
蛍の群れにも見える。

そのただ中へ・・・・・・
はまたい
「破魔退っっ!」
いなずま
きゅうごう
ちょうやく
いげき
たけ
稲妻めいた糾合が飛んだ。 同時に、女達も跳躍する。 迎撃の雄叫び。
鬼十郎の太刀筋が、最初の三匹を斬り払った。けたたましい悲鳴。空中に、漆黒の羽根が撒き散らされ る。宙にある間に、さらに二匹。群れの中央を突き崩し、 退魔師はがっしと大地へ降り 立った。
ひき
くず
しつこく
たちすじ
その背後へ、血にまみれた怪鳥たちがちている。微動だにしない黒い。女たちも、ついに最後の虚飾を取り去った。純白がぬばたまに塗り替えられ、ただ眼光だけを赤く光
らせる。死肉を食らう下級呪神たちは、嫌らしい烏の声で鳴き脅した。
どな
きょしょく
「この門、通らせてもらうっっ!」
からす
さっとう
やみ
からす
かぎづめ
怒鳴った声に、化け鳥たちが殺到した。 闇を裂く鉤爪の唸りが、
鬼十郎の耳を塞ぐ退魔師に躊躇は無かった。退きもせず、左右に白刃を奮う。途端に絶叫が走った。
ちゅうちょ
はくじん ふる
とたん
ぜつきょう
うで いく
くろかみ
しゅきゅう
ころ
わきばら
黒い腕が幾つも吹き飛ぶ。
長い黒髪を引きずり、美しい首級も地に転がった。脇腹を斬り払い、顔面を断ち斬り、乳房の間へ切っ先を突き入れる。瞬時に、鬼十郎の周囲には、屍の山が築かれていた。
はら
た
やき
しゅんじ
かばね
だがしかし.....
「いるな.....」
けたはず
じゅりょく
鬼十郎は見抜いていた。化け鳥たちとは桁外れの呪力が、ゆっくりと近づいている。
まがまが

なまぐさ
ぬく
よぎり
ようき
気に禍々しいおぞけが満ち、生臭い温もりが広がった。鬼十郎の刀にも、夜霧に似た妖気がいやらしく絡み付いている。
から
がいやらしく絡み付いている。
お
「それで脅しのつもりか?」
言って、 退魔師は感覚を研ぎ澄ます。
おのれ
「.....わしの力を試すなら、己で立ち会え。
こんな雑魚ども相手に、全力を上げるわしではない。馬鹿にするな.....」
ばか
(なぁ.....るほど・・・・・・下...が・・・れ・・・ぇ...)
いらだ
うな
ひび
見かねたように、苛立つ唸り声が地に響いた。 黒い女達もすぐさま、 退魔師から飛び退 く。
鬼十郎は太刀を左に寝かせ、 すり足で呪力の気配を確かめた。
たち
やつ
(何だってまた、こんな奴が・・・・・・)
くろづる
(黒鶴の一党は人材豊富だな.....)
きゅうはく
にぎ
こどう
きょうふ
急迫する呪力の強さに、鬼十郎は太刀を握り直した。 鼓動の高鳴りは恐怖なのか。
霊気が尽きている不安なのか。それでも退魔師は、冷静な声で問いかけた。
さよう
はいか
「黒鶴の配下だな.....?」
(左様・ ・婆ぁ・・・羅ぁ・・・鬼い...)
名乗った声が、大気を鳴動させる。
ふん
じばん
続けて・・・・・・地盤が大きく揺らいだ。 鬼十郎の左右で地面が裂け、熱風が地中から噴出する。必死に足場を固める退魔師を、化け鳥たちがあざ笑った。 だが構わず、
鬼十郎は近づく呪力に、 ぴたりと視線を合わせていた。
その視線の先に・・・・・・
ふじょう
きょたい
むらさきいろ
こうかく
あたかも水面に浮上するように、巨体が地中から姿を現した。 紫色の甲殻に守られた
身体は、濡れ光る海鞘を思わせる。いびつなが球形の肉体を飾り、伸びた六本の脚には繊毛がびっしり生えていた。頭部だけが、かろうじて人間の形を止めている。 白髪を振り
乱し、奇怪な老婆の顔は退魔師に牙を剥いた。

せんもう
はくはつ
(2.)
きば
(黒鶴・・・様・・・ にぃ・・・勝あてぇ・・・るぅとぉ...思う・・・てぇ・・・かぁ...!)
ほこさきじよう つめ きどもん
大木のような前脚が、だしぬけに繰り出される。 矛先状の爪は木戸門をぶち破り、地面
へ突き込まれた。 飛び散る土くれと共に、 鬼十郎の身体も宙へ舞っていた。
ま
せい
くつ
こんごうづえ せんたん
が、退魔師と入れ替わるように僧衣が呪神の前へ躍り出る。金剛杖の先端からは、鋭い穂先が飛び出
している。 その槍で、 宝蔵院は呪神の前脚を撥ね除けた。くぐもった獣声の唸りに屈せず、
尼僧が鬼十郎を振り返る。
すると
ぼ さき
じゅしん
じゅう
にそう
かざぐるま
いちげき
どな
「先に行かれよ! ここは私が!」
たた
怒鳴った足元へ、再び矛先が叩きこまれる。風車のように槍を回し、
宝蔵院は一撃から飛びすさった。
でまど
いとま
「ここで手間取うてる暇は無いっ!」
「確かにっ.....又四郎!」
ふところ おひ
だま
とうてき かんはつ
その合図で、少年は懐の尾引き玉に点火した。
茂みから呪神めがけ投擲。間髪入れず、手製の閃光手榴弾は婆羅鬼の顔面に炸裂した。
せんこうりゅうだん
さくれつ
(おぉ・・・のぉ・・・れぇ・・・いぃっ!)
ばうこう
ひる
かんげき
巨体が爆光に大きく怯む。その間隙に、蛇骨丸が飛び込んだ。脇に又四郎を抱えたまま、呪神使いの
跳躍が婆羅鬼を飛び越える。 鬼十郎も同時に飛び、三人は一気に婆羅鬼の背後へ達していた。
ちょうやく
かか
かませんぷう
「出でよ、鎌旋風っっ!」
ふる
せつな

着地の刹那、蛇骨丸が玉を放つ。
解放された使役呪神は、ごおっと周囲の木々を奮わせ三人を取り巻いた。その竜巻の壁めがけ、黒い女達が突進する。しかし突入は叶わない。
たつまき かべ
とっしん
かな
うずま
やいば
またた
からす
渦巻く旋風は風の刃を奮い、瞬く間に数十の化け鳥を両断した。
ばかもの
「馬鹿者、出し惜しみせい!」
ふだ
竜巻の中心で、鬼十郎が怒鳴り飛ばす。
「霊気は最後まで取っておけ! 貴様の呪霊が、我らの切り札なのだぞ!」
とつば
「呪霊抜きで突破は無理ですよ!」
こ
呪力を集中しながら、 蛇骨丸も必死に応える。
「こんな呪神相手に、太刀一本で勝てる道理が無いっ! 無茶ってもんです!」
それでも、鬼十郎はかぶりを振った。
「いいから‥‥‥ここはわしに任せよ.....!」
あらて
「御師匠様、新手ですっ!」
「全く.....楽はさせてくれぬな!」
「鬼十郎殿、やっぱり私の」
「いいから貴様は呪神をしまえ!」
きかん
からす しがい
退魔師の舌打ちと同時に、蛇骨丸が呪神鎌旋風を玉へ帰還させる。
びっしり周囲を埋めた烏の死骸。背後からは、婆羅鬼の絶叫と宝蔵院の槍の音が聞こえてくる。
ぜつきょう
けんそう
その喧噪を打ち消すように.....
らいめい とどろ
そば
でんこう いつせん ほとばし
かたわ
雷鳴が轟いた。鬼十郎のすぐ側へ、電光の一閃が送る。 瞬間、傍らの大木が裂け飛んだ。幹を真っ二つに断ち割られ、杉の木は左右に倒れていく。
「飛べいっっ!」
おおぎよう
ちようやく
裂けた幹は、三人めがけ大仰に倒れかかる。だが跳躍した鬼十郎の周囲めがけ、続けて電光が放たれた。草むらが微塵に吹き飛び、 大岩が爆砕する。よろめく蛇骨丸を、師弟は 必死に支え続けた。
はな
みじん
ぼくさい
してい
はげ

「しっかと立ていっ! 敵になめられるぞっ!」
「こんな激しい呪霊、立て続けにかわせるもんですかっ!無理ですよ!」
「蛇骨丸さん、ここは呪霊で何とか.....!」
そで
又四郎が、 ひっしに振り袖にしがみつく。
「でなきゃ、 先へは進めませんよっ!」
「それは君の師匠に言ってくれっ!」
にお
なみだ
舞い飛ぶ土くれと焦げくさい臭いにむせ、蛇骨丸は涙をこぼした。
てごま
「今の私は.....鬼十郎殿の手駒なんだ! 行けと言われるまで・・ つあっ!
でしゃばる気はないよっ!」
「呑気でいいなっ、貴様らは!」
しんらい
信頼する視線が、鬼十郎に向けられる。だが退魔師は、怒気を強めて吼え立てた。
のんき
ちみつ
こうげき
はが
かんば
やみ おく
はな らいじん
鬼十郎は、緻密な敵の攻撃に歯噛みする。
「これは・・・・・・まだ遊びだ・・・・・・本気はこれからだぞ.....!」
看破した退魔師は、闇の奥に呪力を感じた。 電撃を放つ雷神も、ようやく一歩を踏み出し始める。
その歩みごとに、ちりん.....ちりん.....と、 どこからか鈴の音も聞こえてい た。
あゆ
すず
ひとかげ
鬼十郎は近づく人影に切っ先を持ち上げた。
「うんざりだな、貴様もか?」
ぎょうらいしょうにん
(いかにも・・・・・・暁雷上人)
しゃくじょう
うんすい
しわがれた声がそう答える。 闇から現れたのは、錫杖を右手にした雲水であった。 鈴の
まぶか かぶ
かさ おお
音は、その首にかけられている。だが顔だけは、 い。
目深に被った笠に覆われ少しも見えな
ととの
「無礼だな・・・・・・名乗るなら顔も見せよ」
息を整え、鬼十郎は眉根を寄せた。
「見知らぬ相手に‥‥‥斬られるつもりはないのでな」
(なるほど.....それも道理)
錫杖で地を突き、雲水は笠を持ち上げた。ひっ、と又四郎の喉がひくつく。現れた顔に皮が無い。真っ赤な肉を剥き出し、呪神はぎょろりと眼球を鬼十郎へ動かした。
もくれんどうじ
(目連童子を斬ったのは貴様か?)
「ああ、そうだ」

ほくでんりゅう
（卜伝流の退魔師よな?）
「その通り」
こぶし
まぶ
突然、三人を光の群れが包囲した。 拳ほどの光球が数百、何の前触れも無く現れる。
身構えた蛇骨丸をあざ笑うように、 暁雷上人は顔の筋肉を引きつらせた。
（では‥‥‥死んでもらおう）
「があっ!」「ううっ!」「ああっ!」
でんこう
つえ せんたん
ほとばし
なず
三人の悲鳴が重なった。 電光は暁雷上人の枝の先端から迸る。
その稲妻がまさしく電光石火、周囲の光球へ伝導した。続けて、瞬時に形成された電光の包囲網から、三人めがけ雷のが打ち放たれる。
せつか
しゅんじ
ほういもう
いかずち むち
ぜつきょう
絶叫に、宝蔵院は視線を動かした。
「蛇骨丸! 鬼十郎殿!」
にお
だが尼僧の眼前には、羅鬼の心が押し迫っていた。嗟に飛び、棺を奮う。
前脚を吸き伏せるだけで、宝蔵院には手一杯だった。
ていつぱい
「御師匠様ああっっ!」
あみ
ひざ
もんぜつ
叫んだ少年が、地に突っ伏した。膝を打たれた又四郎は、激痛に悶絶する。肉の焦げる
臭いに、鬼十郎は奥歯を軋ませた。
きし
たち
その鬼十郎は、しっかと太刀を顔の前に立ち上げていた。蛇骨丸も両手で印を結び、鬼十郎と背中を合わせている。
電撃は、二人を絶え間無く打ちすえるが、倒れる気配はどちらにもない。ただ一心に呪力をこらし、この攻撃呪霊に抵抗しているのだ。
でんげき
こうげきじゅれい ていこう
しの
（この網の中、耐え忍ぶとは‥‥..）
おどろ
（人間にしては・・・・・・驚くべき呪力だ・・・・・・）
鬼十郎と視線を合わせ、 暁雷上人は念を強めた。 呪霊に耐えられるのは、抵抗呪霊、 強
い霊体、そして呪力である。
倒そうと念じる呪力と、倒されまいと念じる呪力が、真正面から激突している。

げきとつ
かれつ

ま
じんじょう
ようしゃ
だが苛烈さを増した打撃は、容赦なく二人を打った。鬼十郎の肩が裂け、堪が飛び散った。蛇骨丸の指先からも爪が吹き飛び、鮮血が地にしたたってい両者は、逆転の一撃を狙いすましていたのだ。
える顔に血
せんけつ
く。それでも
ぎゃくてん
(いつまでもこんな.....)
いじ
(強力な呪霊が維持できるはずがない.....)
鬼十郎の考えは、蛇骨丸とも一致している。
(必ず霊気は尽きる、呪力ももちはせぬ・・・・・・)
(その時そ・・・・・・討てる.....!)
くじゅう
暁雷上人の顔にも、苦渋が浮かび始めた。
(尋常な相手ではない.....)
ほふ
(一撃で人間を屠る我が呪霊が・・・・・・通じぬ)
ほう いもう
おとろ
光球が、次第に揺らぎ始めた。包囲網を形作る下級呪神にも、 暁雷上人の衰ている。
が、体内の霊気を一気に噴き出し、 呪神は酷烈な雷光を強引に招した。
えが伝わっ
こくれつ らいこう ごういん しょうらい
じゃまもの
(邪魔者どもは死ぬがいいっ!)
(死ぬがいい! 死ぬがいい! 死ぬがいい!)
あつぱく
た
鬼十郎は、全身の皮膚が裂けるのを感じた。 腕が、艦が、首筋が、
呪霊の圧迫に耐え兼弾け飛ぶ。それでも退魔師は、 呪神の焦燥をつかみ取っていた。
はじ
しょうそう
「姫様はどこだ.....!」
(聞いてどうする! 一歩も動けぬくせに!)
「どうかな、 呪力が弱まっておるぞ.....」
「鬼十郎殿っっ!」
背中で呪神使いが悲鳴を上げた。印を結ぶ指は、すでに真っ赤に染まってい抗を止めれば、莫大な呪霊の威力が蛇骨丸を粉砕するだろう。 鬼十郎は、怒声を涸らし た。
る。だが抵
ばくだい
りよく
ふんさい
どせい
か
こんじような
(ふふふ.....あと一歩だっ!)
「持ちこたえろ、根性無しっ!」
ふだ

「私は切り札でしょう！ 守ってくださいよ！」
暁雷上人の念が、ぐうっと圧力を強めた。周囲を震動させる呪霊の電撃が、 打撃力を力
押しに加速する。
「き、鬼十郎殿っ、だめだっ！」
あざむ
つみ つぐな
（報いだ！ 罰だ！ 我らを欺きし、罪を償え！）
しんどう
ちから
しつそう
蛇骨丸の意識が白く弾けかけた。 鬼十郎の肩から胸へ、稲妻が袈裟懸けに疾走する。ど
す黒い血が、 退魔師の視界を染めた。
しゅんかん
その瞬間・・・
（しまったっっ！）
お
とど
蛇骨丸が、どうと地に倒れる。だが暁雷上人の包囲網は止めを刺す事なく、を停止したのだ。焦った
雲水は、背後へ退こうとする。しかし呪神の目前には・・・・・
不意に攻撃
あせ
うんすい
しりぞ
せま
はだ
おのれ
鬼十郎が迫っていた。
肉を裂かれ、肌を焦がし、己の血にまみれた少女は、待っていたのだ。切っ先を水平に構え、一息に
暁雷上人の懐へ達する。 かわば、抗する霊気も無い。 奇顔は最後の瞬間、恐怖に醜く歪んだ。
この一瞬を
め
ふところ
いとま

す暇も無けれ
き がん
きょうふ みにく ゆが
いのち
「一刀に命をかける.....！」
のどもと
切っ先は、呪神の喉元に突き立っていた。
「必殺の一刀さえ待てば、勝ちは我にある！ これが卜伝流退魔秘法の教えだっ.....！」
（馬鹿な.....）
（·····呪力だけで・・・我が霊体を斬るとは・・・・・・）
雲水は、喉元をかきむしった。だがうなじまで突き抜けた一撃は、もはや呪神の命数を
断っている。静かに、鬼十郎は太刀を抜き払った。霊体を粉砕された暁雷上人は、頭頂からぐずぐず
と溶け出していく。雲水笠一つ残し、呪神は大地の染みと化した。
ふんさい
めいすう
うんすいがさ
だいじょうぶ

「又四郎、大丈夫か!」
「お、御師匠様こそ.....ううっ!」
ほうろく
こた
てのひら
すべ
少年の手をつかもうとし、
鬼十郎は悲鳴を堪えた。掌は、血でぬるぬると滑っている。初めて自分の損耗を見下ろし、
退魔師は苛立たしく苦渋の声を漏らした。
そんもう
いらだ。
くじゅう
「だいぶ.....　やられた...つうっ!」
「わ、私に構わず、蛇骨丸さんとお先へ!」
ばら
「.....ここであの婆羅鬼と戦うつもりか!」
「焙烙が残ってます.....これで何とか.....」
「そうだな、貴様の剣はさっぱりだからな.....」
退魔師は、背後を振り返った。
蛇骨丸は動かない。そのさらに向こうでは、が婆羅鬼に手間取っていた。
弟子にうなずき、鬼十郎は気丈に笑顔を浮かべて見せた。
まだ宝蔵院
きじょう
「無理はするな、　必ず戻る.....!」
「御師匠様も!」
応えて、又四郎は婆羅鬼の背後へ這い進んだ。
退魔師は、大きく肩で息を吐戦意が、少女の五体に張った。
鬼十郎は太刀を杖に、地に伏す呪神使いへ駆け寄った。
く。新たな
みなぎ
ふだ
「起きろ、切り札! 寝てる暇は無い!」
「捨て札でいいです、置いて行って.....」
「貴様の方が浅手だ! 情けない声を出すな!」
けと
背中を思い切り蹴飛ばされ、蛇骨丸は苦痛に目を見開く。その眼前に、血みどろの阿修羅の形相が立ちはだかっていた。 髪を振り乱し、 全身から血を流すその姿は、処刑された落ち武者を思わせる。
ぎょうそう
しょけい
むしゃ
かがや
それでいて、眼光だけは澄んだように輝いていた。
生気に満ちた顔を上気させ、汗に濡れた頬を袖でぐいと拭う。
そしてゆっくり、はあーっと大きく息を吐いた。
そで
ぬぐ
あま
甘い、　少女の
きがい
みぶる
香りが蛇骨丸にかかる。　鬼十郎の気概と美しさに、呪神使いは身震いがした。

「そ、そんな身体で.....」
「貴様を守るためだ！ 貴様を温存してこそ、我らに勝ちがある.....ぐうっ.....！」
「何か、手当をしてから.....」
たて
「そんな暇があるかっ！ わしは楯で良い！ 死ねば、手当の必要も無いのだ！ 行く
ぞっ!」
はる
りょうが
今更、蛇骨丸は恐怖した。
鬼十郎の呪力は、人間の域を遥かに凌駕している。図り知れぬ闘志と、徹底した犠牲心。
やはり希代の、 退魔師には違いなかった.....。

とうし
てってい
ざせいしん
きだい
(暁雷上人が倒された.....)
ひび
気配が、暗黒に苛立ちを響かせる。
かさびくに
(例の退魔師、直にここまで来よう。 防げるであろうな、傘比丘尼.....?)
(申すまでもなく.....)
こうしょう
おおぎよう
自信に満ちた哄笑は、大仰にうなずいた。
ばん
まか
(さして時も要りませぬ。万事、お任せを)
しず
ぬし
あくらつ
はな
わな
めぐ
気配が闇に沈んだ。 哄笑の主は、悪辣な霊気を放ち、 呪霊の罠を四方へ張り巡らせた。

「ここは.....！」
とつぜん
いっぱい
せんこう
戸口を蹴破り、蛇骨丸と鬼十郎は声を揃えた。
突然、視野一杯に閃光が広がる。目も眩む光量に、二人は慌てて駆け戻ろうとする。しかし、遅い。
両名はすでに、異界に足を踏 み入れていたのだ。
あわ
もど
おそ
陣屋は、廃城の中心にあるはずだった。朽ちながらも唯一残った廃屋は、かつての城の中枢である。
飛び込んだ二人が目にする物も、廃材の山か何かであったはずだ。 それが.....
「奴ら、向こうからお出ましだぞ・・・・・・」
「なめられてますね、完全に.....」
「いや.....相当数、伏せておる。 油断すな」

こうや
一面の、荒野である。
まがまが
空は赤黒い雲に覆われ、禍々しい強風が大地に吹き荒れていた。雑草一本無い地表は、
水気に飢え、堅くひび割れている。陣屋の内は、二人を待ち受ける魔界に変じていた。
かた
まか
ふる
その魔界の果てを指す、遠い地平の上に・・・・・・
「鬼十郎殿.....あれに.....」
かなた
きょ
震える指が彼方を示す。蛇骨丸は、虚無の大地にそそり立つ、唯一の大木を見つけていた。枯れた枝を屍の腕のように伸ばし、苦悶するように屹立する幹は、さながら墓標を思わせる。だが呪神使いは、 その幹に縛り付けられた手弱女にも気が付いていたのだ。
しば
たおやめ
「千鶴様.....」
おもしろ
「面白い.....取れるものなら、取ってみよと言う訳か。 望むところだ.....!」
鬼十郎は柿の種を口に放ると、苦みに顔をしかめてみせた。が、その苦汁で痛みを堪えるや、両手に剣を握らせる。 右手には太刀を、左手には脇差を逆手に握り、 退魔師は蛇骨丸の肩から離れた。
にぎ
わきざし さて
かた
はな
だいじょうぶ
「大丈夫なんですか、 本当に.....」
ほか
だれ
「くどいぞ····· 我らの他には誰もおらぬのだ。 やらねばならぬ.....!」
とも
「勿論、お供しますよ.....!」
うなずいて、 退魔師は蛇骨丸の前に出た。
きさま
ひめさま
「わしが斬り伏せる。 貴様は姫様の元へ.....」
おから
だいじ
「くれぐれも御体を大事に.....」
「させてくれぬよ、奴らがな...・・・」
いつしゅんおく
声と同時に、鬼十郎が飛ぶ。
呪神使いは、背後へとんぽを切った。一瞬遅れて、複数の攻撃が二人を襲う。 爆発、 火柱、強酸、異臭が一斉に炸裂し、蛇骨丸は悲鳴を上げた。
おそ
ばくはつ
きようさん
いしゅう いつせい さくれつ
「鬼十郎殿っっ!」
しんそく てんかい

やいば じゅう
だが退魔師の返事は無い。 宙へ舞った鬼十郎は、身体を神速に転回した。
左右の刃を縦横に閃かせて、少女は荒れ地に着地する。 辺りへ、得体の知れぬ残骸が落下した。
退魔師は、鋭い視線を周囲へと振り向けていた。
おう
ひらめ
あた
きょううん
いぎょう
雲と荒野を、異形の群れが埋めていた。
人、獣、鳥、魚、虫見知った生き物の醜悪な部分を、繋ぎ合わせた化け物たちである。蝙蝠の羽を持つ蛆虫たち。下半身をなめくじに変えた裸女。 半ば腐乱した巨大な猫の首。
蛙の頭を揺らす赤子の群れ。
こうもり
うじむし
らじょ
ふらん
きょだい
ざっと二百。 一目見て分かる、いずれも戦いのために生み出された使役呪神ばかりだ。
じょうだん
蛇骨丸は、 退魔師の背へ駆け寄った。
「し、勝算は、鬼十郎殿?」
「どうにも数が多いな、 手なずけられるか?」
とうそう
かたまり
「冗談! みな、闘争本能の塊ばかりですよ! まったく、可愛げってもんがない!」
「だったら、しばし待て.....」
鬼十郎は、ぐっと地につま先を擦り込ませた。
「今から.....斬り抜けるっ!」
おたけ
さっとう
雄叫びが殺到した。
きょうそう
とつにゆう
いちげき
ひと
おおかみ
は
その狂騒のただ中へ、退魔師が突入する。 最初の一撃が、一つ目
狼の首を刎ね飛ばした。続けて左の脇差が、黒天狗の顔面を断ち割る。背後へ回った双頭蛇へ回し蹴りをくらわし、人面狐の背を飛び越える。
果敢に飛びかかる白髪の塊は、体当たりで跳ね飛ばし、直後に太刀で両断する。けたたましい絶叫が次々、荒野へこだました。
くろてんぐ
そうとうじゃ
じんめんこ
リ
かかん
はくはつ かたまり
は、
たち

ぜつきょう
「あれで呪霊無しだもんなぁ!」
かんたん
すいしようだま
感嘆の笑みを浮かべ、蛇骨丸は水晶玉を手にした。 一念、 使役呪神が解放される。
たの
きんれい
「頼むぞっ、金霊っ!」
ゆうやく
こうか
呪神使いも勇躍、巨大な硬貨へ飛び乗った。 敵群は、鬼十郎に気を取られている。
蛇骨丸は、そのまま強風を突っ切り、一気に千鶴へ迫ろうとした。
せま
「蛇骨丸、焦るなっ!」
毒蜘蛛の胴体を撫で斬り、 退魔師が怒鳴る。
どくぐも どうたい
「まだ敵は多い! 無理するな!」
しょうねんば
「ここが正念場ですよ、 鬼十郎殿!」
こた
空から応え、蛇骨丸は前方の呪神の群れを見据えた。 呪力は、すでに十分練られている。
40
ごめん
「出し惜しみはもう御免ですっ!」
えんえんえんえん
はな
せいげき
炎煙炎煙の名を呼び、
呪神使いは空中へ水晶玉を放つ。敵の迎撃の中心で、使役呪神は素早く具現化した。巨大な火球の誕生。空へ舞った呪神たちに回避の余地は無い。 二十匹あまりの呪神が、瞬時に炎に呑まれていた。
ぐげんか
たんじょう
ま
おやま
「やるな、三流女形っ!」
とつば
鬼十郎は、敵勢を突破する蛇骨丸にほくそ笑んだ。騒ぎ立てる呪神たちは、背後の金霊を追おうとする。だがその背に、鬼十郎の両刀が襲いかかった。
たった一人の退魔師に、化け物たちは退く事も許されないでいる。
お
しりぞ
ぴき
「千鶴様! 姫様!」
さけ
叫んで、蛇骨丸は大木へ急行した。急くように金霊から飛び降り、使役呪神を回収する。初めて会った時の市女笠が、 力無く幹に束縛されていた。 その柔肌に食い込む荒縄
に、呪神使いは思わず声を上げた。
いちがさ
そくぼく
やわはだ
あらなわ

「御無事ですか、千鶴様っ」
「その声は･･････」
「あなた様の蛇骨丸にございます！ 鬼十郎殿ともども、姫様お助けに参りました!」
にら
呪神使いは、敵の動きを睨みつつ、荒縄を解き始める。 千鶴の声は力無く、か細い。
そして束縛が緩むや、 市女笠はぱたりと荒れ地に膝を突いていた。
ひざ
「どこか御怪我は、千鶴様!」
「ありませぬが･･････足が震えて・・・・・・」
きゃしゃ
かか
声も、確かにわな た。
ている。蛇骨丸は細い指先を手にし、千鶴の華奢な肩を抱き抱え
（ともかく.....御無事で何より・・・）
あんど
かく
ほっと安堵の息をつくも、呪神使いは少女を背中に隠した。
鬼十郎と共に呪神の群れは、徐々に大木へ迫っている。叫喚を上げつつ向かい来る敵勢に、蛇骨丸は念を集中し た。
じょじょ
せま
きょうかん
まか
「どうするのです、 蛇骨丸殿!」
「お任せを！ みな吹き飛ばして見せます!」
「そんな霊気が残っておるのですか!」
「無論！ これが私の切り札!」
ふだ
にっこり笑い、 呪神使いは姫に振り向いた。
「最後まで温存した、 使役呪神を使います!」
（それは.....困るな）
急に、そんな声がした。

蛇骨丸の背筋が凍りつく。嘆れた女声の主は、他の誰でも無い。市女笠の奥から、意に満ちた咆哮が低く響 だが気づいた時には、呪神使いの身体は衝撃に大きく弾き飛ば されていた。
ほうこう
しょうげき
「蛇骨丸、そいつは.....!」
鬼十郎の視線が、乱戦の中、市女笠の正体を捕らえていた。
笠を跳ね上げ、現れた顔は剃髪した女のものである。
しかしその眼大きく見開かれた黄色い両眼に瞼は無い。瞳も縦長に尖っている。
蛇眼を持つ尼僧は、使役呪神たちに腕を振り上げた。
ていはつ
まぶた
ひとみ
じゃがん
にそう
とが
き

ものども
（者共、かかれ！ その退魔師を斬り刻めっ!）
「貴様も呪神かっ!」
たお
はら
退魔師は、倒れ臥す蛇骨丸へ駆け寄ろうと、左右の使役呪神を斬り払った。が、高笑いの蛇僧は、呻く蛇骨丸を足蹴にする。
うめ
あしげ
（一瞬の安堵が命取りであったな、くくっ.....）
「ほ、本物の・・・・」
もんぜつ
たていちもんじ
せんけつ
そ
言おうとして、蛇骨丸は悶絶する。
縦一文字に裂かれ、鮮血に染まった背中を女の足が踏みにじる。蛇眼は、鬼十郎へ向けられた。
たま
ざしき
さいちゆう
かさびくに、
わな
（本物の千鶴なら、珠を抜く儀式の真っ最中。見事、この傘比丘尼の罠にかかったな.....）
ま
ただなか
かた
ばし
だが、名乗られた鬼十郎は、未だ剣戟の真っ只中にあった。群がる呪神を片っ端から斬り飛ばし、何とか傘比丘尼に迫ろうと試みる。
代わって、蛇骨丸の呻きが問いかけた。
「儀式.....儀式とはどういう意味だ.....?」
（無論、媚珠を取り出す儀式...）
「媚珠はこれだ・・・・・・これが媚珠であろう.....」
ふところ
じゅ
たから にぶ かがや
呪神使いは、懐から数珠を取り出した。
あの火災の中、拾い上げた宝は鈍く輝いている。だが傘比丘尼は、高らかに嘲笑を響かせた。
ちょうしょう
ひび
いつわ
あざむ
[おもちゃ]
（ほほほっ！ それが偽りの媚珠か！ なるほど、人間の眼を欺くには良い玩具だ!）
「その数珠が偽り? どういう意味だ!」
鬼十郎は、追いすがる敵を打ち倒し、傘比丘尼の眼前へ迫りかけた。
が、その頭上に.....
（それを知ってどうする.....）
声に、鬼十郎は顔を上げた。
おのれ りようで
ふる

はだ
あわだ
そして.....己の両腕を見下ろす。 指先から走った震え。
いつの間にか、肩までびっしりと肌が粟立っている。 何度も唾を飲み込む。
奥歯は、がちがちと鳴っていた。
(落ち着け·····落ち着くのだ.....!)
声は、ただ一言である。
いいち
きょうふ おとしい
しかしその一言が、大陸随一の退魔師を恐怖に陥れていた。
太刀を握る手に力が入らない。それでも鬼十郎は、顎を堅く噛み、両腕に闘士を送り込む。
退魔師は今一度、 毒悪な 上空へ視線を振り向けた。
かた
とうし
ゆうぜん
いんさん
赤黒い雲が、悠然と流れて行く。 陰惨な雲海はやがて割れ、 そして.....
どくあく
太陽が現れた。
つらぬ
いくすじ
こうりん
ぼうちょう
青白い光の帯が雲を貫き、幾筋も魔界へ降臨する。 熱気を帯びた大気が膨張し、鬼十郎
は目を伏せた。 肌が焼けるように熱い。
(おお.....黒鶴様・・・・・・)
あお
かんたん
なんざんしんでん。
なにとぞ
天空を仰ぎ、傘比丘尼は感嘆の声を上げた。
きづだに
(南山神天が造りし、木津谷の守り神滝と泉と森の守護者にして、平穏の扱い!!!.....)
ばつ
(何卒、この者たちに罰をお与えください・・・・・・目連童子と暁雷上人を討ちし、この罪深き
人間どもに·····お怒りの矢羽を...)
「来るかっ.....!」
ばくだい
鬼十郎は一撃に備えた。だが蛇骨丸の知覚力は、予想を越える莫大な呪力の出現を感知 していた。
おののく声が警告を発する。
つみぶか
「だめだ、鬼十郎殿!」
せつな
らいこう
はじ
いなずま
言いかけた刹那、上空から雷光が弾け飛んだ。 鬼十郎の視界に、幾筋もの稲妻が落下する。
退魔師は息を呑んだ。 かわす間などない。 鬼十郎自身、経験したことのない強大な呪
霊が、群れをなして退魔師に殺到していた。
さつとう
(馬鹿なっっ!)

しゅんかん
りょく げんとつ
でんこう
悔やんだ瞬間、意識が白光した。 四肢それぞれに、呪霊の威力が激突する。 電光の直撃
を受けた退魔師は、悲鳴すらあげられない。 轟音と共に、 鬼十郎は荒れた大地に叩きつけ られた。
それで・・・・・・すべて終わった。
ごうおん
たた

「鬼.....っ!」
ぜつきよう みずか
びどう
たお
蛇骨丸は、絶叫を自ら呑み込んだ。 使役呪神の群れの中、
退魔師は微動だにせず倒れている。まさに一瞬、一撃の事であった。
いつしゅん いちげき
「.....立ってくれ.....」
動かぬ鬼十郎に、蛇骨丸は囁くように呼びかけた。
「.....立ってくれ、 鬼十郎殿・・・・起きてくれ、動いてくれ.....」
おろ
おろ
(愚かなことよ・・・・・・黒鶴様の呪霊に、呪力だけで刃向かおうなど・・・・・・愚かな退魔師じゃ.....)
傘比丘尼は、そのまま蛇骨丸を踏み続ける。
しょせん
(大陸一の退魔師とは言え・・・・・・所詮は人間
我ら木津谷の呪神を束ねる黒鶴様に勝てるはずがない.....)
「戦うんだ、鬼十郎殿 立って戦え... 敵は来ている・・・・・・黒鶴が来てるんだ・・・・・・」
(貴様もいつまでも未練たらしい・・・・・・)
「鬼十郎殿っ! 聞こえないのか! 鬼十郎殿!」
こうばく
やがて.....使役呪神たちの姿が、次々かき消えて行った。広漠たる平地には、ぽつりと
退魔師だけが取り残される。
かわ
その傍らに、聖光が降り立っていた。
せんこう かがや
うな
たなびく光の帯の中、さらに眩しい閃光が輝き出す。 光は荒れ狂い、唸りをあげて咆哮
を上げた。だが白熱する嵐に構わず、蛇骨丸は視線を逸らさない。
そして爆光は収束すると、ようやく人型へ変転を開始した。
あらし
ばつこう しゅうそく
ほうこう
へんてん
(なんて.....呪力だ.....)
ほうぜん
じんじょう
くわ
呆然と、蛇骨丸は変化を見守った。呆れるほど強大な呪力と、尋常でない量の霊気を蓄
えた敵が、今まさに姿を現している。 勝負になどならない。一瞬にして戦意を喪失するほ
どの、歴然とした力の差があった。

そうしつ
うわ言でも言うかのように、蛇骨丸は口をわななかせた。
ひとかげ
「き、貴様が木津の・・・・・・」（左様.....　黒鶴）
鷹揚にうなずき、相手の視線が蛇骨丸を真っすぐ見つめる。その気圧されるような雰囲気に、蛇骨丸は脱力した。
だつりょく
（勝てるわけがない.....）
（こいつは呪神なんてもんじゃない.....）
（まさに・・・・・・神だ・・・・・・）
（木津谷の守り神・・・・・・）
だが血にまみれた手で這いながら、呪神使いは上体を起こした。
「聞かせてくれ、全て.....何が狙いなのか.....なぜ、こんな陰謀を企てたのかを.....」
ざいあく
（全ての罪悪は、　榊原家にある.....）
めいもく
しょうちゅう
くだ
人影は、言って静かに瞑目した。　と、蛇骨丸の掌中で数珠が微塵に砕け散る。
黒鶴はおもむろに、蛇骨丸へと歩み寄った。
あゆ
さいか　さら
（その罪科を晒せと申すのだな.....?）
たてえぼ
こばかま
すいかん
黒い立烏帽子に、黒い小袴。白い水干をひるがえし、近づいて来る。
その細みの青年に、蛇骨丸は声を無くした。小さく尖った顎の内には、涼やかな目元と紅い唇が彩られている。白磁のような肌は透けるようで、細い指先一本一本にも、磨き抜かれた彫刻美が滲んでいた。　戦慄するような美しさである。
とが
くちびる
はくじ
はだ
こと
せんりつ
むかし　さかのぼ
（事は六百年の昔に遡る.....）
ひび
木津の黒鶴は、鈴音の如き声を響かせた。
るふ
おとぎぞうし
たん
（人間たちの間に流布される話・　・御伽草紙の物語に端は発する.....）
「あ、あれは全て.....　嘘なのか.....?」
（全てではない）
そば
ひざまず
黒鶴は、蛇骨丸の側に跪いた。
みようじゅ　かがみいし

とくじつ
しんこう
（確かに私は明寿に鏡石を送ろうとした。彼の者の篤実なる信仰心に打たれたのは誠だ）
傘比丘尼も言葉を続ける。
（なれど、あの数珠に込められた石は姉味に非ず。ただの石塊、太子が造りし偽物。媚珠とは、決して譲り渡せぬ代物なのだ）
わた
しろもの
「では媚珠とは.....」
（我が体内にあった霊気の塊）
さと
かたまり
黒鶴は、諭すようにそう告げた。
ゆいいつもに
たしゃ
みりょう
（生まれ持って身体の内に存在した唯一無二の代物。他者を魅了する絶対呪霊を発散する.....わしにとって、なくてはならぬ物だ.....）
だま
（それを貴様ら人間が奪った！ 太守どもが黒鶴様を騙し、奪い去ったのだ!）
「ど、どうやって.....」
けつかい
ぼうぜん
問い続けるしかできない。呆然と、蛇骨丸は黒鶴の視線に魅入られている。その声に、優しく呪神は応え続けた。
こた
にしな
たき
（わしは、明寿に仁科の滝へ来いと知らせた。
そこで鏡石を渡そうとした。だが明寿は、わしを敬うが余り、太守にこの件を知らせてしまったのだ。 時の雲州太守、 榊原忠政に な）
（黒鶴様の御尊顔が拝める。 是非、 太守様もいらして、御姿を押されては.....と）
わな
うわさ
（だが.....それが間違いの元であった。忠政は欲に駆られた。噂に聞く、わしの嫺珠を手に入れ、家臣領民を束ねようと。 そして媚珠を奪うべく、罠を張った。三十人もの退魔師が結界を造り、二十人もの傀儡使いがわしを襲うた。
そ奴らに.....わしと明寿は捕らわれ たのだ.....）
しょうえん
蛇骨丸は、動かぬ鬼十郎に目をやった。 退魔師からは、黒い焦煙が立ちのぼっている。
たんたん
だが構わずに、呪神は淡々と言葉を続けた。
（忠政はわしの腹を裂いた。媚珠を奪い、わしの体を打ち捨てた。抗う明寿も斬り捨てた。それ以来、媚珠は榊原の家にある.....）
「千鶴様の体内に.....か?」
みずか
いつわ
（そうじゃ！ 忠政は自ら媚珠を呑み込んだ!
そして偽りの物語をでっちあげ、媚珠の力を得て、奴は雲州の支配を確かにした!）
め ぶ
「ならなぜ、姫様の中に媚珠があるのです!」

呪神使いは、傘比丘尼を見上げた。
こしい
「なぜ今まで奪い返さなかったのですか！ なぜ今になって、この輿入れの時に！ なぜ.....」
蛇骨丸は、黒鶴へ視線を戻した。
ひど
「なぜ.....千鶴様がこんな酷い目に.....！」
ぬし
は
泰然と黒鶴は立ち上がる。 木津谷の主は、息を吐いて自ら声を発した。
じょじょ
（忠政が死に、媚珠も失われた。だが媚珠はまた生まれる。
その子孫の体内に、徐々に媚珠は芽吹き始め、やがて立派な霊気の塊と成る...
幾世代も経てな.....）
かたまり
な
「その完成した媚珠が、 千鶴様の中に.....」
きょうせい
とどろ
比丘尼は裂けた口を広げ、嬌声を轟かせる。
（まぁ、待ったわ、待った！ 六百年も！ 媚珠を身ごもった、あの姫が生まれた折り、
我らがどれほど喜んだことか!）
な
かんじん
（我らは、ひたすら待った.....完成した媚珠を持つ者が生まれるのを。だがその肝心の姫は、我らが父祖の地、 雲州を離れると言う）
はな
れいげん
（許すものか！ 雲州の霊源を離れては、 我らとて手が出せぬ・・・・・・
ゆえに我らは媚珠を、千鶴を奪う企てを起こしたのじゃ!）
蛇骨丸は、崩れた数珠のかけらを見つめた。
つく
「榊原家は媚珠を無くして後も、 その力が健在だと見せかけるため、これを造った・・・・・・」
んでん
しんみん じゅうぞく
（その通り!偽物の媚珠を造り、さも霊験ありげに喧伝し、臣民を従属させた！ 忠政
こそ、真の媚珠の力を発揮したが、
子孫はみな偽りの力じゃ!この秘事は、代々太守のみが知り得、家臣は無論、 千鶴すら知らぬ真実！
みな偽りを有り難がっていたと言う訳 だ!）
はつき
（だがあの姫は違う.....）
黒鶴は、蛇骨丸に視線を合わせた。
（あの姫は榊原忠政以来の、真の媚珠を持つ者なのだ。それゆえ、わしもあの姫の腹を裂き、媚珠を取り出す。 誰にも邪魔はさせぬ）
だれ
じゃま
はら
すいかん
うちそ
言って、青年は水干を脱ぎ捨てる。そしてやおら、内袖の胸元をぐいと開く。 思わず、
蛇骨丸は息を呑んだ。 黒鶴の白く平板な胸には、縦に真っすぐ、長い傷痕が記されていた のだ。
きずあと

（この傷は、まだ癒えてはいない.....）
ふく
黒鶴は、声に静かな怒りを含ませる。
か
（媚珠を失いし後は配下の呪神も減り、
我が呪力も弱まった。だが癒えるのを待っていては、媚珠は雲州から離れてしまうのだ.....!）
こう
おうが
蛇骨丸は、力無く横臥した。
まちか
あの時、千鶴を間近で見た時:
・蛇骨丸を捕らえた何かは、確かに媚珠の力だったのだ。ただし数珠が発する力ではなく、
千鶴自身が持つ力。 生まれついての絶対呪霊.....。
ひど
「なるほど.....お気持ちは察します。 ですが...・・・よくそんな酷い事ができましたね?」
呪神使いは再び、よろよろと身を起こした。
りよく
しなん わざ
「たとえどれほど強い呪神でも、媚珠の魅力を持つ姫様を傷つける事は至難の業。珠に抵抗できる呪力が回復しているとも思えない」
ぬぐ
蛇骨丸は、口元の血を拭い去る。
「いったい·····誰が姫様の腹を裂けると言うのですか.....?」
おそ
（知ったとて、もう遅いであろう）

Translation Break 5

こくう
黒鶴は、虚空から長刀を現出させた。
（目連や暁雷を斬った者を生かしておく訳にはいかぬ·····それとも、手の者を殺めた罪として、千鶴の最後を見てから死ぬか?）
「できれば・・・・・・あなたの最後を見てから.....」
（ほざけえっっ!）
は
うろこ おお
傘比丘尼の一撃が、今一度蛇骨丸を跳ね飛ばす。
鱗に覆われた両腕が呪神使いを打ち、よろめく身体は荒野にめり込んだ。
その倒れた喉元に、すいと黒鶴の刀身が近寄った。
こうや
たお
のどもと
（呪神を使う者は、 呪神の味方をせねばな.....）
「私の味方は私が選びます.....」
ぎまん
ざいにん
（それが悪しき家系であってもか! 欺瞞や偽りであってもか! 罪人でもか!）
あら
おのれ
初めて、黒鶴は声を荒げる。だが蛇骨丸は自信を持って、己の信念を口にした。

「私の知る千鶴様に... 罪などありません。
私を信じてくれた方です.....たとえあの魅力が媚珠の力であっても、私は千鶴様の気持ちに応えます.....」
（そのためには、退魔師とも組むのか!）
もちろん
「ええ.....勿論」
（貴様ら呪神使いの敵ではないか!）
「ええ・・・・・・確かに」
びしょう
答えつつ、思わず蛇骨丸は微笑を漏らした。
「ですが私は美人の味方なので.....」
「ほざきおって.....」
やくそく
「確かに、正反対の人間ですよ.....ですが約束したのです。共に戦おうと。
共に力を合わせて姫様をお守りしようとね・・・・・・」
（その約束のために死んでも良いと申すか･･･...）
「それしか道がなければ.....」
まぶた
観念し、蛇骨丸は瞼を閉じた。傘比丘尼がにんまり笑う。 黒鶴は無表情に刃を振り上げた。
やいば
（潔い心掛けだ・・・・・・）
「それはどうかな.....」
突然、そう笑う声がする。嘲笑に、黒鶴が振り返る。傘比丘尼は怒りに牙を剥き出した。
だが.....
ひき
あぜん
むか
二匹の呪神の前で、嘲笑はもう一度繰り返された。 唖然とした視線に迎えられ、声の主
は深く長く、 息を吐いた。
くさ しば
だま
もの
「臭い芝居だ ・騙されるなよ.....そ奴の本性は・・・・ただの痴れ者だ・・・・・・」
「鬼十郎殿っ −J
ちんにゆうしゃ
ふる

「き.....鬼十郎殿.....」
せりふ
闖入者に、蛇骨丸は震える声で呼びかけた。
「良い台詞だな、蛇骨丸・・・・・・黒鶴も泣かせるほどの、臭い三流芝居だ・・・・・・」
ようやく笑ってみせる。だが喉に詰まった血が、言葉を中断させる。それでも鬼十郎は呟きすらせずに己の血を飲み込んだ。
しわぶ
おのれ
ほか
（馬鹿な、生きていたのかっ.....!）
ひとかけ
げきとう

叫んだ傘比丘尼は、立ち上がった人影に目をこらす。 しかし半日間の激闘で、
退魔師はずたほろに斬り刻まれている。 太刀一本を両手で支える姿は、人間の残骸にしか見えない。
たち
さんがい
（いや.....死にぞこないか・・・...）
まんしんそう
傘比丘尼の言葉に、蛇骨丸も同意した。 立っているのがやっと。まさしく満身創痍である。
「無茶だ、鬼十郎殿!」
きず
とうつう
自らも疼痛を堪え、蛇骨丸は声を飛ばした。
「その傷じゃ、黒鶴には‥‥‥」
「負けると申すか、 馬鹿者が・・・...」
制して、鬼十郎は笑みを浮けべた。
しょせん
「たとえ名高き呪神とは言え・・・・・・所詮は鳥ではないか..... 人間の知恵にかなう訳がない」
固まった血で、 退魔師の顔は真っ黒である。 その顔に鋭い眼光を光らせ、少女は刀を持 ち上げた。
「それに.....忘れたか... 我らの切り札は、貴様の呪霊だ
貴様がいる限り、勝ち目はある。黒鶴を倒すのは、貴様の仕事だ・・・・・・」
もく
とう
鬼十郎は、まっすぐに呪神使いの瞳を見つめた。
闘志が眼光に宿っている。勝負をあきらめぬ、退魔師の双眸であった。
そうぼう
（勝機がある.....!）
（鬼十郎殿は、黒鶴の弱みに気が付いてる）
（それに気づかねば・・・・・・）
げきど
だが蛇骨丸の視界には、激怒を剥き出した傘比丘尼の姿が現れていた。
（無礼な.....!）
とが
黙する黒鶴の前へ進み、傘比丘尼は両腕を振り上げる。
十本の指が鎌のように尖り、呪神は戦闘態勢に移行した。
びしょう
ぜつきょう
（貴様ら、まこと黒鶴様に勝てると思うておるのか!
その前にまず、この傘比丘尼を斬ってから、大口叩くがいいっ!）
たた
「なるほど.....なら、 来るがいい.....」
微笑のまま、鬼十郎も切っ先を据え直した。
「蛇骨丸とは相手をさせんぞ・・・貴様を斬るのは、わしの仕事だ.....!」
（死ねえええええっっ!）
絶叫が、荒れ野にこだました。
ちようやく
おど
こし
跳躍した傘比丘尼は、鬼十郎の頭上に躍り出る。だが退魔師は動かない。腰を落とし、太刀を脇へ水平に構える。 傘比丘尼は、一気に鬼十郎へ急迫した。
きゆうはく
たち

「鬼十郎殿っ!」
蛇骨丸の声と同時に、傘比丘尼が退魔師に激突した。が、まともに鬼十郎の両肩に
食い込む。上がる血しぶきに、少女の身体が一瞬ぐらついた。
はし
と
はくじん
が、直後に鬼十郎の太刀が戻った。真横から跳んだ白刃が、傘比丘尼の左腹を直撃す
る。太刀筋は、そのまま右の腹へ抜けていた。斬り飛ばされた上半身が、霊体を撒いて大地へ落ちる
。瞬時に消失した呪神は、荒れ地に正体をさらけ出す。 破れた蛇の目傘を踏み
にじり、退魔師は黒鶴へ切っ先を振り向けた。
(良い腕だな.....)
長刀を構える黒鶴の前で、 鬼十郎は肩を上下させた。 あとどれだけ戦えるのか。
分からぬほどに傷は深く、 思考も鈍化していた。だが付き従うように、蛇骨丸も立ち上がった。
きず
どんか
「私の仕事でしょう? ....鬼十郎殿.....」
すいしょうだま にぎ
いつとう
黒鶴の背後で、ともかく呪神使いは水晶玉を握り直した。
蛇骨丸は一揆の重責を噛み締め、鬼十郎と視線を合わせた。
「いよいよ、切り札の出番ですね.....」
うれ
「あまり嬉しくない切り札だがな.....」
「もぉ.....頼りにしてるくせに.....」
はさ
ととの
血に染まった顔が見つめ合い、ほほ笑む。 黒鶴を挟み、二人は一撃の機会に息を整えた。
こと
(どうにもならぬぞ、 それでも来るか.....?)
やと
「どうにかするために雇われたのでな.....」
鬼十郎が、じりっと詰め寄る。
「・・・・・・貴様とて本領は発揮できまい」
(どういう意味だ?)
「かつての力は癒えておらぬのであろう?」
退魔師は、値踏むように黒鶴をねめつけた。
ぞくせい
「五つの属性に通じ、 三十の呪霊を駆使すると言われた貴様だ。
その気になれば・・・・でも事を成し得たはず。 それを、かほどに使役呪神を動員したのは.....」
「六百年前の傷はそれほど深かったのか.....」
当然の事に、蛇骨丸も気が付いた。 黒鶴は腹を裂かれ、打ち捨てられたのである。
呪神だからこそ生き延びたが、その回復には気の遠くなるような時間が必要なのだ。
媚珠が再生するよりも、長い長い年月である。
きずあと
1
人
黒鶴は、傷痕を軽く撫でた。
(さほどに弱いと思うか.....?)
どとう
鬼十郎が、蛇骨丸が、同時に念を集中する。前後の敵に、 呪神も霊気の怒濤を解放した。
(では自らをもって試すがいいっ!)

しゅんじ
はんらん
こう
思念が、霊気の怒濤を打ち放つ。 黒鶴の攻撃呪霊は、瞬時に四方へ氾濫した。抗する間
もない。呆気なく、 蛇骨丸は悲鳴を上げていた。
「鬼十郎ど.....!」
こた
よゆう
だが、退魔師にも応える余裕は無い。 黒鶴の呪霊に押し流され、鬼十郎の姿もかき消え た。
まず津波が襲い来た。無から現れた呪霊の高波が、一気に荒れ地に送る。波に呑まれた
二人は、いつの間にか水中に没していた。
せま
た
だがそれで終わりではない。呼吸を求め、 もがく身体に火柱が迫った。
波を断ち割り、うなりを上げる炎熱の竜。 その苛烈な顎が、
蛇骨丸の胴に食いつき、鬼十郎を波間へ跳ね蛇骨丸の口から、ごほっと泡が漏れた。
えんねっ りゅう
かれつ あご
けたちが
どう
しゃくねつ
上げる。 灼熱が全身を包んだ。
(勝てないっっ!)
あわ
じゅりよく
(桁違いの呪力だ! こんな・・・・..)
くもん
こいこう
思考が、苦悶にかき消される。しかし絶望した意識が、抵抗を止めようとした瞬間・・・・・
(これで分かったであろう.....)
とうとつ
かた
かたわ
不意に、蛇骨丸は呼吸を取り戻した。 唐突に、冷たく堅い大地。
傍らに倒れる鬼十郎を見つけ、呪神使いは周囲の変転を悟った。 津波も炎も消えうせていたのだ。
へんてん
さと
ほのお
(たとえ完全に傷は癒えずとも... 貴様ら二人を始末するには十分な呪力だ.....)
うめ むなぐら
落ち着き払い、黒鶴は歩を進める。 足取りが、 ゆっくり鬼十郎に近づいた。
呻く胸倉をつかみ、呪神は強引に退魔師を引っ立てる。
ごういん
(.....それでもまだやると申すか?)
「千鶴様は.....どこだ.....?」
せいさん きわ
あえ
ようやく、鬼十郎は声を絞った。 ずぶ濡れで、焼け焦げの血だるま。
凄惨の極みに、蛇骨丸は無論、黒鶴さえ我が目を疑った。
しゃべ
(まだ意志があるのか、貴様は.....?)

「し、喋らない方が‥‥‥いい、 き、 鬼十.....」
「貴様は・・・・・・だまって... ろ.....」
みす
喘ぎを交わし、 退魔師は黒鶴を見据えた。
「言え.....姫・・・・・・様は.....」
(わしを斬ればすぐに見つかる。 なれど.....)
しゃ
れんびん
うつ
黒鶴は、鬼十郎の残骸を容赦なく揺すぶった。憐憫のかけらも無い声で、
退魔師に向かって言い放つ。
やつ
だれ
(その身で何ができる? もはや貴様は屍だ)
「忘れ・・・たか....貴様を‥‥‥斬るの...は.....」
かばね
虚ろな視線で、鬼十郎はしっかと蛇骨丸を指し示した。
「あ奴.....だ ・・奴が‥‥‥ 貴様を‥‥‥斬る...
奴には‥‥‥貴様の弱みが分かっている.....」
(わしの弱みだと笑止な.....!)
たんせい
黒鶴は、端正な顔をひくつかせた。
けたちが
(呪力も霊気も・・・・桁違いな事は分かっているはずだ・・・・・・どこに付け入る隙がある?)
「そこが・・・・・・弱みよ.....」
鬼十郎は力無く、だが確かにほほ笑んだ。
かく
「誰にでも弱みはある・・・・・・そして弱みを隠そうとして強くなる.....だが弱みは.....その者の中から消えた訳ではない・・・・・・忘れているだけなのだ・・・・・・」
もう一度、今度は蛇骨丸に微笑する。
びしょう
「貴様は強い・・・・・・だが忘れている...元々貴様の内にあった弱みを・・・・・今も心の内にあるはずの弱みを... それが我らの付け目だ.....」
よごれ
あきら
たち
蛇骨丸も、血に汚れた鬼十郎の顔に、確かな笑みを発見した。
そして退魔師の手には、いまだ太刀が握られているではないか。
(諦めちゃいない.....!)
17
呪神使いは、鬼十郎の真意を確信した。 ここまで、
退魔師は絶え間無く戦い続けている。しかも、切り札の蛇骨丸を守りつつだ。蛇骨丸さえ生き残れば、呪霊の力さえ温存す れば、最後には勝てる。 それが鬼十郎の信念である。
ふる
こた
ぬの
その信念が生きているのだ。 応えぬ訳にはいかない。
蛇骨丸は、ぼろ布のような身体を必死に奮い立たせた。
ほう
「じゃあ.....仕方ない。 遊びは‥‥‥ここまでにしますか」
(まだやるのか・・・・・・ しぶとい奴)

ぶたい
「.....これから始まるんですよ。私の.....一世一代の晴れ舞台がね.....」
(見上げた呪力だ·····人間には惜しい)
ふんき
きょうたん
蛇骨丸の奮起に、呪神も驚嘆の視線を送る。
いど
(無謀な戦いを挑むだけの事はあるな.....)
しごく
「お褒めに預かり... 光栄至極.....」
(太守に幾らで雇われたか知らぬが.....)
みくら
黒鶴は、二人を見比べ嘆息した。
(そこまでしてあの姫を助けたいのか?)
「ええ.....勿論.....・・」
言って、蛇骨丸はふらふらと立ち上がった。全身は鉛のように重く、全ての傷が熱く く。
それでも呪神使いは、 水晶玉を手に、黒鶴の前にその身を起き上がらせていた。
「それに.....あなたは鬼十郎殿をそこまで·····傷つけた・・・」
(何が言いたい.....?)
もろ
むすめ
「美しい.....人なのですよ.....私は知っています...見惚れるほどの娘さんです.....
そん な人を傷つけた·····許す訳にはいきません・・・・・・」
こんな時だと言うのに.....
らしん
蛇骨丸は、鬼十郎の裸身を思い出していた。本当の鬼十郎を、ありのままの鬼十郎を。
かれん
【常》の強さはなくとも、美しく可憐な姿であった。 そして、友の死に、激情を露にする
弱さもある。
(そうだ、本当はみんな弱い.....)
あの鬼十郎殿も・・・・・・そしてこの黒鶴にも.....)
(弱く脆い部分があって当然なんだ.....)
(そうだ、みんな.....)
[あらわ
すんぶんたが
めぐ
そこまで思いを巡らせた時・・・・
もう一度、蛇骨丸は鬼十郎を見た。鬼十郎も、蛇骨丸を見ている。
そして二人の意思が寸分違わず·····重なった。
おもむろに蛇骨丸は口を開いた。
くわだ
「あなたの事は、気の毒に思うけど、この企ては許せない ・勝たせてもらいます.....」
(どうやってだ?
この退魔師は呪霊が使えぬ、貴様とて・・・・・・さして霊気がある訳でもなし....)
黒鶴は、同情の笑みをふりまいた。
(いかにしても·····勝ちは無い)
「しかし.....切り札の使役呪神を使えば...?」
蛇骨丸は、水晶玉を黒鶴の前に突き付けた。
「切り札です... 我らの。 こ奴の一撃なら.. .. .. ..
..だ・・・・きっと・・・・・あなたを・・・・・・・・・倒せるはずた.....」
(馬鹿なっ!)

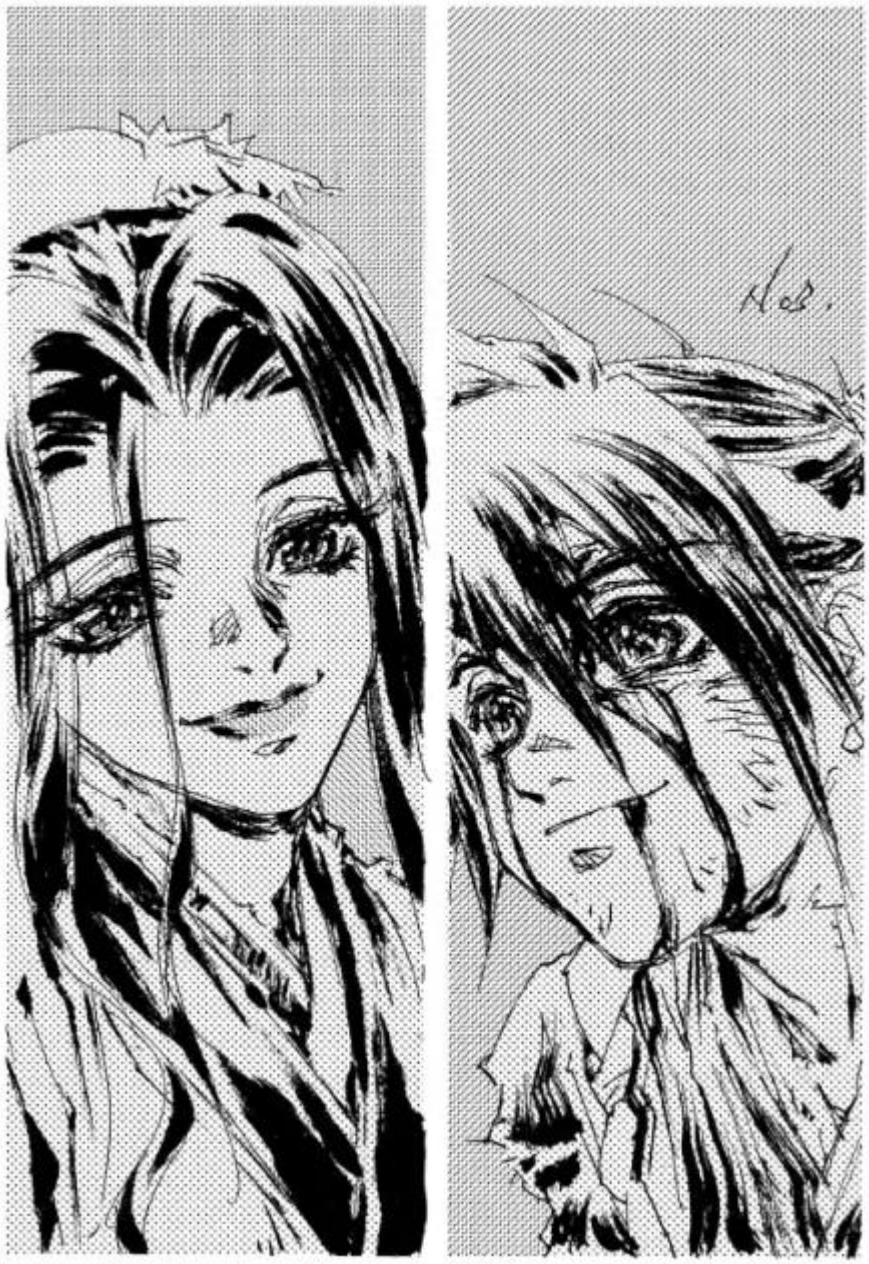
言下に、黒鶴は言い放つ。
ほふ
(わしを居れる呪神などいるはずがない!)
はな
「しかしあなたとて‥‥‥無敵ではない・・・・・・」
問いかけ、 呪神使いは間合いを詰めた。
わし
らくしゅう
「あなたは.....鶴だ。 鶴の呪神だ。なら私は.....鷲の呪神を放つ。 楽州の深山にて捕らえた使役呪神。
こいつなら・・・・あなたの美しい羽をむしり取り・・・・・・肉を裂いてくれる」
その言に.....
はんのう
びくりと黒鶴が反応する。 うなずいて、 蛇骨丸も微笑を返した。
こわ
「やはり..... 怖いものでしょう? どんなに強く・・・・・・ 長く生きる呪神でも... 正体は隠せない。天敵は..... 怖いものです...・・・・・」
蛇骨丸は、体内の霊気を集中する。 呪力をこらす気配を察し、黒鶴の顔も引きつり始め た。
(天敵とて.....臆するものか.....!)
たいぜん いん
黒鶴は、泰然と印を結んだ。
げんしょ
(そのような原初の怖じけなど‥‥‥わしはとうに克服しておる! なめるでないっ!)
おかくご
はら
こんじょう
「では御覚悟を 腹を空かせた群れを ・黒鶴殿にお目にかける今生の別れに・・・・・・」
ゆる
ちょうせんてき
もうさん
呪神使いが、にたりと口元を緩める。
その挑戦的な笑みは、黒鶴に猛禽を連想させた。天敵に食われる恐ろしさ。 本能的な恐怖。
二千歳を誇る呪神にしては、余りに無様な狼狽を示し、黒鶴はぐいと鬼十郎の体を楯にした。
おそ
きょうふ
ほこ
ろうばい
たて
(こ、こ奴もろとも、わしを殺せるか!)
J
「ああ.....心配.....ない.....」
あんど
だが安堵の声で、鬼十郎は捨て鉢に笑った。
「奴は.....分かってる。 今すべきは.. ・わしを助ける事でなく
・・・・貴様を・・・・・斬る事・・・・・・」
ととの
鬼十郎の声も呼吸も、次第に整いつつある。 うなずいて、 退魔師は白い歯を見せつけ た。
へんたいのぞ みや
「やれ.....変態覗き見野郎・・・・・!」
いんけんごうじょうむすめ
ふる

「行きますよ・　・陰険強情娘・・・・・・」
（死ねえええええっっ!）
先んじて、震える黒鶴が走った。
しつそう
はな
けん
鬼十郎を突き放し、
一直線に疾走する。 剣は蛇骨丸の脳天へ落下した。 が、同時に・・・・・・
すいしょう せんこう
はな
しゅんかん
あわ
ちょ
「いでよっ! 呪神・・・・・・」
水晶が閃光を解き放つ。瞬間、慌ただしい羽ばたき。その音が、黒鶴の踏み込みを躊躇させる。習性が突進をくい止めた。
その背へ.....
はまたい
「破魔退いいっっ!」
（ぐげえええっっ!）
つばもと
けしん
鬼十郎は、一刀を鍔元まで押し込んでいた。黒鶴の背に潜った切っ先は、化身の肉体を貫通し、胸元へ突き出している。剣を落とし、喉元をかきむしる黒鶴は、暗雲を仰いだ。
かんつう
だま
むな
だつりょく
のどもと
はと
ゆうぜん
目の前では、蛇骨丸の水晶から放たれた白い鳩の群れが、悠然と空に舞い上がって行空しい光景を見つめ、呪神は霊体を嘔吐した。
おうと
（は、鳩だと.....!）
「騙して・・・・・・すみません.....」
ひざまず
脱力して跪き、蛇骨丸は黒鶴に頭を下げた。
「しかし.....こうでもせねば・・・あなたには勝てない :騙すしかなかったんです.....」
すき
「一瞬の・・・・・・隙であったな.....」
刀にしがみついたまま、鬼十郎も声を続ける。
しょせん
かんち
のろ
おのれ
みじゅく
「
「所詮.....隙を見せた方が負ける。 人の奸智を呪う前に・・ 鶴・・・・・・己の未熟さを呪え・黒
ぼうぜん

返事は無い。ただ呆然と、 黒鶴は飛び交う鳩を見つめている。 最後の呻きを漏らし、青
年は力無く大地に伏す。 年老いた黒羽の大鶴へ姿を戻し、 呪神は静かに命数を終えたのだ。

「つあっ.....!」
ひざ
がくりと、鬼十郎も膝をついた。そのまま地にロづけるように、身体を折り曲げる。
げきつう
「大ばくちだったな...貴様...!」
「・・・・・・まさか本当に勝てるとは.....」
「あれじゃ黒鶴も浮かばれまい.....絵に描いたような.....下らぬ騙し討ちだ.....」
「でも.....やりましたね.....」
鬼十郎と蛇骨丸は、血まみれの顔を見合わせた。自然と顔がほころぶ。だがすぐに二人は激痛を思い
出し、地に悶絶した。
もんぜつ
「どうです? ・・・・私は立派な切り札でしょ?」
「よく気が付いた...気づくと思うていた・・・・・・」
「鬼十郎殿の御言葉がなければ、どうなっていたか.....」
いまごろ
じごく
がしこ
「だがな、今頃、黒鶴は地獄で待っておるぞ...人間はずる賢いとのたうちりながらな.....」
せっしょう
かたぼう
「そんな殺生な・・・・・! 片棒は鬼十郎殿が・・・・・・」
「うるさい.....わしは黒鶴に告げたはずだ・・・・・・蛇骨丸に騙されるな .....とな」
ののし
貴様を罵
はな
せん
蛇骨丸は唖然とした。 唖然として、笑う。 笑えば疼痛が走るが、笑わずにはいられない。
てのひら
そうほう
かた
ふる
「本当に.....私たち.....」
う ま
「ああ.....上手くやったものだ.....」
とうに感覚を失った掌が、双方から伸ばされ堅く握られる。震える手の温もりを確か
め、両者はしばしほほ笑みを見交わした。
こうや
じょじょ
暗雲が去り、荒野も徐々に消失する。
黒鶴の魔界が消え去る中でも、二人の呪霊使いの手は離れなかった。それは正反対の二人の、
初めての握手でもあった。

「又四郎殿っ!」
こしやく
宝蔵院の怒号が飛ぶ。咆哮と共に、婆羅鬼の巨体が憎めがけて突っ込んだ。
(小癪なぁ・・・虫けぇらぁ・・・どぉ・・・もお...!)



いらだ
ようそう
長引く戦いに、 呪神は苛立ちを募らせる。 だが、少年はその焦燥を待っていたのだ。
「下がって、 宝蔵院様!」
はな
ほうろく
よやみ
又四郎の手を離れた焙烙が、 くるくると夜間を横切った。
霊気の染み込んだ多量の火薬を詰め込んだ陶器が、 呪神の後頭部へ吸い込まれる。
少年は茂みへ逃れ、尼僧は後方へ大
を詰め込んだ陶器が、呪神の後頭部へ吸い込まれる。少年は茂みへ逃れ、尼僧は後方へ大
きく飛び退いた。
「いささか・・・・・・手間取りましたな」
(きい・・・さぁ・・・まぁ・・・らぁ...!)
ぼくふう
しょうげき

だんまつま
しらがあたま ふんさい
爆風に続いて、衝撃。 それが、婆羅鬼の断末魔であった。
白髪頭を粉砕され、巨体がどうと地に倒れる。
やがて正体を晒した老婆の屍に、ようやく宝蔵院も額の汗を拭った。
せんこう ひらめ
はいじょう
じんや
むらさき
おふたかた
「宝蔵院様は、御二方を追って下さい!」
すぐさま這い進み、少年は叫ぶ。
「黒鶴が敵では、いかなあの二人でも.....」
と、又四郎の声を制し、 閃光が閃いた。 廃城の中央、陣屋の方角。
夜空に射した紫の光が二人の眼光を捕らえる。 その光の中に.....
「鳩.....?」
「あれは蛇骨丸の.....!」
叫んで、尼僧は少年を見下ろした。 又四郎も視線を合わせる。 ためらいはない。
宝蔵院は又四郎を肩にかつぎ、少年は痛む足を引きずった。
怪光は二人をも、最後の戦いへと導き、瞬きを繰り返していた。

またた
かいこう
(来たのか.....)
どこからか声がする。
あきら
らくたん
しつこく
こうや
投げやりな諦めと共に、落胆の気配は漆黒に満ち満ちた。 荒野を塗りつぶした暗黒は果
てしなく、視界に映る物はない。二人の呪霊使いは、その間に警戒を放った。
「黒鶴は.....自分が死ねば、 姫様の居場所が分かると言った」
「ここが.....その居場所なんですか?」
やつかい
「ああ・・・・・・だが厄介な場所だな・・・・・・」
とくちょう
鬼十郎は、不満げな顔を蛇骨丸に近づけた。
特徴も無い、ただの闇が、危険を察知した鼻をひくつかせ、 退魔師は周囲を睨み回した。
おそ
「ここは恐らく.....」
はし
とつぜん
その視線の端に.....
ひとかげ
にそう
突然、二つの人影が浮かび上がった。 どこから来たのか。
少年と尼僧が、飛び込んだ一面の間に足をすくませている。気づかぬ二人に、鬼十郎は声を飛ばした
。
「又四郎! 宝蔵院殿!」
呼ばれて、二人が視線を変える。 瞬間・・・・・
「ひええっっ!」 「おのれ、黒鶴の手先っ!」

やり
又四郎が目を剥き、宝蔵院が槍を構える。呆気に取られ、蛇骨丸も泳ぐように闇を進んだ。
「何言ってるんですか、私ですよ、私!」
よご
「ええっ? 蛇骨丸さん.....?」
少年の言に、宝蔵院も眼を開く。 人影に目をこらし、尼僧も信じられぬ思いを口にした。
そざつ
どろ
まこと
「なんと、誠の蛇骨丸!」
にせもの
「当たり前です、 偽物じゃありませんよ」
ようやく、蛇骨丸も気が付いた。 呪神使いの髪は粗雑に乱れ、服は散り散り。
血と泥に汚れた顔には、美形の面影すらなかった。
おもかげ
せいせつ
しかし血まみれの退魔師の姿には‥‥‥又四郎も宝蔵院も声が出なかった。 凄絶な死線を
くぐり抜けてきた少女は、高ぶった意気を隠そうともしない。その凶相に、弟子すら思わ
かく
めぐ
ず身を引いている。だが気にせず、 鬼十郎は周囲に気を巡らせた。
さわ
「あまり騒ぎ立てるな、見張られておる.....」
「き、木津の黒鶴ですか、 御師匠様?」
きょうそう
どくうるし
「ああ、あいつならもう倒したよ」
まこと
「何と! それは誠ですか、 蛇骨丸!」
「おかげで二人ともこの有り様ですが・・・・・・」
さりげなく笑って、蛇骨丸も呪力の在りかを確かめ始めた。
「けど.....まだ終わりじゃない。敵はまだ残ってる。姫様の腹を裂こうとする奴がね.....
..」
「ああ・・・・・・そしてそいつは...」
えんか
鬼十郎は唾を嚥下し、呼吸を整えた。
もの あやつ
ととの
きょじん
おそ
「毒漆の化け物を操り
岩石の巨人で御行列を襲った奴だ・・・・・・何の因果かは知らぬが・・・・・・黒鶴に味方してい
た・・・・・・人間だ」
(その通り.....)
もう一度、どこからか声がした。 退魔師は一歩進み出力無く太刀を持ち上げる。
ぎらつく眼光は、すでに敵を捕らえていた。
「出て来い・・・・・・そして立ち会え・・・・・・」
鬼十郎は気力で身体を支え、さらに前に出る。
「おとなしく姫様を返してもらおうか.....」
肩を並べ、蛇骨丸も言葉を続けた。
くわ

ていこう
「黒鶴が死んだ今、企ては失敗に終わりました。 これ以上の抵抗は無意味です」
くらやみ
呪神使いの声が、暗闇にゆっくり染み渡る。
「いいかげんに止めませんか･･･?」
わた
背後では、 又四郎と宝蔵院も素早く身構える。
さと
ひび
だが四人を諭すように、気配は低い声を響かせ、深いため息を吐いてみせた。
（それはできぬな.....）
とたん
とも
かなた
だいだいいろ
言った途端、闇にぼおっと明かりが灯る。
彼方に、大きな橙色の光球が浮かび上がった。その光の中に、うずくまる少女が捕らわれている。
ぴくりとも動かない市女笠の姫君。思わず、蛇骨丸の喉から声が出かかった。
さよう
ざしき
とちゅう
（心配ない ・・まだ儀式は途中だ・・・・・・）
「媚珠を抜く儀式の事か?」
あんちゅう
左様、と答えて.....気配は暗中に姿を現した。 四人の、すぐ目の前に。
（しかし、まさか黒鶴様を倒すとは.....）
さ かぶ
けいそう
塗り笠を被った軽装の武士はそう呟く。
つぶや
（よくぞここまで来たものだ・・・・..）
蛇骨丸は、声を詰まらせた。
ろうばい
又四郎は、狼狽した視線を泳がせる。
そうぼう
宝蔵院の双眸は、怒りにぎらついていた。
その見知った姿に、いずれも言葉を失っている。 そして、鬼十郎は・・・・・
まちか
と
花め
ぶぜん
最後の敵を間近に捕らえ、すいと切っ先を持ち上げた。憮然として、退魔師は塗り笠の武士に声をかけた。
「どういう事だ.....?」
まみ
（再び見えるつもりは無かったのだが.....）
ぬかせ、と鬼十郎は吐き捨てる。
はか
「よくも我らを謀ってくれたな...」
わかむしゃ
つみ

（それも全ては榊原家の罪・・・・・・）
若武者は、何食わぬ顔で刀を引き抜いた。
だま
つみ つぐ
（黒鶴様を騙し、媚珠を奪いし罪は償わねばならぬ。 それがしも意を同じくしたまで）
しゅくば
「では宿場で死んでいたのは?」
しぼ
蛇骨丸がやっと声を絞ると、塗り笠は大きくうなずいた。
すがたかたち
くぐつ いまごろ
かみにんぎょう
（我が姿形を写した傀儡。 今頃は、正体の紙人形に戻っておろう.....）
「では黒鶴に加担する傀儡使いと言うは.....」
さむらい
（いかにも.....）
侍は観念し、鬼十郎に笠を上げる。
（この小幡勘兵衛。 六百年前、太守一味に殺された・・・・・・明寿の末裔にござる.....）

鬼十郎は.....
せつな
自分の言葉を思い出していた。
自分の思いを思い出していた。
（剣を交えれば、いい勝負になる.....）
まつえい
まこと
いつく
（わしは最初、そう思うた.....）
（正直な·····誠、正直な御方だ・・・・・・）
（姫様思う気持ちを、わしは信じていた・・・・・・）
（それがしが見込んだ侍は.....）
（あの時は.....そなただけと思うていた.....）
（そしてそのそなたが死んだ時、わしは.....）
退魔師は、無言のまま蛇骨丸を見た。
蛇骨丸は、すでに鬼十郎を見守っている。慈しむような.....哀れむような眼差しである。だが、何も言葉は出てこない。
一瞬、鬼十郎の胸中に悔恨の情が駆け巡る。
太刀を握る手に、堅く怒りが込み上げた。その刹那・・・・
「悔やんでも・・・仕方ないですね.....」
きんちょう
おだ
こわね
げきど
えさん
ぽつりと蛇骨丸が声を漏らした。 その穏やかな声音に
・鬼十郎の激怒が雲散する。はっとして、退魔師は再度、呪神使いを見た。肩をすくめる、優男がそこにいた。
いまさら
（そうなのだ····· 今更仕方ない.....）
我に帰って、 鬼十郎は心を鎮めた。
たよ

（味方であったから頼った.....それだけだ・・・）
今更、鬼十郎は蛇骨丸の存在を不思議に感じていた。
《常》に油断を見せまいとする鬼十郎だが、蛇骨丸は巧妙にその隙をついてくる。
今も、思わぬところをつつかれ、不意に 怒りが鎮まった。 そしてそれが.....
（何やら、心休まる.....）
ゆうぜん
たちさき
せいが
大きく息を吸い込み、悠然と、鬼十郎は太刀先を正眼に据えた。勘兵衛も、無表情のまま、長刀を脇に構える。 一分の隙もない、武芸者の身構え。 勘兵衛の立ち居は、鬼十郎に緊張を走らせた。
（初めて会った折り、 できる奴と思った.....）
（だが今はまた・・・・・・違う）
たちすじ
（太刀筋に冷たさが宿っておる.....）
「御師匠様、ここは・・・・・・」
「こ奴は任せろ.....」
こうら おお
踏み出す弟子を押さえ、 鬼十郎は背後へ命じた。視線は勘兵衛から外さない。 退魔師は、決断の声を響かせた。
「姫様を.....千鶴様を救い出せ!」
しつそう
だが声より早く、蛇骨丸は跳んでいた。 宝蔵院も疾走に続き、二人は闇を飛び越える。
「宝蔵院様、三日酔いの方はっ?」
は
「何のっ! もう吐く物も無いわっ!」
しかし両者の前には、だしぬけに異形の群れが飛び出していた。闇から出でる数十のわどごう
ななき。 左右から襲いかかる黒い影に、勘兵衛のかん高い怒号が走った。
こくろうき
「逃すな! 討ち取れ、 黒狼鬼!」
くぐつ
傀儡の群れに、勘兵衛が吠えた。
みじん
「たかが二人! 微塵に刻めいっ!」
やまいぬ
蛇骨丸たちを包囲したのは巨大な山犬の群れであった。
六尺を越える狼たちは、いずれも後足で直立し、貪欲な食欲に飢えている。
そしてその背中から上腕は、黒光りする甲羅で覆われている。
残忍なだけの、始末に終えぬ狼の傀儡であった。
と
「何の! 山犬如きっ!」
叫んだ蛇骨丸は、残り少ない霊気を水晶玉へ送り込んだ。イオオ、イオオと不思議な呻きを漏らす化け物へ、 呪神使いの手が伸びる。
へんらえんら
「行けっ、 炎羅炎羅っ!」
直後.....
「退けいっ、蛇骨丸!」
ほうこう
にそう
宝蔵院の体当たりが、蛇骨丸を跳ね飛ばした。 続いて殺到する咆哮の群れを、尼僧の槍が押し返す。倒れた呪神使いは、何の反応も無い水晶に目をこらした。

いらだ
「ちょっと待って! これどういう事です?」
「分からぬか! ここは奴の呪界です!」
苛立つ宝蔵院は、警告を響かせる。
「我らの呪霊は反応せぬ! 呪霊無しで行け!」
たかまがはら
やつかい
「鬼十郎殿の高天原と一緒か! 厄介な!」
絶句して、蛇骨丸は後ろへ飛びのく。 と、入れ替わるようにして、 宝蔵院の槍には又四郎の剣が並んでいた。
「蛇骨丸さんは後ろへ!」
「だ、大丈夫なのかい、 又四郎君!」
けんげき
くぐつ
かぎづめ
心配する声に、 剣戟の音が重なった。同時に、傀儡たちの絶叫。 黒狼鬼の鉤爪を太刀で跳ね返し、少年は腰を低く落とした。
「御心配無く! これでもそれがしは、 葵鬼十郎の一番弟子! 退魔師の端くれにござる!」
きょうかん
「おお、頼もしいこと!」
宝蔵院は、嬉しそうに槍を振り回した。
「ならば私もお付き合いいたしましょう! 昨夜の草粥の礼にございます!」
ろうばい あらわ
だが蛇骨丸は、狼狽を露にする。
「宝蔵院様! 又四郎君はまだ修行中です!」
「それがいかがした!」
「鬼十郎殿の口癖ですよ! いつも言ってます、 貴様、剣の方は.....」
こうさく
叫喚が闇に交錯する。
だが又四郎は、果敢に剣を振り上げ、傀儡の群れに飛び込んだ。容赦なく、黒狼鬼も迎撃の輪を造る。だが包囲網の中心で、少年は執念の気合を轟かせた。
はまたい
「破魔退っ!」
からだ
しっぷう
しゅうねん
とどろ
身体の右から左へ、又四郎は太刀を横へ薙いだ。切っ先は大きく弧を描くが、その瞬速は疾風を思わせる。 と、 そのまま傀儡たちの懐で、 又四郎はかちりと刃を鞘へ収めた。
遅れて、傀儡が五体、上下に両断され絶命する。 斬撃を浴びた化け物は、山犬の正体を剥き出し、闇に打ち倒れた。
瞬、振り向いた又四郎に、蛇骨丸は力無く笑ってみせた。
「.....ほ、本当·····又四郎君・ 剣の方はさっぱりなんですね.....」
この間・・・・・
にら
いつとう
ねら
鬼十郎と勘兵衛は睨み合ったままである。間合いを遠ざけ、息を殺す。
一刀を狙う両者は、視線をぶつけ、微動だにしていない。
そのすぐ側で、宝蔵院と又四郎は、傀儡の包囲を斬り崩していた。光球に包まれた千鶴まで、目前に迫る。 蛇骨丸は、 その後に続いた。

「千鶴様!」
蛇骨丸は、呼びかけを震わせた。
「蛇骨丸にござります、 千鶴様! 姫様!」
しわ
が、反応は無い。代わりに、光球の周囲には幾つもの影が浮かび上がった。全身皺に覆われた真っ黒な胎児。 その赤子たちが千鶴の回りに輪を造り、一心に秘文を唱えているの だ。
ざしきくぐ
かな
「させるかっ!」
(そ奴らこそ、我が儀式傀儡・・・・・・)
鬼十郎と睨み合うまま、勘兵衛が言う。
(媚珠を取り出す呪霊・・・・・・やがて叶おう)
振り向きざま、蛇骨丸が叫ぶ。だが勘兵衛は、瞬きすら止め、不敵な笑みを浮かべた。
まばた
かんば
(させぬためには、この勘兵衛を斬れ。 わしの呪力なくして、儀式は続かぬ)
蛇骨丸は、拳を握った。 宝蔵院が槍を構え、
又四郎が息を整える。だが、背後で散開す三人を察し、鬼十郎は警告を発した。
「騒ぐな・・・・・・みなの敵ではない.....」
にら
制して、勘兵衛を睨み据える。
「こ奴は、わしが斬る。だがその前に・・・・・・」
(わしの内心を聞いておきたいのだな.....?)
看破され、鬼十郎は間合いを遠のかせた。
「それぐらい許されると思うが.....」
(騙された者としては·····か?)
「貴様も人が悪い..... 最初から····· 黒鶴と組んでいたな・・・・・・」
たんそく
鬼十郎は、口の端に憎悪をちらつかせる。しかし勘兵衛は嘆息し、ゆっくりと言葉を選 び始めた。
(.....今言うた通りだ。
榊原忠政が媚珠を奪いし折り、奴らは·····何の罪も無い明寿まで
斬った。その明寿には幼い娘が残され・・・・・・娘は黒鶴様に育てられた。 そして娘は.....)
「黒鶴との間に子を成した・・・・・・」
蛇骨丸は、 ごくりと唾を飲んだ。
めいじゅ
「あなたはその子孫と言う訳ですね.....」
暫時、勘兵衛は答えない。 が、 鬼十郎にはもう分かっていた。
「貴様も.....半呪神というわけか.....」
まつえい
(そうだ.....人間と呪神の血を引く末裔.....我が一族は、代々黒鶴様の回復を祈り、榊原
家を呪い続けた。
そしてようやく媚珠を持つ姫が生まれた時・・・・・・私が榊原家に入り込んだのだ。呪霊を使い、
家中の者、太守康政みな欺き通し、千鶴の護衛となった.....)
「傀儡使いだから選ばれたのですね?」
呪神使いも問い続ける。
「人間にも呪神にも、心がある。しかし媚珠は、その心を奪う物。 他者を引き寄せ、魅了
する力がある。魅了されれば、媚珠を持つ者を傷つける事などできないはず、たとえ黒鶴
でも・・・・・・なれど傀儡になら出来ます」
「そう、傀儡には心が無いからな.....」 鬼十郎も、言葉を連ねた。

「だから.....黒鶴は貴様を選んだ。 心持たぬ傀儡を操れる者を。 そしてあの渡し場で、 姫
様を襲わせたのだ。 傀儡なら、姫様の腹を裂ける。 嫌がる悲鳴にも動じない。抗う腕を斬
り落とす事もできる。 だが・・・・・・」
ゆが
あらが
りょう
退魔師は、疼く傷に顔を歪めた。
つぶや
「.....貴様には出来るのか、それが? 傀儡どもに命じる事ができるのか? 姫様の腹を 裂けと?
媚珠を奪えと? 姫様を殺せと?」
「心ある人間にはできぬ事です...」
蛇骨丸の声が、深く闇に浸透する。
「私は姫様の御顔を、 まだ見た事がありません..... ですが、 薄い絹越しに感じた千鶴様
は.....到底傷つけられるものじゃない! それどころか、指一本触れられないはずだ!
あんな姫様を傷つける事ができるなんて、傀儡の他には.....」
「そう、心を持たぬ人間だけだ・・・・・・」
呟いた鬼十郎に、勘兵衛は、すいっと両腕を伸ばした。
中段に構えた太刀が、真っすぐ鬼十郎に接近する。黙ったまま、 蛇骨丸は来るべき一瞬を待った。
鬼十郎と勘兵衛の間合 いが、ぐっと狭まりつつある。
「どうして.....わしを雇った?」
鬼十郎は、思い出したように言う。
じゃま
「わしの事を邪魔とは思わなかったか?」
もちろん
(それは勿論.....しかしこう考えたのだ·····)
(大陸に名高い退魔師が護衛につけば、太守も長盛殿も.....そして姫様も安心する。安堵すれば、そ
こに..... 必ず隙が生じるとな)
とも
「その隙に付け込み、わしと行列を切り離し...供の者を皆殺しにしたわけか.....」
わず
白刃の圧迫にも、 退魔師は動じない。鬼十郎はほんの僅か、切っ先を持ち上げた。
(それもすべては、 媚珠を奪い返すため)
「そして媚珠を奪い返すために.....姫様の腹を裂くために、心を捨てたと申すか?」
念を押すように・・・・・・
鬼十郎は、闇に声音を響かせた。
ぎょうし
勘兵衛は、しばし退魔師を凝視する。 その視線が、 鬼十郎の全身を探り回した。
(目的を達するため・・・・・・何かを捨てねばならぬのは仕方の無いこと・・・...)
(弱みや心など·····無用の物・・・・・・)
「黒鶴も.....そう信じて死んだ・・・・・・」
あわ
鬼十郎は、哀れな呪神を思い返した。
「黒鶴も.....己に弱みが無いと信じていた。それが命取りとなった。
己が忘れていた弱みに襲われ.....わしに斬られた。
弱みや心などと言うものは.....そんなものだ。 忘れたくて
も忘れられぬ。捨てようとて、叶わぬものだ。わしとてもそうだ」
(鬼十郎殿にも弱みがあると?)
その瞬間・・・・・
「ああ.....打ち捨ててしまいたいような弱みや... 知られてはならぬ隠し事もな」
いぶか
ぼうぜん

蛇骨丸は、呆然とした。呆然と鬼十郎の笑顔を見つめていた。鬼十郎の‥‥‥清々し
い笑顔を。退魔師ではない、ただの.....少女の笑顔で、鬼十郎はほほ笑みかけていたの だ。
「わしは..... 退魔師として 《常》であろうとした。感情に流されたり、女子の気持ちを
持ってはいかんと.....。 そしてもし 《常》のわしであり続けたら・・・・・ 呪神使いを毛嫌いす
るままでいたら.....蛇骨丸と組むことはなかったであろう」
「何で・・・・・・そんなことを急に・・・・・」
狼狽する蛇骨丸に、鬼十郎は小さくうなづく。
「もし貴様がいなかったら.....わし一人では黒鶴を倒せなかった。そう考えると.....今ま
で《常》にこだわったり... 退魔師としての意地にこだわることなど・・・・・・ 馬鹿馬鹿しく思
えてきてな.....」
(何の話をしておるのだ.....?)
「貴様の話をしているのだ・・・・・・」
訝しむ兵衛に、今一度、 鬼十郎は向き直った。 退魔師の顔付きで。
あかご
「貴様とて.....赤子の頃から心を捨てたわけでもあるまい。かつては闇に脅え・
胸に顔を埋めて泣いていたはずだ」
(何を馬鹿なっ!)
やみ
おび
すがすが
けぎら
・母親の
「馬鹿な事ではない。己の弱さを知り・・・・・・誰かに救いを求める。 その.....心が、わしと蛇
骨丸の力を合わせた。 そして黒鶴を斬れた・・・・・・もし心を取り戻せば貴様にも‥‥‥
思い掛け ぬ事ができるのではないか?」
うら
ごと
(心を取り戻し、六百年の恨みを捨てよと申すかっ! 戯れ言も大概にせいっ!)
「しかしその恨みを持ち続けたせいで‥‥‥黒鶴は死んだ。恨みを捨てれば違った生き
方があったかもしれぬ」
せま
だが勘兵衛は、ぐっと身を迫り出した。
(恨みを捨てられようか! 人の心など取り戻せようか! なぜ、それがお分かりになら れぬ!
この恨みが・・・・・・意地が‥‥‥どれほどの剣撃を生み出すか.....御自身の腕で確かめ
られるがよい!)
剣圧が一気に高まり....
勘兵衛が、長刀を上段から振り下ろす。
「わしの話を聞くのだ、勘兵衛!」
げきけん
鬼十郎の太刀が、 その撃剣を跳ね返す。 が、勘兵衛は刃を急転させ、 再度鬼十郎に斬りかかる。
未然で受け止め、両者は鍔ぜり合いにもつれ込んだ。
「黒鶴は死んだ! ここで、媚珠を奪っても...!」
(何を今更! なら貴様は引けと申すか!)
あらわ
兵衛は、激怒を露にして刃を押し込んだ。
だつかん
きづだに
(確かに黒鶴様は死なれた! だがここで引く訳にはいかぬ!
媚珠を奪還するは、我ら木津谷の一族が悲願! たとえわし一人になろうとも、必ず嫺珠は奪い返す!)
「それじゃあ...本当に意地だけじゃないですか!」
宝蔵院の槍が、背後に迫った黒狼鬼を突き倒す。 又四郎の剣に守られ、蛇骨丸は悲痛に 叫んだ。

むな
「奪い返したって空しいだけだ! あなたがたの恨みつらみは、十分榊原家にも通じたは ずです!
もう引いてもいいじゃないですか!」
(引けるか!
六百年待ち続け、ようやく奪い返す段になって...貴様らに一族返り討ちにされ、黙って諦めろと申す
か!わしはまだ榊原家に一矢報いてはおらぬ!媚珠奪 い返すまでは、恨みつらみは晴れぬのだ!)
「いや、もう十分報いたはずだ!」
鬼十郎も声を鳴らす。
「榊原の家の者、貴様ら一体、何百人殺したと思う!
あれだけ人の命を奪っておきながら、まだ殺し足りぬのかっ!」
(ああ、足りぬわ! まるで足りぬ!)
勘兵衛は、 退魔師の眼前で吼えた。
(たとえ榊原家を殺し尽くそうが、我らの恨みはまるで晴れぬ!媚珠奪い返すまでは な!)
「貴様は.....!」
きんじょう
なぶ
しかばね
むさん
鬼十郎は、野分の宿の惨状を思い出していた。 呪神たちに競り殺しにされた屍の山。
長盛の無残な最期・・・・・・・
勘兵衛の刃が、ぐっと鬼十郎に接近した。
(奪ったのは奴ら! 騙したのも奴ら! 悪事働いた奴らが報いを受けて、何が悪いの だ!)
「それは六百年も前の人間です!」
蛇骨丸が、 再び声を飛ばす。
「あなたがたが殺したのは何の関係も.....」
おやま
「黙ってろ、三流女形っっ!」
びいんと、周囲を畏怖する響きで、
退魔師は蛇骨丸を制した。回りでは、又四郎と宝蔵院が必死に突破の糸口を求めている。
傀儡たちの獣声は、 剣戟と交差した。 その喧噪を押 しのけて、鬼十郎の怒声が闇に鳴り響いた。
ゆる
「わしは許せぬ! 貴様が人の命を何とも思わぬことが! どれほど人を殺してもよいと 考えたことが!
貴様そんなに人が殺したいかあっっ!」
(ぬっ :ぬうっ.....!)
りよりよく
からだ
血まみれの身体から、どうしてそれほどの膂力が湧くのか。 鬼十郎は両足に力を込め、
蛇骨丸の剣を押し戻していった。勘兵衛は、刃を押す退魔師に牙を剥いた。
かま
(何としても媚珠が欲しかった!どれほど榊原の者が死んでも構わない! 心などいら ぬのだ!
弱みなぞ・・・・・・心の弱みなぞ.....!)
こんしん
鬼十郎の刃から、渾身の怒りが噴き出した。 腹の底から怒声を絞り、
退魔師は勘兵衛の身体を押し返した。
「媚珠を奪うがために人を殺め、心を無くした貴様など・・・・・・黒鶴から媚珠を奪った連中と
同じではないか!」
(ほざくなっっ!)
つぱく せつな
みね
裂帛の刹那、一同の視線が集まった。
こんしん

勘兵衛の剣は渾身の一撃と化し、退魔師の太刀を押しのけた。退きざまに、鬼十郎は剣
を振り上げる。だが勘兵衛は、その動きを見抜いていた。剣を跳ね上げ、鬼十郎の太刀を
打つ。峰を叩かれた退魔師の刃が、かん高い金属音とともに真っ二つに斬り飛ばされた。
「鬼十郎殿っっ!」
のどもと
太刀を失った退魔師へ蛇骨丸の悲鳴が飛ぶ。 が、勘兵衛の剣はその声より速い。喉元を
狙った一刀は、鬼十郎の口元まで達していた。
(死ねええいいっ!)
あんこく めいどう
傀儡使いの絶叫が暗黒を鳴動させる。
くつがえ
しかし鬼十郎の動きは、勘兵衛の予想を覆すものだった。 手から無用と化した得物を落
とし、退魔師はまさしく空手となった。と同時に、左腕が勘兵衛の剣に立ち向かう。
「破魔退っっ!」
は
へいこう
内に銅を巻き込んだ手甲で、 鬼十郎は一撃を大きく撥ね除けた。 平衡を失い、勘兵衛は泳
ぐように前へのめる。
その胸元へ、退魔師の拳が突き込まれた。微妙に曲げられた五本の指が、羽織りを突き抜け、肉を貫
き、肋骨の狭間へ鋭く食い込む。
びくつく勘兵衛の心臓を握り締め、鬼十郎は敗者の呻きに目を閉じた。
(が、ががっ.....!)
えいしよう
宝蔵院たちの前から、 黒狼鬼の群れが消えて行く。 続いて儀式傀儡の詠唱も絶え、やが
みな失せた時・・・・
(わ、わしは.....わしは.....)
かたまり
だつりょく
こぶし
ごぼっと、勘兵衛の口から血の塊が漏れる。 脱力した体から拳を抜き取り、鬼十郎は
傀儡使いを闇に横たえてやった。
まこと
「ああ..... わしには分かる。
そなた誠は·····かろうじて人の心を残しておるのだ。でなければわしの言葉に怒る事もなかった。
復讐を念じ続けるにも心は必要だ。 恐らく... 千鶴様の儀式にも少しは躊躇したのであろう.....」
ささや
しょせん
ちゅうちょ
まぶた
囁く鬼十郎は、血に染まった手で勘兵衛の瞼を閉ざしてやった。
「所詮、無理な話なのだな。 意地も恨みも捨てたくても捨てられぬ。
そして心までも捨てたと信じ、殺戮に走ったそなたは.....」
さつりく
言葉が詰まった。詰まってそのまま、 退魔師はがくりと膝をつく。
「御師匠様っ!」
じゅかい
ほんじん
呪界が解けていく。朽ちた本陣が正体を現す中、少年が倒れる鬼十郎に素早く駆け寄っ た。
「よくぞ、よくぞここまで戦い抜かれ.....」
「せ、世辞はいらぬ・・・・・・蛇骨丸はいるか.....」
だま

かたわ
あき
呼ばれた呪神使いは、黙って傍らに立ち尽くす。 呆れた声が退魔師の口から飛んだ。
つら
「何だ、その面は･･････不景気そうな顔をするな･･････わしはこうして生きておる.....」
「ええ、 本当に・・・・・・」
のどもと
おえつ
うる
ひとみ
喉元に詰まった嗚咽を堪え、蛇骨丸も全身で勝利を噛み締めていた。潤んだ瞳で鬼十郎を見下ろし、呪神使いは鼻をすすった。
まこと
「本当に勝って、生きている.....誠、 大陸一の退魔師ですね... 葵鬼十郎殿・・・・・・」
「世辞はいらぬと言ったはずだ、馬鹿めっ!
そ、それより忘れた.....のか?」
力尽きた退魔師には、もう瞼を開く力も無い。横臥したまま、 鬼十郎は彼方を指さし た。
おうが
かなた
「姫様を頼むぞ・わしはわしはしばらく.....ふうっっ...もう.....」
「.....御師匠様? 御師匠様っ!」
あんど
意識を閉じる鬼十郎に、少年の叫びが取りすがる。だが蛇骨丸は安堵して微笑した。 今
更ここで死ぬような少女ではない。たかが数日、共に戦っただけでも、それだけは確信で
きる。たとえ正反対の人間でも、鬼十郎は大陸最高の退魔師に違いなかった。
「蛇骨丸殿.....」
呼ばれて、呪神使いは振り向いた。 そして振り向いた瞬間・・身動きができなかった。 じんや
ゆか陣屋の床は、土を剥き出しにしていた。 あちこちに得体の知れぬ物も散乱している。 明
かりの無い室内には、すえた臭いも広がり、謁見には最低の状況であった。
にお
えつけん
ま
ちんざ
くらやみ
かがや
だがその土間に・・・・・・銀河のきらめきが鎮座していた。暗闇に、星座の輝きが降り立って
いる。蛇骨丸は真実、そう信じた。信じざるをえない、息を呑むほどの美しさだったのだ。
いちめがさ
市女笠は、宝蔵院の手にある。 蛇骨丸が焦がれた千鶴の素顔が、まっすぐ呪神使いを見くろかみ
つめていた。流れ落ちる黒髪は夜目にも艶めき、ふっくらした白い頬と愛くるしい対照を成していた
。 そしてその ・瞳。深い黒に彩られた双眸は、長い睫に覆われている。
その瞳に正面から見つめられ、蛇骨丸は金縛りにあっていた。 いや、 束縛ではない。
この瞳のためなら何でもできる。この瞳が曇るのを見たくはない。そう思わせる、光が宿っていた。
ひとみ
いろど
そうぼう
まつげ おお
かなしば
そくばく
も
「蛇骨丸殿、私の...」

こわ
さくらいろ くちびる
清らかな声音が、桜色の唇から漏れた。
びしゅ
「私のせいでみな死んだのですね...私の内にある媚珠のせいで.....」
「.....お聞きに・・・・・・」
それだけやっと言う。喉がやけに乾く。だが動揺には気づかず、千鶴はくっと顔を伏せた。
「私を助ける事など・ ・せずとも良かったのです 私もみなとともに、死にたかっ た・・・・・・」
おお
「何を仰せられます!」
へいふく
初めて平伏し、蛇骨丸は言葉を取り戻した。
まち
「みな、姫様をお守りするために死んでいったのです!
このうえ姫様まで命落とされては、みなの死が無駄となりましょう!」
「私一人生き残ってなんとします!」
悲痛な声が、蛇骨丸の胸を締め付けた。
ぜんしゅう
「たとえ然州に嫁ぐ身とは言え、 榊原の家臣をかほどに失い、それでそれで・・・・・・」
なぐさ
絶句して、むせび泣く。
宝蔵院がその小さな背を支えるが、蛇骨丸は慰めの言葉も続けられない。そのか細い泣き声は、強烈に呪神使いの胸中を揺さぶった。
きょうれつ
にそう
「.....ひとつだけひとつだけ、姫様お忘れくださいますな.....」
何とか、蛇骨丸は言葉を絞り出そうとした。
めぐ
あまた
「この数日、姫様の御身を巡り、数多の ・・命が潰えました。 御味方も、 そして敵も.....」
千鶴は尼僧の胸の中で、 その言に耳を傾ける。
ねら
かたむ
「敵は姫様の御命を狙い、御味方は姫様を守ろうとした。 なれど姫様は・・ 生き残ってお
いでです。 無事、 この通り・・・・・・」
しかばね
「みなの屍の上にではありませぬか.....」
「そうです。 ですからその屍を・・・・・・お忘れくださいますな・・その屍たちの思いをみな、
覚えておいてくださりませ.....」
蛇骨丸は、脳裏にみなの顔を思い浮かべた。 長盛、勘兵衛、 黒鶴、無名の呪神、 家臣た
.....千鶴の胸の内にも、同じ光景が広がった。
さよう
「みなが守り抜いた御命です・・・・・・死ぬ事などござりませぬ・・・・・生き延びた上は、生きてお る者のために何かをなされませ・・・・・・」
「生きておる者.....?」
とうぜん
千鶴は宝蔵院を陶然と見上げた。だが尼僧は答えない。 代わって蛇骨丸が言葉を続け た。
たみ
「左様.....然州に嫁がれる上は然州の民に、然州の家臣に、そして然州の呪神にも.....」
[.....]

「生きておる者に、心ある者に、何かできる事をなされませ。
千鶴様には、人を引き付ける力がございます。 その御力を存分に使われれば良いのです.....」
「なれどこの媚珠のために.....」
言いかけた千鶴を、 宝蔵院が静かに制した。
つみ
もちろん
「姫様の内にある媚珠に罪はございませぬ。
そして勿論、姫様にも。みなが守り抜い御命、そして媚珠。 大事になされませ」
へいふく
蛇骨丸はもう一度、深く平伏した。
ふくしゅう
「死んだ者のために、死ぬ事はございませぬ。それでは勘兵衛殿と同じ.....復讐に心を亡
くし、死ぬる事と同じでござる。 生きておる者のために、生きてくだされ。千の命を失っ
たと嘆くなら、万の命を慈しみくだされ。 それが死んだ者たちにも供養となり申す.....」
つく
くよう
おえつ
あんど
うなずいて千鶴は、また嗚咽を繰り返す。だが宝蔵院は、安堵の笑みを浮かべて見せた。尼僧と少年に視線を配り、蛇骨丸も息を吐く。
（そうですよね、鬼十郎殿.....）
（死ぬ事なんかないですよね...･･･姫様が.....）
（生きていけばいいんだ、ずっとずっと...）
つか
呪神使いは、動かぬ退魔師を見つめ直す。だが戦いに疲れた鬼十郎は、起きることを放棄し、もうしばらく情眠に身を委ね続けていた。
だみん
はいじょう
白々と明け行く空の下、廃城にはいつまでも千鶴のむせびがこだましていた。

しゅうと
街道は、眼下に州都を見下ろしていた。
おか こがねいろ むぎ
きゆうりょう
なだらかな丘は黄金色の麦に覆われ、
初秋の風が一面の穂をさざめかせる。丘陵の頂きへ通じる道は晴れやかな空に照らされ、行き交う旅人の顔も一様にほころんでいた。
いちよう

「どうなされます、御師匠様?」
どこか
「どの道を進もうが、いずれは大陸の何処かに着く。いつもの通り、こいつに聞こう.....」
ぶんき
こけ
こし
道は、丘の上で三方に分岐していた。 苔むした石像が、道標の如く交差点に腰を据えて
いる。その石像によりかかり、 退魔師は新刀を鞘ごと腰から引き抜いた。
「さ、お前はどっちへ行きたい.....?」
さや
鐔を地に着け、鬼十郎は立てた刀の柄を軽く弾いた。
がちゃり、音をたて太刀は中央の道を示す。師弟はほほ笑み、背後を振り返った。
ざくとうげ
おそ
ほうしゅう
「決まった、我らはこの道だ。 朱雀峠を越えて・・恐らく原州へ出るだろう。これで貴様

らともおさらばだな」
「もらったばかりの太刀で何という事を.....」
ほう
蛇骨丸は路傍から腰を上げ、痛む傷口を撫でさすった。
もんじむらま
てばな
「菊一文字村正ですよ、よく然州の若君が手放したものだ。無双の名刀じゃないですか」
とこのま
「やかましい、今はわしの太刀だ。恩賞の品だからとて、 床間に置くつもりはない。 飾り
物の太刀なぞ、わしの好みに合わぬのだ」
りょそう
言って鬼十郎は、ぎごちなく太刀を腰へ戻す。
黒い旅装の下は、未だ白布で包まれているはずだ。又四郎は足をひきずる師匠を支え、穏やかな笑み
をふりまいた。
かぎ
「蛇骨丸さんたちは、これからどちらへ.....」
「雲州へ戻ります。 元々、この道中が寄り道でしたゆえ.....」
こんれい
1130
しゃくじょう
錫杖を鳴らし、宝蔵院は眼下に視線をやった。
婚礼に湧く然州の都は賑わいの最中にある。今頃町は、祝福の絶頂にあるだろう。
その喧噪を眺め、尼僧は蛇骨丸に微笑を戻し た。
けんそう ながに
そう
びしょう
いまごろ
「しかし.....まこと未練はないのですね?」
しゅぎょう
むぎは
こんぎ
「太守家同士の婚儀ですか? 私たちが列席できるような式でもありますまい」
「だけど、せっかく呼んでくれたのにな.....」
ごういん
むくれるその耳を退魔師は強引にねじ上げた。
ちん み
さかだる
らんち きさわ
「貴様とて見たろう? あの山海の珍味の山、酒樽の列...
三日三晩の乱痴気騒ぎなど、修行の妨げになる! 堕落するぞ!」
「痛い!痛いですよ、御師匠様!」
「宝蔵院様も、酒目当てでござりましたか?」
こたび ずいぶん ひど
「酒はしばらくよい・ :此度は随分、酷い目にあいましたからね.....」
とんぼ
ゆうよく
麦穂の波をかすめるように、蜻蛉の群れが遊弋する。
しばし千鶴の婚礼を見下ろし、四人は秋風のそよぎに身を任せた。
まか
「世話になったな.....」
鬼十郎は、呪神使いに向き直った

「短い間だったが、貴様のような呪神使いと知り合え共に戦えて良かったと思う。
もう会う事もないだろうが‥‥‥達者で暮らせ」
たつしゃ
せりふ
く
「鬼十郎殿から、そんな台詞を聞けるとは思いませんでしたよ.....」
蛇骨丸も、不思議そうに退魔師を見つめた。
「でも.....私も同じ気持ちです。
退魔師にも、あなたのような人がいると分かっただけでも..... 何か嬉しいですね。
それは宝蔵院様も同じだと思いますよ」
うれ
あらあら
いや
しかし荒々しく鼻を鳴らし、 鬼十郎はさも嫌そうに呪神使いをねめつけた。
つつし
じゅうにしんてん
つか
「ともかく酒は慎め! 度が過ぎる! 十二神天に仕える身だぞ!」
「鬼十郎殿も野卑な行いはくれぐれも.....」
ほほほと笑う口元を、宝蔵院様は袖で隠した。
むすめ
よめ もら
「売り時の娘がみっともない.....それでは嫁の貰い手もありますまいて・・・・・・」
「やかましい!わしは女は忘れた!」
「でも、女をやめた訳じゃないんですよね?」
ふきげん はぎし
ひび
ふかあ
がさ
かぶ
蛇骨丸の言葉に、鬼十郎は不機嫌な歯軋りを響かせた。
新調した深編み笠を被り、退魔師は決然と歩を進める。
くさ
「行くぞ、又四郎!こいつらと口を利くと、脳みそが腐りそうじゃ! 出立する!」
だいみょうたび
「いいですねぇ、礼金一千両の大名旅か.....一生、優雅に暮らせますねぇ...」
「それが違うんですよ、蛇骨丸さん」
少年は、あっさり呪神使いの想像を覆した。
もら
「御師匠様、礼金、 貰わなかったんですよ」
「そ、そりゃまたなんで!」
くつがえ
「護衛をあれだけ失って、わしだけのうのうと金を受け取れるか! 支度金として前渡し
の五十両、それだけで十分だ」
「なれど、千鶴様を無事ここまで・・・・・・」
いいや、と退魔師は宝蔵院を制する。
「雲州は多くの兵を失ったのだ、これから金も入り用になる。
わしなどに大金を払わず、国のために使う方が良いと言うものだ」
「.....と言うわけです」
又四郎も、編み笠の緒を締め直した。
「少し残念な気もしますが.....御師匠様の言われる通りと私も思いますので.....」

「君は本当に忠実な弟子だね、 又四郎君」
「それに五十両もあれば、私たち二人、しばらく退魔の仕事せずとも暮らせますゆえ.....」
まえわた
ぶぜん
そうてん あお
かつくう
少年は、背を向けた鬼十郎に追いすがった。
「では蛇骨丸さん、 宝蔵院様、お元気で」
「また会えるかな、鬼十郎殿?」
蒼天を仰ぐ退魔師に、蛇骨丸は手を上げる。
「また大陸の何処かで、会えますかねぇ?」
「大陸は広い! 会える訳なかろう!」
「でも、その大陸で‥‥‥ 私たちは出会ったんですよ! きっとまた・・・・・・」
呪神使いの言葉は、 麦畑に広がった。
「.....きっとまた会えますよね!」
又四郎は、じっと師匠の沈黙を見上げる。
足を止めた退魔師は、笠に顔を隠したまま、憮然と別れの言葉を投げ付けた。
つら
おやま
「二度とその面見せるなよ! 三流女形っ!」
(素直じゃないなぁ.....)
ふところ
わず
笑って、蛇骨丸は懐から半紙を取り出した。 指先から僅かな呪霊を導くと、
呪神使いは紙片を空へ飛ばす。
風に舞った半紙は、そのまま意志を得たように、すいと又四郎めがけ滑空した。
「な、なんだ、これ・・・・・・?」
ふる
ぱつとう
編み笠に張り付いた紙切れを手にするや、少年は赤面し、絶句する。 蛇骨丸はにっこり
笑い、師弟に向けて手を振った。
せんべつ
おだいじ
「二人ともお元気で! それは私からの、心ばかりの餞別です! よくよく御大事に!」
さいしきが
こうちょう
震える少年の手には、一枚の彩色画が握られていた。 湯気に紅潮した、
若くしなやかな少女の後ろ姿。が、かいま見た又四郎の眼前で、裸婦画は一刀両断された。
らふが
んたいやろう
「そこで待て、 変態野郎っっ!」
と
抜刀した退魔師は、すでに宙に跳んでいた。
ため
「新刀の試し斬りだ! 生かしておくかあっ!」
「ひええっっ!御師匠様っ!」
「決して忘れませぬよ! 背中ゴシゴシも.....!」
しゅくこん
りんそう
何処かで山鳥がさえずった。然州も深い秋を迎えようとしている。
祝婚の喧噪の片隅で、狂奔はしばし、街道を賑やかに彩っていた。

にぎ
いろど
かたすみ
きょうはん
あとがき
そもそもこの作品を書く前に・・
そこで……
こころざ
まっとうな時代小説を書こうと志した時もあったんですよ。いや本当に。
SFやファンタジー小説と並行して、 池波正太郎や司馬遼太郎を読んできた結果、 「時代劇が書きたい」と思ったのも、当然と言えば当然。
織田信長の史料として有名な「信長公記」からネタを拾おうと読んでみると、これが.....面白いんですねぇ。
特に、本能寺の変直前、甲斐の武田勝頼が滅ぼされるくだりは「へえ.....こんな話もあったの?」の連続です。
ぜんだいみもん
みめうるわ
刀を抜いて前代未聞の戦いぶりを見せたという武田方の女武者。 見目麗しい若衆の奮下曽根覚雲斎、なんぞという、いかにも悪役な名前の裏切り者もいたりして、思わず「よーし、この辺りを題材に、俺も一本書いてみるか!」と気負いこんだのですが.....
いけませんね。
この日、この人はどこにいて、あの事件が起きるのは、まだ二ヶ月先で……なんて事実の付き合わせをしていくと、もうストーリーが束縛されて.....どうにも動かない。
かしゆ
こうしょう
さらに、時代考証をきちんとすべく本を買い込めば、きりがない。かといって、おろそかにもできない。ああ、もうどうしたらいいんだ、と考えていると.....
《お前の書きたいのは、そんな小説じゃないだろ?》
神のお告げか、悪魔の囁きか・・・・・・
《自由好き勝手に、 楽しい小説を書けばいいじゃないか》
《日本でなくても時代劇は書ける。好き勝手な時代劇の書ける、世界を造れ》
《魔法があって、化け物がいる。そんな日本をでっちあげてしまえ》
やっぱり無理があったんですかねえ。
僕の思いつく話、書きたい話を、現実の歴史に滑り込ませるのは、かなり大変のようです。お陰であらためて、自分の書きたい時代劇を考え直すことができました。
かい はけん
例えば・・・・・・超絶的な力を持った侍が、人知を越えた化け物と死闘を繰り広げる。妖怪、忍者、からくりの類いを従えた戦国大名たちが魔界の覇権を相争う。 そんな話が書きたかったのです。
それならば、中世ヨーロッパをモデルにした異世界ファンタジーがたくさんある。だったらいっそ、日本をモデルにした異世界ファンタジーをつくってしまえ。
その世界にこそ僕の書きたいファンタジー小説があるんだ。
すぐに世界と物語を考えました。
せんらん
ユーラシア大陸より、もっと広い世界にしよう。
戦乱の嵐が吹き荒れる地方もあれば、元禄を思わせる泰平な地方も.....
ろく
たいへい
じゅれい くし
けんごう
から

そして、この世界の魔法である呪霊を駆使する剣豪。 その剣豪に絡む軟弱者。
こうして 「大陸」という僕の日本と、 退魔師鬼十郎の物語が生まれたのです。
えいよ
まわ
今回、ありがたくも準入選の栄誉を賜りましたが、 「じゃあ実際、俺の小説を読んでくれた人はどう思っているの?」という疑問でいっぱいです。
作品の善し悪しは、読んでくれたみなさん一人一人が感じてくれていると思います。 面白かったのか、つまらなかったのか。 ぜひ、お教えください。 それが僕の心の糧になるはずですから。
それではまた「大陸」のどこかで
はたまた別の世界で・・・・・・またお会いしましょう。

一九九八年十二月

市川 丈夫

解説

富士見ファンタジア文庫編集部

みなさん楽しんでいただけましたか?
ごぞんじ
御存知の方もいらっしゃると思いますが、この作品は第一〇回ファンタジア長編小説大賞準入選を獲得した作品です。
かくとく
となりました。
この回は、過去最高数の応募作が集まりまして、質量共にレベルが高く、かなりの激戦その戦いを勝ち抜いてきた作品だけあって、力と個性に満ちた作品です。
冒頭の数ページを読んでどんな感想を持ちました?
どしゃぶ
たい
きんちょう
土砂降りの中対峙する五人の侍。 静かな、それでいて怒りと緊張を含んだ会話。
そしてその緊張に耐え切れなくなったかのように唐突に始まる戦い――。
おお、まさしく正統派伝奇小説にふさわしい幕開け!
シリアスでハードな物語への期待に胸躍らした人も多いでしょう。
しかしその期待はあっさりひっくり返させられます。
とにかくキャラクターたちが一癖も二癖もある連中ばかりなのです。
たいまし
どうじょ
大陸一の腕前と謳われる退魔師で十六歳の美しい女剣士。だがその言動はまるできかん気の強いガキ大将みたいな葵鬼十郎。
けしょう
腕利きの呪神使いでありながら、派手な化粧で、豪華な振りそでを粋に着こなし、おまけに童女狂いという変人で軟弱な男、蛇骨丸。
じゃこつまる
けなげに鬼十郎に付き従うも、ひたすら師匠になじられいじめられる弟子の少年又四 郎。
みそじなか
いや
蛇骨丸の育ての親で、 三十路半ば（に見える）の人品しからぬなかなかの美女。
しかし、年齢のことを言われるとヒステリーを起こし、さらに無類の酒好きで酔っ払うと手が

にそう ほうぞ
付けられ なる破壊尼僧・宝蔵院。
なんか、とんでもないキャラクターたちばかりですよね、へたをすれば、作品の世界観を壊しかねない危険性をはらんでいる。
ところがところが、こいつらが実に生き生きと動き回るのです。
まいぼつ
みりょく
そして、ともすればストーリーの中に埋没しがちなわき役たちの魅力までも引っ張り出し、作品のすみずみまで光をあててしまう。
そつせん
世界観を壊すどころか、逆に率先して引き立てていくわけです。
伝奇小説と聞くと、難しいと考える読者も多いかと思います。でも、この作者は重くなりがちな世界観のこの物語を、時にシリアス、時にギャグとキャラクターたちを縦横無尽に走らせ、読者を作品に引き込み全く飽きさせない。
まったく新人離れしたテクニックの持ち主といえましょう。
ですから、冒頭を読んで「ちょっと難しいかも」と思ったあなた。 安心して結構です。
この小説は間違いなく面白いのですから。

さて、実際に読んで、面白いと思ったあなた! あなたにはやらなければならないこと があります。
いくら才能、実力があるといっても、著者の市川丈夫は、まだこの作品でデビューしたばかりの雛鳥です。 彼が大空に羽ばたくためには、みなさんの愛情が必要です。
作家を育てるのはひとえに読者の力。 さあ、友達に勧めよう! アンケートハガキを出 そう!
著者に応援の手紙を書こう!
じゅうおう むじん

退魔師鬼十郎
宝珠、紅に染まるとき
市川丈夫

平成26年7月19日　発行
発行者　郡司 聡
発行所　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
03-3238-8745（営業）
http://www.kadokawa.co.jp/
企画・編集　富士見書房
03-3238-8585（編集）
http://fujimishobo.jp
(C)Takeo Ichikawa, Nobuteru Yuuki 1999
本電子書籍は下記にもとづいて制作しました
富士見ファンタジア文庫『退魔師鬼十郎　宝珠、紅に染まるとき』平成11年1月25日初版発行